

近代文語 UniDic 短単位規程集

Ver. 1.1

国立国語研究所コーパス開発センター(近藤明日子)編

2016年3月

目次

短単位	1
第1章 最小単位認定規程	1
第1 最小単位認定規程	1
第2 和語の最小単位認定に関する規則	13
第3 最小単位の分類	30
第2章 短単位認定規程	32
第1 短単位認定規程	32
第2 最小単位の結合の例	44
第3章 付加情報	50
第1 付加情報の概要	50
第2 品詞情報の概要	50
細則 1. 18. 1 名詞・形状詞・副詞の品詞認定	57
細則 2. 6. 1 活用型の認定基準	75
細則 3. 12. 1 終止形・連体形の判別基準	79
細則 3. 12. 2 シク活用形容詞の語幹・終止形の判別基準	81
第3 語種情報の概要	82
第4章 同語異語判別規程	84
第1 同語異語判別規程	84
細則 6. 1 名詞と接辞の判定基準（1）	118
細則 6. 2 名詞と接辞の判定基準（2）	121
細則 6. 3 動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準	122
細則 6. 4 人名の扱い	125
細則 6. 5 固有名詞の扱い	129
細則 6. 6 ローマ字略語の扱い	134
細則 6. 7 擬音語・擬態語の扱い	139
細則 6. 8 感動詞の扱い	144
細則 6. 9 メタ的に使われた漢字等の扱い	148
細則 6. 10 出現形「に」の判別基準	149
細則 6. 11 出現形「にて」の品詞判別基準	150
細則 6. 12 読みが不確定な出現形の語形認定基準	151
第2 意味の面から見た同語異語の判別	152

参考文献	156
付表	157
付表 1 ～ 3 凡例	157
付表 1	同語異語判別結果の一覧（動詞）.....	158
付表 2	同語異語判別結果の一覧（形容詞）.....	180
付表 3	同語異語判別結果の一覧（名詞）.....	182
資料	要注意語.....	185
1	接頭的要素.....	186
2	接尾的要素.....	187
3	助詞.....	203
4	助動詞.....	210
5	「一の～」.....	214
6	「が～」.....	240

短単位

短単位は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位である。短単位の認定に当たっては、まず現代語において意味を持つ最小の単位（最小単位）を規程する。その上で、最小単位を短単位認定規程に基づいて結合させる（又は結合させない）ことにより、短単位を認定する。そのため、短単位の認定規程は、最小単位と短単位の二つの認定規程から成る。

《凡例》

- 以下の規程に示した例は、コーパスに現れた例又は作例である。
- 最小単位・短単位の境界を示すために次の記号を用いた。
最小単位の境界 …………… / 例： / 国 / 立 / 国 / 語 / 研 / 究 / 所 /
短単位の境界 …………… | 例： | 国 立 | 国 語 | 研 究 | 所 |
短単位の境界（当該規程で着目している箇所） …………… || 例： | 国 立 | 国 語 | 研 究 || 所 |
- 最小単位・短単位について分割しないことを特に示す必要があるときには、次の記号を用いた。
最小単位・短単位のつなぎ目 …………… - 例： | 大-丈夫 | です |
最小単位・短単位のつなぎ目（当該規程で着目している箇所） …………… = 例： | パソ=コン | を | 使う |
- 着目している最小単位・短単位がわかりにくい場合は、当該箇所を【 】で囲った。

第1章 最小単位認定規程

第1 最小単位認定規程

最小単位は、現代語において意味を持つ最小の言語単位のことである。

最小単位は、和語・漢語・外来語・記号・数・人名・地名の種類ごとに、以下の規程によって認定する。

和語・漢語・外来語の語種の判定は、原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』（第2版）（小学館）を主たる資料として語種判定を行う。また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

近代文語における最小単位についても、現代語との関連を重視して、原則として現代語を対象とした最小単位認定規程を適用する。現代では用いない語についても、原則として同様の扱いとする。

基礎となる現代語の最小単位認定規程を理解するために、近代文語では用例が見出しがたく、必ずしも必要でない規定についても、現代語での規定に基づいて掲載する場合がある。

1

ただし必要に応じて、近代文語等での使用実態に基づき、個別の判断をすることがある。例えば、次に挙げるような語である。

【例】

/ 異 / なる / :
『日本国語大辞典』第2版では、動詞「異なる」の用例は、明治時代からであり、それ以前は形状詞「異（こと）」+助動詞「なり」と扱っている。よって、近代文語では、原則「異（こと）」+助動詞「なり」と考え「/ 異 / なる / 」と最小単位を認定する。

2 和語

和語の最小単位は、以下の例のように認定する。

和語の最小単位の認定に関する詳細は、第2「和語の最小単位認定に関する規則」を参照。

また、擬音語・擬態語の最小単位の認定については、同語異語判別規程の第4章 第1 6.7「擬音語・擬態語の扱い」を参照。

【例】

/ 母 / 親 / / 名 / 高 / し / / 殊 / 更 /
/ 重 / 【箱】 / / 【幾】 / 分 / / 硝子 / 【窓】 /
/ 之 / を / 取 / 消 / し / た / る / も / の / と / 看 / 做 / す /

2.1 融合形

融合形は、元の形に戻さずに、融合している複数の最小単位全体で1最小単位とする。

【例】
 /人/に/まれ/ (もあれ) /海/に/ざり/ける/ (ぞありける)
 /もの/の/く/に/て/ (物の奥にて) /な/じょう/ (何といふ)
 /か/る/が/ゆえ/に/ (かあるがゆえに)
 /思/ひ/け/らし/ (思ひけるらし)

/その/と/き/や (あ) / (その時は) /わ/た/し/や/ (わたしは)
 /行/き/や (あ) /し/ /ない/ (行きはしない)
 /考/え/り/や (あ) / (考えれば)
 /お/も/し/ろ/け/り/や/ (おもしろければ) /お/も/し/ろ/き/や/ (おもしろければ)
 /悪/か/ /ない/ (悪くはない)
 /生/き/ /て/る/ (生きている) /生/き/ /て/ /た/ (生きていた)
 /持/っ/ /て/く/ (持っていく) /持/っ/ /て/っ/ /た/ (持っていくた)
 /置/い/ /と/く/ (置いておく) /置/い/ /と/い/ /た/ (置いておいた)
 /知/っ/ /と/る/ (知っておる) /知/っ/ /と/っ/ /た/ (知っておった)
 /行/っ/ /ち/ま/う/ (行ってしまう) /行/っ/ /ち/ま/っ/ /た/ (行ってしまった)
 /行/っ/ /ち/や/う/ (行ってしまう) /行/っ/ /ち/や/っ/ /た/ (行ってしまった)
 /っ/ち/ゆう/ /の/ /は/ (って言うのは) /っ/て/え/ /と/ (って言うのと)

2.2 省略形

省略形は、元の形に戻さずに、可能な範囲で最小単位を認定する。その際、元の形との対応をできる限り取るよう留意する。

【例】
 /や/ /ん/ /だ/ /っ/け/ (やるんだっけ) ※1
 /行/っ/ /て/る/ /ん/ /す/ ※2

※1 元の形「やるんだっけ」との対応を可能な限り取るように、「や」を動詞「やる」の活用語尾が省略された形、「ん」を元の形「やるんだっけ」の「ん（準体助詞「の」の撥音便）」と考えて、最小単位の認定を行う。
 ※2 元の形「行ってるんです」との対応を可能な限り取るように、「す」を元の形「行ってるんです」の助動詞「です」と考えて、最小単位の認定を行う。

2.3 分割不可

現代語において分割することができない、若しくは分割することが適切でないと考えられるものは、分割せずに全体で1最小単位とする。

【例】
 /あ/っ/け/ら/か/ん/ / /い/な/ず/ま/ / /え/が/く/ / /お/も/ん/ば/か/る/ / /こ/だ/ま/ / /と/ん/か/ち/

2.4 前の要素に含め1最小単位としない語

次に挙げるものは、それだけで1最小単位とせずに前の要素に含める。

2.4.1 形容詞語尾

【例】
 /さ/む/=し/ / /ひ/ろ/=か/ら/ / /な/つ/か/し/=き/

2.4.2 形状詞語末「か」「やか」「らか」

【例】
 /し/ず/=か/ / /す/み/=や/か/ / /つ/ま/び/=ら/か/

2.4.3 動詞の活用語尾

【例】
 /お/も/=ふ/ / /ひ/ろ/=ふ/ / /た/よ/=る/

2.4.4 いわゆる副詞語尾「と」

「と」を含む主な副詞を以下に示す。

【例】
 /うか=と / うん=と / おいそれ=と / おのず=と / (自ずと) / おのれ=と / (己と) / がっし=と
 / かっ=と / きちり=と / きちん=と / きつ=と / (急度) / き=と / ぎよっ=と / ぐん=
 と / けるっ=と / こじやん=と / ごそっ=と / ごまん=と / さっさ=と / さ=と / しか=
 と / しっ=と / じっ=と / しゃん=と / しゅん=と / しらっ=と / しれっ=と / しん=と
 / じん=と / ずい=と / すきっ=と / すっく=と / ずっ=と / せっせ=と / そこはか=と
 / そっ=と / ぞっ=と / そ=と / たん=と / ちく=と / ちゃん=と / ちょうと (丁と) /
 / ちよこっ=と / ちよっ=と / (一寸) / ちん=と / つい=と / つ=と / つぶ=と / てい=と
 / てん=と / とう=と / どう=と / とく=と (篤と) / どっか=と / とっ=と / どっ=と
 / とっ=と / とん=と / ぬっく=と / はく=と / はた=と / はっし=と / はっ=と /
 / びく=と / ひし=と / ひた=と / ひよっ=と / ふっつ=と / ふ=と / ぼうっ=と / ぼけ
 っ=と / ほっ=と / まっ=と / まんま=と / むさ=と / むず=と / むっく=と / むっ=と /
 / もそっ=と / もっ=と / やっ=と (漸と) / よよ=と / りゅう=と / りん=と (凜と) /
 わざ=と (態と) / わり=と (割と) / われ=と (我と)

2.4.5 助数詞「とり（たり）」

【例】
 /ひ=とり / /ふ=たり /

2.4.5.1

「ひとり」「ふたり」以外（例：みたり、よたり、いくたり）については、助数詞「たり」を前の要素に含めず、1最小単位とする。

【例】
 /み/たり / /よ/たり / /いく/たり /

2.4.6 ク語法の「く」「らく」

【例】
 /す=らく / /ねがは=く / /のたまは=く /

2.4.7 コソアド類の各語末

【例】
 /こ=れ / /こ=こ / /こち=ら / /そ=れ / /そ=こ / /そち=ら /
 /あ=れ / /あそ=こ / /あち=ら / /ど=れ / /ど=こ / /どち=ら /
 /だ=れ / /いず=れ /

2.5 前後の要素にまとめないもの

次に挙げるものは、前又は後ろの要素にまとめずに助詞・助動詞と同様に単位を認定する。

2.5.1 接続詞・接続助詞の構成要素となっている助詞・助動詞

【例】
 /なら/ば / /しかれ/ども / /ならび/に /
 /もの/の / /もの/を /

2.5.2 いわゆる形容動詞、いわゆる形容動詞活用型の助動詞の変化部分

【例】
 形容動詞： /静か/なり / /すみやか/なり /
 形容動詞型活用の助動詞： /やう/なり /

2.5.3 いわゆる副詞語尾「に」

【例】
 /実/際/に / /非/常/に /

2.5.3.1

※「和語の最小単位認定に関する規則」 第2 2.3.2.4 に挙げたものは除く。

2.5.4 「動詞連用形+て」から副詞に転じた語の接続助詞「て」

【例】
／あえ／て／ ／あわせ／て／ ／はたし／て／

2.6 感動・呼び掛け・応答など

感動・呼び掛け・応答などの1回描写を1最小単位とする。

【例】
／ああ／ ／いざ／ ／いな／いな／

3 漢語

漢語（和製漢語を含む。）は、漢字1文字で表されるものを1最小単位とする。

【例】
／政／治／ ／容／易／ ／洋／學／者／ ／數／百／

4 外来語

外来語・外国語は原語で1単語になるものを1最小単位とする。英語起源の外来語の最小単位の認定は『リーダーズ英和辞典』第2版（研究社）による。それ以外の言語を起源とする外来語については適宜判断する。

【例】
／ア／ート／サイ／エ／ンス／ ／コ／ン／モ／ン／セ／ン／ス／ ／リ／ベ／ラ／ル／党／ ／ガ／ス／ラ／ン／プ／

4.1

英語起源の外来語について、原語で1語になるものの結合体が『リーダーズ英和辞典』第2版で1語として扱われている場合、その結合体を1最小単位とする。

【例】
／デ／ー／タ＝ベ／ー／ス／ ／ネ／ット＝ワ／ー／ク／

※「データ (data)」、「ベース (base)」、「ネット (net)」、「ワーク (work)」は、それぞれ原語で1語であるが、「データ」と「ベース」との結合体「データベース」、「ネット」と「ワーク」との結合体「ネットワーク」が、それぞれ『リーダーズ英和辞典』第2版で1語とされている。このような場合、「データベース」「ネットワーク」を1最小単位とする。

4.2

外来語・外国語の1最小単位を略したのも1最小単位とする。

【例】
／塩／ビ／ ／パ／ソ／コ／ン／ ／イン／フレ／

4.3

用言化した外来語の活用語尾は切り出さない。

【例】
／サ／ボ＝る／ ／ハ／モ＝る／

4.4

外来語・外国語に漢字を当てたのも外来語・外国語として扱う。

【例】
／菩／薩／ ／卒／塔／婆／ ／硝／子／ ／瓦／斯／ ／俱／楽／部／ ／弗／

4.5

日本語としては分割不可能と考えられるもの及び二つの単語が融合して発音されたことによって分割不可能になったものは、全体で1最小単位とする。

【例】
/ク/ー/デ/ター/ /ス/タ/ン/ダ/ッ/ (“standup” の融合)

4.6

組織の名称等の名に当たる外来語・外国語の最小単位を略した1文字の片仮名は、記号の最小単位として扱う。

【例】
/セ/リ/ー/グ/ /ナ/リ/ー/グ/ /マ/社/
/パ/関/係/者/に/よ/る/と/、/今/季/か/ら/実/現/し/た/セ/・/パ/交/流/戦/で/は/
/J/1/復/帰/を/決/め/、/声/援/に/応/え/る/セ/大/阪/

5 記号

記号は1文字に当たるもの（それを仮名書きしたものも含む。）を1最小単位とする。

【例】
/A/B/C/ /Y/字/ /オ/列/ /【ガンマー】/線/
/。/ /、/ / (/a/) / /○/ /…/…/

5.1

ローマ字を並べた略語は全体で1最小単位とする。ローマ字の間の中点・ピリオド等は1最小単位としない。人名の一部又は全部をローマ字で略記したものの扱いは、規定 7.4.2 を参照。

【例】
/OHP/ /OS/ /D・N・A/ /Ph. D. /

6 数

数字は1文字に当たるものを1最小単位とする。

【例】
/一/億/兩/ /千/八/百/八/十/六/年/ /第/1/圖/

7 人名

7.1 姓・名

人名は姓を1最小単位、名を1最小単位とする。

【例】
/福/澤/諭/吉/ /徳/富/猪/一/郎/ /李/鴻/章/ /ジ/ュ/ー/ル/ベ/ル/ヌ/

7.1.1 通称・雅号・しこ名

通称・雅号・しこ名（その略称も含む。）等は、次のように最小単位を認定する。

【例】
/千/代/大/海/ /十/返/舎/一/九/ /古/今/亭/志/ん/生/ /一/休/宗/純/

7.1.2 ローマ字等を含む仮名

ローマ字等を含む仮名は、次のように最小単位を認定する。

【例】
/A/子/ /○/田/■/男/

7.1.3 助詞を含む人名

助詞を含む人名は、助詞を1最小単位とせず、人名全体で1最小単位とする。

【例】
／竹=ケ=原／ ／鈴=之=助／ ／千代=の=富士／

7.2 姓+読み添えの「の」+名

姓と名との間にある読み添えの「の」が本文に表記されている場合は、助詞として扱い、1最小単位とする。

【例】
／藤原／の／道長／ ／源／の／頼朝／

7.2.1

本文に表記されていない場合は規定 7.1 を適用する。

【例】
／源／頼朝／

7.3 「お（御）～」

人名のうち「お（御）～」という形のもの、全体をまとめて1最小単位とする。

【例】
／お=千代／ ／お=ゆき／ ／お=春／さん／

7.4 姓又は名を略したもの

7.4.1

姓又は名を略した1文字の仮名・漢字は、記号の最小単位として扱い、人名として扱わない。

【例】
／グ／氏／ ／【比】／公／

7.4.2

人名の一部又は全部をローマ字で略記したもの（また、そのローマ字を仮名表記したもの）は、記号の最小単位として扱い、人名として扱わない。その際、ローマ字の間の中点・ピリオド等は、1最小単位とする。

【例】
／T／氏／ ／G／.／T／.／ ／K／Y／生／ ／【イ】／、／【エツチ】／、／ハウス／氏／

7.4.3

複数の人物の名それぞれを略した要素（1字で構成される名の場合はその全体）が結合体を構成する場合、その各要素は和語・漢語・外来語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／若／貴／兄／弟／ ／柏／鵬／時／代／
／角／福／戦／争／ ／三／角／大／福／中／

7.4.4

姓又は名を略した通称（の一部）と認められるものは、和語・漢語・外来語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／仙／ちゃん／ ／おざ／けん／ ／橋／龍／

7.5 女房の名前

女房の名前は、次のように最小単位を認定する。

7.5.1

地位に由来するものは、和語・漢語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／小／式／部／内／侍／

7.5.2

現代でも人名として通用しているものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／紫式部／

7.5.3

地名に由来するものであっても、人名として扱う。

【例】
／伊勢／

7.6 中国系の人名

中国系の人名のうち姓と名がそれぞれ1文字ずつのものは、姓名をまとめて1最小単位とする。

【例】
／曹=操／ / 劉=備／

7.7 東南アジア系の人名

東南アジア系の人名で短い姓名が複数連続する場合、名前全体をまとめて1最小単位とする。

【例】
／ホー=チ=ミン／

7.8 西洋系の人名

7.8.1

西洋系の人名において、姓や名が「=」や「・」などで区切られ、二つの要素から構成される場合、原則としてその位置で最小単位を分ける。

【例】
／ジャック／・／シャバン／=／デルマス／

7.8.2

冠詞や前置詞等に相当する部分は、原則として切り離す。

【例】
／ジョン／・／【フォン】／・／ノイマン／
／フェルディナン／・／【ド】／・／ソシユール／
／カミーユ／・／【サン】／=／サーンス／

7.8.2.1

ただし、「(レオナルド・)ダ・ビンチ」のように、結合した形(のみ)が一般的に用いられる場合は、結合した形を1最小単位とする。

7.9 アラブ系の人名

アラブ系の人名における定冠詞「アル」「アッ」「アン」「エル」は、分割せず後続する名詞と合わせて1最小単位とする。

【例】
／サアド／・／アル＝ガーミディー／

7.10 称号を表す類概念

称号等を表す類概念は人名から切り離し、最小単位の認定規程を適用する。

【例】
／円融／院／ 後醍醐／帝／ 路易／十／四／世／ ジョン／王／
／井上／伯／ ビスマルク／公／
／遠湖／子／ 蘇峰／生／ ボアソナード／氏／ 大／バツハ／
／豊雲野／神／ イザナギ／ノ／ミコト／ 刀自古／郎女(いらつめ)／

7.10.1

日本神話の登場人物名のうち「～ヒメ」「～ヒコ」は類概念とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／コノハナサクヤ＝ヒメ／ ヌナカワ＝ヒメ／ノ／ミコト／
／伊福吉部徳足＝比売／ 大気津＝比売／ 豊玉＝毘売／ 佐用＝比売／
／ウミサチ＝ヒコ／ ワカタケ＝ヒコ／

7.10.2

日本神話の登場人物名以外の「ヒメ」については次のとおりとする。

7.10.2.1

「漢字1字＋ヒメ」は、全体で1最小単位とする。

【例】
／絢＝姫／ 清＝姫／ 濃＝姫／ 漁＝姫／

7.10.2.2

「2字以上＋ヒメ」は、「ヒメ」以外の部分が一般的な名に相当する場合は名と「ヒメ」をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／和子／姫／ 紗夜／姫／ マリ／姫／

7.10.2.3

「2字以上＋ヒメ」の場合であっても、「ヒメ」を切り出した残りの部分が一般的な名に相当しない場合は、全体で1最小単位とする。

【例】
／小桜＝姫／ 檜皮＝姫／ おおまき＝姫／

7.10.2.4

判断に迷うものは、「ヒメ」を切り出さず、全体で1最小単位とする。

【例】
／花百=姫／ ／火海=姫／

7.10.3

人名と類概念が結合した形で（のみ）一般に用いられるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／孔=子／ ／武=王／ ／源=氏／

8 地名

地名は、次の規定により最小単位を認定する。

8.1 行政区画を表す地名

行政区画を表す地名は「都・府・県・郡・市・区・町・村・字」を除いた部分をそれぞれ1最小単位とする。類概念を表す部分には最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／【大阪】／府／【東】／區／【今橋】／四／丁／目／
／【山口】／縣／【都濃】／郡／【徳山】／村／九／百／七／十／五／番／地／

8.1.1

「北海道」は全体で1最小単位とする。

【例】
／北海道／山越／郡／八雲／村／

8.1.2

市区内の小区分の「～町」は「～町」を含めて1最小単位とする。

【例】
／神戸／市／【東川崎町】／ ／日本橋／區／【本石町】／三／丁／目／

8.1.3

京都の地名のうち、通りの名称の部分には8.5を適用する。

【例】
／京都／市／上京／區／【今出川】／通／【烏丸】／東／入／

8.1.4

地名の略称は、全体を1最小単位とする。地名の略記については、8.6から8.8を参照。

【例】
／ちとから／（千歳烏山） ／天六／（天神橋筋六丁目）

8.1.5

行政区画を表す地名が他の場所名等に使われている場合には、行政区画の名を表す部分を1最小単位とし、類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／【戸山】／學／校／ ／【小淵澤】／驛／ ／【日比谷】／公／園／ ／【東京】／工／業／學／校／

8.2 外国

外国の国名や行政区画名などにも 8.1 から 8.1.5 を適用する。

【例】
／亞米利加／合衆國／／佛蘭西／共和國／／ドイツ／帝國／／イタリア／王國／
／コロラド／州／デンバー／市／／福建／省／／【メキシコ】／シチー／

8.2.1

市区内の小区分「～町」に相当する「タウン」は「～タウン」を含めて1最小単位とする。

【例】
／ジョージ＝タウン／／ケープ＝タウン／

8.2.2

国名・行政区画を表す地名が他の場所名等に使われている場合は、8.1.5 を適用する。

8.3 地域・地方を表す地名

行政区画や国以外の地域・地方を表す地名（通称や呼称，商業エリア名などを含む。）は，名を表す部分と類概念を表す部分及び「東・西・南・北・新」等を分割した上で，名を表す部分を地名の1最小単位とする。類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／【下總】／國／／【關東】／地／方／／【九州】／地／方／
／【歐洲】／／西／／【アフリカ】／

8.3.1

北海道及び七道は、「道」を含めて1最小単位とする。

【例】
／北海＝道／／東海＝道／／東山＝道／／北陸＝道／
／山陰＝道／／山陽＝道／／南海＝道／／西海＝道／

8.3.2

地域・地方を表す地名が他の場所名等に現れた場合の扱いは 8.1.5 を適用する。

8.4 地形名

地形名は，類概念を表す部分を除いた部分を1最小単位とする。

【例】
／富士／山／／アルプス／山／
／隅田／川／／揚子／江／／琵琶／湖／
／ベーリング／海／峽／／大連／灣／

8.4.1

地形名と類概念を表す部分との間にある読み添えの助詞が本文に表記されている場合は，助詞として扱い，1最小単位とする。

【例】
／音羽／の／山／／出雲／の／浦／／住吉／の／浦／

8.4.1.1

本文に表記されていない場合は 8.4 を適用する。

【例】
／音羽／山／

8.4.1.2

ただし、助詞を含む全体で、一般的に地名として用いられているものや、助詞を1最小単位とすることに問題があると思われるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／壇=ノ=浦／ ／如意=が=岳／ ／鬼界=が=島／

8.4.2

名を表す部分が漢字1字の場合は、類概念を表す部分をまとめて1最小単位とする。

【例】
／桂=河／ ／桜=島／ ／黄=河／

8.4.3

地形名が他の場所名等に現れた場合の扱いは 8.1.5 を適用する。

8.4.4

坂・人工の水路やダム等の名称には、8.5 を適用する。

8.5 場所名

場所名については、名を表す部分と類概念を含むその他の部分とに分割した後、両方の部分に最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／大／宮／通り／ ／銀座／通り／ ／セバストウポル／街／道／
／新橋／驛／ ／奥羽／南／線／

8.6 地名を略した漢字一字

地名を略した漢字1字の「日」「米」などについては、漢語の最小単位として扱う。

【例】
／日／米／ ／普／佛／塙／伊／ ／【米】／國／ ／日／露／戦／役／
／京／坂／神／ ／薩／長／土／肥／ ／【薩】／州／出／身／

8.7 外国地名を略した片仮名一字

片仮名表記する外国地名を略したもので、地名を略した1字漢語（「日」「米」など）に相当する片仮名1文字の「ロ」（ロシアの略）などは、外来語の最小単位として扱う。

【例】
／訪／ロ／

8.8 地名を略記したローマ字

地名をローマ字で略記したものは、記号の最小単位として扱う。

【例】
／NY／ ／L. A. ／ ／JPN／ ／USA／

※上記は、5.1 によって1最小単位となる。

8.9 漢字1字の国名

漢字音からなる漢字1字の国名「漢」「清」などは、漢語の最小単位として扱う。

【例】
／【秦】／【漢】／／日／【清】／條／約／

8.10 助詞を含む地名

助詞を含む全体で地名と見なされるものは、助詞を1最小単位とせず、地名全体で1最小単位とする。

【例】
／井=の=頭／／市=ヶ=尾／／天=の=橋立／

8.11 補則

地名のうち最小単位の認定に当たり判断に迷う例について、その認定方法を示す。

8.11.1 地形名

【例】
／瀬戸／内／／瀬戸／内／海／／プリンスエドワード／島／
／耶馬／溪／／奥穂高／岳／／大菩薩／峠／／鬼押出／
／ポート／アイランド／／イースト／リバー／

8.11.2 場所名（駅名以外）

【例】
／岡田／山／古／墳／／加茂／岩倉／遺／跡／／荒神／谷／遺／跡／
／妻木晩田／遺／跡／／吉野が里／遺／跡／／田和／山／遺／跡／
／区／役／所／通り／／富士見／坂／／武田／山／トンネル／
／八方／尾根／スキー／場／
／スターリン／広場／／関西／国／際／空／港／／関／空／
／暗／闇／坂／／榎／坂／／駒ヶ坂／／別府／温／泉／

8.11.3 駅名

8.11.3.1 行政区画名と一致する駅名

【例】
／東中野／／西日暮里／／江戸川／／多賀城／

8.11.3.2 二つの地名から成る駅名

【例】
／祖師ヶ谷／大蔵／／多摩／境／／武蔵／境／
／武蔵／小山／／武蔵／小杉／／川西／池田／

8.11.3.3 その他

【例】
／表／参道／／半蔵／門／

9 補則

9.1 一字漢語サ変動詞

一字漢語サ変動詞は、前項の漢語が現代語において単独で語として機能し得るかどうかを問わず、全体で1最小単位とする。

【例】
／愛=す／／際=す／／信=ず／／達=す／／有=す／

10 参考 最小単位の例

【例】嗟呼、國民之友、生れたり、何が故に生れたるか、現今日本の時勢、其の必要を感ずればなり、「必要」とは何ぞや、吾人乞ふ試に之を説かむ。

日本國、何くに在る、日本人民、何くに在る、我が愛する日本は、不幸にして、三百年來、絶海の孤嶋に、隱遁して、たるを以て、國家、人、民の思想、名義、に至りては、何人の腦中、と雖も、殆んど之を、尋る所なく、漠々たる無主人の空屋に、類し、人は文弱に流れ、民は遊惰に耽り、滔々たる天下泰平の夢に沈酔して、復た他事を顧みざるに、際し、忽然と我を驅り、我に教るに、國體の思想を以て、我はを導くに、愛國の感情を以てし、此の感情、思想は、鬱して、有志の腦中に、日本國を、描き出し、日本人民を、寫し出し、乍ち發揮し、維新の大變革となり、其運動、新、鮮、快、活、なると、火の如く、花の如く、雷の如く、電の如く、或は攘夷の詔となり、或は尊王の説となり、或は鐵劍を揮ふて、淋漓たる紅血、白雪に、濺ぐの櫻田の刺客となり、或は木主を擁して、焰々たる烽火、天外を、衝く筑波の暴擧となり、或は東海蒼波を破りて、萬里外を、壯遊を試みるんとするものあり、或は南山白雪を、踏んで、英雄千古の遺憾を晴さんと欲するものあり、或は久阪、高杉の義憤となり、或は佐久間、横井の開國論となり、或は坂本龍馬の遊説となり、遂に一舉して、天上の王侯將相、忽然として、其の權勢を失ひ、地下の浮浪匹夫と、忽然として、其の權勢を得、幕府大政、返上となり、戊辰の亂となり、萬機公論に決するの、誓文となり、廢藩置縣の制となり、廢刀令となり、徴兵令となり、民選議院の建白となり、立憲同治郡區の自治、と地方官會議府縣白會の設、立、となり、町村郡區の自治、と國會議院の設、立、となり、と、なり、其の勢の爽快活潑なる、恰も萬里の長江一瀉して、來るが如く、上封建制度の破壊より、下國會の開、設、に及ぶ迄、僅々二十余年を以て之を成就するに到れり。

*本来は「/イエ/ドモ/」と2つの最小単位として認定されるものであるが、表記上分割できないため、仮に1最小単位と見なす。

第2 和語の最小単位認定に関する規則

和語の最小単位の認定は、漢語・外来語と比較して判断に迷うことが多い。そこで、以下のとおり、和語の最小単位を認定するための規程を定める。

1 語の一覧等に基づいて最小単位を認定するもの

1.1 常用漢字表の訓

常用漢字表（1981年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の音訓欄に掲げられた訓は、1最小単位とする。可能動詞形については、元の動詞に準じて1最小単位とする。

【例】
 /あわ=せる/ /まつり=ごと/ /え=がく/
 /え=がける/

1.2 二語に分解しにくい「じ」「ず」を含む語

語源的には二つ以上の要素から成る語のうち、現代仮名遣い（1986年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の第2の5において「現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則と」すると規定されている語のうち次に挙げるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
 /いな=ずま/ /かた=ず/ /き=ずな/ /さか=ずき/ /ときわ=ず/ /ほお=ずき/ /みみ=ずく/
 /うな=ずく/ /おと=ずれる/ /かし=ずく/ /つま=ずく/ /ぬか=ずく/ /ひざ-ま=ずく/
 /あせみ=ずく/ /さし=ずめ/ /で=ずつ-ぱり/ /なか-ん=ずく/ /うで=ずく/

1.3 「要注意語」

「要注意語」の「助詞」「助動詞」「接頭的要素」「接尾的要素」に挙げたものは1最小単位とする。可能動詞形については、元の動詞及び動詞性接尾辞に準じて1最小単位とする。

【例】
 /東京/ 【に】 /あつ 【て】 / /話し 【たり】 / /考え 【がたし】 / /使ひ 【こなす】 /
 /使ひ 【こなせる】 /

2 上記の規定に該当しないものに関する規定

2.1 単独で使用される語

コーパス中の文において、他の要素と結合せず単独で語として使われているものは1最小単位とする。

【例】
／空／が／【かすむ】／

2.2 複合語を構成する要素

複合語を構成する要素については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.1

複合語の構成要素のうち、現代語において単独で語として機能し得るものどうしが結合して語を構成している場合は、それぞれの構成要素を1最小単位とする。

【例】
／空き／家／ / 灰汁／抜き／ / 揚げ／足／ / 明け／暮れる／

2.2.2

結合の際に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1

複合語の前項に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1.1

前項が被覆形となっているものは、その音節数等によって、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.1.1

2音節以上であれば、原則として1最小単位とする。

【例】
／つま／先／

2.2.2.1.1.1.1

ただし、以下のいずれかに該当するものは、1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

2.2.2.1.1.1.1.1

既に語源意識が失われていると考えられるもの

【例】
／うつ=ぶす／

2.2.2.1.1.1.1.2

一方の構成要素が語源未詳、若しくは語源は判明しているが、音変化等のため一般には元の語への還元が難しいと考えられるもの

【例】
／うわ=みず／（上溝） / しら=に／（白土） / しら=ふ／

2.2.2.1.1.2

1音節で、元の形への還元が難しくないと考えられるものは1最小単位とする。

【例】
／木／陰／ 　／木／枯らし／ 　／木／立ち／

2.2.2.1.1.2.1

語源意識が失われている等の理由によって一般には元の形への還元が難しいと考えられるものは1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】
／こ=だま／ 　／こ=ぬれ／ 　／か=ぶれる／ 　／こ=がね／ 　／こ=よみ／

2.2.2.1.2

前項の名詞に音変化が生じている場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かい=ま／ (←かきま) 　／かえ=で／ (←かえるで) 　／かん=ざし／ (←かみさし)

2.2.2.1.3

前項が用言の音便形となっているものは、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.3.1

後項が動詞である場合（当該の複合語が複合動詞、又はその転成名詞である場合）、前項を1最小単位とする。一般には語源が意識されることの少ない語についても同様に扱う。

【例】
／追っ／掛け／ 　／切っ／掛け／ 　／くっ／付く／

2.2.2.1.3.2

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形を取っていても、それが規則的で広く用いられるものである場合は、前項を1最小単位とする。

【例】
／突っ／張る／ 　／引っ／掛かる／ 　／吹っ／切れる／

2.2.2.1.3.3

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形で個別的な事例と考えられる場合や、音の脱落を生じている場合は、前項を1最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／おもん=ばかる／ 　／しゃべ=くる／ 　／せっ=かち／

2.2.2.1.3.4

後項が用言以外である場合、後項と結合した形で1最小単位とする。

【例】
／追っ=手／ 　／同い=年／ 　／切=手／

2.2.2.1.4

後項が個別の変化を起こしている等のことから、それを1最小単位と認定し難い場合は、個別の判断によって最小単位を認定する。

【例】
／飲んだくれる／
※「たくれる」を最小単位と認定する必要はないと考えられるため。
／引っ／べがす／
※「引っ／べがす」が2最小単位となることとの整合性を取るため。

2.2.2.2

複合語の後項に音変化が起きているものは、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.2.2.1

連濁を生じている場合も、元の形が規定 2.2.1 に該当するものであれば、1最小単位とする。

【例】
／わたし／ぶね／（渡し船）　／ほん／ばこ／（本箱）

2.2.2.2.1.1

常用漢字表の音訓欄に挙げた訓には、規定 1.1 が優先的に適用される。

【例】
／え=がく／　／いろ=どる／

2.2.2.2.2

後項の語頭の母音に子音が挿入されている場合も、前項・後項をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／あき／さめ／（秋雨）　／きり／さめ／（霧雨）

2.2.2.2.3

後項の語頭音が個別的に変化・脱落している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かわ=も／（川面）　／かわ=ら／（川原）　／ごき=ぶり／

2.2.2.2.4

結合部分の母音が融合している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／おっしやる／　／きゅうり／　／しょう／（背負う）

2.2.2.2.4.1

ただし、「ひと（人）」に由来する「と」「うと（ど）」「っと」等を最小単位と認める関係上、本規定に該当する語であっても、「と」「うと（ど）」「っと」と前項とをそれぞれ1最小単位とすることがある。

【例】
／おちゅ／うど／（落人）　／わこ／うど／（若人）

2.2.2.2.4.1.1

「（う）と」の部分に「人」の意味が殆ど認められない語は、全体で1最小単位と認めることがある。

【例】
／隼人／　／もうと／（真人）

2.2.3

結合の際に挿入された促音又は撥音は、後項に含める。

【例】
／開け／っ／広げ／　／朝／っ／ばら／　／甘／っ／たれ／　／甘／っ／ちよろい／　／腕／っ／節／　／崖／っ／淵／
／首／っ／引き／　／く／ま／ん／蜂／　／下／っ／端／　／し／み／っ／たれる／　／杉／っ／葉／　／手／っ／取り／早い／
／出／っ／歯／　／出／っ／張る／　／菜／っ／葉／　／抜／き／ん／出る／　／猫／っ／毛／　／端／っ／端／
／びり／っ／けっ／　／宵／っ／張り／

2.3 助詞・助動詞を構成要素に含む語

助詞・助動詞を構成要素に含む語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.3.1 1 最小単位とする助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とする。助詞・助動詞以外の構成要素は、特に定めのない限り、他の規定に基づいて最小単位を認定する。

2.3.1.1 「一の～」

前後の要素が古語であつたり、音変化を生じていたりする場合も、助詞「の」を1最小単位とする。

【例】
／天／の／川／　／あ／ま／の／じゃく／　／有／り／の／俣／　／タツ／ノ／オトシ／ゴ／

2.3.1.2 助動詞の連用形が独立性を失い、動詞と1語化して名詞・形状詞に転じたもの

【例】
／い／わ／れ／(謂れ)　／い／や／が／ら／せ／　／知／ら／せ／　／人／泣／か／せ／　／人／騒／が／せ／　／番／狂／わ／
せ／　／虫／刺／さ／れ／　／や／ら／せ／

2.3.1.3 その他の名詞・形状詞等

【例】
／土／踏／ま／ず／　／人／で／な／し／　／間／に／合／う／

2.3.1.4 「動詞＋て」型の副詞

【例】
／あ／え／て／　／改／め／て／　／得／て／し／て／　／か／え／っ／て／　／か／ね／て／　／辛／う／じ／て／
／極／め／て／　／強／い／て／　／す／べ／て／　／せ／め／て／　／次／い／で／　／な／べ／て／　／果／た／し／て／
／ひ／い／て／は／　／翻／っ／て／　／ま／し／て／

2.3.1.5 「動詞＋ず」型の副詞

【例】
／す／か／さ／ず／　／取／り／あ／え／ず／

2.3.1.6 「動詞の未然形・已然形＋ば」型の副詞

【例】
／言／わ／ば／　／例／え／ば／

2.3.1.7 「形容詞の連用形＋は」型の副詞

【例】
／あ／わ／よ／く／ば／

2.3.1.8 「副詞・形容詞の連用形＋も」型の副詞

【例】
／い／と／も／　／や／や／も／　／奇／し／く／も／　／い／や／し／く／も／　／か／ら／く／も／

2.3.1.9 その他の副詞

【例】
／飽く／まで／　／いは／ん／や／　／擦っ／た／揉ん／だ／　／なる／べく／　／まる／で／　／わり／と／

2.3.1.10 「動詞+ぬ・ない」型の連体詞

【例】
／素／知ら／ぬ／

2.3.1.11 「動詞+たる」型の連体詞

【例】
／さし／たる／

2.3.1.12 「動詞+て+動詞」型の動詞及びその転成名詞

【例】
／取っ／て／置き／

2.3.2 1 最小単位としない助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とはしない。助詞・助動詞を含む全体で1最小単位とする。

2.3.2.1 「動詞+て+動詞」のうち、助詞「て」が後続の動詞と縮約しているもの

【例】
／打っ／ち／やる／　／置／いて／け／ぼり／

2.3.2.2 「持つて」に由来する「も(っ)て」を含む語(その転成名詞を含む。)

【例】
／も＝て＝あそぶ／　／持＝て＝余す／　／も＝て＝なす／

2.3.2.3 助詞「は」を含む語のうち、助詞「は」に由来する要素が現代仮名遣いで「わ」と表記される語

【例】
／イマ＝ワ／ (今際)

2.3.2.4 「～に」型の副詞

本規定の適用を受ける主な語は以下の通り。

【例】
／暗＝に／　／如何(いか)＝に／　／大(おお)い＝に／　／大(おお)き＝に／　／主(おも)＝に／　／徐(おもむろ)＝に／　／実(げ)＝に／　／厳(げん)＝に／　／現(げん)＝に／　／殊(こと)＝に／　／更(さら)＝に／　／し＝に／　／既(すで)＝に／　／切(せつ)＝に／　／直(ただ)ち＝に／　／偶(たま)＝に／　／単(たん)＝に／　／遂(つい)＝に／　／夙(つと)＝に／　／具(つぶさ)＝に／　／特(とく)＝に／　／頓(とみ)＝に／　／ひた＝に／　／偏(ひとえ)＝に／　／独り＝に／　／平(ひら)＝に／　／本(ほん)＝に／　／正(まさ)＝に／　／優(ゆう)＝に／　／世(よ)＝に／　／碌(ろく)＝に／

2.3.2.5 「～に」型の副詞由来の接続詞

【例】
／更＝に／

2.3.2.6 「～なる・な」型の連体詞

本規定の適用を受ける主な語は以下の通り。

【例】
／如何=な／　／いっか=な／　／異=な／　／色ん=な／　／大き=な／　／可笑し=な／　／主=な／　／こげ=な／
／小=な／　／ひよん=な／　／碌=な／　／如何=なる／　／大い=なる／　／更=なる／　／妙=なる／　／単=
なる／

2.3.2.7 「動詞以外+たる」型の連体詞

本規定の適用を受ける主な語は以下の通り。

【例】
／確=たる／　／名だ=たる／　／何=たる／

2.3.2.8 あいさつ・掛け声等の感動詞

【例】
／さら=ば／　／こんにち=は／　／こんばん=は／　／さよう=なら／

2.3.2.9 その他

【例】
／あた=か=も／
※「あた」を最小単位とは認め難いため。
／そ=も／そ=も／
※指示詞「そ」が1最小単位と認定されないため。

2.4 副詞「と」「かく」を構成要素に含む語

副詞「と」「かく」を構成要素に含む語については、副詞「と」「かく」を1最小単位とした上で、他の要素もそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／と／ある／　／兎／角／　／兎／に／角／　／と／も／あれ／　／兎／も／角／　／と／て／も／
／と／に／も／かく／に／も／

2.5 派生形容詞・繰り返しの要素を含む副詞・形状詞

派生形容詞及び繰り返しの要素を含む副詞・形状詞については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.5.1

「AAし」という語構成の形容詞は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／軽／々し／　／白／々し／　／痛／々し／　／忌／々し／　／初／々し／

2.5.2

「黄色し」「奥ゆかし」等、複合語に形容詞語尾が付いた語（「待ち遠し」のようにク活用型形容詞の語幹にシク活用型形容詞の活用語尾が接続したものを含む。）は、以下のように最小単位を認定する。

【例】
／黄／色し／　／待ち／遠し／　／奥／ゆかし／

2.5.3

複合名詞の一部が形容詞語尾として異分析された語や、後項に個別的な音変化が生じているものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／目=ぼし／
※名詞「目星」の転。
／目=まぐるし／
※「目+紛らし」の転。後項「紛らし」に音変化が生じている。

2.5.4

重複要素を含む副詞・形状詞は、次のように重複する要素をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／粗／々／　／生き／生き／　／色／々／　／浮き／浮き／　／更／々／　／偶／々／

2.6 接頭辞

接頭辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.6.1

接頭辞「お」「み」を含む語は、以下の規定によって最小単位を認定する。（以下は、資料「要注意語」に挙げた接頭的要素「お」「み」の例外規定に当たる。）

2.6.1.1

「おみ+○」という語構成のものうち「み+○」が1最小単位と規定されているものは、「お」は1最小単位とする。

【例】
／お／み=くじ／　／お／み=こし／

2.6.1.2

前条に該当しない「おみ+○」という形式は全体で1最小単位とする。

【例】
／お=み=足／　／お=み=渡り／

2.6.1.3

感動詞の構成要素と成っている接頭辞「お」は、直後の要素と合わせて1最小単位とする。

【例】
／お=はよう／

2.6.2

次に挙げる接頭辞は、1最小単位とする。
接頭辞の直後に挿入された促音は接頭辞に含める。

2.6.2.1 生物の雌雄を区別する「お（雄）」

【例】
／雄／牛／　／牡／鹿／

2.6.2.1.1

ただし、生物の雌雄を直接指示しない「お」は除く。

【例】
／雄=たけび／

2.6.2.2 おお（大）

【例】
／大／君／　／大／雨／

2.6.2.3 か

【例】
／か／細し／ ／か／弱し／

2.6.2.4 こ (小)

【例】
／小／石／ ／小／売り／

2.6.2.4.1

ただし、「小間」の「こ」を除く。

【例】
／小=間／物／ ／小=間／使い／

2.6.2.5 こっ

【例】
／こっ／ばずかしい／ ／こっ／酷い／

2.6.2.6 さ

【例】
／さ／迷ふ／ ／小／夜／

2.6.2.7 さか (逆)

【例】
／さか／うらみ／ ／さか／のぼる／

2.6.2.7.1

ただし、以下の「さか」は除く。

【例】
／逆=さ／ ／逆=らふ／

2.6.2.8 だだ

【例】
／だだっ／広い／

2.6.2.9 ど

【例】
／ど／田舎／ ／ど／えらい／ ／ど／ぎつい／ ／度／肝／ ／度／突く／ ／どん／底／

2.6.2.10 どす

【例】
／どす／黒い／

2.6.2.11 ひ

【例】
／ひ／弱／

2.6.2.12 ひた

【例】
／ひた／走る／ ／ひた／あやまり／

2.6.2.12.1

ただし、以下のものは除く。

【例】
／ひた=すら／ ／ひた=むき／

2.6.2.13 ま (真)

【例】
／ま／いわし／ ／真ん／中／ ／真っ／白／

2.6.2.14 め (雌)

【例】
／雌／牛／ ／牝／鹿／

2.6.2.15 ゆう (夕)

【例】
／夕／焼け／ ／夕／暮れ／

2.7 接尾辞

接尾辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.7.1 1 最小単位とする接尾辞

次に挙げる接尾辞は、1 最小単位と認定する。
接尾辞の直前に挿入された促音は接尾辞に含める。

2.7.1.1 がましい

【例】
／おこ／がましい／ ／押し／付け／がましい／

2.7.1.2 がり

【例】
／暗／がり／ ／怖／がり／ ／強／がり／ ／広／がり／

2.7.1.3 かす

【例】
／甘や／かす／ ／脅／かす／ ／おびや／かす／ ／散ら／かす／ ／寝／かす／ ／やら／かす／

2.7.1.4 け

【例】
／眠／気／ ／真っ／暗／け／ ／洒落／っ気／

2.7.1.5 ころ

【例】
／石／ころ／ ／犬／ころ／

2.7.1.6 ずむ

【例】
／黒／ずむ／

2.7.1.7 たらしい

【例】
／長／たらしい／ 　／むご／たらしい／

2.7.1.8 っこい

【例】
／油／っこい／ 　／丸／っこい／ 　／ねば／っこい／ 　／ねち／っこい／

2.7.1.9 ったい

【例】
／野暮／ったい／ 　／口／幅／ったい／

2.7.1.10 ったけ

【例】
／首／っ丈／ 　／有り／っ丈／

2.7.1.11 ったるい

【例】
／甘／ったるい／

2.7.1.12 っち

【例】
／おれ／っち／

2.7.1.13 っちい

【例】
／丸／っちい／ 　／嘘／っちい／

2.7.1.14 っちよ

【例】
／先／っちよ／ 　／横／っちよ／

2.7.1.15 っばち

【例】
／嘘／っばち／ 　／自棄／っばち／

2.7.1.16 っぺ

【例】
／田舎／っぺ／

2.7.1.17 っぺら

【例】
／薄／っぺら／

2.7.1.18 っぺらい

【例】
／薄／っぺらい／

2.7.1.19 つぼ

【例】
／尾／つぼ／ ／先／つぼ／ ／空／つぼ／

2.7.1.20 つぼい

【例】
／荒／つぼい／ ／安／つぼい／

2.7.1.21 びる

【例】
／古／びる／ ／大人／びる／ ／鄙／びる／

2.7.1.22 びれる

【例】
／悪／びれる／ ／青／びれる／

2.7.1.23 べったい

【例】
／平／べったい／

2.7.1.24 ぼったい

【例】
／厚／ぼったい／ ／暗／ぼったい／ ／腫れ／ぼったい／

2.7.1.25 めかしい

【例】
／なま／めかしい／ ／古／めかしい／

2.7.2 1 最小単位としない接尾辞

次に挙げる接尾辞は前の要素に含める。

2.7.2.1 ク語法

【例】
／いは＝く／ ／ねがは＝く／ ／思へ＝ら＝く／

2.7.2.2 こ

擬音語・擬態語に付いて、「～という状態である」という意の語や他の擬音語・擬態語を作る。

【例】
／泥ん＝こ／ ／どんぶら＝こ＝っこ／ ／ぺたん＝こ／ ／ぺちゃん＝こ／

2.7.2.3 こ

名詞や擬音語に付いて、そのものに対する愛着・愛情等を表現する名詞を作る。

【例】
／こゃん＝こ／ ／わん＝こ／

2.7.2.4 ち（歳）

【例】
／はた=ち／ /三十=路／

2.7.2.5 っか

【例】
／輪=っか／

2.7.2.6 っかしい

【例】
／危な=っかしい／ /そそ=っかしい／

2.7.2.7 っかる

【例】
／乗=っかる／

2.7.2.8 っける

【例】
／乗=っける／

2.7.2.9 っぴら

【例】
／大=っぴら／ /真=っぴら／

2.7.2.10 まか

【例】
／大=まか／ /ちょこ=まか／

2.7.2.11 まる

【例】
／薄=まる／ /奥=まる／ /固=まる／ /静=まる／ /狭=まる／ /高=まる／

2.7.2.12 める

【例】
／赤ら=める／ /薄=める／ /固=める／ /静=める／ /高=める／

2.7.2.13 み

【例】
／とろ=み／ /柔らか=み／ /弱=み／

2.8 1音節の基本語を構成要素に含む語

1音節の基本語を構成要素に含む語は、その基本語を分析・還元することが難しいと考えられる場合、最小単位とせず全体で1最小単位とすることがある。

2.8.1 サ変動詞「する」の連用形「し」

サ変動詞「する」の連用形「し」を含む語については、「し」に当たる要素が「仕」「支」等の別字で表記されることが多いため、原則として「し」を最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／試=合／ /し=あわせ／ /仕=入る／ /仕=立て／ /仕=付け／糸／ /仕=留む／ /し=にせ／ /支=払
ひ／ /仕=舞ふ／ /仕=業／

2.8.1.1

ただし、「する」の意味が比較的強く感じられる語は、「し」を1最小単位とする。

【例】
／為／手／ ／為／直す／

2.8.2 「す(素)」 「そ(素)」

「す(素)」 「そ(素)」を含む語は、「す」「そ」を1最小単位とする。

【例】
／素っ／飛ばす／ ／素っ／飛ぶ／ ／素っ／ぴん／ ／素っ／裸／ ／素／手／ ／素／通り／ ／素／肌／
／そ／振り／

2.8.2.1

ただし、以下のように、他方の構成要素の意味が独立して認識される度合いの小さい語に用いられたものは「す」「そ」を1最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／素=直／ ／素=晴らし／ ／素っ=気／

2.8.3 「て(手)」

「て(手)」を含む語は、原則として「て」を1最小単位とする。

【例】
／手／垢／ ／手／上げ／ ／手／足／ ／手／厚い／ ／手／当て／ ／手／薄／ ／手／落ち／ ／手／紙／
／手／柄／ ／手／軽／ ／手／際／ ／手／口／ ／手／答え／ ／手／塩／ ／手／摺／ ／手／っ取り／
早し／ ／手／引き／ ／痛／手／ ／射／手／ ／受け／手／ ／薄／手／ ／裏／手／ ／売り／手／

2.8.3.1

ただし、以下に挙げるものは「て」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.3.2.1 他の規定によって全体で1最小単位と認定されるもの

【例】
／てんでん／ ／てんやわんや／

2.8.3.2.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／梃子／ ／てこずる／ ／手伝ふ／ ／手間／

2.8.4 「ま(間)」

「ま(間)」を含む語は、原則として「ま」を1最小単位とする。

【例】
／間／際／ ／間／口／ ／間／近／ ／間／取り／ ／間／に／合ふ／ ／間／抜け／ ／間／引く／ ／間／
違ひ／ ／間／違ふ／ ／間／違へ／

2.8.4.1

ただし、現代では語源意識が極めて希薄であるもの等は、「ま」を最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】
／万=引き／ (←間引き)

2.8.5 動詞「見る」の連用形「み」

動詞「見る」の連用形「み」を含む語は、原則として「み」を1最小単位とする。

【例】
／見／合ひ／ ／見／出だす／ ／見／入る／ ／見／劣り／ ／見／限る／ ／見／応へ／ ／見／詰む／
／看／取る／ ／見／栄え／ ／見／舞ふ／ ／国／見／ ／下／見／ ／見／付かる／※

※「付かる」という語が単独で存在しているわけではないが、「／見／付く／」に対応する語として「／見／付かる／」の2最小単位に分割する。

2.8.5.1

ただし、以下に挙げるものは「み」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.5.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／認む／ ／醜し／

2.8.5.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／見事／ ／みっともない／

2.8.6 「め（目）」

「め（目）」を含む語については、原則として「め」を1最小単位とする。

【例】
／目／新し／ ／目／当て／ ／眼／鏡／ ／目／先／ ／目／指す／ ／目／敏し／ ／目／覚む／ ／目／付
き／ ／目／抜き／ ／目／安／ ／網／目／ ／板／目／ ／裏／目／ ／上／目／ ／負ひ／目／

2.8.6.1

ただし、以下に挙げるものは「め」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.6.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／め=くるめく／ ／め=じろ／ ／め=ぼし／（形容詞） ／め=まぐるし／

2.8.6.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／め=ど／

2.9 語の構成要素となっている古語

語の構成要素となっている古語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.9.1

語の構成要素となっている動詞が、文語の活用形を残存している場合にも、それを1最小単位と認定する。

【例】
／あし／げ／（足蹴） ／こじ／開く／ ／攀じ／登る／

2.9.2

助詞「つ」及びその母音交替形や、助詞「の」の母音交替形、間投助詞「し」は、最小単位とせず全体で1最小単位とする。

【例】

／ひ=な=た／ ／ある=い=は／ ／今=し=がた／ ／ひ=な=た／ ／み=な=そこ／ ／ま=つ=毛／ ／末=つ=方／
／おの=ず=から／ (←おのつから) ／果て=し=ない／

2.9.2.1

ただし、助詞の前後が複数の最小単位で構成されているなど、全体で1最小単位とすることが適切でないと考えられる場合は、助詞を1最小単位とする。

【例】

／天／つ／高／御座／

2.9.3

1語化した語の中に残存する文語の助動詞は、1最小単位としない。

【例】

／あら=まし／ ／いは=ゆる／

2.10 その他、最小単位としないもの

以下に挙げる要素は、最小単位としない。

2.10.1 指示代名詞などの構成要素「あ」「か」「こ」「そ」等

【例】

／あそこ／ ／あちら／ ／あなた／ ／あの／ ／かの／ ／こいつ／ ／そいつ／

2.10.2 疑問代名詞・疑問副詞などの構成要素「いか」「いく(幾)」「ど」等

【例】

／いか=なる／ ／いく=た／ ／いく=ばく／ ／いく=ら／ ／ど=の／

2.10.3 単独では動植物を示すことがない一般語が複数結合し、動植物名として用いられている語の構成要素、及び構成要素の一部に動植物名を含むが、結合した全体は個々の構成要素が表す動植物とは無関係な動植物を表す語の構成要素

【例】

／あさ=がお／ ／いし=もち／ ／かた=つむり／ ／き=くらげ／

2.10.4 競走馬名などの構成要素

【例】

／マチ=カネ=フク=キタル／ ／マチ=カネ=ワラウ=カド／

2.11 その他、問題となる語

以上に定めたもののほか、問題となる語の最小単位認定について、次に一覧する。

2.11.1

元々は二つ以上の要素から成るが、現代では既に1語と意識されていると考えられる語は、全体で1最小単位とする。
主な例を次にあげる。

【例】

《あ》

仰向け (アオムケ) 足掻く (アガク) 論う (アゲツラウ) 曙 (アケボノ)
 浅はか (アサハカ) 朝ぼらけ (アサボラケ) 嘲笑う (アザワラウ)
 汗疹 (アセモ) 厚かましい (アツカマシイ) 呆気 (アツケ)
 あっけらかん 当てずっぽう (アテズッポウ) あどけ (ない)
 脂ぎる (アブラギル) 油ぎる (アブラギル) あやふや
 現人 (神) (アラヒト (ガミ)) 在処 (アリカ) 有りふれる (アリフレル)
 経緯 (イキサツ) 行成 (イキナリ) 藺草 (イグサ)
 居た堪れる (イタタマレル) 躰 (イビキ) 息吹き (イブキ)
 鋳師 (イモジ) いんちき 後ろめたい (ウシロメタイ)
 団扇 (ウチワ) 自惚れる (ウヌボレル) 姥目 (ウバメ)
 羨ましい (ウラヤマシイ) 羨む (ウラヤム) 浮つく (ウワツク)
 得手 (エテ) 干支 (エト) 花魁 (オイラン) 大凡 (オオヨソ)
 落ちぶれる (オチブレル) 弟切 (オトギリ) 一昨日 (オトイ)
 一昨年 (オトトシ) 乙女 (オトメ) 覚束無い (オボツカナイ)
 おわします おんぼろ

《か》

神楽 (カグラ) 駆けずる (カケズル) 瘡蓋 (カサブタ) 気質 (カタギ)
 片栗 (粉) (カタクリ (コ)) 忝い (カタジケナイ) 象る (カタドル)
 形見 (カタミ) 竈 (カマド) 蒲鉾 (カマボコ) 我楽多 (ガラクタ)
 枳殻 (カラタチ) 木こり (キコリ) 如月 (キサラギ) きな粉 (キナコ)
 木目 (キメ) 際どい (キワドイ) 草薙 (クサナギ) 嘴 (クチバシ)
 毛羽 (ケバ) 毛むくじゃら (ケムクジャラ) 煙たい (ケムタイ)
 悉く (コトゴトク) 異なる (コトナル) 言葉 (コトバ) 寿ぐ (コトホグ)
 諺 (コトワザ) 小間 (コマ)

《さ》

棧敷 (サジキ) 臯月 (サツキ) 最中 (サナカ) ざりがに
 潮騒 (シオサイ) しこたま 枝垂れる (シダレル) 芝居 (シバイ)
 僕 (シモベ) 白ける (シラケル) しるべ 辛抱 (シンボウ)
 酢桶 (スダチ) 簾 (スダレ) すっからかん すっ込む (スッコム)
 住処 (スミカ) 背子 (セコ) そそくさ 某 (ソレガシ)

《た》

畳付く (タタナヅク) 忽ち (タチマチ) 七夕 (タナバタ)
 たなびく 容易い (タヤスイ) ちぎれる 稚児 (チゴ)
 司る (ツカサドル) 辻棲 (ツジツマ) 恙ない (ツツガナイ)
 津波 (ツナミ) 唾 (ツバ) 椿 (ツバキ) 鶴嘴 (ツルハシ)
 釣瓶 (ツルベ) 出しゃばり (デシャバリ) 出しゃばる (デシャバル)
 出鱈目 (デタラメ) てんでん (テンデン) 途切れ (トギレ)
 途切れる (トギレル) 途絶える (トダエル) 怒鳴る (ドナル)
 とびきり (トビキリ) 戸惑い (トマドイ) 戸惑う (トマドウ)
 止めど (トメド) 鳥居 (トリイ) 虜 (トリコ) 砦 (トリデ)
 取り分け (トリワケ) 団栗 (ドングリ) とんでも (ない)

《な》

名うて (ナウテ) 亡くなる (ナクナル) なけなし 何某 (ナニガシ)
 名乗り (ナノリ) 名乗る (ナノル) 名乗れる (ナノレル)
 なまじっか 何ぼ (ナンボ) ねんね 仰け反る (ノケズル) のさばる

《は》

羽織 (ハオリ) 羽交い (ハガイ) 葉書 (ハガキ) 渉る (ハカドル)
 儂い (ハカナイ) 儂む (ハカナム) 狭間 (ハザマ) 梯子 (ハシゴ)
 鱒 (ハタハタ) 葉っぱ (ハツパ) 餞 (ハナムケ) 埴輪 (ハニワ)
 羽根 (ハネ) 原っぱ (ハラツパ) 遙々 (ハルバル) 日がな (ヒガナ)
 蹄 (ヒヅメ) ひねくれる 日和る (ヒヨル) 平たい (ヒラタイ)
 平たく (ヒラタク) ひれ伏す (ヒレフス) 広げる (ヒロゲル)
 ふくらはぎ 不貞腐れる (フテクサレル) へたばる 部屋 (ヘヤ)
 ほくそ笑む (ホクソエム) ほつつき (歩く) 進む (ホトバシル)

《ま》

馬子 (マゴ) 実しやか (マコトシヤカ) まさか 真砂 (マサゴ)
 真面目 (マジメ) 混ぜこぜ (マゼコゼ) まっしぐら 真秀るば (マホロバ)
 蝮 (マムシ) 丸切り (マルキリ) 晦日 (ミソカ) 見附 (ミツケ)
 見惚れる (ミトレル) 深山 (ミヤマ) 蝕む (ムシバム) 息子 (ムスコ)
 群がる (ムラガル) 娶る (メトル) 目眩 (メマイ) 基づく (モトヅク)
 裳抜け (モヌケ) 最早 (モハヤ) 最寄り (モヨリ)

《や》

館 (ヤカタ) やきもき 火傷 (ヤケド) 屋敷 (ヤシキ) やっとこ
 やっとこさ 屋根 (ヤネ) 矢張り (ヤハリ) 流鏑馬 (ヤブサメ)
 山びこ (ヤマビコ) 昨夜 (ユウベ) タベ (ユウベ) 湯がく (ユガク)
 行きずり (ユキズリ) 行方 (ユクエ) 蘇る (ヨミガエル)
 四方山 (ヨモヤマ) 夜半 (ヨワ)

《わ》

轍 (ワダチ) 侘助 (ワビスケ)

2.11.2

現代では単独で用いられないことがない、あるいはほとんどない要素を含むが、それを構成要素に持つ語について、現代では複数の構成要素から成る語であると意識されており、その要素も複数の語の中に認められるなど、一定の独立性を持っていると考えられるものは、1最小単位とする。
 主な例を次にあげる。

【例】

《あ》
 /あから/さま/ /朝な/朝な/ /朝な/夕な/ /あだ/名/
 /新/巻/ /熱り/立つ/ /投げ/うつ/ /産/声/ /産/湯/
 /うろ/覚え/ /うろ/つく/ /うわ/ごと/ /生き/餌/
 /撒き/餌/ /笑/顔/ /生い/立ち/ /おい/どん/
 /面/影/ /面/持ち/
 《か》
 /嵩/張る/ /わり/かし/ /神/主/ /色/きち/
 /くす/だま/ /無茶/苦茶/ /滅茶/苦茶/ /かま/くら/
 /おし/くら/
 《さ》
 /遠/ざかる/ /今/更/ /殊/更/ /しか/じか/
 /しず/しず/ /じり/安/ /代/物/ /道/すがら/
 /後/ずさり/ /炭/すこ/ /せせら/笑う/ /ぞろ/目/
 /寝/そべる/
 《た》
 /横/たえる/ /塗り/たくる/ /耳/たぶ/ /だふ/屋/
 /たわ/ごと/ /横/たわる/ /千/尋/ /千/代/
 /乳/飲み/子/ /乳/首/ /ちよめ/ちよめ/ /はい/つくばる/
 /常/夏/ /常/世/ /どさ/くさ/ /どさ/回り/
 /とど/松/ /どんでん/返る/ /どんど/焼き/
 《な》
 /ぬるま/湯/ /のんべん/だらり/
 《は》
 /端/唄/ /端/ぎれ/ /羽/ばたく/ /はし/ぶと/
 /はし/ぼそ/ /はす/向かい/ /はちや/めちや/ /食み/瓜/
 /はみ/出す/ /はみ/出る/ /曾/孫/ /久/方/
 /引っこ/抜く/ /芝/生/ /舳/先/ /海/辺/ /川/辺/
 /岸/辺/ /へし/合い/ /へし/折る/ /へり/くだる/
 /瘦せ/っぼち/ /洞/穴/ /ほろ/苦い/
 《ま》
 /ぶち/まける/ /まて/貝/ /まてば/しい/ /まな/板/
 /継/子/ /継/母/ /まま/ごと/ /血/みどろ/
 /むく/鳥/ /女/神/ /やたら/めったら/ /めり/はり/
 /もも/とり/ /諸/手/ /諸/刃/ /諸/々/
 《や》
 /八百/屋/ /八百/万/ /青/柳/ /朝な/夕な/
 /ゆすら/うめ/ /夜な/夜な/
 《わ》
 /板/わさ/

第3 最小単位の分類

短単位を認定するために、最小単位を以下のように分類する。

【例】
分類

一般	和語 【例】母 親 名 高し 話す 言葉 … 漢語 【例】政 治 洋 學 者 … 外来語 【例】サイエンス リベラル 硝子 瓦斯 …
付属要素	接頭的要素（「要注意語」の「接頭的要素」に掲げたもの。） 【例】相 御（お・おおん・おん・ご・み） 各 仄（ほの） … 接尾的要素（「要注意語」の「接尾的要素」に掲げたもの。） 【例】能ふ 難し 様 尽くす 的 …
記号	【例】A ア 甲 。 、 「 」 …
数	【例】一 二 十 百 千 幾 數 何 …
固有名	人名 【例】福澤 諭吉 ジュール ベルヌ 曹操 … 地名 【例】日本 東京 本石町 欧州 …
助詞・助動詞	（「要注意語」の「助詞」「助動詞」に掲げたもの。） 【例】て の は や ず たり なり む …

1 補則

1.1 一般

1.1.1

ヒトリ（一人）・フタリ（二人）は、「一般」に分類する。

1.1.2

「一」「二」等、数を表す最小単位のうち、数量を表すことに主眼がなく、他との結合が慣用的であり、かつ全体で一つの決まった内容を表すもの（おおよそ次の 1.1.2.1 から 1.1.2.7 に当たるもの）は「一般」に分類する。

1.1.2.1 サ変動詞，副詞，形状詞として使われる語やそれに準じる意味となる語

【例】
一休み 一読 三振 一刻 一律 一時 一流 三角 四角

1.1.2.2 四字熟語，成句の構成要素

【例】
一石二鳥 一夫多妻 一騎当千 ひと騒ぎふた騒ぎ（「ひと一ふた一」という型の表現）

1.1.2.3 比喩的・抽象的で，数字どおりの数を示さないもの（不定の量や大量を表す。）

【例】
一種 一团 一員 一抹 一欠片 八宝 四方 十二分（に）

1.1.2.4 そのカテゴリに属する種類の数を表すもの

【例】
三家 四季 四苦八苦 六法 七味

1.1.2.5 その他具体的な事柄を表すもの

【例】
七節 [虫の名前] 八頭 [里芋の品種] 八字・十字 [字の形] 四捨五入 四球 [四死球] 三箇日 (さんがにち) 三つ星 二紋 (ふたもん) [アシナガバチの種類]

1.1.2.6 数字を含む略語

【例】
小六 中二 高三 四駆 (四輪駆動の略) 二文 (早稲田大学第二文学部の略)

1.1.2.7 その他

【例】
二の腕 三つ編み 四つ角 二枚舌

1.2 記号

音や文字・語の断片※を指示したものについては、「記号」に分類する。

※ここで言う語の断片とは、次に挙げるものである。

- 漢語は1短単位未満のもの。
- 和語・外来語は1最小単位未満のもの。ただし活用語の語幹は除く。

【例】
「【ゐ】」「【ゑ】」を廃して「【い】」「【え】」のみを存す
易直の方に【易】の字を置き

1.3 数

「幾」「数」「何」が「幾人」「数百」「何個」のように不定の数を表す場合は、「数」に分類する。

第2章 短単位認定規程

第1 短単位認定規程

短単位は、長単位の中で最小単位が以下の規程に基づいて結合した（又は結合しない（これは0回結合と考える。））結合体である。

短単位の認定に関する規程は、第1章 第3 「最小単位の分類」で分類した種類ごとに適用すべき規程が定められている。以下に、それを示す。

擬音語・擬態語の短単位の認定については、同語異語判別規程「擬音語・擬態語の扱い」（第4章 第1 6.7）を参照。

近代文語の短単位認定規程は、現代語との関連を重視して、現代語の認定規程を適用することを原則とする。現代では用いない語についても、原則として同様の扱いとする。

近代文語の短単位認定規程の基礎となる現代語の規程を理解するために、近代文語では用例が見出しがたく、必ずしも必要でない規定についても、現代語での規定に基づいて掲載する場合がある。

1 一般

1.1 原則

原則として、「一般」に分類した和語・漢語の最小単位二つの1次結合は1短単位とする。

【例】
| 母=親 | | 取り=消す | | 名=高し | | 殊=更 |
| 政=治 | | 容=易 | | 重=箱 |

1.1.1

「一般」に分類した外来語の最小単位のうち省略されたものは、和語・漢語の最小単位と同様に扱う。

【例】
| 赤=ゲット | (ケット=blanketの略)

1.2 3最小単位以上の結合を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、3最小単位以上の結合であっても全体で1短単位とする。

1.2.1 三つ以上の最小単位から成る組織の名称等の略称

【例】

| 統=数=研 | | 奈=文=研 | | 日=経=連 |

1.2.1.1

※ここでいう略称とは、組織の名称を構成する短単位すべて又はその一部を略して結合させたもののことである。したがって、以下のような構成要素の一部（「国語」「党」）が略されていないものは、略称とはしない。

【例】

国立	国語	研究	所	→	国語	研
自由	民主	党	→	自民	党	
主婦	連合	会	→	主婦	連	

1.2.2 切る位置が明確でないもの、あるいは切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるもの

【例】

大統領		不可解		明後日		殺風景
輸出入		國內外		町村長		市町村長
大袈裟		大雑把		大丈夫		二枚目

1.2.2.1

ただし、二つ以上の漢語の最小単位が並列して、1短単位と結合している場合は、次のように短単位を認定する。

【例】

| 中 | 小 | 工業 | | 小 | 中 | 学校 | | 郡 | 区 | 役所 |

1.2.3 「一が～」 「一の～」

資料「要注意語」の「一が～」 「一の～」に挙げたもの。

【例】

「一が～」 : | 天=が=下 | | 雁=が=音 | | 劍=が=峯 |
「一の～」 : | 日=の=丸 | | 床=の=間 | | 竹=の=子 |

1.2.3.1

※「一の～」で1短単位とするものを選定するに当たっては、以下の事項をおおよその目安とする。

1.2.3.1.1

「の」が読み添えとなっているもの

【例】

齋宮（いつきのみや） 對屋（たいのや）

1.2.3.1.2

「の」の直前の要素が被覆形のもの

【例】

木の葉 目の当たり

1.2.3.1.3

「一の～」全体の品詞が名詞以外となるもの

【例】
思ひの外 氣の毒 殊の外

1.2.3.1.4

「一の～」が動植物名等を表すもの

【例】
卵の花 竹の子 泥の木

1.3 1 最小単位を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、1最小単位を1短単位とする。

1.3.1 外来語・外国語の最小単位

【例】
|アート|サイエンス| |コンモン|センス| |リベラル|党| |瓦斯|燈|

1.3.1.1

ただし、省略された外来語の最小単位との1次結合体は1短単位とする。

【例】
|エア=コン| |マス=コミ| |デフレ=スパイラル|

1.3.1.2

※元は省略された外来語の最小単位であるが、省略されたものとして扱わないものがある。それらについては7.1を参照。

1.3.2 最小単位が三つ以上並列した場合の、それぞれの最小単位

【例】
|衣||食||住| |松||竹||梅| |町||村||郡||區|

1.3.3 名を表す部分と類概念を表す部分とが結合してできた固有名のうち、名を表す部分・類概念を表す部分が共に1最小単位である場合の、それぞれの最小単位

【例】
|梅||屋| |ビーグル||號| |さくら||会|

1.3.3.1

ただし、名を表す部分が1字の漢語である場合は、その1次結合体を1短単位とする。

【例】
|東=大| |佛=教| |清=朝| |禮=記|

1.3.4 感動詞

【例】
|否な|否な| |嗚呼|嗚呼|

1.3.5 言いよどみ

【例】
|そ|、|そんな| |お|、|おれ|も|

1.3.6 規定 1.1 ~ 1.3.4 によって得られた短単位に、前又は後ろから結合した最小単位

【例】
| 政治 || 談 | | 新 || 大統領 | | リベラル || 黨 |

1.3.7 単独で文節を構成する最小単位

【例】
| 【豈に】 | 【又た】 | 無理 | なら | ず | や |
| 近今 | の | 戦法 | に | 封港 | と | 【云ふ】 | 【7】 | 【あり】 |

2 記号

記号は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】
A	B	C		Y	字		オ	列		【ガンマー】	線
(a)							
J R			N T T			L . A .					
【「】		日本	人		【」】		の	宗教	主義		
内府		【、】		堅く	制し	て	動さ	ず		【。】	

2.1

それがないときに 1 短単位となるものの中にある記号は無視する。

【例】
| 五 = 【、】 = 六百 | 萬 | の | 英人 |
| クー = 【、】 = デ = 【、】 = ター |

3 数

数は、以下の規定によって単位認定する。

3.1

数は、ほかの最小単位と結合させない。

【例】
明治		七		年		十		一		月	刊行		
童子		五		六		歳							
每号		三		千		二		百		五		冊	餘
當今		紙幣		百		弗	の	價	は				

3.2

数の間どうしの結合については、一・十・百・千の桁ごとに 1 短単位とする。「万」「億」「兆」などの最小単位は、それだけで 1 短単位とする。小数部分は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】
四 = 十		三		億		三 = 千		八 = 百		萬		弗
一 = 千		一 = 百		萬		圓						
年齒	漸く	二十		四 = 五								
二 = 三 = 十		年	前									
何 = 十		何 = 百		の	人	達						
幾 = 千		幾		萬		の	童蒙					

3.2.1

※「四五」「二三十」などと結合させるのは概数の場合に限る。並列の場合は結合させない。

【例】
| 三 || 四 || 五 || 六 | の | 四 | 個月 | の | 間 |

4 固有名

固有名（人名・地名）は、1 最小単位を1 短単位とする。

【例】

〔人名〕

| 福澤 | 諭吉 | | 李 | 鴻章 | | ジュール | ヴェルヌ | | 十返舎 | 一久 | | お千代 | | 曹操 |

〔国名〕

| 大 | 【日本】 | 帝國 | | 【亞米利加】 | 合衆 | 國 | | 【イタリア】 | 王國 |

〔行政区画名〕

【山口】	縣		【都濃】	郡		【徳山】	村	九百	七十	五	番地
【日本橋】	區		【本石町】	三	丁	目					
【コロラド】	州		【デンヴァー】	市							

〔地域名〕

| 【下總】 | 國 | | | 【關東】 | 地方 | | | 【北海道】 | | | 【東海道】 | | | 【歐洲】 | | 西 | | 【アフリカ】

〔地形名〕

| | 【富士】 | 山 | | | 【アルプス】 | 山 | | | 【隅田】 | 川 | | | 【揚子】 | 江 | | | 【琵琶】 | 湖 | | | 【ベー
リング】 | 海峽 | | | 【大連】 | 灣 |

〔場所名〕

| | 【銀座】 | 通り | | | 【セバストウポル】 | 街道 | | | 【新橋】 | 驛 | | | 【奥羽】 | 南線 |

4.1

姓又は名を略した通称の最小単位は、「一般」の最小単位に分類されるので、1 によって短単位を認定する。

【例】

| おざ=けん | | | 橋=龍 |

4.2

地名を略した一字漢語の「日」「米」、それに相当する片仮名の「ロ」（「ロシア」の略）、一字漢語の地名「漢」「清」などは、「一般」の最小単位に分類されるので、1 によって短単位を認定する。

【例】

| 日米 | | | 普 | 佛 | 塙 | 伊 | | | 日露 | 戦役 | | | 佛艦 | | 魯軍 | | 米國 |
| 薩 | 長 | 土 | 肥 | | | 薩州 | 出身 |
| 訪 | 漢 | | ※「ロ」は 1.1.1 を適用する
| 秦漢 | | 日清 | 條約 | | 清軍 |

4.2.1

ただし、地名を略した一字漢語が三つ以上並列したものが、ある地域を表す場合は、全体で1 短単位とする。

【例】

|| 京=坂=神 || に | 歴遊 |

5 付属要素

付属要素は、1 最小単位を1 短単位とする。

【例】

| 【御】 || 殿 || 【様】 | | | 爲し || 【能ふ】 |

5.1 居体言の構成要素となっている動詞性接尾辞

付属要素に分類した動詞・動詞性接尾辞は、居体言の構成要素となっている場合も接尾的要素として扱う。

【例】

| 縁 | に | | は | 焚き || 【さし】 || の | 蚊遣 | 火 |
| 少しく | 考へ || 【過ぎ】 || で | は | ある | まい | か |

5.2 可能動詞形の動詞性接尾辞

付属要素に分類した動詞性接尾辞は、可能動詞形になっている場合も接尾的要素として扱う。

【例】
| 思 | きら | ん | と | し | て | も | 思 || 【きれ】 || ず |

5.3 敬語の動詞性接尾辞

敬語の動詞性接尾辞が複合動詞の間に入った場合も、接尾的要素として扱う。

【例】
| しのび | て | 寝 || 【たまひ】 || そめ | て | けり |

6 助詞・助動詞

助詞・助動詞は、1最小単位を1短単位とする。

【例】
| 西京 || 【へ】 || 行幸 | 在ら || 【せ】 || 【られ】 || 給へ || 【り】 |
| 固より | 立談 || 【の】 || 間 || 【に】 || 其の | 局 || 【を】 || 結ぶ || 【可き】 || 【也】 |

6.1 可能動詞形の補助動詞短縮形

助動詞として扱っている補助動詞短縮形は、可能動詞形になっている場合も助動詞として扱う。

【例】
| 結局 | (Fあの一) | ほっ || とけ || ない | って | いう | ところ | で |
| もう | ちょっと | 調子 | 悪く | て | 連れ || てけ || ない |

6.2 「一が～」 「一の～」

資料「要注意語」の「一が～」 「一の～」 に挙げられた語の中の助詞「が」「の」は、助詞・助動詞として扱わない。

【例】
「一が～」 : | 君=が=代 | | 萬=が=一 |
「一の～」 : | 日=の=丸 | | 床=の=間 | | 竹=の=子 |

6.3 助詞を含む人名・地名

人名・地名に含まれる助詞「が」「の」は、助詞・助動詞として扱わない。

【例】
| 千代=の=富士 | | 天=の=橋立 | | 藤原 (ふじわら=の) | 道長 |

6.4 補則 7.6.3 に挙げた語の中の助詞・助動詞

補則 7.6.3 に挙げた語の中の助詞・助動詞は1短単位とせず、それを含む全体で1短単位とする。

【例】
| 敢えて | | 飽くまで | | 況んや |

6.5 「もがな」「もがも」

「もがな」「もがも」は、終助詞「がな」「がも」「もが」のうち、「もが」を一まとまりとすることを優先して単位認定する。

| もが || な | | もが || も |

6.6 「てしがな」「にしがな」

「てしがな」「にしがな」は次のように短単位認定する。

|て||しが||な| |に||しが||な|

7 補則

7.1 略語として扱わない外来語の最小単位

省略された外来語の最小単位のうち、以下に掲げたものは省略された外来語の最小単位として扱わない。

アイゼン (シュタイクアイゼンの略)
アクセル (アクセルレーターの略)
アニメ (アニメーションの略)
アパート (アパートメント - ハウスの略)
アマ (アマチュアの略)
アンプ (アンプリファイヤーの略)
イラスト (イラストレーションの略)
インテリ (インテリゲンチヤの略)
イントロ (イントロダクションの略)
エクス (エキストラクトの略)
エゴ (エゴイスト, エゴイズムの略)
エレキ (エレキテルの略)
オートバイ (autbikeの略)
キャッチ (キャッチャーの略)
キャップ (キャプテンの略)
キロ (キロメートル, キログラム, キロワットの略)
コーポ (コーポラスの略)
コンテ (コンティニューイティの略)
コンパ (コンパニーの略)
コンビ (コンビネーションの略)
ジム (ジムナジウムの略)
スーパー (スーパーインポーズの略)
センチ (センチメートルの略)
ダイヤ (ダイヤグラムの略)
ダダ (ダダイズムの略)
デパート (デパートメント - ストアの略)
デマ (デマゴギーの略)
テレビ (テレビジョンの略)
トイレ (トイレットの略)
トランス (transformerの略)
ナンバリング (numbering machineの略)
ニス (ワニスの略)
ネル (フランネルの略)
ノート (ノートブックの略)
ノンプロ (nonprofessionalの略)
ノンポリ (nonpoliticalの略)
パーマ (パーマネントウェーブの略)
バイオ (バイオテクノロジーの略)
パブ (public houseの略)
ハンカチ (ハンカチーフの略)
ピケ (ピケットの略)
ビデオ (ビデオテープ, ビデオテープレコーダー等の略)
ビル (ビルディングの略)
プレミア (プレミアムの略)
プロ (プロフェッショナルの略)
ペーパー (サンドペーパーの略)
ホーム (プラットホームの略)
ボルノ (ボルノグラフィの略)
マイク (マイクロホンの略)
マンネリ (マンネリズムの略)
ミス (ミステークの略)
ミリ (ミリグラムの略)
メカ (メカニズムの略)
モノクロ (モノクロームの略)
ラボ (ラボラトリーの略)
リストラ (リストラクチュアリングの略)
リハビリ (リハビリテーションの略)
リュック (リュックサックの略)
レジ (レジスターの略)
ロケ (ロケーションの略)
ロゴ (ロゴタイプの略)

7.1.1

7.1 に掲げた語を選定した際の観点は、以下のとおりである。

7.1.1.1

元の語形が一般に余り使われない。

【例】

テレビ (テレビジョン) ジム (ジムナジウム)

7.1.1.2

原語に略語形がある。

【例】

プロ (pro (プロフェッショナル)) キャップ (cap (責任者))

7.1.1.3

原語に類義の同語形がある。

【例】

バイオ (バイオテクノロジー, bio (生物学))

7.1.1.4

その他

【例】

アマ (アマチュア) ……「プロ」を略語としないこととの対応

7.2 掛詞

原則として、掛詞の後ろの語句とのつながりで解釈する。この原則によっても意味を一つに特定できないときは、文脈全体から自然な解釈を選ぶ。

【例】

| いく | に | か | 身 | を | ば | 捨て | む | と | 【しら=雲】 | の | かから | ぬ | 山 | も | 泣く泣く | ぞ | 行く |

※前とのつながりから「| 捨て | む | と | しら (知ら) | 雲 | の | 」と分割するのではなく、後ろとのつながりから上の例のように分割する。

7.3 動詞「一 (サ) ス」

原則として、四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「ス」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サス」に分析可能なものは、語末「ス」「サス」を助動詞とする。

【例】

| 物 | 食は || せ || つ |
| 悲痛 | を | 覚え || させ || たる | 二 | 通 | の | 書状 |

7.3.1

四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「ス」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サス」と分析できないものは、語末の「(サ)ス」を分割しない。

【例】

| 着=す |

※「着る」は上二段動詞であるため、使役の助動詞としては「サス」が接続し、「着さす」となる。したがって、語末の「ス」を助動詞として切り出すのは、助動詞「ス」の接続の上で適切ではない。

[参照] | 見 || さす |

7.3.2

『日本国語大辞典』第2版において、尊敬の助動詞と認定されている「ス」は分割しない。

【例】

| のたまは=す | | たまは=す |

7.3.3

『日本国語大辞典』第2版において、意味の変化を伴い一語化したとの記述のある「ス」は分割しない。

【例】

| 参ら=す | ※1 | 遣は=す | ※2

※1 謙譲語として使用され、使役の意味が認められない場合は分割しない。〈参上させる〉と使役の意味が認められる場合は分割する。

※2 〈おやりになる〉という意味を表す場合は分割しない。

7.3.4

「合はす」は『日本国語大辞典』第2版において、明らかに一語の他動詞として認められているので、「ス」は分割しない。

7.3.5

「―(サ)ス」という形の複合動詞(連用形が名詞化したものも含む。)については、語末の「(サ)ス」を分割しない。

【例】

| 言い聞か=す | | 埋め合は=す |

※元の動詞が存在しないものや、存在したとしても元の動詞と「―(サ)ス」形との間で意味にずれが認められるものが多いことから、一律に語末の「(サ)ス」を助動詞として切り出さないこととした。

言い聞かす→×言い聞く
埋め合はす→×埋め合ふ

7.3.6

「―(サ)ス」という形の動詞(複合動詞は除く。)が、複合語を構成している場合、動詞の語末「(サ)ス」は分割しない。

【例】

| 食は=せ物 | | 人騒が=せ | | 人泣か=せ | | 番狂は=せ | | 役者 | 泣か=せ |

7.3.6.1

ただし、「―(サ)ス」という形の動詞(複合動詞は除く。)が付属要素と結合する場合、5によって付属要素を分割した上で、動詞に当たる部分に7.3を適用する。

【例】

| 思わ || せ || 振り |

7.4 可能動詞

可能動詞は、元になった四(五)段活用動詞と同様に短単位を認定する。

【例】

| 読める | | 行ける | | 見出だせる |

7.5 文節との関係

1 最小単位の体言と1 最小単位の用言とが接続した場合に、1 短単位として結合させるか否かの判断基準を7.5.1, 7.5.2として示す。

7.5.1 体言+動詞

2 最小単位から成る動詞のうち、体言＋動詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.5.1.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

【例】

| 苔=むす | | 心=ゆく | | 夢=見る |

7.5.1.2

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】

| 茜 || さす |

7.5.1.3

複合語の先頭又は中間に位置する体言＋動詞（連用形）については、7.5.1.1 及び 7.5.1.2 を適用せず、1短単位とする。

【例】

| 波=打ち | 際 | | 菜=切り | 包丁 | | 血=吸い | コウモリ |

7.5.1.3.1

体言＋動詞の品詞については、以下のように判定する。

7.5.1.3.1.1

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、動詞として立項されているものは、同語異語判別規程「動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準」（第4章 第1 6.3）に基づいて動詞か名詞かを判定する。

【例】

波打ち（際）……動詞

7.5.1.3.1.2

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれにおいても動詞として立項されていないもの、両方に立項されているが、「連語」とされているもの、又は一方の辞典にしか立項されておらず、なおかつその辞典で「連語」とされているものは、名詞とする。

【例】

菜切り（包丁）、血吸い（コウモリ）……名詞

7.5.2 体言＋形容詞

2 最小単位から成る形容詞のうち、体言＋形容詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.5.2.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

7.5.2.1.1 体言＋「ナシ（無）」

【例】

いとまなし 甲斐なし 隠れなし 程なし

7.5.2.1.2 体言+「ナシ(甚)」

【例】
あたじけなし あどけなし あらけなし いたいけなし
いわけなし ぎごちなし しどけなし せつなし
せはしなし はしたなし むげなし

7.5.2.1.3 上記以外の体言+形容詞

【例】
油臭し 色好し 奥深し

7.5.2.2 原則に当たらないもの

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】
| 違ひ || なし | | 訳 || なし |

7.5.2.3 関連事項

「要注意語」の「接頭的要素」に掲げていない接頭辞又は語素と1最小単位の形容詞との結合体は1短単位とする。

【例】
| うら=寂し | | うら=恥づかし | | うら=若し |
| け=だるし | | もの=悲し |

7.6 全体で1短単位とするもの

以下に挙げる語は、規定1から6にかかわらず全体で1短単位とする。

7.6.1 副詞「と」「かく」を含む語

【例】
| とある | | 兎角 | | 兎に角 | | ともあれ | | 兎も角 |

7.6.1.1

ただし、以下のように2短単位とする場合がある。

【例】
| とにも | かくにも | | とまれ | かくまれ |

7.6.2 連体詞を含む語(以下に挙げる語)

彼の世 此の方 [生まれて~] 此の頃 此の方 [一人称] 此の世
其の方 [二人称] 其の許 (もと) [二人称]
どの道
我が意 我が輩 我が儘 我が家

7.6.3 助詞・助動詞を含む語(以下に挙げる語)

敢えて 飽くまで 改めて あわよくば 美(い)しくも 安(いづく)んか 安(いづく)んぞ 至って 最(いと)も 苟(いやしく)も 言わば 謂(いわ)れ 況(いわん)や 得てして 押して 押し並べて 追って 己(おの)も己(おの)も 概して 却って 斯くて 掛(か)けて 予(かね)て 辛うじて 極めて 奇しくも 決して 然(さ)したる さして 定めて 強いて すかさず すったもんだ 全て せめて 総じて 所知らぬ 大した 大それた 達(た)つて 例えば 断じて 些(ち)つとも ついぞ 次いで 付けたり 通せん坊 取り敢えず とんだ 為される 何とぞ 並べて 成る丈 成る可く 初めて 初めまして 果たして 晴れて 延いては 終日(ひもすがら) 翻って 別して 本の 枉げて 況(ま)して 又もや 丸で 虫刺され 固(もと)より 焼き出され 良しなに よもや わしが [代名詞] 分けて 割れて

7.6.4 その他(以下に挙げる語)

漢語の複次結合語について、語構造の解釈の仕方を示す。

ただし、短単位認定においては、以下に挙げた解釈とは異なる解釈をしても、結果的に認定される単位が同じという場合がある。例えば、3.3.1.1 に※印を付けて示した「債権所有者」などがその例である。「債権所有者」の語構造は「債権を所有する者」と考えることとしているが、「債権の所有者」（債券+{(所有)+者}）と考えても認定される単位は結果的に同じである。したがって、語構造の解釈について、すべて以下のとおりに解釈しなければならないというものではない。

3.1.1

現 代 人
└──┬──┘
└──┘

【例】

| 現代 | 人 | | 伝染 | 病 | | 昨年 | 末 | | 新築 | 中 | | 自主 | 性 |
| 家庭 | 用 | | 全国 | 的 |

3.1.2

都 議 会
└──┬──┘
└──┘

【例】

都	議会		市	庁舎		核	軍縮		食	中毒		正	反対
総	工費		全	同		大	規		不	明		非	能
各	選		同	理		規	模		明	朗		能	率
手	手		事	事									

3.1.3

年 月 日
└──┬──┘
└──┘

【例】

| 年 | 月 | 日 | | 松 | 竹 | 梅 | | 衣 | 食 | 住 |

3.1.4

句 読 点
└──┬──┘
└──┘

【例】

| 都区内 | | 統廃合 | | 町村長 |

3.1.5

国 内 外
└──┬──┘
└──┘

【例】

| 国内外 | | 輸出入 |

3.1.6

[構造を示すことができないと考えられるもの]

【例】

| 不可解 | | 不思議 |

3.2.1

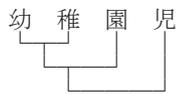
火 災 防 止



【例】
| 火 災 | 防 止 | | 公 共 | 事 業 |

3.2.2

幼 稚 園 児



【例】
| 幼 稚 | 園 児 | | 郵 便 | 局 長 | | 警 備 | 員 室 | | 解 剖 | 学 者 |

3.2.3

中 学 校 長



【例】
| 中 | 学 校 | 長 | | 法 | 医 学 | 者 |

3.2.4

総 調 達 額



【例】
| 総 | 調 達 | 額 | | 軽 | 飛 行 | 機 | | 各 | 管 制 | 塔 | | 同 | 動 物 | 園 |

3.2.5

市 町 村 長



【例】
| 市 町 村 長 |

3.2.6

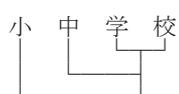
青 少 年 法



【例】
| 青 少 年 | 法 | | 小 中 学 | 生 |

3.2.7

小 中 学 校



【例】
| 小 | 中 | 学 校 |

3.2.8

市 区 町 村

【例】
|市|区|町|村| |都|道|府|県|

3.2.9

生 年 月 日

【例】
|生|年|月|日|

3.3.1

試 驗 放 送 中

【例】
|試験|放送|中| |有線|放送|網| |行政|区画|名| |独占|禁止|法|

3.3.1.1

※ 債 権 所 有 者

【例】
|債権|所有者| |宇宙|飛行|士| |沿岸|警備|隊|
|地震|観測|所| |入試|改善|策|

3.3.2

都 清 掃 条 例

【例】
|都|清掃|条例| |準|保護|世帯|

3.3.3

同 刑 事 部 長

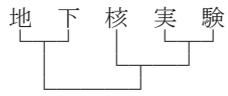
【例】
|同|刑事|部|長| |同|事務|所|長|

3.3.4

再 編 成 論 議

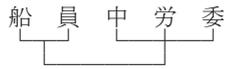
【例】
|再|編成|論議|

3.3.5



【例】
|地下|核|実験|

3.3.6



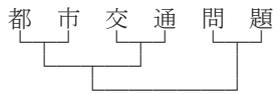
【例】
|船員|中労委|

3.3.7



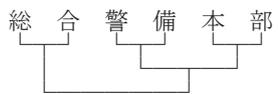
【例】
|経団連|会長|

3.4.1



【例】
|都市|交通|問題| |消費|減退|傾向| |高校|全入|運動|

3.4.2



【例】
|総合|警備|本部| |事故|合同|会議|

3.4.3



【例】
|野鳥|用|給水|池| |自動|車|修理|工|

3.4.4

社 会 科 副 読 本

```
graph TD; A[社会科副読本] --- B[社会]; A --- C[科]; A --- D[副]; A --- E[読本]; B --- F[社会]; C --- F; D --- F; E --- F;
```

【例】
| 社会 | 科 | 副 | 読本 |

3.4.5

都 市 交 通 課 長

```
graph TD; A[都市交通課長] --- B[都市]; A --- C[交通]; A --- D[課]; A --- E[長]; B --- F[都市]; C --- F; D --- F; E --- F;
```

【例】
| 都市 | 交通 | 課 | 長 | | 宇宙 | 開発 | 史 | 上 |

3.4.6

広 告 代 理 店 員

```
graph TD; A[広告代理店員] --- B[広告]; A --- C[代理]; A --- D[店]; A --- E[員]; B --- F[広告]; C --- F; D --- F; E --- F;
```

【例】
| 広告 | 代理 | 店 | 員 |

3.4.7

小 学 校 入 学 児

```
graph TD; A[小学校入学児] --- B[小]; A --- C[学校]; A --- D[入学]; A --- E[児]; B --- F[小]; C --- F; D --- F; E --- F;
```

【例】
| 小 | 学校 | 入学 | 児 |

3.4.8

中 学 校 長 会 長

```
graph TD; A[中学校長会] --- B[中]; A --- C[学校]; A --- D[長]; A --- E[会]; A --- F[長]; B --- G[中]; C --- G; D --- G; E --- G; F --- G;
```

【例】
| 中 | 学校 | 長 | 会 | 長 |

3.5.1

議 員 給 与 条 例 中

```
graph TD; A[議員給与条例中] --- B[議員]; A --- C[給与]; A --- D[条例]; A --- E[中]; B --- F[議員]; C --- F; D --- F; E --- F;
```

【例】
| 議員 | 給与 | 条例 | 中 |

3.5.2



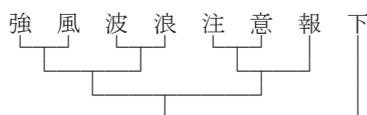
【例】
| 都 | 児 童 | 福 祉 | 協 会 |

3.5.3



【例】
| 新 | 長 期 | 経 済 | 計 画 |

3.5.4



【例】
| 強 風 | 波 浪 | 注 意 | 報 | 下 |

第3章 付加情報

第1 付加情報の概要

短単位認定規程によって認定された各単位に、次に挙げる付加情報を付与する。

1 語彙素読み

語彙素読みは、同一語の活用変化・音の転化・ゆれ・省略・融合等によって生じた異形態や送り仮名の違い等の異表記をグループ化するための情報である。原則として、コーパスに出現したすべての短単位に付与する。

2 語彙素

語彙素は、語彙素読みに対する国語の表記である。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

3 品詞等の情報

各単位に対して、品詞等の情報（以下、品詞情報）として、次に挙げる情報を付与する。

- (1) 品詞
- (2) 活用型
- (3) 活用形

4 語種情報

語種とは、語をその出自によって分類したもののことである。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

第2 品詞情報の概要

1 品詞

品詞のうち、近代文語に関わる主なものを以下に挙げる。

1.1 名詞

1.1.1 名詞-普通名詞-一般

1.1.2 から 1.1.6 以外の普通名詞

【例】
母親 國語 コーヒー

1.1.2 名詞-普通名詞-サ変可能

形式的な意味の「す」「いたす」「できる」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際にサ変動詞の語幹として使われているか否かは問わない。

【例】
関係 手続き

1.1.3 名詞-普通名詞-形状詞可能

断定の助動詞「なり」「たり」が付いて述語になったり、連体修飾成分になったりするもの。可能性を示すものであって、実際に助動詞「なり」が付いているか否かは問わない。

【例】
哀れ 自由

1.1.4 名詞-普通名詞-サ変形状詞可能

形式的な意味の「す」「いたす」「できる」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもので、断定の助動詞「なり」「たり」が付いて連体修飾成分にもなるもの。可能性を示すものであって、サ変動詞の語幹として使われているか否か、形状詞として使われているか否かは問わない。

【例】
安心

1.1.5 名詞-普通名詞-副詞可能

単独で連用修飾成分になるもの、及び句又は節による連体修飾を受けて、それ全体で連用修飾成分となるもの。可能性を示すものであって、実際に単独で、又は句や節による連体修飾を受けて連用修飾成分として使われているか否かは問わない。

【例】
今日 所 自ら

1.1.6 名詞-普通名詞-助数詞可能

数詞に付き、助数詞として用いられることのあるもの（主として『日本国語大辞典』第2版、『大辞林』第2版において、名詞のほか助数詞としての用法に関する記述のあるもの）。可能性を示すものであって、実際に助数詞として使われているか否かは問わない。

【例】
円 ドル ページ 通り 時間 箇月 号

1.1.7 名詞-固有名詞-一般

1.1.8 から 1.1.12 以外の固有名詞。組織の名称や元号・ペットの名など。「名詞-固有名詞-一般」の詳細は、同語異語判別規程の第4章 第1 6.5 「固有名の扱い」を参照。

【例】
民友 丸善 ハーバード 明治 釈迦

1.1.8 名詞-固有名詞-人名-一般

日本・中国・韓国以外の人名及び 1.1.9 , 1.1.10 に分類できない人名。あだ名やしこ名なども含む。人名の詳細は、同語異語判別規程の 第4章 第1 6.4 「人名の扱い」を参照。

【例】

ビスマルク ジョン キリスト 曹操 伏姫 (ふせひめ)

1.1.9 名詞-固有名詞-人名-姓

日本・中国・韓国の人名のうち姓に当たるもの。落語家の亭号なども含む。

【例】

伊藤 徳川 李 曾

1.1.10 名詞-固有名詞-人名-名

日本・中国・韓国の人名のうち名に当たるもの。

【例】

博文 家康 鴻章

1.1.11 名詞-固有名詞-地名-一般

国名以外の地名 (行政区画名・地域地方名・地形名)。

【例】

東京 横浜 日本橋 (区) ローマ 欧州 北海道 桜島 富士 (山)

1.1.11.1

道・駅 (道路・路線・航路・海路を結ぶ駅)・坂・温泉・油田の名を表す要素のうち、普通名詞等の一般語・人名・固有名詞-一般のいずれにも該当しないものは、「名詞-固有名詞-地名-一般」とする。

【例】

竹下 (通り) 関空 小牧 (ジャンクション) 上野原 (インターチェンジ) 三宅 (坂) 野中 (温泉) アブカイク (油田)

1.1.11.2

地名を略した一字漢語および一字漢語の地名を結合したもののうち、地域名として広く普及しているもののみ、「名詞-固有名詞-地名-一般」とする。それ以外 (「日米」「清韓」など) は「名詞-普通名詞-一般」とする。

【例】

阪神 京浜

1.1.11.3

ローマ字で略記した国名以外の地名は「名詞-普通名詞-一般」とする。詳細は 第4章 第1 6.6 「ローマ字略語の扱い」を参照。

1.1.12 名詞-固有名詞-地名-国

地名のうち国名。

【例】

日本 ドイツ フランス 米国 清

1.1.12.1

国名の漢字 1 字略称も「名詞-固有名詞-地名-国」とする。

【例】
普 徳 白

1. 1. 12. 2

歴史上の都市国家や公国は「名詞-固有名詞-地名-一般」とする。

【例】
アテナイ ブルゴーニュ (公国)

1. 1. 13 名詞-数詞

【例】
一 二十 幾 (人) 何百 数千

1. 1. 14 名詞-助動詞語幹

一般に伝聞の助動詞とされる「そうだ」の語幹。

1. 2. 1 代名詞

【例】
これ なに 余 汝 かれ

1. 3 形状詞

1. 3. 1 形状詞-一般

1. 3. 2 , 1. 3. 3 以外の, いわゆる形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
明らか 盛ん

1. 3. 2 形状詞-タリ

いわゆるタリ活用の形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
滔々 確固

1. 3. 3 形状詞-助動詞語幹

一般に助動詞とされる「そうだ」(様態)及び「ようだ」の語幹に当たるもの。

1. 4 連体詞

【例】
その 我が いわゆる

1. 5 副詞

擬音語・擬態語を含む。名詞としての用法を持つものは、「名詞-普通名詞-副詞可能」とする。

【例】
甚だ 決して おずおず

1. 6 接続詞

【例】
即ち しかして されども

1.7 感動詞

1.7.1 感動詞—一般

感動詞の詳細は、同語異語判別規程の 第4章 第1 6.8 「感動詞の扱い」を参照。

【例】
ああ いな いざ

1.8 動詞

1.8.1 動詞—一般

1.8.2 以外の動詞

【例】
持つ 関わる 対す

1.8.2 動詞-非自立可能

名詞に直接続くことのある「す」「いたす」「できる」の類や補助動詞として動詞連用形や動詞連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続することのあるもの。資料「要注意語」の「接尾的要素」に上げた語のうち、品詞を動詞とするものはここに分類する。可能性を示すものであって、実際に補助動詞として使われているか否かは問わない。

【例】
す 来 能う 候う

1.9 形容詞

1.9.1 形容詞—一般

1.9.2 以外の形容詞

【例】
少なし 甚だし

1.9.2 形容詞-非自立可能

形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形や形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続し、補助的に用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際に補助的に使われているか否かは問わない。

【例】
なし 良し

1.10 助動詞

【例】
なり ず ごとし

1.11 助詞

1.11.1 助詞-格助詞

【例】
に の より を

1.11.2 助詞-副助詞

【例】
など のみ ばかり

1.11.3 助詞-係助詞

【例】
こそ は も

1.11.4 助詞-接続助詞

【例】
つつ て ども ながら ば

1.11.5 助詞-終助詞

【例】
かし かな よ

1.11.6 助詞-準体助詞

【例】
の

1.12 接頭辞

【例】
相（容れる） 大（改革） 第（一回） 不（完全）

1.13 接尾辞

1.13.1 接尾辞-名詞的-一般

【例】
（教育）者 （合衆）国 （彼）ら （高橋）様

1.13.2 接尾辞-名詞的-サ変可能

名詞に接続してサ変動詞の語幹となり得る語を作るもの。

【例】
（偶像）化 （同一）視

1.13.3 接尾辞-名詞的-副詞可能

名詞に接続して作られた語が、単独で連用修飾成分になり得るもの。

【例】
（六ヶ月）間 （世界）中 （地球）上

1.13.4 接尾辞-名詞的-助数詞

助数詞としての用法しか持たないもの。

【例】
つ 個 本 か

1.13.5 接尾辞-形状詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して形状詞を作るもの

【例】
(忘れ) 勝ち (はかな) げ (冷々) 然 (客観) 的

1.13.6 接尾辞-動詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して動詞を作るもの。

【例】
(耐え) 兼ね (かわい) がる (真面目) 立つ (理屈) めく

1.13.7 接尾辞-形容詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して形容詞を作るもの。

【例】
(言) がたし (差し出) がまし (見) やすし

1.14 記号

1.14.1 記号-一般

1.14.2 以外の記号。簡条書きの項目名に使われた1文字の片仮名、地名以外の固有名を略した1文字の片仮名、またそれらに相当する漢字一字を含む。姓又は名を略した1文字の漢字を含む。

【例】
チ (氏) 比 (公)

1.14.2 記号-文字

アルファベットやギリシャ文字。

【例】
A α Σ

1.15 補助記号

1.15.1 補助記号-一般

【例】
○ … — .

1.15.2 補助記号-句点

【例】
。 . ! ?

1.15.3 補助記号-読点

【例】
, ' ,

1.15.4 補助記号-括弧開

【例】
「 (“

1.15.5 補助記号-括弧閉

【例】
」) ”

1.16 空白

行頭の下下げなどの空白

1.17 品詞一覧

品詞	類※
名詞-普通名詞-一般	体
名詞-普通名詞-サ変可能	体
名詞-普通名詞-形状詞可能	体
名詞-普通名詞-サ変形状詞可能	体
名詞-普通名詞-副詞可能	体
名詞-普通名詞-助数詞可能	体
名詞-固有名詞-一般	固有名
名詞-固有名詞-人名-一般	人名
名詞-固有名詞-人名-姓	姓
名詞-固有名詞-人名-名	名
名詞-固有名詞-地名-一般	地名
名詞-固有名詞-地名-国	国
名詞-数詞	数
代名詞	体
形状詞-一般	相
形状詞-タリ	相
形状詞-助動詞語幹	助動
連体詞	相
副詞	相
接続詞	他
感動詞-一般	他
動詞-一般	用
動詞-非自立可能	用
形容詞-一般	相
形容詞-非自立可能	相
助動詞	助動
助詞-格助詞	格助
助詞-副助詞	副助
助詞-係助詞	係助
助詞-接続助詞	接助
助詞-終助詞	終助
助詞-準体助詞	準助
接頭辞	接頭
接尾辞-名詞的-一般	接尾体
接尾辞-名詞的-サ変可能	接尾体
接尾辞-名詞的-副詞可能	接尾体
接尾辞-名詞的-助数詞	接尾体
接尾辞-形状詞的	接尾相
接尾辞-動詞的	接尾用
接尾辞-形容詞的	接尾相
記号-一般	記号
記号-文字	記号
補助記号-一般	補助
補助記号-句点	補助
補助記号-読点	補助
補助記号-括弧開	補助
補助記号-括弧閉	補助
空白	補助

※「類」はUniDicにおいて「語彙素」に付与される情報の一つで、各品詞はいずれかの類に属する。

1.18 細則

1.18.1 名詞・形状詞・副詞の品詞認定

ある語について、実際のコーパスの用例（『日本国語大辞典 第2版』に立項されている語形の場合、そこにあがられた用例も含む）から名詞・形状詞・副詞用法を判別し、規程上の「品詞」を認定する基準を示す。

1.18.1.1 名詞・形状詞・副詞用法の判別

名詞用法・形状詞用法・副詞用法の判別基準を以下に示す。

1.18.1.1.1 格助詞が後接する

【例】

【元來】が救恤事業なり、富豪の義務として務めざる可らざる性質を有す、供給に【過剩】を來す可きは論を俟たず。假令ひ前途に【危険】の伴ふものありとするも、是れ天、【俊傑】に與ふるに、經濟生活の【複雑】となるに伴ひて

1. 18. 1. 1. 1. 1

ただし、1. 18. 1. 1. 6. 2 に該当する「の」、1. 18. 1. 1. 6. 3 に該当する「に」「と」は除く。

1. 18. 1. 1. 1. 1. 2

格助詞のない形式となる場合や、格助詞の代わりとなる係助詞・副助詞が付く場合もある。

【例】

寝るとも【慰安】なく、
【簡素】は藝術的事業の必要條件なり、

1. 18. 1. 1. 1. 1. 2 連体修飾を受ける

【例】

怒るも笑ふも君の【勝手】なり、
果して然らんには、此上もなき【幸福】なり、

1. 18. 1. 1. 1. 3

擬音語・擬態語は1. 18. 1. 1. 1. 1、1. 18. 1. 1. 1. 2の用例があっても名詞用法とは認めない（規程 第4章 第1 6. 7. 3. 2 参照）。

1. 18. 1. 1. 2. 1 助動詞「なり」「たり」（「に」「と」は除く）が付く形で事物の性質・状態を現す

【例】

多言せずして【明らか】なるべし
固より【確乎】たる証徴ありて發する者にあらず

1. 18. 1. 1. 3. 1 単独で連用修飾する

【例】

衆民皆協議同心して【敢て】背く者なし、
聽く者【豈】惑はざらんや、
余は【未だ】知る能はず、

1. 18. 1. 1. 3. 1. 1

係助詞「は」「も」「ぞ」「なむ」・副助詞「など」「のみ」「ばかり」「だに」等が後続する場合もある。

【例】

其の原因は、【恐らく】は内閣彼自身の不居合より、來りしことならん、
世人は【斯く】計り同議會を重んぜざるにも拘はらず、

1. 18. 1. 1. 4. 1 「す」「できる」などを伴ってサ変動詞になる

【例】

平民主義を以て世界を【一統】すべく（名詞）
未だ人をして進化の法則を【明知】せしむるに至らず、（名詞）
左も無くては【承知】出來ずと思ふ人々もあらん、（名詞）
猶政府は財政の措置に【齷齪】し（副詞）
【畢竟】するに功名心は方便にして目的に非ざる也。（副詞）

1. 18. 1. 1. 5. 1 格に相当する要素によって修飾される

【例】
スタイン大先生の講釋を拜聞する迄もなく、諸公が【承知】のことならん（名詞） ※「諸公が」が格に相当
外國と【戦争】の事あれば（名詞） ※「外國と」が格に相当
本邦人の如きも官民【一致】、益々世界的經濟の方針を以て進まざるに於ては、（名詞） ※「官民（が）」が格に相当
地方議會をして、地方官と【對等】の權を得せしめんと欲せば（形状詞） ※「地方官と」が格に相当
萬卷の書を読むより【手輕】の臥遊の具として（形状詞） ※「萬卷の書を読むより」が格に相当
東西南北に地を畧して版圖已に【絶大】、武威亦比類なし。（形状詞） ※「版圖」が格に相当
印刷も至極【鮮明】、製本も至極堅牢なれば、（形状詞） ※「印刷も」が格に相当

1. 18. 1. 1. 6. 1 程度副詞（例：甚だ、おおいに、すこぶる）を受ける

【例】
人民自由の國は世界中に甚だ【稀】なり（形状詞）
近來大に【細密】なる事項に涉れるに拘らず（形状詞）
甚だ【能く】腕力の効能を知れり（副詞）

1. 18. 1. 1. 6. 2 事物の性質・状態を表し、格助詞「の」を伴って連体修飾する

【例】
大隈伯の斯る注文を爲したるは、素より【當り前】の事にして、（形状詞）
余は決して民度に適せざる【巧妙】の政治を望まず（形状詞）
天然の愛嬌に加へて、【一層】の愛嬌を養ひ立てたるのみならず、（副詞）
【少し】の「をかしみ」をも生ぜず、（副詞）

1. 18. 1. 1. 6. 3 事物の性質・状態を表し、「～に」「～と」の形で連用修飾する

【例】
吾人が【竊か】に遺憾とする所なり（形状詞）
【公然】と世に神教を布施する事となれり（形状詞）
一國の氣風習俗が【左程】に大切とも思はざりしに（副詞）
此の好氣運に乗じて、【追々】と正確堅固なる實業に手を出し、（副詞）

1. 18. 1. 1. 6. 3. 1

なお、「に」「と」の品詞は、形状詞に下接するものは助動詞「なり」「たり」、副詞に下接するものは格助詞「に」「と」とする。

1. 18. 1. 2 「品詞」の認定

意味の面で共通性が見られる用例の範囲において、判別された用法から規程上の「品詞」を認定する基準を以下に示す。

各用例が名詞用法・形状詞用法・副詞用法のいずれなのかは、どれか一つに確定する+++3285++++, +++3293+++, +++3295++++を第一の基準とし、複数の可能性がある+++3298++++, +++3300++++, +++3302++++を参考としながら、適宜判別する。

1. 18. 1. 2. 1 名詞用法のみが判別される場合

名詞用法のみが判別される場合、「名詞-普通名詞-一般」（あるいは「名詞-普通名詞-サ変可能」）とする。

1. 18. 1. 2. 2 形状詞用法のみが判別される場合

形状詞用法のみが判別される場合、「形状詞-一般」（または「形状詞-ナリ」）とする。

1. 18. 1. 2. 2. 1 形状詞の下位分類

助動詞「たり」が下接する用例のみがある場合は「形状詞-タリ」とし、それ以外は「形状詞-一般」とする。

1. 18. 1. 2. 3 副詞用法のみが判別される場合

副詞用法のみが判別される場合、「副詞」とする。

1. 18. 1. 2. 4 名詞用法と形状詞用法が判別される場合

名詞用法と形状詞用法が判別され、かつ副詞用法は判別されない場合、「名詞-普通名詞-形状詞可能」（あるいは「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」）とする。

1.18.1.2.5 名詞用法と副詞用法が判別される場合

名詞用法と副詞用法が判別され、かつ形状詞用法は判別されない場合、「名詞-普通名詞-副詞可能」とする。

1.18.1.2.6 形状詞用法と副詞用法が判別される場合

形状詞用法と副詞用法が判別され、かつ名詞用法は判別されない場合、形状詞用法と判別されるものは「形状詞-一般」（または「形状詞-タリ」）、副詞用法と判別されるものは「副詞」とする。

1.18.1.2.7 名詞用法・形状詞用法・副詞用法すべてが判別される場合

名詞用法・形状詞用法・副詞用法すべてが判別される場合、名詞用法・形状詞用法と判別されるものは「名詞-普通名詞-形状詞可能」（または「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」）、副詞用法と判別されるものは「副詞」とする。

1.18.1.2.8 用例間で意味上、大きな違いがある場合

意味の面で用例間に大きな違いが見られる場合、意味別に用例を分け、意味ごとに 1.18.1.2 の方法で品詞の認定を行う。

【例】

- A) 目下【一刻】を争ふ危急の折から →名詞用法と判別
- B) 一時【一刻】唯だ世間を騒がす迄の目的なら →副詞用法と判別
- C) さなきだに無【一刻】なる夫の物言ひ、龍の鱗に觸れさうにて危険なるに、 →形状詞用法と判別

※「わずかな時間」の意のAとBから「名詞-普通名詞-副詞可能」、「頑固なさま」の意のCから「形状詞-一般」の2つの品詞を認定する。AとCをあわせて「名詞-普通名詞-形状詞可能」などと認定はしない。

1.18.1.3 近代文語で新たな用法が見つかった場合

別の時代の電子化辞書開発のためUniDicに既に登録されている語で、既登録の「品詞」とは異なる「品詞」と認定される用法が近代文語で見つかった場合の対処法を次にあげる。

1.18.1.3.1.1 既登録語が「名詞」で新規用例がサ変動詞

既登録語の品詞が「名詞-普通名詞-一般」「名詞-普通名詞-形状詞可能」の場合は、近代文語で新たにサ変動詞の用例が見つかったとしても、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「名詞-普通名詞-一般」、近代文語でサ変動詞→登録は「名詞-普通名詞-一般」のまま》
會社は其の貨物を【保険】すべきや否やを考定し、
互ひに胸襟を開き社會萬般の事項を【説話】すとせば、

1.18.1.3.1.2 既登録語が「形状詞-タリ」で新規用法が「～なり」

既登録語の品詞が「形状詞-タリ」の場合は、近代文語で助動詞「なり」の後続する用例が新たに見つかったとしても、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「形状詞-タリ」、近代文語「～なり」→登録は「形状詞-タリ」のまま》
其實權を收取し我勢力を【確固】ならしむるを欲す
【空漠】なる憲政論、抽象的なる政論を戦はず

1.18.1.3.1.3 「名詞」と「形状詞」

既登録語の品詞が「名詞」の場合、近代文語で形状詞用法と判別される用例が見つかったとしても（あるいは逆に、既登録語の品詞が「形状詞」の場合、近代文語で名詞用法と判別される用例が見つかったとしても）、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「名詞」、近代文語で形状詞用法→登録は「名詞」のまま》
賽銭は甚だ【少額】なるに
我れに於て極めて必要に、極めて【利益】なるも、

《既登録語「形状詞」、近代文語で名詞用法→登録は「形状詞」のまま》
民権の【貴重】を敬維すべし
昔て國家の禍を推すに歸する所は官吏人民の【姑息】にあり
倫理の【當然】に従て

1.18.1.3.1.4 「名詞」と「副詞」

既登録語の品詞が「名詞」の場合、近代文語で副詞用法と判別される用例が見つかったとしても（あるいは逆に、既登録語の品詞が「副詞」の場合、近代文語で名詞用法と判別される用例が見つかったとしても）、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「名詞」、近代文語で副詞用法→登録は「名詞」のまま》
是れ實に【方今】我が社會道德上の大難問題なりとす。

《既登録語「副詞」、近代文語で名詞用法→登録は「副詞」のまま》
習ふに【漸次】を以てし行ふに歳月を以てし
國人の智識【一層】を進めば

1.18.1.3.1.5 「形状詞」と「副詞」

既登録語の品詞が「形状詞」で、近代文語で副詞用法と判別される用例が見つかったときは、品詞「副詞」を追加登録し、副詞用法の用例を「副詞」と認定する。あるいは逆に、既登録語の品詞が「副詞」で、近代文語で形状詞用法と判別される用例が見つかったときは、品詞「形状詞」を追加登録し、形状詞用法の用例を「形状詞」と認定する。

【例】

《既登録語「形状詞」、近代文語で副詞用法→「副詞」を追加登録》
頑迷なる韓國政府も茲に【翻然】悟る所あり。

《既登録語「副詞」、近代文語で形状詞用法→「形状詞」を追加登録》
人を知るの【最も】なる道は直覺なり。
我れを壓する者極めて【多多】なるならん
其學ぶ所に偏するは洵に【おのづから】なる勢なりと謂ふべし、

1.18.1.3.2 既登録語と意味の面で大きな違いが見られる場合

近代文語で、既登録語とは異なる「品詞」と認定される用法があり、かつ意味の面で大きな違いが見られる場合、新たに認定された「品詞」を追加登録する。

【例】

《既登録語「名詞」、近代文語で副詞用法→「副詞」を新規登録》
見るに聞くにつらき憂世、【いかさま】氣も滅入て無常を感じ俄道心者も出来る筈なり
※「名詞」は「ごまかし」「いんちき」の意、「副詞」は「たしかに」の意

2 活用型

UniDicの活用型のうち、近代文語に関わる主なものを、以下に挙げる。

2.1 動詞

2.1.1 文語四段活用

2.1.1.1 文語四段-カ行

【例】

行く 置く

2.1.1.2 文語四段-ガ行

【例】
仰ぐ 凌ぐ

2.1.1.3 文語四段-サ行

【例】
明かす 致す

2.1.1.4 文語四段-タ行

【例】
うがっ 放つ

2.1.1.5 文語四段-ハ行 (-一般)

2.1.1.6 ~ 2.1.1.8 以外の文語ハ行四段活用動詞

【例】
争ふ 追ふ

2.1.1.6 文語四段-ハ行 (-ノウ)

語幹末尾がア段音の文語ハ行四段活用動詞。連用形がウ音便になる場合、語幹末尾がオ段音に変わる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】
会ふ 買ふ

2.1.1.7 文語四段-ハ行 (-イウ)

動詞「言ふ」。終止形・連体形が「ユウ」と発音されることがある。

2.1.1.8 文語四段-ハ行 (-チョウ)

「ていふ」の縮約形「てふ」。終止形・連体形の「てふ」、已然形・命令形の「てへ」に限られる。

2.1.1.9 文語四段-バ行

【例】
遊ぶ 減ぶ

2.1.1.10 文語四段-マ行

【例】
当て込む 読む

2.1.1.11 文語四段-ラ行

【例】
煽る 散る

2.1.2 文語上一段活用

2.1.2.1 文語上一段-カ行

【例】
着る

2.1.2.2 文語上一段-ナ行

【例】
煮る 似る

2.1.2.3 文語上一段-ハ行

【例】
干る 簸る

2.1.2.4 文語上一段-マ行

【例】
見る 鑑みる 試みる

2.1.2.5 文語上一段-ヤ行

【例】
射る 鋳る

2.1.2.6 文語上一段-ワ行

【例】
居る 率る 用ゐる

2.1.3 文語上二段活用

2.1.3.1 文語上二段-カ行

【例】
起く 生く

2.1.3.2 文語上二段-ガ行

【例】
過ぐ

2.1.3.3 文語上二段-タ行

【例】
落つ 満つ

2.1.3.4 文語上二段-ダ行

【例】
閉づ 恥づ

2.1.3.5 文語上二段-ハ行

【例】
憂ふ

2.1.3.6 文語上二段-バ行

【例】
浴ぶ 滅ぶ

2.1.3.7 文語上二段-マ行

【例】
試む

2.1.3.8 文語上二段-ヤ行

【例】
老ゆ 悔ゆ 報ゆ

2.1.3.9 文語上二段-ラ行

【例】
下(お)る 懲る

2.1.4 文語下一段活用

【例】
蹴る

2.1.5 文語下二段活用

2.1.5.1 文語下二段-ア行

【例】
得 心得

2.1.5.2 文語下二段-カ行

【例】
避く 溶く

2.1.5.3 文語下二段-ガ行

【例】
上ぐ 告ぐ

2.1.5.4 文語下二段-サ行

【例】
乗す 見す

2.1.5.5 文語下二段-タ行

【例】
当つ 捨つ

2.1.5.6 文語下二段-ダ行

【例】
出づ 撫づ

2.1.5.7 文語下二段-ナ行

【例】
ぬ(寝)

2.1.5.8 文語下二段-ハ行 (-一般)

2.1.5.9 以外の文語ハ行下二段活用動詞

【例】
和ふ 終ふ

2.1.5.9 文語下二段-ハ行 (-経)

【例】
ふ(経)

2.1.5.10 文語下二段-バ行

【例】
比ぶ 並ぶ

2.1.5.11 文語下二段-マ行

【例】
留む 止む

2.1.5.12 文語下二段-ヤ行

【例】
消ゆ 燃ゆ

2.1.5.13 文語下二段-ラ行

【例】
暮る 忘る

2.1.5.14 文語下二段-ワ行

【例】
植う 飢う

2.1.6 変格活用（文語）

2.1.6.1 文語カ行変格

【例】
来

2.1.6.2 文語サ行変格（-ス）

【例】
す 接す

2.1.6.3 文語サ行変格（-ズ）

【例】
信ず 甘んず

2.1.6.4 文語ナ行変格

【例】
死ぬ

2.1.6.5 文語ラ行変格

【例】
あり しかり

2.1.7 五段活用

2.1.7.1 五段-カ行（-一般）

2.1.7.2 , 2.1.7.3 以外のカ行五段活用動詞。

【例】
空く 頂く

2.1.7.2 五段-カ行 (-イク)

語形が「イク」のもの。連用形の音便形が促音便となる。

【例】
行く 逝く

2.1.7.3 五段-カ行 (-ユク)

語形が「ユク」のもの。連用形に音便形がない。

【例】
行く 逝く

2.1.7.4 五段-ガ行

【例】
泳ぐ 注ぐ

2.1.7.5 五段-サ行

【例】
致す 話す

2.1.7.6 五段-タ行

【例】
明け放つ 育つ

2.1.7.7 五段-ナ行

【例】
遊ぶ 学ぶ

2.1.7.8 五段-バ行

【例】
混む 進む

2.1.7.9 五段-マ行 (-一般)

2.1.7.10 以外のマ行五段活用動詞

【例】
混む 進む

2.1.7.10 五段-マ行 (-済ム)

動詞「済む」。連用形にイ音便がある。

2.1.7.11 五段-ラ行 (-一般)

2.1.7.12 , 2.1.7.13 以外のラ行五段活用動詞。

【例】
有る 煽る 売る

2.1.7.12 五段-ラ行 (-アル)

語幹末尾がア段音のラ行五段活用動詞。助動詞「ます」が接続する場合に連用形がイ音便となる。命令形の語末が「い」である。

【例】
いらっしゃる おっしゃる

2.1.7.13 五段-ラ行 (-サル)

語幹末尾がサのラ行五段活用動詞。助動詞「ます」が接続する場合に連用形がイ音便となる。命令形の語末が「い」である。

【例】
下さる 為さる

2.1.7.14 五段-ワア行 (-一般)

2.1.7.15 , 2.1.7.16 以外のワア行五段活用動詞。

【例】
争う 整う

2.1.7.15 五段-ワア行 (-ウ)

語幹末尾がア段音のワア行五段活用動詞。連用形がウ音便になる場合、語幹末尾がオ段音に変わる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】
合う 扱う 損なう

2.1.7.16 五段-ワア行 (-イウ)

動詞「言う」。連用形が「ユウ」と発音されることがある。

2.1.8 上一段活用

2.1.8.1 上一段-ア行

【例】
居る 射る

2.1.8.2 上一段-カ行

【例】
飽きる 出来る

2.1.8.3 上一段-ガ行

【例】
過ぎる

2.1.8.4 上一段-ザ行

【例】
甘んじる 信じる

2.1.8.5 上一段-タ行

【例】
落ちる 満ちる

2.1.8.6 上一段-ナ行

【例】
似る 煮る

2.1.8.7 上一段-ハ行

【例】
干(ひ)る

2.1.8.8 上一段-バ行

【例】
浴びる 滅びる

2.1.8.9 上一段-マ行

【例】
試みる 見る

2.1.8.10 上一段-ラ行 (一般)

2.1.8.11 以外のラ行上一段活用動詞

【例】
下りる 借りる 懲りる

2.1.8.11 上一段-ラ行 (-リル)

動詞「足りる」。未然形に撥音便がある。

2.1.9 下一段活用

2.1.9.1 下一段-ア行 (一般)

2.1.9.2 以外のア行下一段活用

【例】
植える

2.1.9.2 下一段-ア行 (-得ル)

動詞「得(え)る」。終止形、連体形に「える」のほか「うる」がある。

2.1.9.3 下一段-カ行

【例】
開ける 掛ける

2.1.9.4 下一段-ガ行

【例】
上げる 告げる

2.1.9.5 下一段-サ行 (一般)

2.1.9.6 以外のサ行下一段活用動詞

【例】
褪せる 痩せる 噎(む)せる

2.1.9.6 下一段-サ行 (-セル)

連用形語尾に「し」がある。

【例】
見せる

2.1.9.7 下一段-ザ行

【例】
交ぜる 爆（は）ぜる

2.1.9.8 下一段-タ行

【例】
当てる 捨てる

2.1.9.9 下一段-ダ行

【例】
出る

2.1.9.10 下一段-ナ行

【例】
重ねる 寝る

2.1.9.11 下一段-ハ行

【例】
経る

2.1.9.12 下一段-バ行

【例】
食べる 調べる

2.1.9.13 下一段-マ行

【例】
止める 褒める

2.1.9.14 下一段-ラ行（一般）

2.1.9.15 , 2.1.9.16 以外のラ行下一段活用動詞。

【例】
懂れる 遅れる

2.1.9.15 下一段-ラ行（-レル）

動詞「知れる」。未然形に撥音便がある。

2.1.9.16 下一段-ラ行（-呉レル）

動詞「呉れる」。命令形に「～よ」「～ろ」の形がなく、「くれ」である。

2.1.10 変格活用（口語）

2.1.10.1 カ行変格

【例】
来る

2.1.10.2 サ行変格 (-為ル)

2.1.10.3, 2.1.10.4 以外のサ行変格活用。単独の「する」。未然形で、助動詞「ず」が接続する場合に「せ」、 「せる」が接続する場合に「さ」という区別がある。

2.1.10.3 サ行変格 (-スル)

「1字漢語+する」の形のもの。

【例】
愛する 称する

2.1.10.4 サ行変格 (-ズル)

【例】
甘んずる 信ずる

2.1.11 特殊型 (-候)

「そろ」「そう」など「候(そうろ)う」の異語形で特殊な活用をするもの。

2.1.12 その他

助動詞の個別の活用型(2.3.1 参照)と同じ活用をするものは、その活用型を付与する。

【例】
ござんす……文語助動詞-ザンス
なさんす……文語助動詞-ンス

2.2 形容詞

2.2.1 文語活用

2.2.1.1 文語形容詞-ク (-一般)

2.2.1.2 2.2.1.3 以外のク活用の形容詞。

【例】
白し 遠し

2.2.1.2 文語形容詞-ク (-〇シ)

語幹末尾がア段音の形容詞は、連用形がウ音便になる場合に語幹末尾がオ段音になる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】
高し 小さし

2.2.1.3 文語形容詞-ク (-多シ)

形容詞「多し」。終止形に「多し」のほか、「多かり」がある。

2.2.1.4 文語形容詞-ク (-遠シ)

形容詞「遠し」。連用形ウ音便の場合、語幹は「トオ」と二重母音となり、それ以外は「トー」と長母音となる。

2.2.1.5 文語形容詞-シ (-シク)

2.2.1.6 以外のシク活用の形容詞。

【例】
美し 楽し

2.2.1.6 文語形容詞-シ (-ジク)

シク活用の形容詞のうち活用語尾の語頭が「じ」のもの。

【例】
いみじ

2.2.2 口語活用

2.2.2.1 形容詞 (-一般)

下記 2.2.2.2 から 2.2.2.5 以外の形容詞。

【例】
愛らしい 大きい 頼もしい

2.2.2.2 形容詞 (-無イ)

形容詞「無い」。様態の助動詞「そうだ」が接続するとき、「無さ」という形を取る。この場合の「無さ」は語幹の一形態とする。

2.2.2.3 形容詞 (-良イ-イイ)

形容詞「良い」のうち「イイ」という語形のもの。

2.2.2.4 形容詞 (-良イ-ヨイ)

形容詞「良い」のうち「ヨイ」という語形のもの。

2.2.2.5 形容詞 (-〇イ)

①語幹末尾がア段音の形容詞は、連用形がウ音便になる場合に語幹末尾がオ段音になる。また、終止形・連体形の語幹末尾がエ段音になる場合がある（たかい→たけえ）。②語幹末尾がウ段音の形容詞は、終止形・連体形の語幹末尾がイ段音になる場合がある（さむい→さみい）。③語幹末尾がオ段音の形容詞は、終止形・連体形の語幹末尾がエ段音になる場合がある（ひどい→ひでえ）。語幹が仮名書きされている場合、以上の変化が表記に現れる。

【例】
高い 寒い 酷い

2.3.1 個別の活用型

次に挙げる助動詞の活用は、動詞・形容詞の活用と比べて個別的であるため、助動詞ごとに活用型を立てる。

き……文語助動詞-キ
げず……文語助動詞-ゲズ
けむ……文語助動詞-ケム
けらし……文語助動詞-ラシ
けり……文語助動詞-ケリ
ごとし……文語助動詞-ゴトシ
じ……文語助動詞-ジ
しゃんす……文語助動詞-ンス
ず……文語助動詞-ズ
たり（完了）……文語助動詞-タリ-完了
たり（断定）……文語助動詞-タリ-断定
つ……文語助動詞-ツ
なり（断定）……文語助動詞-ナリ-断定
なり（伝聞）……文語助動詞-ナリ-伝聞
ぬ……文語助動詞-ヌ
べし……文語助動詞-ベシ
まし……文語助動詞-マシ
まじ……文語助動詞-マジ
む……文語助動詞-ム
むず……文語助動詞-ムズ
めり……文語助動詞-メリ
やしゃんす……文語助動詞-ンス
やんす……文語助動詞-ンス
らし……文語助動詞-ラシ
らむ……文語助動詞-ラム
り……文語助動詞-リ
んす……文語助動詞-ンス

じゃ……助動詞-ジャ
ず……助動詞-ズ
た……助動詞-タ
だ……助動詞-ダ
たい……助動詞-タイ
だす……助動詞-ヤス
です……助動詞-デス
どす……助動詞-ドス
ない……助動詞-ナイ
なんだ……助動詞-ナンダ
へん……助動詞-ヘン
まい……助動詞-マイ
ます……助動詞-マス
や……助動詞-ヤ
やす……助動詞-ヤス
らしい……助動詞-ラシイ
られる……助動詞-レル
れる……助動詞-レル

2.3.2 無変化型

次にあげる活用しない助動詞は「無変化型」とする。

ずら べい

2.3.3 その他

2.3.1, 2.3.2 以外の助動詞には、動詞・形容詞と同じ活用型を付与する。

【例】

す……文語下二段-サ行
まほし……文語形容詞-シク
る……文語下二段-ラ行

2.4 接尾辞

「接尾辞-動詞的」は動詞の活用型を、「接尾辞-形容詞的」は形容詞の活用型を付与する。

【例】

ばむ……文語四段-マ行
難し……文語形容詞-ク (-タシ)

2.5 活用型一覧

文語四段-〇行
 文語四段-ハ行 (一般)
 文語四段-ハ行 (-〇ウ)
 文語四段-ハ行 (-イウ)
 文語四段-ハ行 (-チョウ)
 文語上一段-〇行
 文語上二段-〇行
 文語下一段-カ行
 文語下二段-〇行
 文語下二段-ハ行 (一般)
 文語下二段-ハ行 (-経)
 文語カ行変格
 文語サ行変格 (-ス)
 文語サ行変格 (-ズ)
 文語ナ行変格
 文語ラ行変格
 五段-〇行
 五段-カ行 (一般)
 五段-カ行 (-イク)
 五段-カ行 (-ユク)
 五段-マ行 (一般)
 五段-マ行 (-済ム)
 五段-ラ行 (一般)
 五段-ラ行 (-アル)
 五段-ラ行 (-サル)
 五段-ワア行 (一般)
 五段-ワア行 (-〇ウ)
 五段-ワア行 (-イウ)
 上一段-〇行
 上一段-ラ行 (一般)
 上一段-ラ行 (-リル)
 下一段-〇行
 下一段-ア行 (一般)
 下一段-ア行 (-得ル)
 下一段-サ行 (一般)
 下一段-サ行 (-セル)
 下一段-ラ行 (一般)
 下一段-ラ行 (-レル)
 下一段-ラ行 (-呉レル)
 カ行変格
 サ行変格 (-為ル)
 サ行変格 (-スル)
 サ行変格 (-ズル)
 特殊型 (-候)
 文語形容詞-ク (一般)
 文語形容詞-ク (-〇シ)
 文語形容詞-ク (-多シ)
 文語形容詞-ク (-遠シ)
 文語形容詞-シク (-シク)
 文語形容詞-シク (-ジク)
 形容詞 (一般)
 形容詞 (-無イ)
 形容詞 (-良イ-イイ)
 形容詞 (-良イ-ヨイ)
 形容詞 (-〇イ)
 文語助動詞-キ
 文語助動詞-ゲス
 文語助動詞-ケム
 文語助動詞-ケリ
 文語助動詞-ゴトシ
 文語助動詞-ザンス
 文語助動詞-ジ
 文語助動詞-ズ
 文語助動詞-タリ (-完了)
 文語助動詞-タリ (-断定)
 文語助動詞-ツ
 文語助動詞-ナリ (-断定)
 文語助動詞-ナリ (-伝聞)
 文語助動詞-ヌ
 文語助動詞-ベシ
 文語助動詞-マシ
 文語助動詞-マジ
 文語助動詞-ム
 文語助動詞-ムズ
 文語助動詞-メリ
 文語助動詞-ラシ
 文語助動詞-ラム
 文語助動詞-リ
 文語助動詞-ンス

助動詞-ジャ
助動詞-タ
助動詞-ダ
助動詞-タイ
助動詞-デス
助動詞-ドス
助動詞-ナイ
助動詞-ナンダ
助動詞-ヌ
助動詞-ヘン
助動詞-マイ
助動詞-マス
助動詞-ヤ
助動詞-ヤス
助動詞-ラシイ
助動詞-レル
無変化型

※活用型の名称のうち括弧でくくられた部分は、入力活用型の細分類である。UniDicによる形態素解析結果には、入力活用型の細分類は出力されない。

2.6 細則

2.6.1 活用型の認定基準

ある書字形から想定される活用型が複数ある場合の、近代文語での活用型の認定基準を以下に記す。

2.6.1.1 文語活用と口語活用

文語活用とそれに対応する口語活用がある場合、文語活用を活用型とする。

【例】

話さ(ず) → 文語四段-サ行 × 五段-サ行
見え(たり) → 文語下二段-ヤ行 × 下一段-ア行
愛し(て) → 文語サ行変格-ス × サ行変格-ス
(なら)ぬ(こと) → 文語助動詞-ズ × 助動詞-ヌ

2.6.1.1.1

口語活用としてしか判別できないもののみ、活用型を口語活用とする。

【例】

生きる(も死ぬるも) → 上一段-カ行
高める(もの) → 下一段-マ行
旨い(かな) → 形容詞-一般
(変)な → 助動詞-ダ

2.6.1.1.2

次にあげる、対応する文語活用がないと考える口語活用の語は、口語活用を活用型とする。

2.6.1.1.2.1 可能動詞

【例】

飲める → 下一段-マ行 × 文語下二段-マ行

2.6.1.1.2.2 その他

【例】

できる → 下一段-カ行 × 文語下二段-カ行 ※文語活用は文語カ行変格「でく」がある

2.6.1.2 文語サ変活用とサ行四段活用

文語サ行変格活用とそこから派生したサ行四段活用がある場合、文語サ行変格活用を活用型とする。

【例】
愛し（て）→文語サ行変格-ス ×文語四段-サ行

2.6.1.2.1

四段活用としてしか判別できないもののみ、活用型を四段活用とする。

【例】
愛さ（れたり）→文語四段-サ行

2.6.1.3 文語サ変活用とザ行上一段活用

文語サ行変格活用とそこから派生したザ行上一段活用がある場合、文語サ行変格活用を活用型とする。

【例】
信じ（たり）→文語サ行変格-ズ ×上一段-ザ行

2.6.1.3.1

上一段活用としてしか判別できないもののみ、活用型を上一段活用とする。

【例】
重んじる（ものなり）→上一段-ザ行

※「文語上一段-ザ行」「文語上二段-ザ行」は規程上存在しないので、活用型として認めない。

2.6.1.4 二段活用のハ・ヤ・ワ行間の揺れ

ハ・ヤ・ワ行間で揺れが生じる二段活用の語については、活用語尾の表記ごとに以下のように定める。

2.6.1.4.1

活用語尾の仮名が「ひ・ふ・へ」で始まる場合は、ハ行の活用とする。

【例】
強ひ・強ふ・強ふる・強ふれ・強ひよ →文語上二段-ハ行
与へ・与ふ・与ふる・与ふれ・与へよ →文語下二段-ハ行
覚へ・覚ふ・覚ふる・覚ふれ・覚へよ →文語下二段-ハ行 ×文語下二段-ヤ行
据へ・据ふ・据ふる・据ふれ・据へよ →文語下二段-ハ行 ×文語下二段-ワ行

2.6.1.4.2

活用語尾の仮名が「い・ゆ・え」で始まる場合は、ヤ行の活用とする。

【例】
覚え・覚ゆ・覚ゆる・覚ゆれ・覚えよ →文語下二段-ヤ行
強い・強ゆ・強ゆる・強ゆれ・強いよ →文語上二段-ヤ行 ×文語上二段-ハ行
植え・植ゆ・植ゆる・植ゆれ・植えよ →文語下二段-ヤ行 ×文語下二段-ワ行

2.6.1.4.3

活用語尾の仮名が「ゐ・う・ゑ」で始まる場合は、ワ行の活用とする。

【例】
植ゑ・植う・植うる・植うれ・植ゑよ →文語下二段-ワ行
与ゑ・与う・与うる・与うれ・与ゑよ →文語下二段-ワ行 ×文語下二段-ハ行
覚ゑ・覚う・覚うる・覚うれ・覚ゑよ →文語下二段-ワ行 ×文語下二段-ヤ行

2.6.1.4.4

活用語尾の表記省略などのため、ハ・ヤ・ワ行のいずれに相当するか不明な場合は、本来の活用の行とする。

【例】
与（ん） →文語下二段-ハ行
据（て） →文語下二段-ヤ行
植る（もの） →文語下二段-ワ行

2.6.1.5 四段活用と下二段活用

下二段活用と四段活用とで揺れが生じる語については、下二段活用を活用型とする。

【例】
恨み（て） →文語上二段-マ行 ×文語四段-マ行
忍ぶ（べし） →文語上二段-バ行 ×文語四段-バ行

2.6.1.5.1

四段活用としてしか判別できないもののみ、活用型を四段活用とする。

【例】
恨ま（ず） →文語四段-マ行
忍ぶ（恋） →文語四段-バ行

3 活用形

UniDicの活用形のうち近代文語に関わる主なものを、以下に挙げる。

3.1 語幹

3.1.1 語幹-一般

下記以外の活用語の語幹。

3.1.2 語幹-サ

いわゆる様態の助動詞「そうだ」「そうなり」が接続する場合の形容詞「無い」の語幹「無さ」と形容詞「良い」の語幹「良さ」

3.2 未然形

3.2.1 未然形-一般

下記以外の未然形。

3.2.2 未然形-サ

助動詞「す」「る」が接続する場合のサ変動詞「する」の未然形「さ」。

3.2.3 未然形-補助

文語形容詞の補助活用。

3.3 意志推量形

【例】
歩こう 寝よう

3.4 連用形

3.4.1 連用形-一般

下記以外の連用形。

3.4.2 連用形-〇音便

助動詞「たり」や接続助詞「て」が接続する場合の一般的な音便形。

3.4.3 連用形-ト

文語助動詞「たり」の連用形「と」。

3.4.4 連用形-ニ

文語助動詞「なり」の連用形「に」。

3.4.5 連用形-補助

文語形容詞の補助活用。

3.5 終止形

3.5.1 終止形-一般

下記以外の終止形。

3.5.2 終止形-撥音便

助動詞の終止形末尾が撥音便になったもの。

【例】

(見) ん (とす) (しばし眠りを結ぶ) らん (此邊を想像して詠じ) けん

3.5.3 終止形-補助

文語形容詞「多し」の終止形「多かり」。

3.6 連体形

3.6.1 連体形-一般

下記以外の連体形。

3.6.2 連体形-ウ音便

【例】

(おなくなりなされ) 候 (こと) ※「ソーロー」と読む場合

3.6.3 連体形-撥音便

【例】

(自由を保維せ) ん (が爲め) (雑談も) 多かん (めれど)

3.6.4 連体形-補助

文語形容詞の補助活用。

3.7 已然形

3.7.1 已然形一般

下記以外の已然形。

3.7.2 已然形補助

文語形容詞の補助活用。

3.8 仮定形

3.8.1 仮定形一般

3.9 命令形

3.10 ク語法

3.10.1

ただし、「曰く」は品詞を「名詞-普通名詞-副詞可能」とし、動詞「言ふ」のク語法とはしない。

また、「望むらく」のように接続上助動詞「り」のク語法とは見なせない「らく」は、品詞を「接尾辞-名詞的-一般」とし、助動詞「り」のク語法とはしない。

3.11 活用形一覧

語幹-サ
語幹-一般
未然形-一般
未然形-サ
未然形-補助
意志推量形
連用形-一般
連用形-○音便
連用形-ト
連用形-ニ
連用形-補助
終止形-一般
終止形-○音便
連体形-一般
連体形-○音便
連体形-補助
已然形-一般
已然形-補助
仮定形-一般
命令形
ク語法

3.12 細則

3.12.1 終止形・連体形の判別基準

形態上、終止形と連体形を区別できない活用語について、判別基準を以下に示す。

3.12.1.1.1 係り結び

文中の係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の結びは連体形とする。

【例】
事の擧る擧らざる我何ぞ與り知【ん】
何をか術とせ【ん】

3.12.1.1.2 疑問詞疑問文の文末

疑問詞疑問文の文末は連体形とする。

【例】
方一かかるてあらば其時には如何（いか）がはせ【ん】
孰れを非とせ【む】

3.12.1.1.3 その他

3.12.1.1.1 ～ 3.12.1.1.2 以外は終止形とする。

3.12.1.2 後続の助詞・助動詞による判定

後続する助詞・助動詞による判定基準を次に示す。

後続する助詞	前接語の活用形
か (係助詞)	連体形
が (格助詞)	連体形
が (接続助詞)	連体形
かし (終助詞)	終止形
かな (終助詞)	連体形
がな (終助詞)	連体形
から (格助詞)	連体形
きり (副助詞)	連体形
くらい (副助詞)	連体形
けれど (接続助詞)	終止形
こそ (係助詞)	連体形
さえ (副助詞)	連体形
し (副助詞)	連体形
しも (副助詞)	連体形
すら (副助詞)	連体形
ぞ (係助詞)	連体形
だけ (副助詞)	連体形
だに (副助詞)	連体形
と (格助詞)	終止形
と (接続助詞)	終止形
どころ (副助詞)	連体形
とも (接続助詞)	動詞型活用の終止形
な (終助詞)	終止形
など (副助詞)	終止形
なむ (係助詞)	連体形
に (格助詞)	連体形
に (接続助詞)	連体形
にて (格助詞)	連体形
の (格助詞)	連体形
の (準体助詞)	連体形
のみ (副助詞)	連体形
は (係助詞)	連体形
ばかり (副助詞)	連体形
ほど (副助詞)	連体形
まで (副助詞)	連体形
も (係助詞)	連体形
も (接続助詞)	連体形
や (係助詞)	終止形
よ (終助詞)	連体形
より (格助詞)	連体形
を (格助詞)	連体形
を (接続助詞)	連体形
を (終助詞)	連体形
をば (格助詞)	連体形

後続する助動詞	前接語の活用形
じゃ	終止形
だ	終止形
なり (断定)	連体形
なり (伝聞)	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
べし	終止形, ラ変型活用の連体形
まい	四段型活用の終止形, ラ変型活用の連体形
まじ	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
めり	終止形, ラ変型活用の連体形
らし	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
らしい	動詞型活用の連体形, 形容詞型活用の終止形
らむ	終止形, ラ変型活用の連体形

3.12.2 シク活用形容詞の語幹・終止形の判別基準

文語シク活用の形容詞は、形態上、終止形と語幹の区別ができない。そこで、語幹と認定する基準を以下に示し、示したもの以外を終止形とする。

3.12.2.1 接尾辞が後続するもの

【例】
切齒をして【もどかし】がられたるは御尤千万とおぼゆ
【恨めし】げなる顔つきにて
わが心の【樂し】さを思ひ玉へ
一種の【をかし】みを覚えしむるは

3.12.2.2 接続助詞「ながら」が後続するもの

【例】
【恥かし】ながら、それがしにて候。

3.12.2.3 詠嘆の「や」が後続するもの

【例】
今きくだにも【恐ろし】や

3.12.2.4 後続する名詞を連体修飾するもの

【例】
【あだし】あだなみのよるべにまどひ

3.12.2.5 「～の」の形で後続する名詞を連体修飾するもの

【例】
忘れもやらぬ【なつかし】の曲

3.12.2.6 感動詞「あな」に後続するもの

【例】
あな【見ぐるし】その姿はよ

第3 語種情報の概要

1 語種とは

日本語の語種は一般に、和語、漢語、外来語と、これら3種類の語種のうち異なる2種類以上の語種の語が結合した混種語の4種類に分けられる。「中古和文UniDic」では、現代語のUniDicと同様、この4種類のほかに固有名、記号の2種類を加えた6種類に分類した。なお、各語に語種を付与するに当たっては、〔 〕内の略称等を用いた。

1.1 和語〔和〕

日本固有の語。

【例】
言葉 話す 寒し

1.2 漢語〔漢〕

近世以前に中国から入った語。

【例】
音楽 国語 報告

1.2.1

和製漢語も漢語とする。

【例】
大根 返事

1.3 外来語〔外〕

欧米系の諸言語から入った語。

【例】
アート ガラス コーヒー サイエンス

1.3.1

上記のほか、以下のものも外来語とする。

1.3.1.1 和製英語

【例】
アフレコ ナイター

1.3.1.2 梵語等を中国で音訳した語に由来する語

【例】
阿羅漢 盂蘭盆 卒塔婆

1.3.1.3 アイヌ語から入った語

【例】
シシヤモ トナカイ ラッコ

1.3.1.4 中国以外のアジア諸国語から入った語

【例】
キムチ カボチャ パッチ

1.3.1.5 近代以降に中国から入った語

【例】
クーニャン シュウマイ メンツ

1.4 混種語〔混〕

和語・漢語・外来語のうち異なる2種類以上の語種の語が二つ以上結合した語。漢語・外来語であったものの末尾が活用するようになった語。

【例】
ジャガ芋 信ずる ダブる 本箱 力む

1.5 固有名〔固〕

人名・地名・商品名等。品詞が固有名詞となる語。

【例】
日本 東京 井上 五郎 ハーバード 明治

1.6 記号〔記号〕

句読点・括弧などの補助記号や、箇条書きの項目名として使われた一字のカタカナなどの記号。固有名以外のローマ字略語。

【例】
、 。 「 」 ア A OHP

2 語種の判定

2.1

語種の判定は、次の手順によった。

2.1.1

原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。

※『新潮現代国語辞典』第2版を使ったのは、見出し語が漢語・外来語の場合は片仮名で、和語及び不明の場合は平仮名で表記しており、その表記を手掛かりにして語種を知ることができるためである。

2.1.2

『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』第2版（小学館）を主たる資料として語種判定を行う。

また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

2.2

なお、『新潮現代国語辞典』第2版では、見出し語が和語の場合のほか、語種が不明の場合も見出し語を平仮名で表記している。見出し語が平仮名表記のものを一律に和語とすると、語種が不明であるため平仮名表記されていた語まで和語と判定してしまうことになる。

そのため、見出し語が平仮名で表記されている場合、『新潮現代国語辞典』第2版の注記や他の辞書等を参照して、和語とすべきか他の語種とすべきか適宜判断した。

第4章 同語異語判別規程

第1 同語異語判別規程

《凡例》

1. 例として挙げる語の表記は、以下の原則による。
 - ①語の形を問題とする場合は、片仮名で表記する。
 - ②語の形を特に問題としない場合は、外来語を除き片仮名以外で表記する。
2. UniDicの階層名を示す場合には、「語彙素」「語形」「書字形」のように鍵括弧を付けて表記する。
3. 一つの「語彙素」「語形」にまとめる語を併記する場合、語と語の間に「/」を記入する。
亭主っ／亭主 レンジュウ／レンチュウ
4. 別の「語彙素」「語形」とする語を併記する場合、語と語の間に「↔」を記入する。
とても↔とっても アイザワ↔アイサワ
5. 「語彙素」「語彙素読み」を併記して示す場合には、「語彙素」に【 】を付ける。
アタタカイ【暖かい】
6. 語例で文脈を補う場合は丸括弧に入れて示し、注記を付ける場合は[]に入れて示す。

1 同一「語形」・別「語形」の判定規定

任意の二つの出現形について、UniDicに登録する際に、一つの「語形」にまとめるか、異なる「語形」として別にするか判断するための規定は、以下のとおりである。

1.1 語形

出現形の形に基づく規定は、以下のとおりである。

1.1.1 同一の「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ出現形は、語源が同一であり、かつ意味の違いを生じていない限り、同じ「語形」とする。

1.1.1.1 和語・漢語

長音符号を用いた出現形と直前の母音と同じ母音字を重ねた出現形

【例】

なあ／なー じじい／じじー

1.1.1.2 外来語

1.1.1.2.1 長音符号を用いた出現形と長音を表す他の文字を用いた出現形

1.1.1.2.1.1 長音符号を用いた出現形と「ア・イ・ウ・エ・オ」を用いた出現形

【例】

アパートメント／アパアトメント アンコール／アンコオル

1.1.1.2.1.2 長音符号を用いた出現形と「ア・イ・ウ・エ・オ」を用いた出現形

【例】

オスカー／オスカア ロセッチー／ロセッチィ

1.1.1.2.1.3 長音符号を用いた出現形と「キ・エ・ヲ」を用いた出現形

【例】

ルビー／ルビキ ペートル／ペエトル レポリューション／レボヲリューション

1.1.1.2.2 小書きの仮名とそれを大書きにした仮名

【例】

シャツ／シヤツ コニヤック／コニヤツク ナチュラル／ナチュラル ソサイティ／ソサイテイ コメディ／コメデイ インテリゲンツィア／インテリゲンツィア

1.1.1.2.3 「ツェ」「デュ」「フェ」を含む出現形と「チェ」「ジュ」「ヒュ」を含む出現形

【例】

コンツェルト／コンチェルト モジュール／モジュール フェーズ／ヒューズ

1.1.1.2.4 「フハ」「フヒ」「フヘ」「フホ」を含む出現形と「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」を含む出現形

【例】

アスファルト／アスフハルト ソフィア／ソフヒア フェルジナンド／フヘルジナンド カリフォルニア／カリフホーニア

1.1.1.2.5 4.1.2 のカタカナ表にない仮名・記号を用いた出現形と表にある仮名・記号を用いた出現形

1.1.1.2.5.1 特定の文字列

「ウキ」と「ウィ・ウイ」	ダーウキン／ダーウィン ウキスキー／ウイスキー
「ウエ」と「ウエ」	ノルウエー／ノルウエー
「ウホ・ウヲ」と「ウオ」	ウヲートルロー／ウオートルロー
「クキ」と「クイ」	クキーン／クイーン
「グキ」と「グイ」	アンビグキチー／アンビグイチー
「シエ」と「シエ」	シェークスピア／シェークスピア
「ジェ・ヂエ」と「ジェ」	サージェン／サージェン プールヂェー／プールジェー
「ジヲ・ヂヲ」と「ジヨ」	ジヲルジ／ジヨルジ レリヂヲス／レリジヨス
「ツ」と「ズ」	ツボン／ズボン
「チェ」と「チェ」	マンチェスター／マンチェスター
「ツキ」と「ツイ」	ツキング／ツイング
「ツエ」と「ツエ」	ツエペリン／ツエペリン
「ツヲ」と「ツオ」	ホーヘンツヲレルン／ホーヘンツオレルン
「テキ」と「テイ」	テキール／テイール
「デキ」と「デイ」	グランデキー／グランディー
「ヴァ・ヴッ・ヴハ・ヴ」と「バ」	ヴァイオレット／バイオレット リヴワー／リバー
「ヴィ・ヴキ・ヰ」と「ビ」	ヴィクトリア／ビクトリア シヴキリゼーション／シビリゼーション
「ヴェ」と「ビュ」	レヴェュー／レビュー
「フハ・フハ・フア」と「ファ」	ラフハエル／ラファエル バッフハロー／バッファロー
「フヒ・フヒ・フィ・フキ」と「フィ」	フヒジカル／フィジカル フキリップン／フィリップン
「フヘ・フヘ・フェ・フェ」と「フェ」	プフヘンニツヒ／プフェンニツヒ カフエ／カフェ
「フホ・フホ・フオ・フヲ」と「フォ」	カルフォルニア／カルフォルニア フヲード／フォード
「ヴェ・ヴェ・ヴェ」と「ベ」	ヴェクトル／ベクトル ヴェネチア／ベネチア
「ヴォ・ヴォ・ヅ」と「ボ」	ヴォルト／ボルト レヴヲリューション／レボリューション
「ム」と「ム」	ガムマ／ガムマ
「ル」と「ル」	メルボルン／メルボルン
「ウワ」と「ワ」	ドウワー／ドワー

1.1.1.2.5.2 上記以外

「ハ」と「ハ」	ラハリドッフ／ラハリドッフ
「ヒ」と「ヒ」	エヒテルジンゲン／エヒテルジンゲン
「フ」と「フ」	フビアルラ／フビアルラ
「ヂ」と「ジ」	ラチオ／ラジオ
「ヴ」と「ブ」	ヘヴン／ヘブン
「ウ」と「ウ」	インクワイアラ／インクワイアラ
「キ」と「ウイ・イ」	サンドキッチ／サンドウィッチ ワキン／ワイン
「エ」と「エ・ウエ」	エリザベス／エリザベス スエーデン／スウェーデン
「エ」と「ベ」	レゼル／レベル
「ヲ」と「オ・ウオ」	ナポレオン／ナポレオン ヲートルロー／ウオートルロー

1.1.1.2.6 「ア・イ・ウ・エ・オ・ヤ・ユ・ヨ」を含み 4.1.2 のカタカナ表にない文字列を用いた出現形と表にある仮名を用いた出現形

1.1.1.2.6.1 ウ段の仮名に続く「ユ」を用いた出現形とイ段の仮名に続く「ユ」を用いた出現形

「クユ」と「キュ」
「グユ」と「ギユ」
「スユ」と「シユ」
「ズユ」と「ジユ」
「ツユ」と「チュ」
「ヌユ」と「ニユ」
「ブユ」と「ビユ」
「プユ」と「ピユ」
「ムユ」と「ミユ」
「ルユ」と「リュ」

【例】

アバンチュール／アバンチュール トリブユーン／トリビユーン クルユージェル／クリユージェル

1.1.1.2.6.2 エ段の仮名に続く「ユ」を用いた出現形とイ段の仮名に続く「ユ」を用いた出現形

「ケユ」と「キュ」
「ゲユ」と「ギユ」
「セユ」と「シユ」
「ゼユ」と「ジユ」
「テユ」と「チュ」
「ネユ」と「ニユ」
「ヘユ」と「ヒユ」
「ベユ」と「ビユ」
「ペユ」と「ピユ」
「メユ」と「ミユ」
「レユ」と「リュ」

【例】

ステュディオ／スチュディオ ブルテンベユルヒ／ブルテンビユルヒ

1.1.1.2.6.3 エ段の仮名に続く「ヨ」を用いた出現形とイ段の仮名に続く「ヨ」を用いた出現形

「ケヨ」と「キヨ」
「セヨ」と「シヨ」
「テヨ」と「チヨ」
「ネヨ」と「ニヨ」
「ヘヨ」と「ヒヨ」
「メヨ」と「ミヨ」
「レヨ」と「リヨ」
「ゲヨ」と「ギヨ」
「ゼヨ」と「ジヨ」
「ベヨ」と「ビヨ」
「ペヨ」と「ピヨ」

【例】

ゲョーテ／ギョーテ ゼヨン／ジョン

1.1.1.2.6.4 「トユ」「ドユ」を用いた出現形と「チュ」「デュ」を用いた出現形

【例】

トユルース／チュルース グデュール／グデュール

1.1.1.2.6.5 拗音「ャ・ユ・ヨ」の代わりに臨時的に小書き「ア・ウ・オ」が用いられたと見なせる出現形と「ャ・ユ・ヨ」を用いた出現形

【例】

ギリシア／ギリシャ カリウム／カリユーム ジオン／ジョン

1.1.1.2.6.6 「ウァ」を用いた出現形と「ワ」を用いた出現形

【例】

ハーワード／ハーワード ショッペンハウアー／ショッペンハワー

1.1.1.2.6.7 上記以外

「ア」と「ア」
「イ」と「イ」
「ウ」と「ウ」
「エ」と「エ」
「オ」と「オ」
「ャ」と「ャ」
「ユ」と「ユ」
「ヨ」と「ヨ」

【例】

ワイズマン／ワイズマン ニコラウス／ニコラウス スクエア／スクエア ロエスレル／ロエスレル ベルサイユ／ベルサイユ

1.1.2 異なる「語形」とする出現形

1.1.2.1 和語・漢語

次に示す形の差異を持つ出現形は、異なる「語形」とする。

1.1.2.1.1 清濁の差異及び濁音と半濁音との差異（連濁を含む）

【例】

レンチュウ↔レンジュウ ナンピト↔ナンピト (三)カイ↔(三)ガイ

1.1.2.1.2 語末長音の短呼形と元の形との差異

【例】

センセ↔センセイ ニョウボ↔ニョウボウ モ(一つ)↔モウ(一つ)

1.1.2.1.3 音が弱まって母音音節となったものと元の形との差異

【例】

アタクシ↔ワタクシ ソイ(から)↔ソレ(から)

1.1.2.1.4 撥音化した形と元の形との差異

【例】

アンタ↔アナタ ソン(なら)↔ソレ(なら)

1.1.2.1.5 促音化した形と元の形との差異

【例】

アッタカイ↔アタタカイ カッテ[嘗て]↔カツテ[嘗て]
(～な)コツ(た)↔(～な)コト(だ) テッカク↔テキカク

1.1.2.1.6 撥音が挿入された形と元の形との差異

【例】

アンマリ↔アマリ ミンナ↔ミナ (見た)マンマ↔(見た)ママ

1.1.2.1.7 促音の有無の差異

【例】
ケッシテ↔ケシテ タッタ↔タダ

1.1.2.1.8 連声によって生じた形と元の形との差異

【例】
アンノン↔アンオン (三) ミ↔(三) イ

1.1.2.1.9 語末以外の長音の有無の差異

【例】
シイカ↔シカ

1.1.2.1.10 サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形との差異

【例】
チッチャイ↔チイサイ (お父) ツァン↔(お父) サン

1.1.2.1.11 呉音・漢音・慣用音等の差異

【例】
サイシキ↔サイシヨク チョウフク↔ジュウフク

1.1.2.1.12

※臨時的に長音・促音が付加された形等と元の形についても異なる「語形」とする。

【例】
(だー) カーラー↔(だ) カラ トッテモ↔トーッテモ↔トテモ

1.1.2.2 外来語

規定 1.1.1.2 に記載したもの以外の差異を持つ出現形は、異なる「語形」とする。差異の例として 2.1.1.2 も参照のこと。

【例】
コンピューター↔コンピュータ メール↔メイル アルミニウム↔アルミニューム

1.2 品詞

品詞に基づく規定は、以下のとおりである。

1.2.1 無活用語

無活用語が複数の品詞として機能している場合、本規程の細則により、それぞれ異なる品詞が与えられるのであれば、それらは異なる「語形」とする。

1.2.1.1 同一の「語形」とするもの

1.2.1.1.1

名詞が形状詞としても機能する場合、名詞として用いられている出現形、形状詞として用いられている出現形のいずれにも「名詞-普通名詞-形状詞可能」という品詞が与えられるので、各出現形は同じ「語形」とする。

【例】
健康(を増進) / 健康(なる思想) 安全(を保つ) / 安全(なる所)

1.2.1.1.2

名詞が副詞としても機能する場合も、上記と同様に「名詞-普通名詞-副詞可能」という品詞が与えられるので、各出現形は同じ「語形」とする。

【例】
明日（になる）／明日（出発する） 多く（を得る能わず）／多く（あり）

1.2.1.1.3

名詞が助数詞としても機能する場合も、上記と同様に「名詞-普通名詞-助数詞可能」という品詞が与えられるので、各出現形は同じ「語形」とする。

【例】
年（六回）／（千八百七十）年 ページ（を費やす）／（九十）ページ

1.2.1.2 異なる「語形」とするもの

ある無活用語が形状詞としても副詞としても機能する場合、形状詞として用いられている出現形には「形状詞-一般」又は「形状詞-タリ」、副詞として用いられている出現形には「副詞」という品詞が与えられるので、各出現形は異なる「語形」とする。

【例】
断固（たる決心）←→断固（味方す） 格別（なる思想）←→格別（多し）

1.2.2 動詞連用形と動詞連用形転成名詞

動詞連用形とそれから転成した名詞は、それぞれ異なる「語形」とする。

【例】
動き（たり）←→（肘の）動き 遊び（し時）←→遊び（して）

1.2.3 形容詞語幹と形容詞語幹転成無活用語

形容詞語幹とそこから転成した無活用語は、それぞれ異なる「語形」とする。

【例】
安（さ）←→（金利）安

1.3 固有名

固有名に関する規定は、以下のとおりである。

1.3.1 人名・地名

品詞と語の形とが同じであれば、指し示すものと同じか否かにかかわらず、同じ「語形」として一つにまとめる。語の形が同じであるか否かの判断は規定 1.1 による。

【例】
〔人名-姓〕 檜山／桧山 星野／ほしの
〔人名-名〕 進次郎／進二郎 輝弘／昭浩 一郎／イチロー
〔人名-一般〕 モーツァルト／モーツアルト ビクトリア／ヴィクトリア
〔地名-一般〕 茨木／茨城 緑町／美土里町／美登里町 ケンブリッジ／ケンブリッジ

1.3.2 人名・地名以外の固有名

1.3.2.1

出現形が同じであれば、指し示すものが異なる場合であっても、同じ「語形」とする。

【例】
三嶺（商事）／三嶺（書房） 永興（号）／永興（寺）／永興（元年）

1.3.2.2

出現形が異なる場合は、異なる「語形」とする。

【例】
興福（寺） ↔ 弘福（寺） ↔ 香福（寺） 大創 ↔ 大惣 ↔ ダイソー

1.3.2.2.1

ただし出現形が異なる場合であっても、指し示すものが確実に同じであれば、同じ「語形」とする。

【例】
日産／ニッサン／NISSAN

1.4 活用型

活用型が異なれば異なる「語形」とする。

【例】
愛す（五段-サ行） ↔ 愛す（文語サ行変格-ス）

2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定規定

任意の二つの「語形」について、一つの「語彙素」にまとめるか、異なる「語彙素」として別にするか判断するための規定は、以下のとおりである。

2.1 語形

語の形に基づく規定は、以下のとおりである。

2.1.1 同一の「語彙素」とする「語形」

2.1.1.1 和語・漢語

次に示す差異を持つ「語形」は、語源が同一であり、かつ意味の違いを生じていない限り、同じ「語彙素」とする。

2.1.1.1.1 清濁の差異及び濁音と半濁音との差異（連濁を含む）

【例】
レンチュウ／レンジュウ ナンピト／ナンピト (三)カイ／(三)ガイ

2.1.1.1.2 語末長音の短呼形と元の形との差異

【例】
センセ／センセイ ニョウボ／ニョウボウ モ（一つ）／モウ（一つ）

2.1.1.1.3 音が弱まって母音音節となったものと元の形との差異

【例】
アタクシ／ワタクシ ソイ（から）／ソレ（から）

2.1.1.1.4 撥音化した形と元の形との差異

【例】
アンタ／アナタ ソン（なら）／ソレ（なら）

2.1.1.1.5 促音化した形と元の形との差異

【例】
アッタカイ／アタタカイ カッテ [嘗て]／カツテ [嘗て] (～な)コッ(た)／(～な)コト(だ) テッカク／テキカク

2.1.1.1.6 撥音が挿入された形と元の形との差異

【例】
アンマリ／アマリ ミンナ／ミナ（見た） マンマ／（見た） ママ

2.1.1.1.7 促音の有無の差異

【例】
ケッシテ／ケシテ タダ／タッタ

2.1.1.1.8 連声によって生じた形と元の形との差異

【例】
アンノン／アンオン カンノン／カンオン

2.1.1.1.9 語末以外の長音の有無の差異

【例】
シイカ／シカ

2.1.1.1.10 サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形との差異

【例】
チッチャイ／チイサイ （お父） ツァン／（お父） サン

2.1.1.1.10.1

ただし「ちゃん」と「さん」とは別の「語彙素」とする。

【例】
チャン↔サン

2.1.1.1.11 呉音・漢音・慣用音等の差異

【例】
サイシキ／サイシヨク チョウフク／ジュウフク

2.1.1.1.12 上記以外

上記以外に、「語形」の差異を同一の「語彙素」とすることがある。以下、事例を示す。

2.1.1.1.12.1 母音が交替した形の差異

【例】
ミスオチ／ミゾオチ デケル／デキル エガラッポイ／イガラッポイ

2.1.1.1.12.2 子音が交替した形の差異

【例】
ユルブ／ユルム オトロシイ／オソロシイ ヤッパシ／ヤッパリ

2.1.1.1.12.3 サ（ザ）行の拗音と直音が交替した形の差異

【例】
ネンジュ／ネンズ チシャ／チサ（高苜） ジュツナイ／ジツナイ

2.1.1.1.12.4 特殊拍どうしが交替した形の差異

【例】
クランド／クラウド（蔵人） シッチュウ／シュウチュウ（集注）

2.1.1.1.12.5 語中音節の有無の差異

【例】

一般音節：マイゴ／マヨイゴ オモロイ／オモシロイ フバコ／フミバコ
母音音節：コワモテ／コワオモテ アブラゲ／アブラアゲ ユイイツ／ユイツ

2.1.1.1.12.6 語末音節の有無の差異

【例】

ナス／ナスビ カケックラ／カケクラベ

2.1.1.1.12.7 音の融合した形と元の形の差異

【例】

コサエル／コシラエル シャガレル／シワガレル ミョウト／メオト

2.1.1.1.12.8

※上記 2.1.1.1.12.1 から 2.1.1.1.12.7 の差異を持ち、かつ意味が同じものであっても、語源が同一か否かの判断が困難な場合は、異なる「語彙素」とする。

【例】

ツゴモリ←→ツキゴモリ ツバ←→ツバキ

2.1.1.2 外来語

外来語の「語形」のうち、原語が同じであるか極めて近い場合で、かつ音声的に類似する場合の表記の差異を持つものは、同じ「語彙素」とする。

典型的には以下に示す差異、又は差異の組合せで説明できるものを同じ「語彙素」とする。

2.1.1.2.1 連母音「アウ」「エイ」「オウ」と長音符号を用いた形との差異

【例】

ファウル／ファール メール／メール ボウル／ボール

2.1.1.2.2 以下の文字対のうち左の文字を用いた形と右の文字を用いた形との差異

「シェ・ジェ」と「セ・ゼ」	シェパード／セパード ジェリー／ゼリー
「ティ」と「チ」	ティーム／チーム
「テイ・デイ」と「テ・デ」	スティッキ／ステッキ ハンディ／ハンデ
「デイ」と「ジ」	ディレンマ／ジレンマ
「トゥ・ドウ」と「ツ・ズ」	トゥール／ツール ヒンドゥー／ヒンズー
「ドゥ」と「ド」	マドゥモアゼル／マドモアゼル
「ファ・フィ・フェ・フォ」と「ハ・ヒ・ヘ・ホ」	セロファン／セロハン テレフォン／テレホン
「ツイ」と「チ」	エリツイン／エリチン
「ウィ・ウエ・ウオ」と「ウイ・ウエ・ウオ」	ウィーン／ウイーン ウォッチ／ウオッチ
「ウイ・ウエ・ウオ」と「イ・エ・オ」	スウィート／スイート スウェーデン／スエーデン
「イエ」と「エ」	イエール／エール
「クア・クイ・クエ・クオ」と「カ・キ・ケ・コ」	クアルテット／カルテット
「ガア」と「ガ」	ガアテマラ／ガテマラ

2.1.1.2.3 語末あるいは原語における子音に先行する位置での「トゥ」「ドゥ」を用いた形と「ト」「ド」を用いた形との差異

【例】

カトゥ／カット ドゥライブ／ドライブ

2.1.1.2.4 特殊拍（長音・促音・撥音）の有無の差異

【例】

ミッション／ミション マシーン／マシン エンターテインメント／エンターテイメント

2.1.1.2.5 半母音/j/, /w/の有無の差異(/j/の場合は特にイ段・エ段に後続する場合)

【例】
ダイヤモンド／ダイヤモンド エトワール／エトアール

2.1.1.2.6 母音の有無の差異

【例】
グラウンド／グラント レインジャー／レンジャー

2.1.1.2.7 長音と促音の交替

【例】
オーケー／オッケー アンティーク／アンティック

2.1.1.2.8 特殊拍（長音・促音・撥音）とそれ以外の交替

【例】
ケッパー／ケイパー シンポジウム／シムポジウム アpartment／アパルトメント

2.1.1.2.9 母音と半母音の交替

【例】
イニシャル／イニシアル アダージョ／アダージオ

2.1.1.2.10 異なる母音間の交替

【例】
ボディ／バディ サクソフオーン／サキシフオーン マニー／マネー
ルーブル／ルーブリ マスタング／ムスタング バジャマ／ピジャマ

2.1.1.2.11 清音と濁音（に相当するもの）の交替

【例】
スムース／スムーズ ベット／ベッド シビリゼーション／シウィリゼーション

2.1.1.2.12 調音法や調音点の類似した子音間の交替

【例】
ゴシック／ゴチック コンチェルン／コンテルン

2.1.1.2.13 原語のつづり“a”に対する「ア／エイ」，“i”に対する「イ／アイ」の交替

【例】
カオス／ケイオス オーガニゼーション／オーガナイゼーション

2.1.1.2.14

2.1.1.2.1 ～ 2.1.1.2.13 以外についても、それに類する差異については同一の語彙素とする。

【例】
アンビリーバブル／アンビリーバボー

2.1.1.2.15

なお英語に関して、単数形と複数形の差異や原形と分詞形の差異などは原則として異なる「語彙素」とする。ただし語形的に類似し、かつ文脈的にも区別が難しいものについては同じ「語彙素」とする。類似の条件は 2.1.1.2.1 から 2.1.1.2.13 を適用する。典型的な例を以下に示す。

【例】			
複数形	同語彙素	ブック／ブックス※1	ウーマン／ウイメン
	別語彙素	チャイルド↔チルドレン	
名詞所有格	同語彙素	ブック／ブックス※1	メン／メンズ (普通名詞)
	別語彙素	ジェニー↔ジェニーズ	(固有名詞) ※2
動詞派生型	同語彙素	ビルド／ビルト	ウォーク／ウォークス
	別語彙素	ウォーク↔ウォーキング	

※1 多くの普通名詞は単数形、複数形、所有格が同じ「語彙素」となる。
 ※2 原則として固有名詞の所有格は普通名詞となるため、規定 2.2 により異なる「語彙素」となる。なお「ジェニーズ(事務所)」など組織の名を表すものの扱いについては 6.5 「固有名の扱い」を参照。

2.2 品詞

品詞に基づく規定は、以下のとおりである。

2.2.1

ある無活用語がその用法によって異なる品詞を与えられていても、その品詞の属する類が同じであれば、同じ「語彙素」とする。一方、その品詞の属する類※が異なれば、それらは異なる「語彙素」とする。

※UniDicにおいて「語彙素」に付与される情報の一つで、「体」「用」「相」「他」などがある。各品詞がどの類に属するかについては 第3章 第2 1.17 を参照。

【例】
 断固 (たる決心) / 断固 (味方す)
 自然 (を写す) ↔ 自然 (生ず) / 自然 (なるもの)

2.2.2

動詞・形容詞に基づくものであっても、別に定める品詞判別に関する規程により無活用語とされたものについては、元の動詞・形容詞とは異なる「語彙素」とする。

【例】
 (肘の) 動き↔動き (たり)
 (金利) 安↔安 (さ)

2.3 活用型

活用型が異なる活用語のうち、次に挙げるものは同じ「語彙素」とする。

2.3.1 文語活用の活用語と、それに対応する口語活用の活用語

【例】
 す/する 受く/受ける 少なし/少ない 白し/白い ず/ぬ らる/られる

2.3.2 サ行五段活用動詞と、その元になったサ行変格活用動詞

【例】
 愛す/愛する 対す/対する

2.3.3 ザ行上一段活用動詞と、その元になったザ行変格活用動詞

【例】
 感じる/感ずる 信じる/信ずる

2.3.4 可能動詞と、その元になった五段活用動詞

【例】
 書ける/書く 読める/読む

2.3.5 二段活用の動詞で、ハ・ヤ・ワ行間で交代の生じた動詞と、その元になった動詞

【例】
据ふ（文語下二段-ハ行）／据う（文語下二段-ワ行）
強ゆ（文語上二段-ヤ行）／強ふ（文語上二段-ハ行）

2.3.6 その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語

【例】
そろ／そろろう（候）

2.4 方言形

方言形と、それに形の上で対応する口語の共通語形とは、意味のつながりがある場合、同じ「語彙素」とする。

【例】
オトロシイ／オソロシイ

2.5 人名

人名に関する規程は、以下のとおりである。

2.5.1 日本の人名

日本の人名には、原則として規定 2.1.1 は適用しない。

【例】
アイザワ←→アイサワ

2.5.1.1

読み添えの「の」を含む語形は、「の」を含まない語形と同じ「語彙素」とする。

【例】
フジワラ／フジワラノ スサノオ／スサノオノ

2.5.1.2

日本の神話の神名や昔の人名などについては規定 2.1.1 を適用する。

【例】
タカミムスビ／タカミムスヒ（高御産巢日） カグヤヒメ／カクヤヒメ ウマヤド／ウマヤト

2.5.2 日本の人名と外国の人名

日本の人名および日本漢字音で読んだ中国・韓国の人名と、それ以外の人名は、異なる「語彙素」とする。

【例】
アンナ（杏奈など）←→アンナ（Anna など）

2.5.3 外国の人名

外国の人名（日本漢字音で読んだ中国・韓国の人名を除く。）については、指し示す人物が同じであるか否かを問わず、語形が同じであれば同じ「語彙素」とし、語形が異なれば異なる「語彙素」とする。

【例】
シェークスピア←→シェクスピーア←→シェークスピヤ
ゲーテ←→ギョーテ←→ゴエテ

2.6 地名

地名に関する規定は以下のとおりである。

2.6.1 日本の地名と外国の地名

日本の地名と外国の地名は異なる「語彙素」とする。

【例】
ハワイ（羽合） ↔ ハワイ（Hawaii）

2.6.2 日本の地名

2.6.2.1

日本の地名については、同じ場所を指すことが明らかな場合、規定 2.1.1.1 の範囲で同じ「語彙素」とする。

【例】
カンサイ／カンセイ

2.6.2.1.1

読み添えの「の」を含む語形は、「の」を含まない語形と同じ「語彙素」とする。

【例】
ヒゴ／ヒゴノ

2.6.2.2 過去の日本の地名

過去の日本の地名については、規定 2.1.1.1 に類する音韻変化の範囲で同じ「語彙素」とする。

【例】
モロガタ／モロアガタ（諸県） クナ／クヌ（狗奴国） キ／キイ（紀伊）

2.6.3 外国の地名

2.6.3.1 国名

指し示す国が同じである限りにおいて、規定 2.1.1.2 の範囲で同じ「語彙素」とする。

【例】
イギリス／エゲレス スイス／スウィス オランダ／ホルランド

2.6.3.1.1

指し示す国が同じであっても、規定 2.1.1.2 の範囲外の違いがある場合は別「語彙素」とする。

【例】
スイス ↔ スイツランド
オランダ ↔ ネーデルランド
イギリス ↔ エイコク（英国）
クダラ（百済） ↔ ヒャクサイ（百済）

2.6.3.2 漢字一字の略称国名

漢字一字の略称国名は、指し示す国が同じであるか否かを問わず、漢字の字種ごとに別「語彙素」とする。

【例】
露 ↔ 魯 独 ↔ 徳

2.6.3.2.1

漢字一字の略称国名の字種と漢字1字の国名の字種とが一致する場合は、それぞれ別「語彙素」とする。

【例】
魯（ロシアなどの略称） ↔ 魯（古代中国の国名）

2.6.3.3 国名以外

国名以外の外国の地名は、指し示す場所が同じであるか否かを問わず、語形が同じであれば同一「語彙素」とし、語形が異なれば異なる「語彙素」とする。

【例】
オックスフォード ↔ オックスフォルト ↔ オックスフォード
カリフォルニア ↔ カリホルニヤ

2.7 人名・地名以外の固有名

固有名については、指し示すものが同じである限りにおいて、規定 2.1.1.2 の範囲で同じ「語彙素」とする。

2.7.1 日本語由来の固有名

読み添えの「の」を含む語形は、「の」を含まない語形と同じ「語彙素」とする。

【例】
カヤ（高陽） / カヤノ

2.7.2 外来語由来の固有名

外来語由来の固有名については、指し示すものが同じである限りにおいて、規定 2.1.1.2 の範囲で同じ「語彙素」とする。

【例】
オデュッセイア / オデッセイ / オデセイ ハーバード / ハーワード

2.8 略語

二つの略語が同語形であっても、その元になった語が異なる「語彙素」として扱われる場合、略語も別の「語彙素」として扱う。

【例】
（大阪）大 ↔ （実物）大

2.8.1

その元になった語が異なる「語彙素」であっても、概念に共通性が高い場合には、略語は同じ「語彙素」にまとめる。

【例】
漁 [「漁業」の略] / 漁 (「漁労」の略)

3 「書字形」の定め方及び表記

「書字形」は、出現形を基に次のように定める。

3.1 活用のない語

原則として出現形をそのまま「書字形」とし、「書字形」の表記も出現形のとおりとする。

【例】
国語 → 国語 國語 → 國語
愈々 → 愈々 愈々 → 愈々

3.2 活用のある語

出現形を終止形に直したものを「書字形」とし、「書字形」の表記も出現形を終止形に直したものとする。

【例】

思ひ（たり）→思ふ 受繼が（ん）→受繼ぐ ウルサク（思ふ）→ウルサシ

4 「語形」の定め方及び表記

4.1 「語形」の定め方

4.1.1 和語・漢語

和語・漢語については、「書字形」の読み（語形）を「語形」として立てる。

【例】

國語→コクゴ 愈々→イヨイヨ 話す→ハナス ウルサシ→ウルサシ

4.1.2 外来語

4.1.2.1 カタカナ表記の出現形

カタカナ表記の外来語は、次のカタカナ表中にある仮名・符号からなる出現形は、それをそのまま「語形」とする。

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ				
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ				
キヤ		キユ		キョ
シヤ		シユ		ショ
チヤ		チユ		チョ
ニヤ		ニユ		ニョ
ヒヤ		ヒユ		ヒョ
ミヤ		ミユ		ミョ
リヤ		リユ		リョ
ギヤ		ギユ		ギョ
ジャ		ジュ		ジョ
ビヤ		ビユ		ビョ
ピヤ		ピユ		ピョ
ン	(撥音)			
ッ	(促音)			
ー	(長音符号)			

		シエ	
		チエ	
ツア		ツエ	ツオ
	テイ		
ファ	フィ	フェ	フォ
		ジェ	
	デイ		
		デュ	
	ウイ	ウエ	ウオ
	ツイ		
		トゥ	
		ドゥ	
		フュ	

その例外や、カタカナ表にない仮名・記号を含む出現形については、以下のように「語形」を定める。
 なお、以下の外来語に関する記述の中で「辞書」といった場合、『大辞林』第2版と『日本国語大辞典』第2版を指す。両辞書の記述が異なる場合は、原則として『日本国語大辞典』第2版の記述に従う。
 また、語例には、普通名詞だけでなく外国の地名・人名・固有名をとりあげる場合がある。
 また、規定検索の便をはかり、同一の出現形について複数の項目で重複してとりあげる場合がある。

4.1.2.1.1 ツア・ツエ・デュ・フュ

出現形「ツア・ツエ・デュ・フュ」は、「ツア・ツエ・デュ・フュ」あるいは「ツア・チェ・ジュ・ヒュ」を語形とする。「ツア・ツエ・デュ・フュ」「ツア・チェ・ジュ・ヒュ」のどちらを語形とするかは辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

- 【例】
 モーツァルト→モーツァルト
 コンツェルト→コンチェルト フィレンツェ→フィレンツェ
 モジュール→モジュール プロデュース→プロデュース
 フェーズ→ヒューズ フェージョニズム→フェージョニズム

4.1.2.1.2 長音

4.1.2.1.2.1 ア・イ・ウ・エ・オ

ア・イ・ウ・エ・オ列の仮名の後にそれぞれ「ア・イ・ウ・エ・オ」を用いた出現形で、「ア・イ・ウ・エ・オ」が長音を表すと考えられるものについては、原則として長音符号「ー」を用いた形を語形とする。

【例】
アパートメント→アパ-トメント アンコ-ル→アンコー-ル

4.1.2.1.2.2 ア・イ・ウ・エ・オ

ア・イ・ウ・エ・オ列の仮名の後にそれぞれ小書き「ア・イ・ウ・エ・オ」を用いた出現形は、長音符号「ー」を用いた形を語形とする。

【例】
オスカー→オスカー ロセッチィ→ロセッチー

4.1.2.1.2.3 イ・エ・オ列に続くキ・エ・ヲ

イ・エ・オ列の仮名の後にそれぞれ「キ・エ・ヲ」を用いた出現形で、その「キ・エ・ヲ」が長音を表すと考えられるものについては、長音符号「ー」を用いた形を語形とする。

【例】
ルビキ→ルビー ペートル→ペートル レボヲリユ-ション→レボーリユ-ション

4.1.2.1.2.4

4.1.2.1.2.1 ～ 4.1.2.1.2.3 を適用した結果、語形で長音符号が複数連続する場合は、一つに統合する。

【例】
ウンヅォール (→ウンヅール) →ウンヅール

4.1.2.1.2.5

ただし、4.1.2.1.2.1 ～ 4.1.2.1.2.3 に該当する書字形であっても、辞書の見出し（空見出しを除く。以下同）で「ア・イ・ウ・エ・オ」が用いられている場合は、「ア・イ・ウ・エ・オ」を語形とする。

【例】
バレエ→バレエ レゲエ→レゲエ

4.1.2.1.3 カタカナ表外の仮名・記号を含む書字形

4.1.2.1.3.1 ハ

4.1.2.1.3.1.1 フハ

出現形「フハ」は「ファ」を語形とする。

【例】
フハンティ-ン→ファンティ-ン ラフハエル→ラファエル

4.1.2.1.3.1.2 その他のハ

4.1.2.1.3.1.1 以外の出現形「ハ」は「ハ」を語形とする。

【例】
ラハリドッフ→ラハリドッフ

4.1.2.1.3.2 ヒ

4.1.2.1.3.2.1 フヒ

出現形「フヒ」は「フィ」を語形とする。

【例】
フヒジカル→フィジカル スフヒンクス→スフィンクス

4.1.2.1.3.2.2 その他のヒ

4.1.2.1.3.2.1 以外の出現形「ヒ」は「ヒ」を語形とする。

【例】

エヒテルジンゲン→エヒテルジンゲン

4.1.2.1.3.3 フ

4.1.2.1.3.3.1 フハ・フヒ・フヘ・フホ

出現形「フハ・フヒ・フヘ・フホ」はそれぞれ「ファ・フィ・フェ・フォ」を語形とする。

【例】

バッファロー→バッファロー フヒラデルフヒア→フィラデルフィア アイフヘル→アイフェル フホルミテージ→フォルミテージ

4.1.2.1.3.3.2 ファ・ファイ・フェ・フォ

出現形「ファ・ファイ・フェ・フォ」はそれぞれ「ファ・フィ・フェ・フォ」を語形とする。

【例】

ファスト→ファスト オックスフォード→オックスフォード

4.1.2.1.3.3.3 その他のフ

4.1.2.1.3.3.1, 4.1.2.1.3.3.2 以外の出現形「フ」は「フ」を語形とする。

【例】

フビアルラ→フビアルラ

4.1.2.1.3.4 へ

4.1.2.1.3.4.1 フヘ

出現形「フヘ」は「フェ」を語形とする。

【例】

プフヘンニッヒ→プフェンニッヒ

4.1.2.1.3.5 ホ

4.1.2.1.3.5.1 フホ

出現形「フホ」は「フォ」を語形とする。

【例】

カリフォルニア→カルフォルニア プラットフホーム→プラットフォーム

4.1.2.1.3.5.2 ウホ

出現形「ウホ」は「ウオ」を語形とする。

【例】

ウホーリンフォード→ウオーリンフォード

4.1.2.1.3.6 ム

書字形「ム」は「ム」を語形とする。

【例】
ガムマ→ガムマ

4.1.2.1.3.7 ル

出現形「ル」は「ル」を語形とする。

【例】
メルボルン→メルボルン ダルウィン→ダルウィン

4.1.2.1.3.8 ゼ

4.1.2.1.3.8.1 ゼエ

出現形「ゼエ」は「ジェ」を語形とする。

【例】
ブルヂェー→ブルジェー

4.1.2.1.3.8.2 ゼヲ

拗音「ジョ」の代わりに用いられていると見なせる出現形「ゼヲ」は、「ジョ」を語形とする。

【例】
レリヂラス→レリジョス

4.1.2.1.3.8.3 その他のゼ

4.1.2.1.3.8.1, 4.1.2.1.3.8.2 以外の出現形「ゼ」は「ジ」を語形とする。

【例】
ラヂオ→ラジオ

4.1.2.1.3.9 ツ

出現形「ツ」は「ズ」を語形とする。

【例】
ヅボン→ズボン

4.1.2.1.3.10 ヴ

4.1.2.1.3.10.1 ヴァ・ヴワ・ヴハ

出現形「ヴァ」「ヴワ」「ヴハ」は「バ」を語形とする。

【例】
ヴァイオレット→バイオレット、リヴワー→リバー、ラヴハ→ラバ (lava)

4.1.2.1.3.10.2 ヴィ・ヴキ

出現形「ヴィ」「ヴキ」は「ビ」を語形とする。

【例】
ヴィクトリア→ビクトリア シヴキリゼーション→シビリゼーション

4.1.2.1.3.10.3 ヴェ・ヴェ・ヴェ

出現形「ヴェ」「ヴェ」「ヴェ」は「ベ」を語形とする。

【例】
ヴェクトル→バクトル ヴェネチア→ベネチア ヴエイ→ベイ

4.1.2.1.3.10.4 ヴォ・ヴワ

出現形「ヴォ」「ヴワ」は「ボ」を語形とする。

【例】
ヴォルト→ボルト レヴワリューション→レボリューション

4.1.2.1.3.10.5 ヴュ

出現形「ヴュ」は「ビュ」を語形とする。

【例】
レヴュー→レビュー ヴュルテンベルヒ→ビュルテンベルヒ

4.1.2.1.3.10.6 その他のヴ

4.1.2.1.3.10.1 ～ 4.1.2.1.3.10.5 以外の出現形「ヴ」は「ブ」を語形とする。

【例】
ヘヴン→ヘブン

4.1.2.1.3.11 ヴ

出現形「ヴ」は「バ」を語形とする。

【例】
ペンシルヴニア→ペンシルバニア

4.1.2.1.3.12 ヲ

4.1.2.1.3.12.1 ウッ

出現形「ウッ」は「ワ」を語形とする。

【例】
ドゥッワー→ドワー

4.1.2.1.3.12.2 ヴッ

出現形「ヴッ」は「バ」を語形とする。

【例】
リヴッワー→リバー ドヴッワー→ドバー

4.1.2.1.3.12.3 その他のッ

4.1.2.1.3.12.1 , 4.1.2.1.3.12.2 以外の出現形「ッ」は「ワ」を語形とする。

【例】
インクワイアラ→インクワイアラ

4.1.2.1.3.13 キ

4.1.2.1.3.13.1 ウキ

出現形「ウキ」は「ウィ」または「ウイ」を語形とする。「ウィ」「ウイ」のどちらを語形とするかは、辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

【例】
ルー ドウキヒ→ルー ドウィヒ　ダーウキン→ダーウィン
ウキスキー→ウイスキー

4.1.2.1.3.13.2 テキ・デキ・フキ・ツキ

出現形「テキ」「デキ」「フキ」「ツキ」はそれぞれ「ティ」「ディ」「フィ」「ツイ」を語形とする。

【例】
テキール→ティール　グランデキ→グランディー　フキリッピン→フィリッピン　ツキング→ツィング

4.1.2.1.3.13.3 クキ・グキ

出現形「クキ」「グキ」はそれぞれ「クイ」「グイ」を語形とする

【例】
クキーン→クイーン　アンビグキチ→アンビグイチ

4.1.2.1.3.13.4 ヴキ

出現形「ヴキ」は「ビ」を語形とする。

【例】
シヴキリゼーション→シビリゼーション

4.1.2.1.3.13.5 イ列の仮名に続くキ

イ列の仮名に続く出現形「キ」で長音を表すと考えられるものは、長音符号「ー」を語形とする。

【例】
ルビキ→ルビー

4.1.2.1.3.13.6 その他のキ

4.1.2.1.3.13.1～4.1.2.1.3.13.5 以外の出現形「キ」は、「ウィ」または「イ」を語形とする。「ウィ」「イ」のどちらを語形とするかは、辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

【例】
キーン→ウィーン　サンドキツチ→サンドウィッチ
ワキン→ワイン　ラキン→ライン（地名）　マガズキーン→マガズイーン（magazine）

4.1.2.1.3.14 𐀀

出現形「𐀀」は「ビ」を語形とする。

【例】
スカンディナギア→スカンディナビア

4.1.2.1.3.15 エ

4.1.2.1.3.15.1 ウエ・シエ・チエ・ツエ・フエ

出現形「ウエ」「シエ」「チエ」「ツエ」「フエ」はそれぞれ「ウエ」「シエ」「チエ」「ツエ」「フエ」を語形とする。

【例】
ノルウエー→ノルウェー　シェークスピーア→シェークスピーア　マンチエスター→マンチェスター　ツエペリン→ツェペリン　カフエ→カフェ

4.1.2.1.3.15.2 ジエ・ヂエ

出現形「ジエ」「ヂエ」は「ジェ」を語形とする。

【例】

サージエン→サージェン プールヂエー→プールジェー

4.1.2.1.3.15.3 ヴエ

出現形「ヴェ」は「ベ」を語形とする。

【例】

ヴェネチア→ベネチア アドヴェンテージ→アドベンテージ

4.1.2.1.3.15.4 エ列の仮名に続くエ

エ列の仮名に続く出現形「エ」で長音を表すと考えられるものは、長音符号「ー」を語形とする。

【例】

ペエトル→ペートル メッテエル→メッテール

4.1.2.1.3.15.5 その他のエ

4.1.2.1.3.15.1～4.1.2.1.3.15.4 以外の「エ」は、「エ」または「ウエ」を語形とする。「エ」「ウエ」のどちらを語形とするかは、辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

【例】

エリザベス→エリザベス サイエンス→サイエンス
スエーデン→スウェーデン

4.1.2.1.3.16 ズ

4.1.2.1.3.16.1 ヴズ

出現形「ヴズ」は「ベ」を語形とする。

【例】

ヴズイ→バイ

4.1.2.1.3.16.2 その他のズ

4.1.2.1.3.16.1 以外の「ズ」は、「ベ」を語形とする。

【例】

レズル→レベル ゼランダ→ベランダ

4.1.2.1.3.17 ラ

4.1.2.1.3.17.1 ウラ・ツラ・フラ

出現形「ウラ」「ツラ」「フラ」はそれぞれ「ウォ」「ツォ」「フォ」を語形とする。

【例】

ウラートルロー→ウォートルロー ホーヘンツラルレルン→ホーヘンツォルレルン カリフラルニヤ→カリフォルニヤ

4.1.2.1.3.17.2 ヴラ

出現形「ヴラ」は「ボ」を語形とする。

【例】

レヴラリューション→レボリューション

4.1.2.1.3.17.3 ジヲ・ヂヲ

拗音「ジョ」の代わりに用いられていると見なせる出現形「ジヲ」「ヂヲ」は、「ジョ」を語形とする。

【例】

ジラルジ→ジョルジ レリヂラス→レリジョス

4.1.2.1.3.17.4 オ列の仮名に続くヲ

オ列の仮名に続く出現形「ヲ」で長音を表すと考えられるものは、長音符号「ー」を語形とする。

【例】

レボヲリューション→レポーリューション

4.1.2.1.3.17.5 その他のヲ

4.1.2.1.3.17.1～4.1.2.1.3.17.4以外の出現形「ヲ」は、「オ」または「ウォ」を語形とする。「オ」「ウォ」のどちらを語形とするかは、辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

【例】

ナボレヲン→ナポレオン ガリレヲ→ガリレオ ヲデッサ→オデッサ
コーンヲール→コーンウォール ヲートルロー→ウォートルロー ヲルズヲルス→ウォルズウォルス

4.1.2.1.3.18 ヲ

出現形「ヲ」は「ボ」を語形とする。

【例】

ヅルト→ボルト ズルテール→ボルテール

4.1.2.1.3.19 セ°

出現形「セ°」は「ツェ」を語形とする。

【例】

ポーブエドノスセ° ッフ→ポーブエドノスツェッフ

4.1.2.1.4 小書き仮名を含むカタカナ表外の出現形

小書きの仮名「ャ・ュ・ョ・ァ・ィ・ウ・ェ・ォ」を含み、カタカナ表になく、かつ4.1.2.1.2, 4.1.2.1.3でとりあげていない出現形は、以下のように語形を定める。

4.1.2.1.4.1 ウ段の仮名に続くユ

出現形「クユ・スユ・ツユ・ヌユ・ムユ・ルユ・グユ・ズユ・ブユ・ピユ」は、それぞれ「キュ・シュ・チュ・ニユ・ミュ・リュ・ギユ・ジュ・ビユ・ピユ」を語形とする。

【例】

アバンツューール→アバンチュール クル्यूゲル→クリューゲル トリブューン→トリビューン ジュプユイトラン→ジュピユイトラン

4.1.2.1.4.2 エ段の仮名に続くユ

出現形「ケユ・セユ・テユ・ネユ・ヘユ・メユ・レユ・ゲユ・ゼユ・ベユ・ペユ」は、それぞれ「キュ・シュ・チュ・ニユ・ヒユ・ミュ・リュ・ギユ・ジュ・ビユ・ピユ」を語形とする。

【例】

ステュディオ→スチュディオ コルニュー→コルニユー ブルテンベユルヒ→ブルテンビユルヒ

4.1.2.1.4.3 エ段の仮名に続くヨ

出現形「ケヨ・セヨ・テヨ・ネヨ・ヘヨ・メヨ・レヨ・ゲヨ・ゼヨ・ベヨ・ペヨ」は、それぞれ「キヨ・シヨ・チヨ・ニヨ・ヒヨ・ミヨ・リヨ・ギヨ・ジョ・ビヨ・ピヨ」を語形とする。

【例】
テヨディー→チヨディー ゲヨータ→ギヨータ ゼヨン→ジョン

4.1.2.1.4.4 トユ

出現形「トユ」は「チュ」を語形とする。

【例】
トユルース→チュルース

4.1.2.1.4.5 ドユ

出現形「ドユ」は「デュ」を語形とする。

【例】
グドユール→グデュール

4.1.2.1.4.6 ヤ・ユ・ヨの代わりにア・ウ・オ

拗音「ヤ・ユ・ヨ」の代わりに臨時的に小書き「ア・ウ・オ」が用いられたと見なせる出現形は、「ヤ・ユ・ヨ」を用いた形を語形とする。

【例】
ギリシア→ギリシヤ カリウム→カリユーム ジオン→ジョン

4.1.2.1.4.7 ウア

出現形「ウア」は「ワ」を語形とする。

【例】
ハーワード→ハーワード ショツペンハウアー→ショツペンハワー

4.1.2.1.4.8 その他の小書き仮名

4.1.2.1.4.1～4.1.2.1.4.7 以外的小書きの仮名を含む出現形については、大書きの仮名に直したものを語形とする。

【例】
ワイズマン→ワイズマン ニコラウス→ニコラウス スクェア→スクエアー ロエスレル→ロエスレル

4.1.2.1.4.8.1

4.1.2.1.4.8 を適用の結果、他の規定を適用する必要のある形となる場合は、適用後の形を語形とする。

【例】
ダーウキン (→ダーウキン) →ダーウィン クロンウエル (→クロンウエル) →クロンウエル

4.1.2.1.4.8.2

ただし、辞書の見出しや原音を参照して異なる形を語形とする場合がある。

4.1.2.1.5 小書き仮名の大書き

カタカナ表や 4.1.2.1.1～4.1.2.1.4 にある小書きの仮名を用いた形について、小書きの仮名ではなく大書きの仮名を用いた形が出現形となる場合がある。その場合、大書きの仮名を小書きに直した上で、必要な規程を適用して語形を定める。

【例】

キヤツシユ→キャッシュ ナチュラル→ナチュラル インテリゲンツィア→インテリゲンツィア
ヴアイオリン (→ヴァイオリン) →バイオリン ヴワルカン (→ヴワルカン) →バルカン ダブルユウ (→ダブル
ユウ) →ダブリュー アスフハルト (→アスファルト) →アスファルト カリフホーニア (→カリフホーニア) →カ
リフォーニア

4.1.2.1.5.1

大書きの仮名が小書きに直すべきものなのか大書きのままとすべきものなのかは、辞書の見出しや原音を参照して語ごとに定めるものとする。

【例】

「シヤ」 シヤツ→シャツ アカシヤ→アカシヤ
「ニヤ」 コニヤツク→コニヤック アンモニヤ→アンモニヤ
「テイ」 ソサイテイ→ソサイティ ステイション→ステーション
「デイ」 コメデイ→コメディ デイリー→デイリー

4.1.2.2 漢字表記の出現形

漢字表記された外来語は、『日本国語大辞典』に基づいて「語形」を定める。

【例】

瓦斯→ガス 弗→ドル

4.1.2.2.1

『日本国語大辞典』に立項されていないものは、慣習やルビ等により、出現形ごとに「語形」を定める。

【例】

越歴機→エレキ 洋袴→ズボン

4.1.3 人名

人名の「語形」の定め方は、規定 4.1.1 , 4.1.2 に準ずる。

4.1.3.1

漢字表記された中国・韓国の人名は、ルビの有無等にかかわらず一律に日本漢字音（漢音）で読む。

【例】

金 日成→キン ニッセイ ×キム イルソン

4.1.4 地名

地名の「語形」の定め方は、規定 4.1.1 , 4.1.2 に準ずる。

4.1.4.1

漢字表記された中国・韓国の地名は、『日本国語大辞典』『大辞林』に基づいて語形を定める。二つの辞書の記述が異なる場合は、『日本国語大辞典』に従う。

【例】

平壤→ピョンヤン ×ヘイジョウ

4.1.4.2

辞書に立項されていないものは、ルビの有無等にかかわらず一律に日本漢字音（漢音）で読む。

【例】

昆明→コンメイ ×クンミン

4.1.5 人名・地名以外の固有名

固有名「語形」の定め方は、規定 4.1.1，4.1.2 に準ずる。

4.1.5.1

ただし、日本語に由来する固有名であっても長音符号で記された出現形のみを持つものは、適宜、長音符号の形を「語形」として立てる。

【例】
鐘紡／カネボウ／カネポー→カネボウ ×カネポー
ダイソー→ダイソー ×ダイソウ

4.1.5.2

漢字表記された中国・韓国語由来の固有名は、『日本国語大辞典』『大辞林』に基づいて語形を定める。二つの辞書の記述が異なる場合は、『日本国語大辞典』に従う。

【例】
契丹→キタイ

4.1.5.3

辞書に立項されていないものは、強い慣習やルビがあればそれに従う。ルビがない場合は日本漢字音（漢音）で読む。

【例】
欽察→キプチャク
耀華→ヨウカ

4.2 「語形」の表記

4.2.1 和語・漢語

和語・漢語は、片仮名を用いて、現代仮名遣い（1986年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）に基づき表記する。

【例】
縮む→チヂム 上積み→ウワヅミ 先生→センセイ
思ふ→オモウ ゆゑん→ユエン てふ→チョウ

4.2.1.1

拗音・促音は、小書きに統一する。

【例】
切手→キッテ 社会→シャカイ
もつとも→モットモ かくしやく→カクシヤク

4.2.1.2

現代仮名遣いでは、長音の表記に長音符号を用いないため、「語形」の表記でも原則として長音符号を用いない。

【例】
(それ) じゃー→○ジャア ×ジャー
研究→○ケンキュウ ×ケンキュー

4.2.1.2.1

ただし、一部の語形や擬音語・擬態語、感動詞の中の長音などは、長音符号で表記する場合がある。擬音語・擬態語の長音の表記については 6.7.4.1.1 を参照のこと。

【例】
明るーい→アカルーイ
ばたあん→パターン
えーつと→エーット

4.2.2 外来語

外来語は、4.1.2 の表に示した片仮名・符号を用いて表記する。個々の語の具体的な表記については、規定 4.1.2 を参照する。

4.2.3 固有名

固有名の「語形」の表記は規定 4.2.1，4.2.2 を適用する。

5 「語彙素」の定め方及び表記

5.1 「語彙素」の定め方

5.1.1

「語形」を「語彙素」として立てる。

【例】
チヂム→チヂム【縮む】
ウワヅミ→ウワヅミ【上積み】
センセイ→センセイ【先生】

5.1.2

複数の「語形」を一つの「語彙素」にまとめる場合、以下の規定によって「語彙素」を定める。なお、「語形」が一つしかない場合でも、その「語形」が以下の規定に該当するものであれば、その規定に基づいて「語彙素」を定める。

【例】
アタクシ→ワタクシ【私】※

※「アタクシ」は、5.1.2.1.1.3 に該当する語であるので、「語形」に「アタクシ」のみが登録されている場合でも、「ワタクシ」を「語彙素」とする。

5.1.2.1 語形

語形に基づく規定は、以下のとおりである。

5.1.2.1.1 和語・漢語

和語・漢語については、以下のとおりとする。

5.1.2.1.1.1 清濁，濁音・半濁音

清濁の差異及び濁音と半濁音との差異がある場合は、以下のとおりとする。

5.1.2.1.1.1.1

濁音化・半濁音化が短単位の語頭で生じている場合、原則として濁音化・半濁音化する前の元の形を「語彙素」として立てる。

【例】
(三) カイ／(三) ガイ→カイ【階】
ハコ／(道具) バコ→ハコ【箱】

5.1.2.1.1.1.1.1

ただし、濁音化・半濁音化した形のほうが一般に用いられる等の理由から、濁音化・半濁音化した形を「語彙素」として立てる場合がある。

【例】
ガタイ【難い】（接尾辞）
ザマ【様】（接尾辞）

5.1.2.1.1.1.2

濁音化・半濁音化が短単位の語頭以外で生じている場合、「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
レンチュウ／レンジュウ→レンチュウ【連中】
ナンピト／ナンピト→ナンピト【何人】

5.1.2.1.1.2 語末長音

語末長音の短呼形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
センセ／センセイ→センセイ【先生】
ニョウボ／ニョウボウ→ニョウボウ【女房】
モ（一つ）／モウ（一つ）→モウ【もう】

5.1.2.1.1.3 子音音節・母音音節

音が弱まって母音音節となったものと元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
アタクシ／ワタクシ→ワタクシ【私】
ソイ（から）／ソレ（から）→ソレ【其れ】

5.1.2.1.1.4 撥音化の有無

撥音化した形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
アナタ／アナタ→アナタ【貴方】
ナン／ナニ→ナニ【何】

5.1.2.1.1.5 促音化の有無

促音化した形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
アッタカイ／アタタカイ→アタタカイ【暖かい】
カッテ／カツテ→カツテ【嘗て】
（～な）コッ（た）／（～な）コト（だ）→コト【事】

5.1.2.1.1.5.1

ただし、漢語は語ごとに定める。

【例】
テッカク／テキカク→テキカク【的確】
トッケン／トクケン→トッケン【特権】

5.1.2.1.1.6 撥音挿入の有無

撥音が挿入された形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
アンマリ／アマリ→アマリ【余り】
ミンナ／ミナ→ミナ【皆】
(見た) マンマ／(見た) ママ→ママ【佞】

5.1.2.1.1.7 促音の有無

促音がある形とない形とがある場合、「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
ケッシテ／ケンテ→ケッシテ【決して】
タダ／タッタ→タダ【唯】

5.1.2.1.1.8 連声の有無

連声によって生じた形と元の形とがある場合、原則として連声によって生じた形を「語彙素」とする。

【例】
アンノン／アンオン→アンノン【安穩】
カンノン／カンオン→カンノン【観音】

5.1.2.1.1.8.1

※短単位境界で連声が生じており、後続の短単位の語形が連声によって変化している場合、連声によって生じた形ではなく元の形を「語彙素」として立てる。

【例】
(三) ミ／(三) イ→イ【位】

5.1.2.1.1.9 語末以外の長音の有無

語末以外に長音がある形とない形とがある場合、「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
シイカ／シカ→シイカ【詩歌】

5.1.2.1.1.10 サ行音の音変化の有無

サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
チツチャイ／チイサイ→チイサイ【小さい】
ツァン／サン→サン【さん】

5.1.2.1.1.11 漢字音の差異

呉音・漢音・慣用音等の差異がある場合、「語彙素」として立てる語形は、①漢音、②呉音、③慣用音の優先順位で定めるのを原則とする。漢音呉音交じりの語形の優先順位は①と②の間とする。

【例】
サイシキ／サイシヨク→サイシヨク【彩色】 ※「シヨク」は漢音、「シキ」は呉音
ジュウフク／チョウフク→チョウフク【重複】 ※「チョウ」は漢音、「ジュウ」は慣用音

5.1.2.1.1.11.1

「語形」ごとに意味が異なると考えられる場合は、同一の「類」であっても別「語彙素」とする。

【例】
チカ【地下】←→ジゲ【地下】

5.1.2.1.1.12 その他

次のような「語形」の差異を同一の「語彙素」とする場合、「語彙素」は語ごとに定める。

5.1.2.1.1.12.1 母音が交替した形の差異

【例】

ミゾオチ／ミズオチ→ミゾオチ【鳩尾】
デキル／デケル→デキル【出来る】
イガラッポイ／エガラッポイ→イガラッポイ【いがらっぽい】

5.1.2.1.1.12.2 子音が交替した形の差異

【例】

ユルム／ユルプ→ユルム【緩む】
オソロシイ／オトロシイ→オソロシイ【恐ろしい】

5.1.2.1.1.12.3 サ(ザ) 行の拗音と直音が交替した形の差異

【例】

ネンジュ／ネンズ→ネンジュ【念珠】
チシャ／チサ→チシャ【萵苣】
ジュツナイ／ジツナイ→ジュツナイ【術無い】

5.1.2.1.1.12.4 特殊拍同士が交替した形の差異

【例】

クラウド／クランド→クラウド【蔵人】
シュウチュウ／シツチュウ→シュウチュウ【集注】

5.1.2.1.1.12.5 語中音節の有無の差異

【例】

一般音節：マヨイゴ／マイゴ→マイゴ【迷子】
オモシロイ／オモロイ→オモシロイ【面白い】
フミバコ／フバコ→フバコ【文箱】
母音音節：コワオモテ／コワモテ→コワモテ【強面】
アブラアゲ／アブラゲ→アブラアゲ【油揚げ】
ユイイツ／ユイツ→ユイイツ【唯一】

5.1.2.1.1.12.6 語末音節の有無の差異

【例】

ナスビ／ナス→ナス【茄子】
カケックラ／カケクラベ→カケクラベ【駆け競べ】

5.1.2.1.1.12.7 音の融合した形と元の形の差異

【例】

コサエル／コシラエル→コシラエル【拵える】
シャガレル／シワガレル→シワガレル【嘎れる】
ミョウト／メオト→メオト【夫婦】

5.1.2.1.2 外来語

外来語については、以下のとおりとする。

5.1.2.1.2.1 単数形・複数形，原型・派生形

単数形と複数形，動詞の原形と派生型などがある場合，原則として単数形，原形を「語彙素」とする。

【例】

ブック／ブックス→ブック　ビルド／ビルト→ビルド

5.1.2.1.2.1.1

複数形しか辞書の見出しにないものは複数形を「語彙素」とする。

【例】

データ／データム→データ

5.1.2.1.2.2 連母音と長音符号

連母音「アウ」「エイ」「オウ」と長音符号を用いた形がある場合は、原則として長音符号で記された形を「語彙素」とする。

【例】

メール／メール→メール

5.1.2.1.2.2.1

辞書に母音字で記された形があればそれを「語彙素」とする。

【例】

ファウル／ファール→ファウル

5.1.2.1.2.3 「シェ・ジェ」と「セ・ゼ」など

以下に記す差異がある場合、5.1.2.1.2.3.1，5.1.2.1.2.3.2 のとおり「語彙素」を定める。

「シェ・ジェ」と「セ・ゼ」
「テイ」と「チ」
「デイ・デイ」と「テ・デ」
「デイ」と「ジ」
「トゥ・ドウ」と「ツ・ズ」
「ドウ」と「ド」
「ファ・フィ・フェ・フォ」と「ハ・ヒ・ヘ・ホ」
「ツイ」と「チ」
「ウイ・ウエ・ウオ」と「ウイ・ウエ・ウオ」
「ウイ・ウエ・ウオ」と「イ・エ・オ」
「イエ」と「エ」
「クア・クイ・クエ・クオ」と「カ・キ・ケ・コ」

5.1.2.1.2.3.1

辞書の見出しに後者の仮名で記された形がある場合は、それを「語彙素」とする。

【例】

ミルクシェーキ／ミルクセーキ→ミルクセーキ
ディレンマ／ジレンマ→ジレンマ
セロファン／セロハン→セロハン
スウィート／スイート→スイート

5.1.2.1.2.3.2

それ以外は原則として前者の仮名で記された形を「語彙素」とする。

【例】

ウィーン／ウイーン→ウィーン
エリツイン／エリチン→エリツイン
ディファレンス／デファレンス→ディファレンス

5.1.2.1.2.4 「トゥ・ドウ」と「ト・ド」

語末あるいは原語における子音に先行する位置で、「トゥ」「ドウ」を用いた形と「ト」「ド」を用いた形との差異が見られる場合は、「ト」「ド」で記された形を「語彙素」とする。

【例】

カッター／カッター→カッター
ドライヴ／ドライブ→ドライブ

5.1.2.1.2.5 規定 2.1.1.2 に示した音における差異

規定 2.1.1.2 に示した音の挿入・脱落・交替の差異が見られる場合は、原則として以下の方針に従い「語彙素」を定める。上記 5.1.2.1.2.3 5.1.2.1.2.4 に相当するものはその方針に従う。

5.1.2.1.2.5.1 方針1

辞書の見出しにある形を「語彙素」とする。

5.1.2.1.2.5.2 方針2

以下の方針により「語彙素」を定めることができるものはそれに従う。

5.1.2.1.2.5.2.1 長音記号の有無

原則として長音符号を用いた形を「語彙素」とする。

【例】

コンピューター／コンピュータ→コンピューター

5.1.2.1.2.5.2.2 イ段・エ段に後続する半母音/j/の有無

原則として/j/のない形を「語彙素」とする。

【例】

イタリア／イタリア→イタリア
エアコン／エヤコン→エアコン

5.1.2.1.2.5.2.3 語末が“(i)um”のもの

語末が“(i)um”のものは、原則として「イウム」に相当する形を「語彙素」とする。

【例】

アルミニウム／アルミニューム→アルミニウム

5.1.2.1.2.5.2.4 それ以外で特に強い慣習があるもの

その慣習に従う形を「語彙素」とする。

【例】

レックス／レクス→レックス※
※lex, fix, boxのような形の場合は原音にない促音を入れる慣習があるなど。

5.1.2.1.2.5.3 原音からの挿入・脱落・交替

明らかに原音からの挿入・脱落・交替であることが分かる場合は、原音に近い仮名を「語彙素」とする。

【例】

アセンブル／アッセンブル→アセンブル

5.1.2.1.2.5.4 それ以外

それ以外は語ごとに「語彙素」を定める。

5.1.2.2 活用型

活用型が異なる活用語のうち、次に挙げるものは同じ「語彙素」とする。

5.1.2.2.1 文語活用と口語活用

文語活用の活用語と、それに対応する口語活用の活用語とがある場合、文語活用に対応する口語活用の活用語を「語彙素」とする。

【例】
す／する→スル【為る】
少なし／少ない→スクナイ【少ない】

5.1.2.2.1.1

ただし、打ち消しの助動詞「ず」「ぬ」は、文語活用の終止形を「語彙素」とする。

【例】
ず／ぬ→ズ【ず】

5.1.2.2.1.2

文語活用の活用語に対応する口語活用の活用語の実例がない場合でも、対応が想定される口語活用の活用語を「語彙素」とする。

【例】
募す→ボスル【募する】

5.1.2.2.2 サ行四（五）段活用動詞とサ行変格活用動詞

サ行四（五）段活用動詞と、その元になったサ行変格活用動詞とがある場合、サ行変格活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
愛す／愛する→アイスル【愛する】

5.1.2.2.3 ザ行上一段活用動詞とザ行変格活用動詞

ザ行上一段活用動詞と、その元になったザ行変格活用動詞とがある場合、ザ行変格活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
感じる／感ずる→カンズル【感ずる】
信じる／信ずる→シンズル【信ずる】

5.1.2.2.4 可能動詞と五段活用動詞

可能動詞と、その元になった五段活用動詞とがある場合、五段活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
書ける／書く→カク【書く】
読める／読む→ヨム【読む】

5.1.2.2.5 その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語

その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語とがある場合、元になった活用語を「語彙素」とする。

【例】
そろ／そろろう→ソウロウ【候う】

5.1.2.3 方言形

方言形と、それに形の上で対応する口語の共通語形とがある場合、共通語形を「語彙素」とする。

【例】
オトロシイ／オソロシイ→オソロシイ【恐ろしい】

5.1.2.4 固有名

固有名については以下のとおりとする。

5.1.2.4.1 日本語に由来する固有名

日本の人名・地名、日本語に由来する固有名のうち、規定 2.1.1.1 により複数の「語形」を同じ「語彙素」にまとめたものについては、規定 5.1.2.1.1 に従い「語彙素」を定める。また読み添えの「の」を含む語形と含まない語形がある場合、読み添えの「の」のない形を「語彙素」とする。

【例】

ミナモト／ミナモトノ→ミナモト

5.1.2.4.2.1 人名・地名

外国の人名・地名は、規定 2.5.3、2.6.3.3 により一つの「語形」を一つの「語彙素」とするため、「語形」がそのまま「語彙素」となる。

5.1.2.4.2.2 人名・地名以外

外来語に由来する固有名については、強い慣習がない限り、原則として規定 5.1.2.1.2 に従い「語彙素」を定める。

5.2 「語彙素読み」の表記

「語彙素読み」には、「語彙素」として立てることになった「語形」をそのまま登録する。したがって、その表記の仕方については、規定 4.2 を参照。

5.3 「語彙素」の表記

5.3.1 和語・漢語

付属語は平仮名表記とする。
自立語は原則として漢字表記とし、次に示す手順に従ってその漢字表記を定める。

5.3.1.1 手順 1

その語が『岩波国語辞典』第 6 版の見出しにあり、漢字表記されていれば、その漢字表記を「語彙素」とする。複数の漢字表記が挙げられている場合は、原則として最初に挙げられている漢字表記を「語彙素」とする。

5.3.1.2 手順 2

『岩波国語辞典』第 6 版の見出しにない語、及び『岩波国語辞典』第 6 版の見出しになっているが、語の一部又は全部が漢字表記されていない語については、『日本国語大辞典』第 2 版を参照する。
『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにあり、漢字表記されていれば、その漢字表記を「語彙素」とする。複数の漢字表記が挙げられている場合は、原則として最初に挙げられている漢字表記を「語彙素」とする。

5.3.1.3 手順 3

『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにない語、『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにあるが、漢字表記されていない語については、原則として「語彙素」を平仮名で表記する。

5.3.1.4 手順 4

常用漢字を用いて「語彙素」を表記する場合、送り仮名の付け方は次の基準に従う。常用漢字表外の漢字を用いて「語彙素」を表記する場合も、送り仮名の付け方は、次に示す基準を準用する。

5.3.1.4.1 活用のある語

送り仮名の付け方（1973年、内閣告示第 2 号・内閣訓令第 2 号）の通則 1、通則 2、通則 6 の各本則に従って送り仮名を付ける。各通則の例外、許容は採用しない。

5.3.1.4.2 活用のない語

送り仮名の付け方の通則3の本則、通則4の本則・例外及び許容、通則5の本則及び許容、通則6の本則、通則7に従って送り仮名を付ける。

5.3.2 外来語

外来語の「語彙素」には、「語彙素読み」をそのまま用いる

5.3.3 人名・地名

人名・地名の「語彙素」には、「語彙素読み」をそのまま用いる

5.3.3.1 国名

ただし、国名の「語彙素」は、規程 5.3.1 , 5.3.2 により表記を定める。

【例】

日本→ニッポン【日本】
西ドイツ→ニシドイツ【西ドイツ】
百済→クダラ【百済】

5.3.4 人名・地名以外の固有名

5.3.4.1

日本語由来の固有名の「語彙素」には、出現形をそのまま用いる

【例】

大栄→ダイエイ【大栄】
大映→ダイエイ【大映】
ダイエー→ダイエー【ダイエー】

5.3.4.1.1

複数の出現形がある場合、原則として「漢字」「仮名」「アルファベット」の順で「語彙素」の表記を定める。強い慣習があればそれに従う。

【例】

日産／ニッサン／NISSAN→ニッサン【日産】
そごう／SOGO→ソゴウ【そごう】
WOWOW／ワウワウ→ワウワウ【WOWOW】

5.3.4.2

外国語由来の固有名の「語彙素」には、「語彙素読み」をそのまま用いる。

6 細則

6.1 名詞と接辞の判定基準（1）

意味に差異がない場合、接頭辞・接尾辞ではなく、できる限り名詞・形状詞・形容詞語幹に統合するのを原則とする。

6.1.1 判定に当たっての基本的な観点

判定に当たっての基本的な観点は、以下のとおりである。

6.1.1.1 接頭辞に関するもの

6.1.1.1.1

形容詞語幹に相当する最小単位が、後接の短単位（短単位の連続体を含む。）と結合する場合、その最小単位は接頭辞とせず形容詞とする。

【例】
厚（化粧） 薄（気味） 早（合点） 深（編み笠）

6.1.1.1.2

後接する短単位（短単位の連続体を含む。）を連体修飾するものは、接頭辞とせず名詞等とする。

【例】
名詞-普通名詞-一般 初（舞台） 満（二十五歳）
名詞-普通名詞-副詞可能 他（会社）
名詞-普通名詞-形状詞可能 急（傾斜） 逆（比例）
形状詞-一般 直（輸入）

6.1.1.1.3

上記の規定には当てはまらないが、一般に1字漢語として使われ得るもの（単独用法のあるもの）は、接頭辞とせず名詞とする。

【例】
強（母音） 残（日数） 禁（帯出）

6.1.1.2 接尾辞に関するもの

6.1.1.2.1

前接する短単位（短単位の連続体を含む。）の連体修飾を受けるものは、接尾辞とせず名詞とする。

【例】
（訂正）箇所 （文字）列 （要約）文

6.1.1.2.2

上記の規定には当てはまらないが、一般に1字漢語として使われ得るもの（単独用法のあるもの）は、接尾辞とせず名詞とする。

【例】
（被写）体

6.1.2 具体的な判定の基準

具体的な判定の基準及び語例は、以下のとおりである。

6.1.2.1 名詞とするもの

6.1.2.1.1 地名と結合した以下のもの

6.1.2.1.1.1 行政区画を表すもの

【例】
（東京）府 （鹿児島）県 （ミシガン）州

6.1.2.1.1.2 上記以外

【例】
（新橋）駅 （三宅）島

6.1.2.1.2 同じ語形・意味で、単独で用いられるもの

【例】				
箇所	(不要)	箇所	(訂正)	箇所
側	(反対)	側	(連合)	側
句	(難解)	句	(名詞)	句
組	(小姓)	組	(二)	組
座	(蓮華)	座	(布団)	※座る場所
作	(鷗外)	作	※創作	
	(大豆)	作	※栽培	
札	(一円)	札		
死	(自殺)	死	(安楽)	死
式	(方程)	式	(化学)	式
	(即位)	式	(卒業)	式
	(日本)	食	(道楽)	
食	(首相)	職	(名誉)	職
職	(議員)	数	(周波)	数
数	(紀元)	節	(名詞)	節
節	(電話)	線	(紫外)	線
	(境界)	線	(海岸)	線
	他(国民)	他(地方)		
他	(口語)	体	(絶縁)	体
体	(千八百年)	代	(十三)	代(将軍)
代	(市街)	地	(水源)	地
地点	(中心)	点	(共通)	点
主	(工場)	主	(造物)	主
年	(収入)			
場	(波止)	場	(火事)	場
拍	(特殊)	拍		
番	(留守)	番		
比	(前年)	比	(圧縮)	比
便	(汽船)	便	(飛脚)	便
文	(書簡)	文	(擬古)	文
弁	(安全)	弁	(江戸)	弁
法	(国際)	法	(現行)	法
	(製造)	元	(首相)	
元	(増加)	率	(死亡)	率
率	(機械)	類	(哺乳)	類
類	(文字)	列		
列	(進化)	論	(民権)	論

6.1.2.2 接辞とするもの

6.1.2.2.1 助数詞としてのみ用いられるもの

【例】
個 本 つ 日 (か)

6.1.2.2.2 現代語において、その語形・意味では、単独で用いられることが一般的でないもの

【例】			
界	(自然)	界	(人間) 界
骨	(頭蓋)	骨	
史	(日本)	史	(古代) 史
紙	(新聞)	紙	(模造) 紙 (方眼) 紙
時	(反応)	時	(系列)
酒	(日本)	酒	(食前) 酒
心	(好奇)	心	(信仰) 心
調	(七五)	調	(万葉) 調
物	(目標)	物	(特産) 物
名	(役職)	名	(歌集) 名
録	(議事)	録	(回顧) 録

6.1.2.2.2.1

6.1.2.2.2 により接辞とされたものでも、近代文語では同じ語形・意味で単独で用いられる場合は、名詞とする。

【例】
史 (を案ずるに) …名詞
生 (が論旨を約むれば) …名詞

6.1.2.2.3 その他

【例】						
間	(学者) 間	(男女) 間	(一箇月) 間			
後	(維新) 後	(選挙) 後	(一時間) 後			
座	(歌舞伎) 座	※集団, 団体				
作	(出世) 作	(代表) 作				
質	(神経) 質	(石灰) 質				
実	実 (社会)	実 (収入)				
共	(両者) 共	(親子) 共	(二度) 共			
線	(中央) 線	(奥羽) 線	(一番) 線	※鉄道, 道路		
部	(医学) 部	(女子) 部	(財務) 部	(後方) 部		

6.1.2.2.3.1

6.1.2.2.3 により接辞とされたものでも、同じ語形・意味で単独で用いられる場合は、名詞とする。

【例】		
(その) 間	…名詞	
実 (は)	…名詞	
(男女) 共 (に)	…名詞	

6.1.2.3

以上のことから、同じ語形でも別の品詞になる場合がある。

【例】			
式:	(方程) 式	(即位) 式	…名詞
	(最新) 式		…接辞
線:	(電話) 線	(境界) 線	…名詞
	(中央) 線		…接辞
史:	(日本) 史		…接辞
	史 (を案ずれば)		…名詞
間:	(学者) 間		…接辞
	(その) 間		…名詞

6.2 名詞と接辞の判定基準 (2)

6.2.1

複合語の末尾に位置する動詞連用形 (連用形転成名詞) を名詞とするか接尾辞とするかに関する基準を以下に示す。

6.2.1.1 名詞とするもの

以下のいずれかに該当するもの。

6.2.1.1.1

元の動詞の意味用法に照らして、「～すること」という意味を持つ。

【例】						
(仲間) 入り	(原稿) 書き	(亭主) 探し	(手綱) 捌き	(理屈) 立て	(帳面) 付け	(天下) 取り
(門前) 払い	(種類) 分け					

6.2.1.1.2

名詞として単独用法を有し、それと同じ意味を持つ。

【例】			
余り	(百年)	余り	
生まれ	(明治六年)	生まれ	
帰り	(洋行)	帰り	
踊り	(阿波)	踊り	
狩り	(潮干)	狩り	(猛獣) 狩り
代わり	(昼飯)	代わり	(ランプ) 代わり
騒ぎ	(家出)	騒ぎ	(政党) 騒ぎ
育ち	(武家)	育ち	(学校) 育ち
連れ	(親子)	連れ	
抜き	(理屈)	抜き	
晴れ	(日本)	晴れ	
振る舞い	(大盤)	振る舞い	
祭り	(先祖)	祭り	
向き	(婦人)	向き	※向き不向き

6.2.1.2 接尾辞とするもの

6.2.1.1 に該当しないものを接尾辞とする。以下のような性質がある。

6.2.1.2.1

「～すること」という意味ではなく、「～する人」、「～した結果できたもの」、「～するためのもの」、「～する方法」等の意味を表す。

【例】

(人形) 使い (金魚) 売り ※～する人
 (大根) 下ろし (沢庵) 漬け (万古) 焼き ※～した結果できたもの
 (タバコ) 入れ (進退) 伺い (搜索) 願い ※～するためのもの
 (仮名) 遣い ※～する方法

6.2.1.2.2

複合語全体が状態・性質を表す修飾語になる。

【例】

(東京) 行き (一合) 入り (兄弟) 思い (ペン) 書き (意気) 込み (運河) 沿い (引き出し) 付き
 (女学校) 出 (弱い者) 泣かせ (仲間) 外れ (漢字) 交じり

6.2.2

※なお、上記の基準によると、同じ語が必ずしも同じ品詞を取ることにならない。

【例】

(外国) 行き (を企つ) …名詞
 (倫敦) 行き (の汽船) …接尾辞

6.3 動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準

動詞の連用形とするか動詞転成名詞とするかについての判定基準を次に示す。

6.3.1 単独で用いられるもの

6.3.1.1 名詞とするもの

6.3.1.1.1 述語の格

述語の格となる場合は、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】

固より腕に【覺】があるといふでもなし
 御【疑】の掛つたる素性の者なるに
 一時の【間に合せ】をなしつつあるに非ずや
 二三の俳優に【動き】を生じたれど

6.3.1.1.2 連体修飾を受ける

連体修飾を受ける場合は、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】
小鳥らのゆるき【さへづり】
物云ひ静かなる【生れ付】なり
望みなき【戀ひ】故
扱々殊勝なる御【心掛】なり
再三のお【召】なりしが、

6.3.1.1.3 動詞と認定できないもの

短単位規定上、動詞と認定できないものは、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】
命乞い（×命乞う） 目通り（×目通る） 身動き（×身動く）

6.3.1.1.4 連体修飾「～の」

「～の」の形で連体修飾する場合は、名詞とする。

【例】
所謂【差支（さしつかえ）】の発端なり
【貸越（かしこし）】の保証人を相手取るには
【かくし】の中より小き瓶と注射器とをとりいだしぬ

6.3.1.2 動詞連用形とするもの

6.3.1.2.1 「～もせず」「～はせず」など

「～もせず」「～はせず」など、係助詞または副助詞＋サ変動詞「す」の後続する形で用いられる場合は、動詞連用形とする。

【例】
さして【質し】もせざりしに
此不自由を【嘆き】もせず
氣でも【狂ひ】はせぬか
公使館よりの手つづきだに事なく濟みたらましかば、何事にもあれ、【教へ】もし【傳へ】もせむ

6.3.1.2.2 敬語形式「御～なさる」「御～申す」など

「御～なさる」「御～になる」「御～あり」「御～申す」「御～する」などの尊敬・謙譲の動詞を作る形で用いられる場合は、動詞連用形とする。

【例】
安心してお【出し】なさるべし
根本をお【忘れ】にならざる様希望に堪へざる所に候
賑々しく御【暮し】あるやう心底より祈り申候。
盗みし品は御【返し】申さん
遺憾乍ら御【斷わり】するの外なし

6.3.1.2.3 敬語形式「御～なり」「御～の」「御～か」

「御～なり」の形で「御～である」「御～だ」の意の動作の尊敬表現となる場合、およびその派生の形である「御～の」（連体修飾）、「御～か」（疑問）などの形をとる場合は、動詞連用形とする。

【例】
肉類は殊に御【好み】なれども
皆御【存じ】なるべし
斯く御【氣遣】の御様子は如何なる仔細に候や
既に御【氣附】かとも存候得共
汁の鹽梅は辛きを御【好み】か

6.3.1.2.3.1

ただし、尊敬・謙譲の意が薄れ慣用的な表現となっている場合は、名詞とする。

【例】
お【定まり】の運動に因て
それでお【仕舞ひ】

6.3.1.2.4 命令表現形式「御～」

「御～」の形で命令表現となる場合は、動詞連用形とする。

【例】
早くお【いで】、
此にお【座り】。

6.3.1.2.5 「～に行く」「～に来る」など

「～に行く」「～に来る」などの形で用いられるものは、動詞連用形とする。

【例】
わがドレスデンなる親族【訪ね】にゆきしは人々も知りたり
【汲み】に来て一人淋しき清水哉

6.3.2 合成名詞の先頭又は中間に位置するもの

6.3.2.1.1 動詞と認定できないもの

短単位規定上、動詞と認定できないものは、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】
【馬貰ひ】演説 （×馬貰ふ）
【利廻り】関係 （×利廻る）

6.3.2.1.2 送り仮名がないもの

送り仮名のないものは、名詞とする。

【例】
【貸附】金 【切抜】細工 【寄合】政治 【焼】團子 御【雇】外国人

6.3.2.1.3 後続名詞の格に相当

後続の名詞又は名詞性接尾辞の格に相当する場合は、名詞とする。

【例】
【立入り】禁止 ※「立入りを禁止」の関係

6.3.2.2 動詞連用形とするもの

+++3264+++に該当しないものは、動詞連用形とする。
これは、「～する人」「～する（ための）もの」「～する（ための）場所」などの意で後続の名詞又は名詞性接尾辞にかかり、その意味を限定する働きを持つ。

【例】
【空き】具合 【合せ】細工 【賣込み】問屋 【抱へ】運轉手 【貸し】座敷 【食い】意地 【話し】相手
【引渡し】手續 【拭き】掃除

6.3.2.2.1 接尾的要素の体言化した接尾辞が後続

「要注意語」の「接尾的要素」の体言化した接尾辞が後続する場合、動詞連用形とする。

【例】
【書き】 始め 【書き】 終わり 【歩き】 過ぎ 【行き】 付け

6.4 人名の扱い

6.4.1 人名の範囲

6.4.1.1 実在の個人名

実在の個人の名。芸名、雅号、しこ名、院号のうち、個人の呼称として広く一般に知られているものを含む。

【例】
福沢諭吉 李鴻章 ジュールベルヌ 空海 千代大海 三遊亭楽太郎 MEGUMI いっこく堂

6.4.1.2 通称・仮名

通称や仮名、一般人のペンネームやハンドルネームなどのうち、形式や語感から人名とみなし得るもの

【例】
ほりえもん A子 ×太郎 橋龍 さっちゃん 播磨屋菊五郎

6.4.1.2.1

それ以外は人名とはみなさない。

【例】
赤シャツ うらなり 饅頭屋 馬鹿旦那

6.4.1.3 創作中の名

創作中の固有名のうち人間（に類するもの）の名

【例】
ルーク・スカイウォーカー 野比のび太 怪物太郎

6.4.1.3.1

それ以外は人名とはみなさない。

【例】
スヌーピー キティちゃん

6.4.1.4 グループ名

グループ名のうち、構成員の名前（芸名を含む）のみで構成されるもの

【例】
宮川大助・花子 太平サブローシロー おぼんこぼん

6.4.1.4.1

それ以外は人名とはみなさない。

【例】
ダウンタウン 雨上がり決死隊

6.4.1.4.2

複数の人物の名それぞれを略した要素（1字で構成される名の場合はその全体）が結合体を構成する場合、人名ではなく「名詞-固有名詞-一般」とする。

【例】
若貴（兄弟） 鳩菅（体制） 角福（戦争）

6.4.1.5 神仏名

6.4.1.5.1

神仏名のうち以下のもの

6.4.1.5.1.1

日本の神話の神

【例】
天照大神 須佐之男命 イザナギ

6.4.1.5.1.2

ギリシヤ・ローマ神話の神

【例】
ビーナス ヘラ アテナ

6.4.1.5.1.3

キリスト教関連の天使

【例】
ミカエル ラファエロ ガブリエル

6.4.1.5.1.4

人間由来の神仏名

【例】
シツタルタ イエス

6.4.1.5.2

上記以外は人名とはみなさない。

【例】
ラー シヴァ オーディーン 阿弥陀如来

6.4.1.6 敬称・尊称

敬称や尊称などのうち、特定の一個人を指すもの

【例】
仏陀 キリスト

6.4.1.7 補則

6.4.1.7.1

人名に由来する行政区画名・地形名は人名としない。

【例】
豊田市 足利市 ホーチミン市 マゼラン海峡

6.4.1.7.2

人名に由来する組織の名称は原則として人名としない。

【例】

トヨタ自動車株式会社 松下電器産業株式会社

6.4.1.7.2.1

ただし、姓名の構成を取るなど形式から明らかに人名であることが分かるものは人名とする。

【例】

マツモトキヨシ

6.4.1.7.3

人名に由来する動植物等の学名や、普通名詞化が強く進んでいるものは、人名とはせず「名詞-普通名詞-一般」とする。

【例】

ガーベラ 地図帳アトラス

6.4.1.7.3.1

※上記以外は原則として由来に応じて人名とみなす。

【例】

ハンセン病 ガウス分布

6.4.1.7.4

名前が土地や職業などに由来する場合であっても、姓や名に相当するものであれば人名とする。

【例】

レオナルド・ダ・ビンチ……「ビンチ」は村の名
ムハンマド・アリー・ハッダード……「ハッダード」は鍛冶屋の意

6.4.1.7.5

爵位が領土（地名）に由来することもあるが、当該の地名と関連する爵位かどうかにかかわらず、極めて有名な地名である、あるいは前後の文脈から明らかに地名と判断できる場合のみ地名とし、それ以外は一律に人名とする。

【例】

〔地名〕 エジンバラ公 ブランデンブルク辺境伯領
〔人名〕 アーサー公 アルバート伯

6.4.1.7.6

女房名で、地位に由来するものは人名としない。

【例】

小式部内侍

6.4.1.7.6.1

ただし、現代でも人名として通用しているものは人名とする。

【例】

清少納言 紫式部

6.4.1.7.7

女房名は、地名由来のものであっても人名とする。

【例】
伊勢

6.4.2 品詞の定め方

6.4.2.1.1

日本・中国・韓国の人名のうち、姓と名をそれぞれ「名詞-固有名詞-人名-姓」（以下「人名-姓」）、「名詞-固有名詞-人名-名」（以下「人名-名」）とする。

【例】
| 福沢 (人名-姓) | 諭吉 (人名-名) | | 李 (人名-姓) | 鴻章 (人名-名) | | キム (人名-姓) | イルソン (人名-名) |

6.4.2.1.2

姓名が特定できない場合、及び最小単位認定規程の規定 第1章 第1 7.6 により姓名全体をまとめて1最小単位と認定した中国の人名は「名詞-固有名詞-人名-一般」（以下「人名-一般」）とする。

【例】
| 阿国 (人名-一般) | | 曹操 (人名-一般) |

6.4.2.1.3

最小単位認定規程の規定 第1章 第1 7.10.2.1 により「ヒメ」を含めて1最小単位と認定した人名は、「人名-一般」とする。

【例】
| 濃姫 (人名-一般) | | 檜皮姫 (人名-一般) |

6.4.2.1.4

姓と名との間にある読み添えの「の」は「助詞-格助詞」とする。

【例】
| 藤原 (人名-姓) | の (助詞-格助詞) | 道長 (人名-名) |

6.4.2.2 日本・中国・韓国以外の人名

6.4.2.2.1

日本・中国・韓国以外の人名、及び人名と認定された神仏名は「人名-一般」とする。

【例】
ジュール (人名-一般)	ベルヌ (人名-一般)			
レオナルド (人名-一般)	・ (補助記号-一般)	ダ=ビンチ (人名-一般)		
天照 (人名-一般)	大神 (普通名詞)		須佐之男 (人名-一般)	命 (普通名詞)
イザナギ (人名-一般)		コノハナサクヤヒメ (人名-一般)		
ビーナス (人名-一般)		ミカエル (人名-一般)		

6.4.2.2.2

人名中の冠詞や前置詞などは「名詞-普通名詞-一般」（以下「普通名詞」）とする。

【例】
ジョン (人名-一般)	・ (補助記号-一般)	フォン (普通名詞)	・ (補助記号-一般)	ノイマン (人名-一般)
フェルディナン (人名-一般)	・ (補助記号-一般)	ド (普通名詞)	・ (補助記号-一般)	ソシユール (人名-一般)
カミーユ (人名-一般)	・ (補助記号-一般)	サン (普通名詞)	= (補助記号-一般)	サーンズ (人名-一般)

6.4.2.3 号・しこ名・通称・芸名

院号・雅号・戒名・しこ名・通称・芸名については、実在の人名との類似性や構成などから「人名-姓」「人名-名」と認定できるものはそのように判定し、それ以外は「人名-一般」とする。

【例】

円融 (人名-一般)		院 (普通名詞)			後醍醐 (人名-一般)		帝 (普通名詞)	
十返舎 (人名-姓)		一九 (人名-名)			漱石 (人名-名)			
空海 (人名-一般)			一休 (人名-一般)		宗純 (人名-一般)			
千代大海 (人名-一般)			ほりえもん (人名-一般)		橋龍 (人名-一般)			
さっ (人名-一般)		ちゃん (接尾辞)						
三遊亭 (人名-姓)		楽太郎 (人名-名)			明石家 (人名-姓)		さんま (人名-名)	
いっこく堂 (人名-一般)			MEGUMI (人名-名)					

6.4.2.3.1

明らかに普通名詞等の一般語とみなせるものは人名とはせず普通名詞とする。

【例】

天狗 (普通名詞)		生 (接尾辞)			無名 (普通名詞)		氏 (接尾辞)	
つぶやき (普通名詞)		シロー (人名-名)			猫 (普通名詞)		ひろし (人名-名)	
太郎 (人名-名)							怪物 (普通名詞)	

6.4.2.4 グループ名

6.4.1.4 により人名とするグループ名は、その構成から「人名-姓」「人名-名」「人名-一般」を認定する。

【例】

宮川 (人名-姓)		大助 (人名-名)		・ (補助記号)		花子 (人名-名)			太平 (人名-姓)		サブロー (人名-名)		シロー (人名-名)			おぼん (人名-一般)		こぼん (人名-一般)	
-----------	--	-----------	--	----------	--	-----------	--	--	-----------	--	-------------	--	------------	--	--	-------------	--	-------------	--

6.4.2.5 敬称を表す類概念

人名に付属する敬称等を表す類概念には「固有名詞-人名」以外の適切な品詞を認定する。

【例】

円融 (人名-一般)		院 (普通名詞)			後醍醐 (人名-一般)		帝 (普通名詞)			
ルイ (人名-一般)		十 (名詞-数詞)		四 (名詞-数詞)		世 (接尾辞-名詞的-一般)				
井上 (人名-姓)		伯 (普通名詞)			蘇峰 (人名-名)		生 (接尾辞-名詞的-一般)			
大 (接頭辞)		バッハ (人名-一般)								

6.5 固有名扱い

ここでは、固有名のうち、人名・地名以外の扱いについて述べる。品詞としては「名詞-固有名詞-一般」が付与される範囲に相当する。

なお、例の中で品詞について言及する場合、当該短単位の後には丸括弧を付して記す。その際、品詞名は「固有一般」「普通名詞」「人名-姓」など類推可能な範囲で略記する。また、概念的な固有名（人名・地名以外）を指す場合は「固有名」、品詞名を指す場合は「名詞-固有名詞-一般」と記す。

6.5.1 「名詞-固有名詞-一般」の判定基準

6.5.1.1 方針

原則として、「短単位」の規程に従い短単位とその品詞を認定した上で、「名詞-固有名詞-一般」以外の品詞で説明できない単位に対して本品詞を付与する。

【例】

ソニー (固有一般)		株式 (普通名詞)		会社 (普通名詞)				
国立 (普通名詞)		国語 (普通名詞)		研究 (普通名詞)		所 (接尾辞)		
ポカリ (固有一般)		スウェット (普通名詞)			東京 (地名)		大学 (普通名詞)	

6.5.1.2 基準

6.5.1.2.1

『日本国語大辞典』『大辞林』（以下「辞書」と略記する。）に立項されていないもの、あるいは人名・地名に該当しないものを、「名詞-固有名詞-一般」とする。

【例】

ソニー（固有一般） | 株式（普通名詞） | 会社（普通名詞） |
興福（固有一般） | 寺（接尾辞） |
東京（地名） | 三菱（固有一般） | 銀行（普通名詞） |
山本（人名-姓） | 安英（人名-名） | の（助詞） | 会（普通名詞） |

6.5.1.2.1.1

ただし、辞書に立項されていないものであっても、個物等に与えられる固有の名（固有名）ではなく、同じ種類に属する個物の全てに共通する名（普通名）に相当するものは、「名詞-固有名詞-一般」としない。

【例】

フオドシスニセス（普通名詞） 〈創作上の花の種類の名〉

6.5.1.2.2

辞書に立項されているが、普通名ではなく固有名であり、かつその意味でのみ辞書に記載されているものは、「名詞-固有名詞-一般」とする。

【例】

夢殿〈特定建造物名〉 今鏡〈特定書物名〉

6.5.1.2.3

組織の名を表す固有名に含まれる人名は、6.5.3.1 に記す事例に該当しない限りにおいて例外的に「名詞-固有名詞-一般」とする。

※ここでいう「組織」とは、いわゆる法人組織・国際組織・行政機関・公共機関、あるいはそれに準ずる規模・知名度の組織（大型チェーン店の店舗名など）を指す。「～を応援する会」など公共性・一般性の低いもの、「～委員会」など臨時性の強いもの、「（～大学～）学部」のように上位組織への従属度の高いもの、「道路族」のように実態を持たないもの、「～公園」「～劇場」のように施設・場としての性質が強いもの、「～劇団」「～球団」「～探険隊」のようなパフォーマンス集団や個人の活動集団は、「組織」とみなさない。

【例】

| 本田（固有一般） | 技研 | 工業 |

6.5.1.2.4

6.5.1.2.4.1

以下に該当するものは、辞書の立項の有無にかかわらず、「名詞-固有名詞-一般」とする。

6.5.1.2.4.1.1

元号

【例】

神亀 昭和 明治 安政 建元

6.5.1.2.4.1.2

生物（相当）の個体の名（ペット・キャラクター・人名と認定しない神などの名）

【例】

シロ オグリキャップ ピカチュウ 阿修羅

6.5.1.2.4.2

上記 6.5.1.2.4.1.1 , 6.5.1.2.4.1.2 に該当するものが辞書に普通名として立項されている場合は、別の語彙素を立てる。

【例】
神亀（固有一般） ↔ 神亀（普通名詞）
シロ（固有一般） ↔ 白（普通名詞）

6.5.1.2.5 固有名略

固有名を略した語については、組織の名、あるいは複数の人物の名を表す場合のみ「名詞-固有名詞-一般」とする。組織の範囲は規定 6.5.1.2.3 に従う。略語のうちローマ字を並べた略語については、6.6 「ローマ字略語の扱い」も参照。

【例】
九大 全日空 IBM 若貴 カトケン

6.5.1.2.5.1

上記以外の略語は普通名詞の扱いとする。

【例】
花博 米審 AMeDAS プレステ

6.5.2 具体例

上述のとおり、「名詞-固有名詞-一般」か否かの判断は、原則として辞書によりつつも、適宜、固有名か普通名詞かの判断が求められる。しかし両者の境界は明確ではなく判断に迷うものも少なくない。そこで、以下に固有名とみなすもの、普通名とみなすものの具体例を示す。

6.5.2.1 固有名とみなすものの例

固有名とみなすものの例を示す。6.5.1 に記したように、ここに示すものすべてに「名詞-固有名詞-一般」という品詞が付与されるわけではなく、「名詞-固有名詞-一般」以外の品詞が付与されることもある。

6.5.2.1.1 元号

【例】
神亀 昭和 明治 安政 建元

6.5.2.1.2 生物（相当）の個体の名（ペット・キャラクター・人名と認定しない神などの名）

【例】
シロ オグリキャップ ピカチュウ 阿弥陀

6.5.2.1.3 特定の集団の名

6.5.2.1.3.1 組織（法人組織・国際組織・行政機関・公共機関など）の名

【例】
| 住友（固有一般） | 商事 | | 総務（普通名詞） | 省 |
NTT（固有一般） | UC（固有一般） | LA |

6.5.2.1.3.2 興行集団・個人の活動集団などの名

【例】
| コンサドレー（固有一般） | 札幌 | スマップ（固有一般） アルカイダ（固有一般）
| 書真（固有一般） | 会 | | あげぼの（普通名詞） | 会 |

6.5.2.1.3.3 民族名

【例】
アイヌ（固有一般） | 大和（地名一般） | 民族 | 壮族（固有一般）

6.5.2.1.4 特定の製品の名

6.5.2.1.4.1 施設・建造物などの名

【例】

| 法隆 (固有一般) | 寺 | | 金閣 (普通名詞) | 寺 |
| ルーブル (固有一般) | 美術 | 館 | | 咸臨 (固有一般) | 丸 |

6.5.2.1.4.2 商品・ブランドの名

【例】

アクオス (固有一般) | ボカリ (固有一般) | スエット (普通名詞) |
ポッキー (固有一般) | レクサス (固有一般)
| きのこ (普通名詞) | の (助詞) | 山 (普通名詞) |

6.5.2.1.4.3 芸術作品名・新聞雑誌名・番組名

【例】

| 戦藻 (固有一般) | 録 | | 礼記 (固有一般)
| ヴォーグ (普通名詞) | 中央 (普通名詞) | 公論 (普通名詞) |
| 報政 (固有一般) | 新聞 | | アド街ック (固有一般) | 天国 |

6.5.2.1.4.4 言語名 (人工言語やプログラミング言語を含む。)

【例】

| 日本 (地名-国) | 語 | | アプリニャ (固有名詞) | 語 |
| エスペラント (固有名詞) | 語 | | Perl (固有名詞)

6.5.2.1.5 その他

6.5.2.1.5.1 王朝名

【例】

| ムワッヒド (固有名詞) | 朝 | | 李朝 (固有名詞) | | アケメネス (人名一般) | 朝 |

6.5.2.1.5.2 流派・宗派・家系名

【例】

| ハナフイー (固有名詞) | 派 | | 太捨 (固有名詞) | 流 | | 曹洞 (固有名詞) | 宗 |
| 式家 (固有名詞) | | 徳川 (人名-姓) | 家 |

6.5.2.1.5.3 文明・文化名

【例】

| サボテカ (固有名詞) | 文明 | | エジプト (地名-国) | 文明 |

6.5.2.1.5.4 天体名 (恒星・惑星・衛星・星雲などの名)

【例】

火星 (固有名詞) | ポラリス (固有名詞)

6.5.2.1.5.5 山号 (実存の山の名は地名の扱い)

【例】

| 東叡 (固有名詞) | 山 | | 金龍 (普通名詞) | 山 |

6.5.2.1.5.6 複数の人物の名それぞれを略した要素 (1字で構成される名の場合はその全体) で結合体を構成するもの

【例】

| 若貴 (固有名詞) | 兄弟 | | アスイザ (固有名詞)

6.5.2.2 普通名とみなすものの例

普通名とみなすもののうち、固有名と迷いやすいものを以下に挙げる。

6.5.2.2.1 思想・制度・学問などの体系名

【例】
儒教 マキャベリズム 哲学

6.5.2.2.1.1

※思想体系としての宗教は普通名の扱いとする。「オウム真理教」など集団としての性格の強いものは固有名の扱いとする。宗派も教義等の違いから生じる集団と考え固有名とする。

6.5.2.2.2 農作物のブランド名として用いられているもののうち、品種名に相当するもの

【例】
コシヒカリ | アケ | ノ | ホシ | とちおとめ

6.5.2.2.3 人種名

【例】
コーカソイド モンゴロイド ネグロイド

6.5.2.2.3.1

※人種名は分類学上の名と考え普通名とし、民族名は集団の名と考え固有名とする。

6.5.2.2.4 手法名

【例】
| 雲斎 | 織 | ハイポニカ

6.5.2.2.5 イベントの名称のうち、伝統的な年中行事など著名なもの

【例】
ハロウィーン クリスマス オリンピック

6.5.2.2.6 規定 6.5.2.1.4.2 に該当するもののうち、普通名詞化がかなり進んでいると判断されるもの

【例】
ジープ セロテープ ニクロム テトロン

6.5.3 補則

6.5.3.1 組織名における人名の扱いについて

規定 6.5.1.2.3 に記すとおり、組織の名に含まれる人名は例外的に「名詞-固有名詞-一般」とする。これは、組織の名が人名に由来するか否か判断の付かない事例が少なからずあるためである。しかし以下に示す場合は形式や常識の範囲で人名に由来することが明らかであると考え、この場合に限り人名と認定する。

6.5.3.1.1 「姓+名」「名+姓」「セント+聖人名」など、語構成から明らかに人名と判断できる組織の名

【例】
| 安藤 (人名-姓) | 忠雄 (人名-名) | 建築 | 研究 | 所 |
| セント | トマス (人名-一般) | 大学 |

6.5.3.1.2 著名なクリエイターの名を冠した組織の名

【例】
| アルマーニ (人名-一般) | 社 |

6.5.3.1.3 一般的な神仏名を冠した組織の名

【例】

| ビーナス (人名一般) | 株式 | 会社 |

6.5.3.2 薬品名について

薬品名については、製品名(固有名)か成分名(普通名)かの区別が難しいものが多い。そこで次の基準に基づき固有名か普通名かを判断する。

6.5.3.2.1 固有名

市販薬のうち、一般によく知られているもの、あるいは明らかに成分名とは考えられない名称のもの

【例】

ガスピタン バファリン マキロン ウナコーワ

6.5.3.2.2 普通名

上記以外の市販薬, 処方薬, 成分名

【例】

バリウム ロイナーゼ ロイコマイシン セレスタミン

6.5.3.3 仮想生物の名について

仮想生物の名については、種の名なのか個体の名なのか判断が付かないものも多い。そこで、常識・文脈から、明らかに種の名と分かるもののみ普通名とし、それ以外は固有名とする。

【例】

人魚 〈常識の範囲で種の名と分かるため普通名〉
ヌアーク (の群) 〈文脈から種の名と分かるため普通名〉
ゴジラ 〈種の名か個体の名か分からないため固有名〉

6.6 ローマ字略語の扱い

以下、ローマ字を並べた略語(以下「ローマ字略語」と称す。)の扱いについて述べる。

6.6.1 ローマ字略語の範囲

6.6.1.1 ローマ字略語とみなすもの

以下に該当するものは、本細則の対象とする。

6.6.1.1.1 ローマ字で表記された複数の単語列の一部を組み合わせて作成した語

【例】

C D 〈CompactDisc〉
N H K 〈NihonHousouKyoukai〉
N Y 〈NewYork〉
A S A T 〈Anti-SATellite〉

6.6.1.1.2 1単語中の連続しない文字を組み合わせて作成した語

【例】

V S 〈VerSus〉
J P N 〈JaPaN〉

6.6.1.1.3 上記 6.6.1.1.1, 6.6.1.1.2 に該当する語の読みを仮名で記したもの

【例】

ジス ナスダック

6.6.1.2 ローマ字略語とみなさないもの

以下に該当するものは、本細則の対象外とする。

6.6.1.2.1

6.6.1.1 に該当するものであっても、『リーダーズ英和辞典』に立項されており、かつ元の語の発音が示されているもの。これらは元の語の一書字形とみなす。

【例】

Mr. [ミスター]

6.6.1.2.2

名前の由来が 6.6.1.1 に該当するものであっても、略した形が正式名の場合。

【例】

DOCOMO [ドコモ] SUICA [スイカ]

6.6.1.2.3

ローマ字で略記された単位を表す助数詞のうち、慣習的に元の語と同じ読みを取るもの。これらは元の語の一書字形とみなす。

【例】

k l [キロリットル] Hz [ヘルツ] kcal [キロカロリー]

6.6.1.2.3.1

慣習的に元の語と同じ読みを取らないものは、本細則の対象とする。

【例】

p p m [ピーピーエム] (PartsPerMillion)

6.6.1.2.4

人名の一部又は全部をローマ字で略記したもの。個々のローマ字を分割した上で、ローマ字は記号（品詞「記号-文字」）として扱う。

【例】

| P | . | J | . | ブラウン | | M | . | K | . |

6.6.2 同語異語判別

6.6.2.1 同一「語形」・別「語形」の判定

6.6.2.1.1 同一の「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ任意の二つの出現形は、指すものが同じか否かにかかわらず、同じ「語形」とする。

6.6.2.1.1.1 読みに関係しない記号の有無の差異

【例】

AD/A. D.

6.6.2.1.1.2 大文字・小文字の差異

【例】

CA/C a / c a

6.6.2.1.1.3 ローマ字表記と仮名表記の差異

【例】

AMeDAS / アメダス

6.6.2.1.1.4 同語異語判別規程の規定 1.1.1.2 に記す範囲の差異

【例】

ビイエス / ビーエス / BS
ミューズ / ミュウズ / MUSE

6.6.2.1.2 異なる「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ任意の二つの出現形は、異なる「語形」とする。

6.6.2.1.2.1 英語式のローマ字読みとそれ以外のローマ字読みの差異

【例】

ケージービー ↔ カーゲーベー

6.6.2.1.2.2 同語異語判別規程の規定 1.1.2.2 に記す範囲の差異

【例】

トーフル ↔ トフル エーパック ↔ エイパック エヌエイチケー ↔ エヌエッチケー

6.6.2.1.2.3 ローマ字読みとそれ以外の差異

【例】

ジェーエーエル ↔ ジャル

6.6.2.1.2.4 略語と略語以外

【例】

POP (略語) ↔ POP (英単語)

6.6.2.1.2.5 語種が異なる場合

【例】

ICU (大学名・語種「固有名」) ↔ ICU (集中治療室・語種「記号」)

6.6.2.2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定

6.6.2.1.2 に示す異なる「語形」とする出現形のうち、6.6.2.1.2.1、6.6.2.1.2.2 に該当する差異を持つ「語形」を同じ「語彙素」とする。6.6.2.1.2.3、6.6.2.1.2.4、6.6.2.1.2.5 については異なる「語彙素」とする。

6.6.2.3 「語形」の定め方及び表記

6.6.2.3.1.1

ローマ字で記された出現形（「NHK」「TOEFL」など）については、次に示す 6.6.2.3.1.1.1 から 6.6.2.3.1.1.4 に従い「語形」を定める。片仮名で記された出現形（「エヌエッチケー」「トーフル」など）については、同語異語判別規程の規定 4.1.2 に従い「語形」を定める。

6.6.2.3.1.1.1

『NHKことばのハンドブック』第2版第4章「外国語略語集」、『大辞林』第2版（以下、「資料」とする。）に従い「語形」を定める。

6.6.2.3.1.1.1.1

見出しに読みを定めている場合、それに従う。二つの資料の記述に矛盾がある場合は前者による。一つの資料に複数の読みが併記される場合、最初に挙げられている読みに従う。

【例】

A P E C → エーペック × エーピーイーシー

6.6.2.3.1.1.2

見出しで読みを定めていない場合、ローマ字を英語式に読む形を「語形」とする。

【例】

I S O → アイエスオー × イソ
K G B → ケーゲービー × カーゲーバー

6.6.2.3.1.1.2

資料に立項されていないが、慣習性の強い読みがある場合、あるいは「ユーレカ (EUREKA)」のように文脈から語の形が特定できる場合は、それに従い「語形」を定める。

【例】

A T O K → エートック

6.6.2.3.1.1.3

長い綴り字の単語と同形の場合、その単語の読みに従い「語形」を定めてもよい。

【例】

S T R A I G H T → ストレート

6.6.2.3.1.1.4

上記以外は、原則としてローマ字を英語式に読む形を「語形」とする。

【例】

R D B M S → アールディービーエムエス

6.6.2.3.1.2

なおローマ字の英語式の読み方は次に従う。

A : エー B : ビー C : シー D : ディー E : イー F : エフ G : ジー H : エイチ I : アイ J : ジェー
K : ケー L : エル M : エム N : エヌ O : オー P : ピー Q : キュー R : アール S : エス T :
ティー U : ユー V : ブイ W : ダブリュー X : エックス Y : ワイ Z : ゼット

6.6.2.3.2 「語形」の表記

ローマ字略語の「語形」の表記は、同語異語判別規程の規定 4.2.2 を適用する。

6.6.2.4 「語彙素」の定め方及び表記

6.6.2.4.1 「語彙素」の定め方

6.6.2.4.1.1

英語式のローマ字読みとそれ以外のローマ字読みの差異がある場合、英語式の読みを「語彙素」とする。

【例】

ケーゲービー／カーゲーバー → K G B 【ケーゲービー】

6.6.2.4.1.2

同語異語判別規程の規定 1.1.2.2 に記す範囲の差異がある場合、同規程の規定 5.1.2.1.2 に従い「語彙素」を定める。ローマ字の英語式の読みの差異は、本細則の規定 6.6.2.3 に記す形を「語彙素」とする。

【例】
トーフル／トフル→TOEFL【トーフル】
エヌエイチケー／エヌエッチケー→NHK【エヌエイチケー】

6.6.2.4.2 「語彙素」の表記

6.6.2.4.2.1

ローマ字を英語式に読む場合、「語彙素」は大文字のローマ字表記とする。

6.6.2.4.2.2

上記以外の場合、原則として「語彙素」は大文字のローマ字表記とするが、強い慣習がある場合や、略語か正式名かの判断が付かない場合は、「語彙素」を片仮名表記としてよい。

6.6.2.4.2.3

記号類については、「AT&T【エーティーアンドティー】」など読みを持つものを除き、「語彙素」に記さない。

6.6.3 ローマ字略語の語種・品詞

6.6.1 の方針で本細則の対象となるローマ字略語は、次に記す語種・品詞の組合せのいずれかに該当する。

6.6.3.1 語種「記号」、かつ品詞「名詞-普通名詞-助数詞可能」

【例】
p p m c c b p s

6.6.3.2 語種「固有名」、かつ品詞「名詞-固有名詞-地名-国」

【例】
J P N U S A U K

6.6.3.3 語種「固有名」、かつ品詞「名詞-固有名詞-一般」

以下のいずれかに該当するものを「名詞-固有名詞-一般」とする。

6.6.3.3.1 組織（法人組織・国際組織・行政機関・公共機関、あるいはそれに準ずる規模・知名度の組織）の名をローマ字で略したもの。

組織の詳細については同語異語判別規程の 6.5 「固有名の扱い」の 6.5.1.2.3 も参照。

【例】
N H K M I T I E E E

6.6.3.3.2 組織名以外の固有名のうち、略語か正式名かの判断が付かず、かつローマ字読み以外の慣習的な読みを取るもの

【例】
N A I S（ナイス）

6.6.3.4 語種「記号」、かつ品詞「名詞-普通名詞」

以下のいずれかに該当するものを「名詞-普通名詞」とする。

6.6.3.4.1 上記 6.6.3.1 から 6.6.3.3 以外で、ローマ字読みのもの。国名以外の地名の略語も含む。

【例】
FMV a u CD BGM NY C a

6.6.3.4.2 上記 6.6.3.1 から 6.6.3.3 以外で、正式名ではなく確実に略語と判断できるもの

【例】
APEC NASDAQ JIS AIDS エイズ

6.7 擬音語・擬態語の扱い

ここでは擬音語・擬態語の扱いについて、一般の単位認定規定とは別に規定する。

6.7.1 擬音語・擬態語の単位認定

擬音語・擬態語の最小単位・及び短単位について、次のように定める。

6.7.1.1

擬音語・擬態語は、原則的にその1回の描写を1最小単位とし、それを他と結合させず単独で1短単位とする。以下、1回の描写の典型例を挙げる。

6.7.1.1.1 動物などの鳴き声の描写

【例】
|こけこっこー| |ツチクテムシクテクチシブーイ| |にゃおーん| |わん|

6.7.1.1.2 同一の1音で構成される擬音語・擬態語

6.7.1.1.2.1 1音（末尾に長音・促音が付加された場合を含む）

【例】
|が| |がっ| |がー| |ば| |ばっ| |ばあ|

6.7.1.1.2.2 連鎖（末尾に長音・促音が付加された場合を含む）

【例】
|がが| |ががっ| |ががががー| |ばば| |ばばばっ| |ばばばー|

6.7.1.1.2.3 同一の2音の間に長音・促音が挿入されたもの

【例】
|がっが| |ばっば| |がーが|

6.7.1.1.3 擬音語・擬態語一般

6.7.1.1.3.1 2音で構成されるもの

【例】
|がく| |ぐにゃ| |ずば| |がつ| |ざぶ| |どん|

6.7.1.1.3.2 上記 6.7.1.1.3.1 に派生要素※が付いたもの

※派生要素の種類
《語末》「ーっ」「ーり」「ーん」「ーー」
《語中》「ーっー」「ーんー」「ーーー」

【例】

がくっ	がくり	がくん	がっく	がっくり	がっくん	がくー	がくーん
ぐにゃり	ぐんにゃり	ぐにゃー					
ずばっ	ずばん	ずばーん					
がつん	がつつん	がつつーん					
ざぶっ	ざぶん	ざんぶ	ざぶー				
どんっ	どーん						

6.7.1.1.3.3 上記 6.7.1.1.3.1 , 6.7.1.1.3.2 に当たるものの中で同一の1音が連鎖したもの

【例】

ずばばば	ずばばー	ずばばっ	ずばばばばん
どどーん	どどどどん		
がががつん			

6.7.1.2

擬音語・擬態語一般の2音の形、及び1音に長音・促音が付加された形が、複数連続する場合、便宜的に次のように2連続と3連続に分けたものをそれぞれ1回の描写と見なし、1短単位とする。

【例】

2連続:	ぐるぐる	からころ	さっさっ	があがあ					
3連続:	ぐるぐるぐる	からころから	さっさっさっ	があがあがあ					
4連続:	ぐるぐる	ぐるぐる	からころ	からころ	さっさっ	さっさっ	があがあ	があがあ	
5連続:	ぐるぐる	ぐるぐるぐる	からころ	からころから	さっさっ	さっさっ	さっさっ	さっさっ	があがあ

6.7.1.2.1

以下に挙げるような、連続の形の派生的な形と見なせるものも、1回の描写として全体で1短単位とする。

【例】

がったがた	かんかーん	ぼろっぼろ	どたばたー	どかどかっ	ばんばんばーんっ
-------	-------	-------	-------	-------	----------

6.7.1.3

6.7.1.2 に当たるもの以外の連続は、それぞれを1回の描写とし、1短単位とする。

【例】

ががっ	ががっ	さっさ	さっさ	ばばっ	ばばば	ぐにゃん	ぐにゃん
ばたん	ばたん	ばたん	ずばばん	ずどどん	がたっ	がたっ	
がさっ	ごそっ	がたん	ごとん	かんかーん	かんかーん		

6.7.1.3.1

ただし、『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか(以下「辞書」といった場合はこの2つを指す)に立項されている場合は、その全体を1回の描写とし、1短単位とする。

【例】

からんころん	かんらかんら	ざっくざっく
--------	--------	--------

6.7.1.4

擬音語・擬態語の1短単位の間補助記号が挿入された場合は、記号とそれ以外をそれぞれ1短単位とする。

【例】

ばた		ばた
----	--	----

6.7.1.5

擬音語・擬態語と一般語とが結合した語については、以下のように最小単位を認定する。

6.7.1.5.1

元の擬音語・擬態語との関係を強く想起させる要素と単独で語として使われる一般語とが結合した語は、擬音語・擬態語に当たる要素と一般語とを、それぞれ1最小単位とする。

【例】

／びく／つく／　／びしょ／濡れ／　／ぶら／下がる／　／べた／付く／　／べた／褒め／　／ぼい／捨て／　／むず／がゆい／

6.7.1.5.2

擬音語・擬態語に当たる要素の語源意識が失われてしまっているものや、他の構成要素が接尾辞的な性格の強いものは、擬音語・擬態語に当たる要素と一般語とが結合した全体を1最小単位とする。

【例】

／ひし=めく／　／ひよ=こ／　／ぼや=ける／　／へこ=たれる／　／よた=話／　／パチン=コ／　／ブラン=コ／

6.7.1.5.3

擬音語・擬態語に単に語調を整えるための要素や語源未詳の要素が結合したものは全体で1最小単位とする。

【例】

／ぼか=すか／　／ほにゃ=らか／

6.7.2 擬音語・擬態語に付く「と」・「って」について

6.7.2.1

原則の「助詞・助動詞は、1最小単位を1短単位とする」に従い、格助詞「と」副助詞「って」として分割する。

6.7.2.2

「一と」の場合、促音を擬音語・擬態語の語形の一部とし、格助詞「と」語形「ト」と認定する。

【例】

｜がっ||と　｜ばたッ||と　｜くる=くるっ||と　｜

6.7.2.3

「一って」の場合、促音は副助詞「って」の語形の一部とし、副助詞「って」語形「ッテ」と認定する。

【例】

｜がら||って　｜どかん||って　｜

6.7.2.4

「一て」の場合、副助詞「って」の語形「テ」として認定する。

【例】

｜ぱりん||て　｜割れた　｜ばた||て　｜倒れた

6.7.2.5

「と」を含めて副詞として1語化したと見なせるものは「と」の付いた形を全体で1最小単位とし（最小単位認定規程の規定 第1章 第1 2.4.4 参照）、擬音語・擬態語の単位認定規程の適用に含まないものとする。

「と」を含む主な副詞の一覧は規定 第1章 第1 2.4.4 を参照のこと。

6.7.3 付加情報の認定

6.7.3.1

擬音語・擬態語の品詞は一般に副詞とする。以下に典型的な例を示す。

【例】

〔単独用法〕 くるくる。ガタガタッ。
〔連用用法〕 くるくる舞う。ガタガタ鳴る。
〔付属語を伴う〕 くるくると回した。ガタガタって音がした。

6.7.3.2

擬音語・擬態語に当たる語が格助詞を伴うなど体言的に用いられていても、名詞とせず副詞とする。

【例】

にゃんにゃんがいる。ブーブーが走ってる。（幼児語の類）
ドキドキが止まらない。

6.7.3.3

辞書に形状詞的用法の記述が見られる場合は形状詞を認める。

【例】

バラバラに分解する（形状詞） バラバラと飛び立つ（副詞）
水をひたひたにして（形状詞） 水がひたひた増す（副詞）

6.7.3.4

笑い声は感動詞、泣き声は副詞（擬音語）とする。感動詞の詳細については、同語異語判別規程の 6.8 「感動詞の扱い」を参照。

【例】

感動詞：あはは えへへ
副詞：えーん わーん

6.7.3.5

動物の鳴き声等は副詞（擬音語）とする。

【例】

ホーホケキョ こけこっこ にゃおーん うおーん

6.7.3.6

擬音語・擬態語の語種は和語とする。

6.7.4 同語異語判別

6.7.4.1 同一「語形」・別「語形」の判定

6.7.4.1.1 同一の「語形」とする出現形と「語形」の定め方

6.7.4.1.1.1

長音を示す母音、小書きの母音、長音符号の差異は同一の「語形」にまとめる。辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」とする。

【例】

出現形：ぎゅう／ぎゅー／ぎゅう→語形：ギュウ

6.7.4.1.1.1.1

辞書に立項されている語形がない場合には長音符号を「語形」とする。

【例】

出現形：ばたあん／ばたーん／ばたぁん→語形：パターン

6.7.4.1.1.2

母音連鎖のうち、「エイ」と「エエ」, 「オウ」と「オオ」の差異は同一の「語形」にまとめる。
辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」とする。

【例】

出現形：ぜいぜい／ぜえぜえ／ゼーゼー→語形：ゼイゼイ
出現形：ぼう／ぼお／ぼ→語形：ポウ

6.7.4.1.1.2.1

辞書に立項されている語形がない場合には「エー」「オー」を「語形」とする。

【例】

出現形：ぼうん／ぼおん／ぼーん→語形：ポーン

6.7.4.1.1.3

長音・促音と、それが連鎖している形との差異は同一の「語形」にまとめる。単独の長音・促音で表記される形を「語形」とする。

【例】

出現形：ぎゅう／ぎゅうー／ぎゅううう／ぎゅーー →語形：ギュウ
出現形：ばたーん／ばたーーん／ばたあーん／ばたあーん →語形：バターン
出現形：ばったん／ばったん →語形：バタン
出現形：ばたんっ／ばたんっっ →語形：バタンッ

6.7.4.1.1.3.1

ただし、長音符、母音の順で表記されている場合は異なる「語形」とする。

【例】

ぎゅー↔ぎゅーう
ごお↔ごーお

6.7.4.1.1.4

単独の促音と、促音に長音を示す長音符号や小書きの母音が付いた形との差異は同一の「語形」にまとめる。
促音のみで記される形を「語形」とする。

【例】

出現形：ごっ／ごっー→語形：ゴッ

6.7.4.1.2 異なる「語形」とする出現形

6.7.4.1.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの出現形は、原則として異なる「語形」とする。

【例】

ぎゅ↔ぎゅっ↔ぎゅー↔ぎゅーう
ばったり↔ばーったり
ばたん↔ばたーん↔ばったん↔ばたんっ
ずる↔ずるー
ぐにやり↔ぐんにやり
ずばば↔ずばばば

6.7.4.2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定

6.7.4.2.1 同一の「語彙素」とする「語形」と「語彙素」の定め方

語末に促音が付加されたものと元の形の「語形」の差異は同一の「語彙素」にまとめる。促音が付加されない形を「語彙素(読み)」とする。

【例】
語形：ギユウ／ギユウツ→語彙素：ギユウ【ぎゅう】
語形：バタン／バタンツ→語彙素：バタン【ばたん】

6.7.4.2.1.1

1音の語の場合は促音が付加された形を「語彙素（読み）」とする。

【例】
語形：ギユ／ギユツ→語彙素：ギユツ【ぎゅつ】

6.7.4.2.2 異なる「語彙素」とする「語形」

6.7.4.2.1に挙げた語末促音の有無の以外の差異を持つ任意の二つの「語形」は、原則として異なる「語彙素」とする。「語形」をそのまま「語彙素読み」とする。「語彙素」は「語彙素読み」を平仮名表記したものとす。

【例】
バタリ↔バツタリ（語中の促音の付加）
ギユ↔ギュー（長音の付加）
ズル↔ズルー（長音の付加）
バタン↔バターン（長音の付加）
グニャリ↔グンニャリ（撥音の付加）
バタ↔バタン（撥音の付加）
バタ↔バタリ（派生要素「リ」の付加）
ズバ↔ズババ↔ズババババ（同一音の繰り返し）
シュルン↔シュルルン↔シュルルルルン（同一音の繰り返し）
パン↔パパン↔パパパン（同一音の繰り返し）
ガ↔ガガ↔ガガガ↔ガガガガ（同一音の繰り返し）
トントン↔トントントン（語基の繰り返し）
カリカリ↔ガリガリ（清濁）
バタン↔パタン（濁と半濁）
ビヨン↔ビョン（直音と拗音）

6.8 感動詞の扱い

感動詞の同語異語判別に関する規定を次に示す。

6.8.1 感動詞の範囲

次のものを感動詞とみなす。
下記のうち、6.8.1.1から6.8.1.6までの品詞を「感動詞-一般」、6.8.1.7を「感動詞-フィラー」とする。

6.8.1.1 感動や驚きなどを表すもの

【例】
ああ あな すわ おや まあ えっ

6.8.1.1.1

なお、笑い声は感動詞、泣き声は副詞（擬音語）とする。

【例】
あはは えへへ……感動詞
えーん わーん……副詞

6.8.1.2 呼び掛けを表すもの

【例】
おい こら もし

6.8.1.3 応答を表すもの

【例】
いな はい ええ うん

6.8.1.4 誘い掛けに用いるもの

【例】
いざ いで さあ

6.8.1.5 掛け声

【例】
どっこいしょ よいしょ それ

6.8.1.6 あいさつに用いる語のうち、最小単位認定規程で1最小単位となるもの

【例】
さらば こんにちは こんばんは さようなら おはよう

6.8.1.7 フィラー

【例】
あの えっと えー んー

6.8.2 単位の定め方

最小単位認定規程・短単位認定規程に従い単位を認定する。感動詞に関連する部分を抜粋・整理して以下に記す。

6.8.2.1

原則として感動、呼びかけ、応答などの1回の描写を「1最小単位=1短単位」とする。

【例】
「えっ | |おい | |よいしょ | |はい |はい | |いな |いな | |あの一 |

6.8.2.2

助詞・助動詞は1最小単位とはせず、助詞・助動詞を含む全体で「1最小単位=1短単位」とする。

【例】
「どう=ぞ | |さら=ば | |こんにちは=は | |さよう=なら |

6.8.3 同語異語判別

6.8.3.1 同一「語形」・別「語形」の判定

6.8.3.1.1 同一の「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ任意の二つの出現形は、同じ「語形」とする。

6.8.3.1.1.1 長音を示す母音，小書きの母音，長音符号の差異

【例】
ああ／あー／ああ いやあ／いやあ／いやー

6.8.3.1.1.2 母音連鎖のうち、「エイ」と「エエ」，「オウ」と「オオ」の差異

【例】
ほう／ほお

6.8.3.1.1.3 臨時的に付加された長音・促音と，それが連鎖している形との差異

【例】
うわー／うわーー／うわああ／うわああああ うわっ／うわっっ

6.8.3.1.1.3.1

臨時的に長音・促音が付加された形と元の形の差異は、異なる「語形」とする。

【例】

うわ←→うわあ うわ←→うわっ

6.8.3.1.1.4 単独の促音と、促音に長音を示す長音符号や小書きの母音が付いた形との差異

【例】

うわっ／うわっー

6.8.3.1.2 異なる「語形」とする出現形

6.8.3.1.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの出現形は、原則として異なる「語形」とする。

【例】

ふん←→ふうん あ←→あっ あれ←→あれっ おほほ←→おほほほ

6.8.3.2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定

6.8.3.2.1 同一の「語彙素」とする「語形」

意味に違いが生じない限りにおいて、以下の差異を持つ「語形」は同一の「語彙素」とする。

6.8.3.2.1.1 特殊拍（長音・促音・撥音）の有無及びその交替

【例】

アラ／アラッ／アンラ／アーラ／アアラ ヤア／ヤアァ／ヤ／ヤッ

6.8.3.2.1.1.1

ただし、1音節の語のうち、長音のある「語形」が応答・感嘆の意を、促音のある「語形」が驚きの意を表すものは、異なる「語彙素」とする。その場合、長音・促音のない「語形」は促音のある「語形」と同一の「語彙素」とする。

【例】

アア←→アッ／ア エエ←→エッ／エ オオ←→オッ／オ ハア←→ハッ／ハ

6.8.3.2.1.1.2

上記以外で、長音のある「語形」と促音のある「語形」が同義・類義の場合は、同一の「語彙素」とする。

【例】

ワア／ワッ／ワ

6.8.3.2.1.2 語末音の繰り返し

【例】

アラ／アララ／アララララ

6.8.3.2.2 異なる「語彙素」とする「語形」

6.8.3.2.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの「語形」は、原則として異なる「語彙素」とする。

【例】

ドッコイシヨ←→ドッコラシヨ ハイ←→アイ アラ←→アリャ←→アリ

6.8.3.3 「語形」の定め方及び表記

6.8.3.3.1 「語形」の定め方

次の基準に従い「語形」を定める。以下の 6.8.3.3.1.1 から 6.8.3.3.1.4 に該当しないものは、本規定と矛盾しない限りにおいて、同語異語判別規程の規定 4.1 に従う。

6.8.3.3.1.1

長音を示す母音、小書きの母音、長音符号の差異については、原則として母音の形を「語形」に当てる。

【例】

ああ／あー／ああ→アア いやあ／いやぁ／いやー→イヤア

6.8.3.3.1.2

母音連続のうち、「エイ」と「エエ」、「オウ」と「オオ」の差異については、辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」に当てる。

【例】

ほう／ほお→ホウ

6.8.3.3.1.2.1

辞書に立項されている語形がない場合には、原則として「エエ」「オオ」を「語形」とする。

【例】

そおら／そーら／そうら／→ソオラ

6.8.3.3.1.3

臨時的に付加された長音・促音と、それが連鎖している形との差異については、原則として単独の長音（直前の母音）・促音で記される形を「語形」に当てる。

【例】

いやー／いやぁ／いやぁぁ／いやぁ→イヤア おっっ／おっっっっ→オッ

6.8.3.3.1.4

単独の促音と、促音に長音を示す長音符号や小書きの母音が後続している形との差異については、促音のみで記される形を「語形」に当てる。

【例】

うわっ／うわっ→ウワッ

6.8.3.3.2 「語形」の表記

感動詞の「語形」の表記は、同語異語判別規程の規定 4.2.1，4.2.2 を適用する。

6.8.3.4 「語彙素」の定め方及び表記

6.8.3.4.1 「語彙素」の定め方

「語形」を「語彙素」として立てる。複数の「語形」を一つの「語彙素」にまとめる場合、以下の規定によって「語彙素」を定める。以下の 6.8.3.4.1.1 から 6.8.3.4.1.2 に該当しないものは、本規定と矛盾しない限りにおいて、同語異語判別規程の規定 5.1.2.1 に従う。

6.8.3.4.1.1

特殊拍（長音・促音・撥音）の有無及びその交替が見られる場合、原則として特殊拍のない形、交替のない形を「語彙素」とする。語末長音の短呼形と元の形がある場合は元の形を「語彙素」とする。

【例】
アラ／アアラ／アラッ／アンラ→アラ【あら】
ヤア／ヤッ→ヤア【やあ】
マア／マ→マア【まあ】

6.8.3.4.1.1.1

1音節で語末に促音のある形と促音のない形がある場合、促音のある形を「語彙素」とする。

【例】
アッ／ア→アッ【あっ】
エッ／エ→エッ【えっ】

6.8.3.4.1.2

語末音の繰り返しが見られる場合、原則として繰り返しのない形を「語彙素」とする。

【例】
アラ／アララ／アラララララ→アラ【あら】
アチ／アチチ→アチ【あち】

6.8.3.4.1.2.1

ただし、笑い声に相当する感動詞は、原則として3拍の形を「語彙素」とする。

【例】
アハ／アハハ／アハハハハ→アハハ【あはは】
エヘ／エヘヘ／エヘヘヘヘ→エヘヘ【えへへ】
フフ／フフフ／フフフフフ→フフフ【ふふふ】

6.8.3.4.2 「語彙素読み」の表記

「語彙素読み」には、「語彙素」として立てることになった「語形」をそのまま登録する。

6.8.3.4.3 「語彙素」の表記

感動詞の「語彙素」には、原則として「語彙素読み」を平仮名表記にしたものを用いる。

6.9 メタ的に使われた漢字等の扱い

1字の漢字のうち、漢字の解説に用いられたもの（メタ的に使われたもの）や姓又は名を略したものなどに対して、語彙素・語彙素読みを付与する際の基準を定める。

6.9.1 読み

読みは、原則として漢音とする。

【例】
【具】氏の率る自由党 →グ
未だ一箇の【戦】字を道い出さざる所 →セン

6.9.1.1

外国の人名の略称などで、本来の語形と略称の漢字の漢音との間に齟齬がある場合でも、漢字の漢音を読みとする。

【例】
【比】公 →ヒ ※ビスマルクの略称
【霍】氏 →カク ※ホップスの略称

6.9.1.2

ただし漢音が一般的でない場合は呉音等で読む。なお、音（呉音・漢音等）が一般的でない場合、訓で読むことがある。

【例】
大 →ダイ
鷹 →タカ

6.9.2 語彙素のまとめ方等

読みが同じ漢字は、一つの語彙素にまとめる。

【例】
真／新／信 →シン【シン】
阿／亜 →ア【ア】

6.9.2.1

平仮名・片仮名で漢字の読みを表したもののや、箇条書きの項目名等の1字の平仮名・片仮名も、同じ読みの漢字と同一の語彙素にまとめる。

【例】
真／新／シン／しん →シン【シン】
亜／あ／ア →ア【ア】

6.10 出現形「に」の判別基準

出現形「に」について、断定の助動詞「なり」の連用形かそれ以外の品詞（格助詞または接続助詞）かの判断基準を以下に記述する。

原則、次の6.10.1～6.10.5に該当するものは断定の助動詞「なり」とし、それ以外を格助詞または接続助詞とする。

6.10.1 先行語が形状詞

先行語が形状詞のもの

【例】
容易【に】其舊習を改めし者なるべし（助動詞）
僕竊か【に】疑なき能はず（助動詞）

6.10.2 存在詞が後続

「あり」などの存在詞が後続し、意味上「～で（～であって）」と解せるもの（「～に（は）あらず」のように「あり」が打消の助動詞「ず」を伴うことが多い）

【例】
是悦ぶべくして悪むべき【に】あらず（助動詞）
未曾有の事を新に始る【に】は非ず（助動詞）

6.10.2.1

意味上「～で（～であって）」と解せないものは、格助詞と判断する。

【例】
耶蘇教を奉ずる一國ここ【に】あり（格助詞）
政府の強きを致すは天下人民の同心を致す【に】在り（格助詞）

6.10.3 ～にして

「～にして」の形で用いられ、意味上「～で（～であって）」と解せるもの

【例】
夫日曜は七曜の一【に】して、毎週の首なり、（助動詞）
倍根より以前の心霊の理學は空理のみ【に】して實證なし（助動詞）

6.10.3.1

意味上「～で（～であって）」と解せないものは、格助詞と判断する。

【例】
楊朱墨翟の相反せる兩極を合一【に】して之を社交の一大例規とし（格助詞）
スチブレーション箇條書を頼み【に】して弊害を防ぎ止めんとするの一法あるのみ（格助詞）

6.10.4 「や」が後続

係助詞「や」が後続し、「～にやあらむ」と「あらむ」が補えそうなもの

【例】
ただ艸木の幹一つにして枝八十に別るを見て本は一つなりと誤れる【に】や（助動詞）

6.10.5 やう（様）に、ごとくに

「やう（様）に」「ごとくに」の「に」

【例】
我邦の制とは大に相違する所ある様【に】覺ゆるなり（助動詞）
正金は年々常例の如く【に】外出するなり（助動詞）

6.11 出現形「にて」の品詞判別基準

出現形「にて」の品詞認定は、「断定の助動詞「なり」連用形+接続助詞「て」」または格助詞「にて」とし、「格助詞「に」+接続助詞「て」」という認定はしない。以下の基準に従って「なり+て」か「にて」かを判別する。

6.11.1 意味から判別する基準

6.11.1.1

「～で（～であって）」の意のものは、助動詞「なり」+接続助詞「て」とする。

【例】
曲りし定木が紙の曲るを咎ると同じく【にて】無理至極なり
大名【にて】卿となるは、徳川氏の家門に二三の大名あるのみなりし。

6.11.1.2

「～として」「～にして」の意のものは、助動詞「なり」+接続助詞「て」とする。

【例】
吾輩外国人【にて】は之を知るゝ能はざるなりと雖ども
君をまた見むとおもふ心を命【にて】、幾歳をか経にけむ。

6.11.1.3

「～において」（場所・時）、「～を使って」（手段・方法）、「～によって」（原因・理由）の意のものは、格助詞「にて」とする。

【例】
江戸の敵きを長崎【にて】討つ
紙、絹など【にて】造りたる囊に
国内十五万の兵あらば、是れ【にて】日本の国防は完備したりと云ふ可きか

6.11.2 先行語・後続語から判別する目安

6.11.2.1

先行語が形状詞のものは、助動詞「なり」＋接続助詞「て」とする。

【例】
僕は迂闊【にて】答に究すること度々、時々苦笑ひを浴せられ候。

6.11.2.2

「あり」「はべり」「候ふ」「おはします」などの存在詞が後続し、その存在詞と「にて」で「～であって」の意となるものは、助動詞「なり」＋接続助詞「て」とする。

【例】
余の尤も愛せし所は夏園より冬宮までの間【にて】ありき
めづらしき姓氏【にて】候えども
貴客は有名の御方【にて】おわしますや

6.11.2.3

上記以外のものは、格助詞「にて」とする。

6.11.3 補則

意味から判別する基準での認定と、先行語・後続語から判別する目安での認定が齟齬をきたす場合は、意味から判別する基準での認定を優先する。

6.12 読みが不確定な出現形の語形認定基準

読みが不確定な出現形の語形の認定については、その出現形が表す最も一般的・常識的な読みを語形として定めることを原則とする。それでも語形が確定しない場合は、以下の基準に従って語形を定める。

6.12.1 音読み・訓読み

音読み・訓読みの両方が想定される出現形の場合、音読みを優先する。

【例】
(給水) 場 →ジョウ ×バ

6.12.2 漢字音

音読みの場合の漢字音が複数想定される場合は、①漢音、②呉音、③その他の音、の優先順位とする。

【例】
重複 →チョウフク ×ジュウフク

6.12.3 音便形

音便形と元の形が想定される場合は、元の形を優先する。

【例】
撃(て) →ウチ ×ウツ

6.12.3.1

ただし、音便形を優先する場合がある。

【例】
以(て) →モツ ×モチ
於(て) →オイ ×オキ

6.12.4 読み添えの「の」

読み添えの「の」は、地名および人名の姓に限って補うものとする。

【例】
 藤原（道長） →フジワラノ
 （後）出師（表） →スイシ ×スイシノ
 中（関白） →ナカ ×ナカノ

6.12.5 ルビ

文字列にルビが振られている場合で、ルビの表す読みが該当文字列の一般的な読みと一致する場合、ルビの表す読みを語形とする。

【例】
 硝子〈ルビ：ガラス〉 →ガラス ×ショウシ
 煙管〈ルビ：きせる〉 →キセル ×エンカン

6.12.5.1

ルビの表す読みと該当文字列の一般的な読みが一致しない場合、該当文字列の一般的な読みを語形とする。

【例】
 異質〈ルビ：ヘテロゼニウス〉 →イシツ ×ヘテロゼニウス
 南瓜〈ルビ：トウナス〉 →カボチャ ×トウナス
 園丁〈ルビ：ニハツクリ〉 →エンテイ ×ニワツクリ

6.12.5.2

ルビの振られた文字列が臨時的なものである場合は、ルビの表す読みを語形とする。

【例】
 聖礫〈ルビ：クルス〉 →クルス ×セイタク
 ※「聖礫」という文字列はコーパス・辞書中に他用例を見出しがたい

第2 意味の面から見た同語異語の判別

第1「同語異語判別規程」では、主として語の形の面から同語とするか異なる語とするかを判別するための規定を示すとともに、「語形」「語彙素」の立て方についても規定を示した。しかし、主として意味の面から同語とするか異なる語とするかを判別するための規定については、明確な規定としてまとめるには至っていない。これは、主として意味の面から、二つの語を同じ語とみなすか異なる語とみなすかについては、様々な考え方があり、非常に判断の難しい問題だからである。

例えば、動詞〈オサマル〉について、『岩波国語辞典』第6版（以下、『岩波』）、『国語大辞典』（以下、『国語大』）、『大辞林』第2版（以下、『大辞林』）、『広辞苑』第5版（以下、『広辞苑』）における見出しの立て方を見ると、以下のようになっている。

岩波	収まる・納まる・修まる・治まる
国語大	収まる・納まる・修まる・治まる
大辞林	収まる・納まる 修まる 治まる
広辞苑	収まる・納まる・修まる・治まる

『岩波』『国語大』『広辞苑』は、一つの見出しにまとめるが、『大辞林』は「修まる」と「治まる」とを別立てにし、見出しを三つ立てる。

したがって、「収まる」「治まる」について言えば、『岩波』『国語大』『広辞苑』に従うと同じ語として扱う（同じ動詞〈オサマル〉の表記のゆれとして扱う）ことになるが、『大辞林』に従うと異なる語として扱う（語形は同じだが意味や表記の異なる別語として扱う）ことになる。このように見出しの立て方が辞書によって異なることから、二つの語を同じ語とみなすか異なる語とみなすかは非常に難しい問題であると言うことができる。

そこで、筆者らは、国語辞典の見出しやブランチの立て方・漢字表記に関する注記、BCCWJの頻度情報等を基に、UniDicに登録した和語動詞から同語異語判別に着手した。ここでは、この同語異語判別の方針を紹介するとともに、これまでに判別を行った語を幾つか取り上げ、同語異語判別の実例を示す※。

※本節の内容は、小椋秀樹ほか（2010）に基づくものである。

1 基本的な方針

自動形態素解析を前提とした同語異語判別で留意しなければならないのは、同じ書字形（表記）かつ同じ品詞でありながら、異なる語彙素（見出し）となるような語（同表記異語）をできる限り少なくするという点である。例えば、動詞（オサマル）において、漢字表記「収まる」「納まる」よりも平仮名表記が多く用いられており、しかも平仮名表記が「収まる」の意と「納まる」の意の両方で用いられ、用例数も両者で拮抗しているとする。このような場合、「収まる」と「納まる」とを異なる語彙素にすると、同表記（平仮名表記）の異語が多くなり、解析精度の低下を招く。

また、この例のように漢字表記よりも平仮名表記の方が多という点も、意味の差が微妙であるため漢字の書き分けがうまくできず、その結果、平仮名表記が選択されている可能性がある。このような人手でさえ区別の難しい、微妙な意味の差異によって語彙素を複数立てることは、形態素解析辞書の見出しの設定としてふさわしくない。以上のことを踏まえ、UniDicにおける同語異語判別に関して、次に挙げる二つの基本方針を立てた。

方針1：同表記異語を生じさせるような語彙素の立て方はできる限り行わない。

方針2：複数の語彙素に分ける場合は、明確な基準・理由をもってし、人手で正確に区別できないような語彙素の分割は行わない。

2 対象

UniDic-1.3.12（2009年7月公開）には語彙素レベルで15.7万語が登録されている。そこで、同語異語判別の対象をひとまず絞り込むこととした。具体的には、UniDicに登録した和語のうち、国立国語研究所（1964）の「判別実例一覧表」に掲げられている語を対象とすることとし、単純動詞から判別作業に着手した。ここで単純動詞から作業を行ったのは、意味による漢字の書き分けで問題となる語が多いためである。

なお、2009年12月までに動詞90語の判別を終え、その結果を『『現代書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集』第3版に掲載した。その後、残りの動詞、形容詞、名詞の順に作業を進めた。

3 方法

同語異語判別を行う際の検討資料として、以下の二つを用いた。

3.1.1 構築中のBCCWJ（約5,500万語）から取得した各書字形の頻度情報（表記別頻度）及び用例

方針1を踏まえ、現在UniDicに登録されている語彙素がどのような書字形を持ち、その書字形がコーパス中に何例現れるのかを把握する必要があると考え、検討資料とした。できる限り同表記異語を生じさせないということから、特に平仮名表記の頻度・使用状況に注目した。また、コーパス全体の頻度・用例等を参照するのに加えて、形態素解析システムの学習用コーパスとして作成しているコアデータ（白書・新聞・書籍・Web（Yahoo!知恵袋））約70万語における頻度・用例も適宜参照した。

3.1.2 『岩波』『国語大』『大辞林』『広辞苑』の4種の国語辞典

方針2にも掲げたように明確な基準・理由をもって同語異語判別を行うために国語辞典における見出しやブランチの立て方を参照することとした。ただし、先に見たように辞書によって見出しの立て方に違いがあるため複数の辞書を参照することとし、上記の代表的な中型・小型辞書4種類を用いた。

3.2 判別の観点

検討資料を基に同語か否かを判別するに当たって、次の八つの観点を設けた。

《辞書の記述に基づく観点》

- すべての辞書で見出しの立て方が一致し、それが一般的な漢字の書き分けの意識とも対応している場合、辞書の見出しに基づいて語彙素を立てる方向で検討する。
 - 各辞書の漢字表記に関する注記に違いがある場合、原則として一つの語彙素にまとめる。
 - 『国語大』に漢字表記に関する注記があり、他の辞書でもほぼ同一の書き分けを示している場合、『国語大』の注記に基づいて語彙素を立てる方向で検討する。
 - 『国語大』に漢字表記に関する注記があっても、他の辞書で示された書き分けと異なる場合、一つの語彙素にまとめることを優先する。
- ※『国語大』は漢字表記に関する注記を示すことに慎重な姿勢を取っていると思われるため、『国語大』の注記を重視する観点を設けた。

《動詞の性質等に基づく観点》

- 自動詞と他動詞とで同形の語は、原則として異なる語彙素とする。
- 移動動詞等、自然言語処理における応用面に深くかかわるとされる語の語彙素の統合については慎重に判断する。

《頻度・実例に基づく観点》

- 漢字表記の頻度よりも仮名表記の頻度が非常に高い場合、一つの語彙素にまとめることを優先する。
- 前接・後接語に違いがある場合、又は漢字の書き分けに混乱が見られない場合は、複数の語彙素に分ける方向で検討する。

上記八つを基準又は規則と言わずに観点と呼んでいるのは、意味にかかわる問題であるため、規則のように適用の優先順位等を決められないからである。

3.3 判別の作業

筆者らは、表記別頻度表・用例・4種の国語辞典を基に八つの観点から同語とするか否か、1語ずつ総合的に判断していった。現在までに191語について判別作業を終えた。

4 判別の実例

本節では、現在までに同語異語判別を行った191語の判別結果を示す。4.1では、動詞〈アウ〉〈アズカル〉〈オサマル〉を取り上げ、上述の2種類の資料、八つの観点に基づいて、どのように同語異語判別を行ったのか具体的に述べる。その他の語については、4.2に判別結果を一覧にして示す。

4.1 判別の具体例

4.1.1 アウ

UniDic-1.3.12では、「会う」「合う」「遭う」の三つを語彙素とし、「逢う」は「会う」の書字形に、「遇う」は「遭う」の書字形に登録している。

辞書を見ると、『大辞林』が「合う」を別立てにしているが、他の辞書は一つの見出しにまとめている。ただし『国語大』『広辞苑』はブランチで「合」「会・逢・遭」と接尾的用法の「合」の三つに分けている。『国語大』『大辞林』『広辞苑』は、基本的に「合」と「会・逢・遭」とを分ける方針を取っていると考えられる。

岩波	合う・会う・遭う・遇う・逢う
国語大	合う・会う・遭う・逢う
大辞林	合う
	会う・逢う・遭う
広辞苑	合う・会う・逢う・遭う・遇う

表記別頻度(表1)を見ると、平仮名表記が2,057例と多い。この大半は「合う」の意の例と「遭う」の意の例であり、用例数はほぼ拮抗している。コアデータに限定して見ると、平仮名表記は23例あり、内訳は「合う」の意が13例、「遭う」の意が8例、「会う」の意が2例である。「合う」の意の例のうち8例は接尾的用法で前接語が動詞連用形である。「遭う」の意の例の前接語はすべて格助詞「に」である。平仮名表記例の大半を占める「合う」の意の例と「遭う」の意の例は、前接語に差異が認められる。

表1 〈アウ〉の表記別頻度

あう	会う	合う	逢う	遭う	遇う
2,057	10,057	5,737	696	89	913

「会う」については、漢字表記も含めて見ると、格助詞「に」が前接語となることが多い点で「遭う」と類似しており、辞書でも「会う」と「遭う」とは同じ見出しにまとめられている。

以上のことから、「合う」「会う」の二つの語彙素とし、「逢う」「遭う」「遇う」は「会う」の書字形とした(図1)。

語彙素	語形	書字形
合う	アウ	あう 合う
会う	アウ	あう 会う 逢う 遭う 遇う

図1 〈アウ〉の語彙素・語形・書字形

4.1.2 アズカル

UniDic-1.3.12では、「与る」「預かる」の二つを語彙素としていた。辞書を見ると、『大辞林』『広辞苑』は「与る」「預かる」の二つを見出しに立てる。『岩波』『国語大』は一つにまとめるが、その中を自動詞と他動詞の2項目に分け、自動詞に「与」、他動詞に「預」と注記する。辞書の記述にあるとおり「与る」と「預かる」は自動詞・他動詞の違いがあり、意味についても「預かる」が金品等を手元に置き保管するといった意味を表すのに対し、「与る」が関与するといった意味を表すというように違いがある。

岩波 預かる・与る
 国語大 預かる・与る・関る
 大辞林 預かる
 与る
 広辞苑 預かる
 与る

表記別頻度(表2)を見ると、平仮名表記が「預かる」に次いで489例と多い。内訳は「与る」の意が275例、「預かる」の意が214例で、「与る」の意が約3割多くなっている。また、前接語を見ると、自他の違いを反映して、「与る」の意の例は格助詞「に」が来ることが多く、この点が「預かる」の意の例との違いとなっている。

表2 (アズカル)の表記別頻度

あずかる	与かる	与る	預かる	預る
489	18	63	848	145

意味が異なっていること、自他の区別があることなどから、UniDic-1.3.12のまま「預かる」「与る」の二つの語彙素とした。(図2)

語彙素	語形	書字形
与る	アズカル	あずかる 与かる 与る
預かる	アズカル	あずかる 預かる 預る

図2 (アズカル)の語彙素・語形・書字形

4.1.3 オサマル

UniDic-1.3.12では、「収まる」「治まる」「納まる」「修まる」の四つを語彙素としていた。辞書の見出しの立て方は先に示したとおりである。『国語大』は見出しの中を大きく「物事が安定した状態になる。ととのった状態になる。」と「物がきちんと中にはいる。また、物事が終わりになる。」の二つに分け、前者には「(治・修・収)」、後者には「(収・納)」と注記する。このように、いずれの項目でも複数の漢字が注記として付されていること、「収」については両方のブランチに漢字注記として付されていることから、明確な書き分けが示されているとは言えない。漢字注記に関しては、他の辞書も同様で、明確な書き分けの基準は示されていない。表記別頻度(表3)を見ると、平仮名表記が最も多くなっており、漢字の書き分けが相当難しいことがうかがわれる。

表3 (オサマル)の表記別頻度

おさまる	修まる	収まる	収る	治まる	納まる	納る	蔵まる
844	5	649	9	243	181	16	1

以上のことから、「収まる」のみを語彙素として立て、「治まる」「納まる」「修まる」等はその書字形とした(図3)。

語彙素	語形	書字形
収まる	オサマル	おさまる 修まる 収まる 収る 治まる 納まる 納る 蔵まる

図3 (オサマル)の語彙素・語形・書字形

4.2 判別結果の一覧

これまでに同語異語判別を終えた和語の動詞161語（4.1 に述べた3語を含む。）、形容詞14語、名詞16語について、その判別結果をそれぞれ付表1，付表2，付表3に一覧する。

参考文献

小木曾智信・中村壯範（2011）『国立国語研究所内部報告書『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版』（LR-CCG-10-06）.

小椋秀樹・小木曾智信・原裕・小磯花絵・宮内佐夜香（2010）「形態論解析用辞書UniDicにおける同語異語判別について」『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』，486-489.

小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕（2011）国立国語研究所内部報告書『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版（上）（下）』（LR-CCG-10-05-01，02）.

小椋秀樹・須永哲矢（2012）『中古和文UniDic短単位規程集 平成21（2009）-平成23（2011）年度科研費補助金基盤研究（C）「和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発」研究成果報告書2』.

須永哲矢・近藤明日子（2012）「近代語コーパスのための形態論情報付与規程の整備」『国立国語研究所共同研究報告12-3 近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』，pp. 93-117.

付 表

《付表 1～3 凡例》

1. 語彙素・語形・書字形

①同語異語判別の結果を受けて、UniDicにどのような形で語彙素，語形，書字形を登録しているか示した。

②UniDicに登録されている語形のうち，以下のものは省略した。

- a. 語彙素と異なる語形
- b. 文語活用
- c. 可能動詞

③書字形のうち，以下のものは省略した。

- a. 送り仮名の差異がある複数の書字形が登録されている場合，送り仮名の付け方（1973年，内閣告示第2号・内閣訓令第2号）の通則1，通則2，通則6の各本則によらない送り仮名の書字形は省略した。
- b. 歴史的仮名遣いで書かれた書字形は省略した。
- c. 通行の字体で書かれた書字形といわゆる康熙字典体で書かれた書字形とがある場合，いわゆる康熙字典体で書かれた書字形は省略した。

2. 備考

①備考欄には，同語異語判別を行う前の公開版UniDic-1.3.12における登録状況を「UniDic-1.3.12:「会う」「合う」「遭う」」などと示した。

②当該語についての同語異語判別に関する考え方として，参考になると思われる情報がある場合，それを示した。

付表 1 同語異語判別結果の一覧（動詞）

語彙素	語形	書字形	備考
合う	アウ	あう	UniDic-1.3.12: 「合う」 本規程集第4章第2 4.1.1参照
		合う	
会う	アウ	あう	UniDic-1.3.12: 「会う」「遭う」 本規程集第4章第2 4.1.1参照
		会う	
		逢う	
		遭う	
		遇う	
与る	アズカル	あずかる	UniDic-1.3.12: 「与る」 本規程集第4章第2 4.1.2参照
		与かる	
		与る	
預かる	アズカル	あずかる	UniDic-1.3.12: 「預かる」 本規程集第4章第2 4.1.2参照
		預かる	
		預る	
当たる	アタル	あたる	UniDic-1.3.12: 「当たる」 「髭をあたる」の例を他動詞として分ける辞書があるが、UniDicではそのような立場を取らない。
		当たる	
		当る	
		中る	
当てる	アテル	あてる	UniDic-1.3.12: 「当てる」「宛てる」 「当たる」との対応。
		充てる	
		宛てる	
		当てる	
誤る	アヤマル	あやまる	UniDic-1.3.12: 「誤る」「謝る」 仮名書き例のうち約8割が「謝罪」の意。残りの2割程度は「あやまって～した」という表現。
		誤る	
		謬る	
謝る	アヤマル	あやまる	
		謝る	
		詫る	
著わす	アラワス	あらわす	UniDic-1.3.12: 「表わす」「著わす」「顕わす」 「(書物を)著す」は判別が容易だと思われるので、語彙素「表」とは分ける。
		著す	
表わす	アラワス	あらわす	
		現す	
		表す	
		顕す	
有る	アル	ある	UniDic-1.3.12: 「有る」
		有る	
		在る	
生きる	イキル	いきる	UniDic-1.3.12: 「生きる」
		生きる	
		活きる	

語彙素	語形	書字形	備考
行く	イク	いく	UniDic-1.3.12: 「行く」「逝く」 仮名書き例は「行く」がほとんどで、「～ていく」の例が多いことが予想される。
		行く	
		往く	
逝く	イク	逝く	
頂く	イタダク	いただく	UniDic-1.3.12: 「頂く」
		頂く	
		戴く	
痛む	イタム	いたむ	UniDic-1.3.12: 「痛む」「傷む」「悼む」 「悼む」は他動詞であるため、「傷む」とは分ける。
		痛む	
		傷む	
悼む	イタム	いたむ	
		悼む	
痛める	イタメル	いためる	UniDic-1.3.12: 「痛める」「炒める」
		痛める	
		傷める	
炒める	イタメル	いためる	
		炒める	
至る	イタル	いたる	UniDic-1.3.12: 「至る」
		到る	
		至る	
伺う	ウカガウ	うかがう	UniDic-1.3.12: 「伺う」「窺う」 仮名書き例の大半は「窺う」で、「うかがわれる」の例がほとんどである。
		伺う	
窺う	ウカガウ	うかがう	漢字の書き分けについては明確でない部分もあると思われるが、仮名書き例に傾向が見られることから、語彙素を分ける。
		窺う	
受ける	ウケル	うける	UniDic-1.3.12: 「受ける」 国語辞典にも明確な書き分けの基準が示されていない。
		受ける	
		承ける	
		請ける	
		享ける	
歌う	ウタウ	うたう	UniDic-1.3.12: 「歌う」「謳う」 仮名書き例は「～をうたった商品」というような例が多い。ただし、くだけた文体では「歌う」を仮名書きすることもあり、また「歌をウタウ」の場合、仮名書きになりやすい。
		歌う	
		唄う	
		詠う	
		謡う	
		唱う	
		咏う	
		謳う	
打つ	ウツ	うつ	UniDic-1.3.12: 「打つ」 「打」「討」などは現代語の感覚では分かれるが、辞書記述などを基に一つにまとめるのが良い。
		打つ	
		討つ	
		伐つ	
		拍つ	
		撃つ	
		搏つ	

語彙素	語形	書字形	備考
生む	ウム	うむ	UniDic-1.3.12: 「生む」 「熟む」 「績む」 「膿む」 「倦む」
		生む	
		産む	
熟む	ウム	熟む	
績む	ウム	績む	
膿む	ウム	膿む	
倦む	ウム	倦む	
得る	エル	える	UniDic-1.3.12: 「得る」 「選る」
		得る	
		獲る	
選る	エル	える	
		選る	
負う	オウ	おう	
		負う	
追う	オウ	おう	
		追う	
		逐う	
		趁う	
犯す	オカス	おかす	UniDic-1.3.12: 「侵す」 「犯す」 「冒す」 「侵」と「犯」とは、書き分けが明確でない面もあると思われる。
		犯す	
		侵す	
		冒す	
置く	オク	おく	UniDic-1.3.12: 「置く」 「於く」 「～における」 「～において」 「～におきまして」 の「おく」は「於」に分類する。
		置く	
		擱く	
		措く	
於く	オク	おく	
		於く	
送る	オクル	おくる	UniDic-1.3.12: 「送る」 「贈る」 一般的に「送」「贈」を使い分けようとする意識がある。 どちらも表内訓であることから、仮名書きの用例も少ない。
		送る	
贈る	オクル	おくる	
		贈る	
起こす	オコス	おこす	UniDic-1.3.12: 「興す」 「起こす」 「熾す」 『国語大』に漢字注記が付されているが、各辞書で分類が異なる。
		起こす	
		興す	
		熾す	
起こる	オコル	おこる	UniDic-1.3.12: 「興る」 「起こる」 「怒る」 「熾る」 『国語大』に漢字注記が付されているが、各辞書で分類の基準が異なる。特に「起」と「興」との分類が辞書で異なる。
		起こる	
		興る	
		熾る	
怒る	オコル	おこる	
		怒る	

語彙素	語形	書字形	備考
驕る	オゴル	おごる	UniDic-1.3.12: 「奢る」「驕る」 「身分以上にぜいたくな生活をする」という意の判別が難しいと思われる。
		傲る	
		驕る	
		奢る	
押さえる	オサエル	おさえる	UniDic-1.3.12: 「押さえる」「抑える」
		押さえる	
		圧える	
		抑える	
修まる	オサマル	おさまる	UniDic-1.3.12: 「収まる」「治まる」「納まる」「修まる」 本規程集第4章第2 4.1.3参照
		修まる	
		収まる	
		収る	
		治まる	
		納まる	
		納る	
蔵まる			
収める	オサメル	おさめる	UniDic-1.3.12: 「収める」「治める」「納める」「修める」 「収まる」との対応。 漢字の使い分けが難しい。
		収める	
		修める	
		治める	
		納める	
		蔵める	
押す	オス	おす	UniDic-1.3.12: 「押す」「推す」
		押す	
		圧す	
		捺す	
		推す	
下りる	オリル	おりる	UniDic-1.3.12: 「下りる」「降りる」 「下ろす」との対応。
		下りる	
		降りる	
		墮りる	
下ろす	オロス	おろす	UniDic-1.3.12: 「下ろす」「降ろす」「卸す」 『広辞苑』に「広く一般には「下」と注記がある。「降」「卸」は「下」の覆う意味の一部について特にそれを用いることがあるという程度のもの。 分類基準が辞書により異なるという問題もある。
		下ろす	
		墮ろす	
		卸す	
		降ろす	
返す	カエス	かえす	UniDic-1.3.12: 「帰す」「反す」「解す」 「帰」「返」は複合語の後部要素と成った場合、特に差がはっきりしない。
		返す	
		還す	
		反す	
		帰す	
解す	カエス	かえす	
		解す	

語彙素	語形	書字形	備考
顧みる	カエリミル	かえりみる	UniDic-1.3.12: 「顧みる」「省みる」「帰り見る」「振り返る」 『国語大』は漢字注記を付すが、他の辞書では書き分けの基準が明確ではない。
		顧みる	
		省みる	
		振り返る	
返る	カエル	かえる	UniDic-1.3.12: 「帰る」「返る」「孵る」 「返す」との対応。
		帰る	
		還る	
		返る	
孵る	カエル	かえる	
		孵る	
掛かる	カカル	かかる	UniDic-1.3.12: 「係る」「掛かる」「架かる」「懸かる」「繋る」「罹る」 「罹」は他と比べて意味の違いが大きいと思われるので、ひとまず別語彙素とする。
		掛かる	
		係る	
		架かる	
		懸かる	
		繋る	
罹る	カカル	かかる	
		罹る	
掛ける	カケル	かける	UniDic-1.3.12: 「掛ける」「懸ける」「架ける」「賭ける」
		掛ける	
		架ける	
		賭ける	
		懸ける	
語る	カタル	かたる	UniDic-1.3.12: 「語る」「騙る」
		語る	
騙る	カタル	かたる	
		騙る	
勝つ	カツ	かつ	UniDic-1.3.12: 「勝つ」
		勝つ	
		克つ	
		剋つ	
枯らす	カラス	からす	UniDic-1.3.12: 「枯らす」「涸らす」「噎らす」
		枯らす	
		涸らす	
		噎らす	
枯れる	カレル	かれる	UniDic-1.3.12: 「枯れる」「涸れる」「噎れる」
		枯れる	
		涸れる	
		渴れる	
		噎れる	
乾かす	カワカス	かわかす	UniDic-1.3.12: 「乾かす」「渴かす」
		乾かす	
		渴かす	

語彙素	語形	書字形	備考
乾く	カワク	かわく	UniDic-1.3.12: 「乾く」「渴く」
		乾く	
		渴く	
掻く	カク	かく	UniDic-1.3.12: 「掻く」「舐く」 「汗をかく」「神輿をかく」は同源か。 「恥をかく」にも「掻」が使われるなど用字が混乱していることを踏まえ、本来別語の「掻」「舐」を統合する。
		掻く	
		舐く	
変わる	カワル	かわる	UniDic-1.3.12: 「代わる」「変わる」「替わる」 『国語大』で《代・替》《変・渝》と漢字注記があるが、他の辞書ではおおむね「変」と「代・替」とに分ける。 「変」「代」の書き分けの基準が必ずしも明確ではない。 一つの複合語の表記で「変」「代」「替」が使われるものがある。
		変わる	
		代わる	
		渝る	
		換わる	
聞かす	キカス	きかす	UniDic-1.3.12: 「聞かす」「利かす」「効かす」 「キク」との対応。 「利」「効」は連続的で、書き分けの基準が明確でない面がある。
		聞かす	
		聴かす	
利かす	キカス	きかす	UniDic-1.3.12: 「聞かす」「利かす」「効かす」 「利」「効」は連続的で、書き分けの基準が明確でない面がある。
		利かす	
		効かす	
聞く	キク	きく	UniDic-1.3.12: 「聞かす」「利かす」「効かす」 「利」「効」は連続的で、書き分けの基準が明確でない面がある。
		聞く	
		聴く	
		訊く	
		尋く	
利く	キク	きく	UniDic-1.3.12: 「聞かす」「利かす」「効かす」 「利」「効」は連続的で、書き分けの基準が明確でない面がある。
		利く	
		効く	
請う	コウ	こう	UniDic-1.3.12: 「請う」「恋う」
		乞う	
		請う	
恋う	コウ	こう	UniDic-1.3.12: 「請う」「恋う」
		恋う	
越える	コエル	こえる	UniDic-1.3.12: 「越える」「超える」
		越える	
		躰える	
		超える	
越す	コス	こす	UniDic-1.3.12: 「越える」「超える」
		越す	
		超す	
答える	コタエル	こたえる	UniDic-1.3.12: 「答える」「応える」「堪える」 「反応がある」等の意を「答・応」とし、「身にこたえる」「こたえられない」を「堪」とする。
		答える	
		応える	
堪える	コタエル	こたえる	UniDic-1.3.12: 「答える」「応える」「堪える」 「反応がある」等の意を「答・応」とし、「身にこたえる」「こたえられない」を「堪」とする。
		堪える	

語彙素	語形	書字形	備考
断る	コトワル	ことわる	UniDic-1.3.12: 「断る」「理る」 名詞は「断り」「理」の二つの語彙素とする。
		断る	
		拒る	
		理る	
下げる	サゲル	さげる	UniDic-1.3.12: 「下げる」「提げる」 『国語大』で《提》と注記を付すが、他の辞書では「提」も許容されており、完全に書き分けがなされるわけではない。
		下げる	
		提げる	
差さる	ササル	ささる	UniDic-1.3.12: 「差さる」「刺さる」 「差す」との対応。
		差さる	
		刺さる	
		挿さる	
裁く	サバク	さばく	UniDic-1.3.12: 「裁く」「捌く」 「裁」は表内字(表内訓), 「捌」は表外字であり、基本的に仮名書き例は後者になると考えられる。
捌く	サバク	さばく	
差す 他動詞	サス	さす	UniDic-1.3.12: 「刺す」「差す」「指す」「挿す」「鎖す」 自動詞・他動詞は分けるという基本的な方針に基づき、自動詞・他動詞の分離を試みる。
		刺す	
		螫す	
		差す	
		注す	
		点す	
		指す	
		挿す	
鎖す			
差す 自動詞	サス	さす	
		射す	
		差す	
冷ます	サマス	さます	UniDic-1.3.12: 「冷ます」「覚ます」
		冷ます	
覚ます	サマス	さます	
		覚ます	
		醒ます	
冷める	サメル	さめる	UniDic-1.3.12: 「冷める」「覚める」
		冷める	
		褪める	
覚める	サメル	さめる	
		覚める	
		醒める	
錆びる	サビル	さびる	UniDic-1.3.12: 「寂びる」「錆びる」
		錆びる	
		銹びる	
寂びる	サビル	さびる	
		寂びる	

語彙素	語形	書字形	備考
攪う	サラウ	さらう	UniDic-1.3.12 : 「攪う」 「浚う」
		攪う	
		拐う	
浚う	サラウ	さらう	
		浚う	
		渫う	
晒す	サラス	さらす	UniDic-1.3.12 : 「晒す」
		晒す	
		曝す	
触る	サワル	さわる	UniDic-1.3.12 : 「触る」 「障る」
	触る		
障る	サワル	さわる	
		障る	
静まる	シズマル	しずまる	UniDic-1.3.12 : 「静まる」
		静まる	
		鎮まる	
沈める	シズメル	沈める	UniDic-1.3.12 : 「沈める」 「静める」
静める	シズメル	しずめる	
		鎮める	
		静める	
		閑める	
偲ぶ	シノブ	しのぶ	UniDic-1.3.12 : 「偲ぶ」 「忍ぶ」 両語は元来別語。
		偲ぶ	
忍ぶ	シノブ	しのぶ	
		忍ぶ	
締まる	シマル	しまる	UniDic-1.3.12 : 「締まる」 「閉まる」
		締まる	
		閉まる	
		絞まる	
		緊まる	
染みる	シミル	しみる	UniDic-1.3.12 : 「染みる」 「凍みる」
		染みる	
		滲みる	
		沁みる	
		浸みる	
		泌みる	
凍みる	シミル	しみる	
		凍みる	

語彙素	語形	書字形	備考
占める	シメル	しめる	UniDic-1.3.12: 「占める」「閉める」「締める」「絞める」
		占める	
締める	シメル	しめる	
		シメル	
		締める	
		める	
		絞める	
		閉める	
緊める	シメル	緊める	
		しるす	
		記す	
		誌す	
		印す	
		標す	
徴す			
すかす	スカス	すかす	UniDic-1.3.12: 「すかす」「空かす」「透かす」「賺す」 「空間的にすきを作る」の意を「空」とし、「視覚的に透き通らせる」の意を「透」とする。
空かす	スカス	スカす	
		すかす	
透かす	スカス	空かす	
		透かす	
賺す	スカス	すかす	
		賺す	
空く	スク	すく	UniDic-1.3.12: 「空く」「透く」「梳く」「漉く」「鋤く」 今後、「剥く」(肉を剥く)を立項する可能性あり。
		空く	
透く	スク	透く	
梳く	スク	すく	
		梳く	
漉く	スク	すく	
		漉く	
抄く	スク	漉く	
		抄く	
鋤く	スク	すく	
		鋤く	
濯ぐ	ススグ	すすぐ	UniDic-1.3.12: 「濯ぐ」「漱ぐ」「雪ぐ」
		濯ぐ	
		洗ぐ	
		雪ぐ	
		漱ぐ	
		嗽ぐ	

語彙素	語形	書字形	備考
勧める	ススメル	すすめる	UniDic-1.3.12: 「勧める」 「進める」
		勧める	
		奨める	
		薦める	
		推める	
進める	ススメル	すすめる	
		進める	
擦る	スル	する	UniDic-1.3.12: 「磨る」「刷る」「擦る」「摺る」「掏る」「剃る」 「磨」「刷」「摺」は「擦」に統合する。 「剃る(スル)」は語彙素「ソル(剃)」の語形として登録する。
		摩る	
		摺る	
		擦る	
		刷る	
		播る	
		磨る	
掏る	スル	する	
		掏る	
擦れる	スレル	すれる	UniDic-1.3.12: 「擦れる」「磨れる」
		スレル	
		擦れる	
		摩れる	
		磨れる	
		播れる	
攻める	セメル	せめる	UniDic-1.3.12: 「攻める」「責める」
		攻める	
責める	セメル	責める	
注ぐ	ソソグ	そそぐ	UniDic-1.3.12: 「注ぐ」「雪ぐ」 語彙素「雪」の漢字表記を「濯」に変更する。
		注ぐ	
		灌ぐ	
濯ぐ	ソソグ	そそぐ	
		濯ぐ	
		雪ぐ	
焚く	タク	たく	UniDic-1.3.12: 「炊く」 語彙素「炊」の漢字表記を「焚」に変更する。
		炊く	
		焚く	
		炷く	
供える	ソナエル	そなえる	UniDic-1.3.12: 「供える」「備える」
		供える	
備える	ソナエル	そなえる	
		備える	
		具える	
備わる	ソナワル	そなわる	UniDic-1.3.12: 「備わる」「具わる」
		備わる	
		具わる	

語彙素	語形	書字形	備考
長ける	タケル	たける	UniDic-1.3.12: 「長ける」 「鬨ける」
		長ける	
		鬨ける	
逸らす	ソラス	そらす	UniDic-1.3.12: 「逸らす」 「反らす」
		逸らす	
		外らす	
反らす	ソラス	そらす	
		反らす	
尋ねる	タズネル	たずねる	UniDic-1.3.12: 「尋ねる」 「訪ねる」 自然言語処理での応用を考え、統合しないものとする。 仮名書き例のうち、「尋ねる」「訪ねる」のいずれに収めるか判断に迷うものについては、たずねる対象が明確であるものは「尋」とし、それ以外は「訪」とする。
		尋ねる	
		訊ねる	
		質ねる	
訪ねる	タズネル	たずねる	
		訪ねる	
立つ	タツ	たつ	UniDic-1.3.12: 「立つ」 「起つ」 「建つ」 「経つ」 「発つ」 「起」「建」を「立」に統合し、「立」「経」「発」とする。
		立つ	
		佇つ	
		勃つ	
		建つ	
		起つ	
経つ	タツ	たつ	
		経つ	
発つ	タツ	たつ	
		発つ	
立てる	タテル	たてる	UniDic-1.3.12: 「立てる」 「点てる」
		立てる	
		起てる	
		建てる	
		樹てる	
点てる	タテル	たてる	
		点てる	
断つ	タツ	たつ	UniDic-1.3.12: 「断つ」 「裁つ」
		断つ	
		絶つ	
		裁つ	
		截つ	
溜まる	タマル	たまる	UniDic-1.3.12: 「溜まる」 「貯まる」 「堪る」 「溜」と「貯」とを統合し、「溜」とする。
		溜まる	
		貯まる	
		蓄まる	
堪る	タマル	たまる	
		堪る	

語彙素	語形	書字形	備考
溜める	タメル	ためる	UniDic-1.3.12: 「溜める」「貯める」
		溜める	
		貯める	
垂らす	タラス	たらす	UniDic-1.3.12: 「垂らす」「滴らす」「誑す」 「垂」と「滴」とを統合し、「垂」とする。
		垂らす	
		滴らす	
誑す	タラス	たらす	
		誑す	
費える	ツイエル	ついでる	UniDic-1.3.12: 「費える」「潰える」
		費える	
		潰える	
		墜える	
使う	ツカウ	つかう	UniDic-1.3.12: 「使う」「遣う」 『大辞林』と『広辞苑』とで書き分けの基準が全く異なる。
		使う	
		費う	
		遣う	
使わず	ツカワス	使わず	UniDic-1.3.12: 「使わず」「遣わず」 「使わず」と「遣わず」とは別語。
遣わず	ツカワス	つかわず	
捕まえる	ツカマエル	つかまえる	UniDic-1.3.12: 「捕まえる」「捉まえる」
		捕まえる	
		捉まえる	
		掴まえる	
		攫まえる	
掴む	ツカム	つかむ	UniDic-1.3.12: 「掴む」
		掴む	
		攫む	
		把む	
		捕む	
付く	ツク	つく	UniDic-1.3.12: 「付く」「着く」「就く」「憑く」「点く」 自然言語処理での応用の可能性を考え、移動動詞「着く」を別語彙素とする。 仮名書き例については、場所を取るなど明らかに移動の動作と見なすことができるものを「着」として扱う。「席につく」なども「着」。 「つく」は複合辞「～について」の「ツク」のみとする。 上記以外の「ツク」は全て「付」とする。
		付く	
		蹤く	
		従く	
		尾く	
		即く	
		憑く	
		点く	
		就く	
		支く	
		活く	
着く	ツク	つく	
		着く	
		著く	
つく	ツク	つく	

語彙素	語形	書字形	備考
突く	ツク	つく	UniDic-1.3.12: 「突く」「衝く」「搗く」「築く」「吐く」 「うそをツク」「ため息をツク」のほか、「悪態をツク」も「吐」とする。
		突く	
		撞く	
		搗く	
		衝く	
		築く	
吐く	ツク	つく	
		吐く	
継ぐ	ツグ	つぐ	
		継ぐ	
		嗣ぐ	
次ぐ	ツグ	つぐ	UniDic-1.3.12: 「継ぐ」「次ぐ」「注ぐ」 「次」は「～に次いで」という順序の意のものとする。
		次ぐ	
		亜ぐ	
		続く	
注ぐ	ツグ	つぐ	
		注ぐ	
作る	ツクル	つくる	UniDic-1.3.12: 「作る」「創る」
		作る	
		創る	
		造る	
		製る	
		粧る	
付ける	ツケル	つける	UniDic-1.3.12: 「付ける」「着ける」「点ける」「爛ける」
		付ける	
		附ける	
		着ける	
		尾ける	
		跟ける	
		放ける	
		従ける	
		憑ける	
		点ける	
		爛ける	
就ける			
浸ける	ツケル	つける	UniDic-1.3.12: 「浸ける」「漬ける」
		浸ける	
		漬ける	
蓄む	ツボム	つぼむ	UniDic-1.3.12: 「蓄む」「窄む」 「ツボム(窄)」は「スボム(窄む)」の語形に移動。
		蓄む	
吊る	ツル	つる	UniDic-1.3.12: 「吊る(吊・釣・攀)」
		吊る	
		釣る	
攀る	ツル	攀る	

語彙素	語形	書字形	備考
勤まる	ツトマル	つとまる	UniDic-1.3.12: 「勤まる」 「務まる」
		勤まる	
		務まる	
勤める	ツトメル	つとめる	UniDic-1.3.12: 「勤める」 「務める」 「努める」 「努」はヲ格を取らないと考えられるため、分類は比較的容易と想われる。
		勤める	
		務める	
努める	ツトメル	つとめる	
		努める	
		勉める	
		力める	
溶かす	トカス	とかす	UniDic-1.3.12: 「溶かす」 「梳かす」
		溶かす	
		解かす	
		融かす	
		熔かす	
		鑠かす	
梳かす	トカス	梳かす	
溶ける	トケル	とける	UniDic-1.3.12: 「溶ける」 「解ける」
		溶ける	
		融ける	
		熔ける	
		積ける	
解ける	トケル	解ける	
溶く	トク	とく	UniDic-1.3.12: 「溶く」 「解く」 「説く」 「髪をトク」の例が出現した場合、別語彙素「梳」とする。
		溶く	
解く	トク	とく	
		解く	
		積く	
説く	トク	とく	
		説く	
飛ばす	トバス	とばす	UniDic-1.3.12: 「飛ばす」 「跳ばす」
		飛ばす	
		跳ばす	
		疾ばす	
閉じる	トジル	とじる	UniDic-1.3.12: 「閉じる」 「綴じる」
		閉じる	
綴じる	トジル	とじる	
飛ぶ	トブ	とぶ	UniDic-1.3.12: 「飛ぶ」 「跳ぶ」
		飛ぶ	
		翔ぶ	
		跳ぶ	
		疾ぶ	

語彙素	語形	書字形	備考
取らす	トラス	とらす	UniDic-1.3.12: 「取らす」 「撮らす」
		取らす	
		撮らす	
止まる	トマル	とまる	UniDic-1.3.12: 「止まる」 「泊まる」 「留まる」 鳥などが物につかまって休む意や外れたり離れたりしない状態を保つ意で、「止」「留」の両方が使われ得るなど明確に分けることが難しい。
		止まる	
		停まる	
		留まる	
泊まる	トマル	とまる	
		泊まる	
止める	トメル	とめる	UniDic-1.3.12: 「止める」 「泊める」 「停める」
		止める	
		停める	
		駐める	
		留める	
捕らえる	トラエル	とらえる	UniDic-1.3.12: 「捕らえる」 「捉える」
		捕らえる	
		捉える	
		把える	
		囚える	
捕らわれる	トラワレル	とらわれる	UniDic-1.3.12: 「捕らわれる」 「囚われる」
		捕らわれる	
		捉われる	
		囚われる	
		擒われる	
		執われる	
取れる	トレル	とれる	UniDic-1.3.12: 「取れる」 「捕れる」 「採れる」 「摂れる」 「撮れる」 「漁れる」 「獲れる」 「穫れる」
		取れる	
		採れる	
		獲れる	
		穫れる	
		除れる	

語彙素	語形	書字形	備考
取る	トル	とる	UniDic-1.3.12: 「取る」「執る」「捕る」「採る」「撮る」「録る」「盗る」
		取る	
		撮る	
		採る	
		盗る	
		録る	
		捕る	
		執る	
		撰る	
		獲る	
		穫る	
		秉る	
		奪る	
		征る	
除る			
仇る			
直す	ナオス	なおす	UniDic-1.3.12: 「直す」「治す」
		直す	
		治す	
		療す	
直る	ナオル	なおる	UniDic-1.3.12: 「直る」「治る」
		直る	
		治る	
		癒る	
泣く	ナク	なく	UniDic-1.3.12: 「泣く」「鳴く」 どの辞書も、主体が人か動物かで漢字を使い分ける方針を取る。
		泣く	
		歎く	
		哭く	
		号く	
鳴く	ナク	なく	
		鳴く	
		啼く	
無くす	ナクス	なくす	UniDic-1.3.12: 「無くす」「亡くす」 死亡の意は「亡」とする。
		無くす	
		失くす	
		喪くす	
亡くす	ナクス	なくす	
		亡くす	
		喪くす	

語彙素	語形	書字形	備考			
無くなる	ナクナル	なくなる	UniDic-1.3.12: 「無くなる」「亡くなる」			
		無くなる				
		失くなる				
亡くなる	ナクナル	なくなる				
		亡くなる				
		歿くなる				
		没くなる				
成す	ナス	なす		UniDic-1.3.12: 「成す」「済す」		
		成す				
		生す				
		為す				
済す	ナス	済す				
成る	ナル	なる	UniDic-1.3.12: 「成る」「生る」 「成」は格助詞「から」を取り、「生」は格助詞「が」「に」を取るといように格の違いがある。			
		成る				
		為る				
		興る				
生る	ナル	なる				
		生る				
慣れる	ナレル	なれる			UniDic-1.3.12: 「慣れる」「熟れる」「狎れる」 「慣」「熟」の書き分けが辞書により異なる。	
		慣れる				
		馴れる				
		狎れる				
		熟れる				
乗せる	ノセル	のせる		UniDic-1.3.12: 「乗せる」「載せる」		
		乗せる				
		搭せる				
		載せる				
伸べる	ノベル	伸べる	UniDic-1.3.12: 「伸べる」「延べる」			
		延べる				
		展べる				
伸ばす	ノバス	のばす			UniDic-1.3.12: 「伸ばす」「延ばす」	
		伸ばす				
		延ばす				
伸びる	ノビル	のびる				UniDic-1.3.12: 「伸びる」「延びる」
		伸びる				
		延びる				
		伸びる				
望む	ノゾム	のぞむ		UniDic-1.3.12: 「望む」「臨む」 仮名書き例については、ヲ格を取る場合は「望」とし、ニ格を取る場合は「臨」とする。		
		望む				
		希む				
臨む	ノゾム	のぞむ				
		臨む				

語彙素	語形	書字形	備考
上る	ノボル	のぼる	UniDic-1.3.12: 「上る」「昇る」「登る」
		上る	
		昇る	
		登る	
乗る	ノル	のる	UniDic-1.3.12: 「乗る」「載る」
		乗る	
		載る	
測る	ハカル	はかる	UniDic-1.3.12: 「測る」「図る」「諮る」 「諮」は二格を取り、他とは取る格が異なる。
		測る	
		計る	
		量る	
		度る	
図る	ハカル	はかる	
		図る	
		謀る	
諮る	ハカル	はかる	
		諮る	
履く	ハク	はく	UniDic-1.3.12: 「履く」「佩く」
		履く	
		穿く	
佩く	ハク	はく	
		佩く	
掃く	ハク	はく	UniDic-1.3.12: 「掃く」「刷く」
		掃く	
刷く	ハク	刷く	
剥げる	ハゲル	はげる	UniDic-1.3.12: 「剥げる」「禿げる」
		剥げる	
禿げる	ハゲル	はげる	
		禿げる	
放す	ハナス	はなす	UniDic-1.3.12: 「放す」「離す」
		放す	
		離す	
跳ねる	ハネル	跳ねる	UniDic-1.3.12: 「跳ねる」「撥ねる」
		躍ねる	
撥ねる	ハネル	はねる	
		撥ねる	
		勿ねる	
払う	ハラウ	はらう	UniDic-1.3.12: 「払う」「祓う」 「ほこりをハラウ」を「払う」とすると、「払」と「祓」との区別はなくなる。
		払う	
		攘う	
		祓う	
張る	ハル	はる	UniDic-1.3.12: 「張る」 各辞書とも自他で大きく二分するが、用字上の区別がないため、自他で分けることはしない。
		張る	
		貼る	

語彙素	語形	書字形	備考
控える	ヒカエル	ひかえる	UniDic-1.3.12: 「控える」 自他の区別があるが、「ハル(張)」と同様の理由により、自他で分けることはしない。
		控える	
		扣える	
引き上げる	ヒキアゲル	引き上げる	UniDic-1.3.12: 「引き上げる」 自他の区別があるが、「ハル(張)」と同様の理由により、自他で分けることはしない。
		引き揚げる	
		曳き揚げる	
引く (自動詞)	ヒク	ひく	UniDic-1.3.12: 「引く」「弾く」「挽く」「轆く」「魅く」「退く」「牽く」 大きく自他で分ける。 他動詞について、楽器をヒクという意の「弾」、押し潰すという意の「挽」、その他一般的なヒッパルという意の「引」に分ける。
		引く	
		退く	
引く (他動詞)	ヒク	ひく	
		引く	
		惹く	
		曳く	
		牽く	
		彎く	
		延く	
		魅く	
索く			
弾く	ヒク	ひく	
		弾く	
		奏く	
挽く	ヒク	ひく	
		挽く	
		碾く	
		轆く	
引ける	ヒケル	ひける	UniDic-1.3.12: 「引ける」
		引ける	
吹く	フク	ふく	UniDic-1.3.12: 「吹く」「噴く」 各辞書とも自他で大きく二分するが、実例を見ると、書き分けの基準が明確ではない。
		吹く	
		噴く	
振るう	フルウ	ふるう	UniDic-1.3.12: 「振るう」「奮う」「震う」「揮う」「篩う」 『国語大』の分類に従う。
		振るう	
		奮う	
		揮う	
		顫う	
震う	フルウ	震う	
		慄う	
篩う	フルウ	ふるう	
		篩う	

語彙素	語形	書字形	備考
触れる	フレル	ふれる	UniDic-1.3.12: 「触れる」「振れる」「狂れる」
		触れる	
振れる	フレル	ふれる	
		振れる	
狂れる	フレル	ふれる	
		狂れる	
参る	マイル	まいる	UniDic-1.3.12: 「参る」
		参る	
		詣る	
待つ	マツ	まつ	UniDic-1.3.12: 「待つ」「俟つ」
		待つ	
		俟つ	
		俟つ	
祭る	マツル	まつる	UniDic-1.3.12: 「まつる」「祭る」「奉る」「纏る」 「まつる」は、本来「纏る」に統合すべきもの。
		祭る	
		祀る	
		祠る	
奉る	マツル	奉る	
纏る	マツル	まつる	
		纏る	
見せる	ミセル	みせる	
		見せる	
		診せる	
魅せる	ミセル	魅せる	
見る	ミル	みる	UniDic-1.3.12: 「見る」
		見る	
		看る	
		視る	
		観る	
		診る	
		覧る	
		瞥る	
設ける	モウケル	もうける	UniDic-1.3.12: 「設ける」「儲ける」
		設ける	
儲ける	モウケル	もうける	
		儲ける	
持つ	モツ	もつ	UniDic-1.3.12: 「持つ」
		持つ	
		保つ	
		有つ	
		以つ	

語彙素	語形	書字形	備考
焼く	ヤク	やく	UniDic-1.3.12 : 「焼く」「妬く」
		焼く	
		灼く	
		妬く	
		嫉く	
止める	ヤメル	やめる	UniDic-1.3.12 : 「止める」「辞める」
		止める	
		辞める	
		已める	
		廢める	
		罷める	
		退める	
遣る	ヤル	やる	UniDic-1.3.12 : 遣る
		遣る	
		演る	
		殺る	
		犯る	
		姦る	
		飲る	
		行る	
読む	ヨム	よむ	UniDic-1.3.12 : 「読む」
		読む	
		詠む	
		誦む	
		訓む	
寄る	ヨル	よる	UniDic-1.3.12 : 「寄る」「抛る」「因る」
		寄る	
因る	ヨル	よる	
		因る	
		依る	
		抛る	
		縁る	
		由る	
		倚る	
		仍る	
分かれる	ワカレル	わかれる	UniDic-1.3.12 : 「分かれる」「別れる」 「分」「別」とを書き分けようとする用字意識があることから、二つの語彙素を立てる。
		分かれる	
		岐れる	
別れる	ワカレル	わかれる	
		別れる	
		訣れる	

語彙素	語形	書字形	備考
沸く	ワク	わく	UniDic-1.3.12: 「沸く」「涌く」 感情・歓声等について「沸」と「涌」のどちらで書くか明確でない。
		沸く	
		涌く	
		湧く	

付表2 同語異語判別結果の一覧（形容詞）

語彙素	語形	書字形	備考
温かい	アタタカイ	あたたかい	UniDic-1.3.12：「温かい」「暖かい」 各辞書とも1項目で、用字注記がない。 仮名書き例を見ると、「温」「暖」の区別の付きにくいものが多い。
		温かい	
		暖かい	
荒い	アライ	あらい	UniDic-1.3.12：「荒い」「粗い」
		荒い	
粗い	アライ	あらい	
		粗い	
暑い	アツイ	あつい	UniDic-1.3.12：「暑い」「熱い」「厚い」
		暑い	
熱い	アツイ	あつい	
		熱い	
厚い	アツイ	あつい	
		厚い	
		篤い	
		敦い	
旨い	ウマイ	うまい	UniDic-1.3.12：「甘い」 語彙素を「甘い」から「旨い」へ変更。
		旨い	
		甘い	
		美味しい	
		巧い	
		上手い	
偉い	エライ	えらい	UniDic-1.3.12：「偉い」
		偉い	
		豪い	
遅い	オソイ	おそい	UniDic-1.3.12：「遅い」
		遅い	
		晏い	
		晩い	
賢い	カシコイ	かしこい	UniDic-1.3.12：「賢い」
		賢い	
		畏い	
辛い	カライ	辛い	UniDic-1.3.12：「辛い」
		辣い	
		鹹い	

語彙素	語形	書字形	備考
固い	カタイ	かたい	UniDic-1.3.12: 「固い」「難しい」
		固い	
		堅い	
		硬い	
		確い	
		剛い	
難しい	カタイ	難しい	
悲しい	カナシイ	かなしい	UniDic-1.3.12: 「悲しい」
		哀しい	
		悲しい	
怖い	コワイ	こわい	UniDic-1.3.12: 「怖い」「強い」 「怖」と「強」とは意味が異なるので、二つの語彙素に分ける。 仮名書き例の中に「強」の意のものがわずか見られるものの、一律に「怖」と解析されたとしても大きな問題はないとする。
		怖い	
		恐い	
		怕い	
強い	コワイ	こわい	
		強い	
		剛い	
長い	ナガイ	ながい	UniDic-1.3.12: 「長い」
		永い	
		長い	
早い	ハヤイ	はやい	UniDic-1.3.12: 「早い」「速い」 仮名書き例には「早」「速」が混在している。 書字形「疾」は「早」「速」のどちらの意味か判別しにくく、このことから一つの語彙素に統合するのが適当。
		早い	
		速い	
		捷い	
		疾い	
		迅い	
良い	ヨイ	よい	UniDic-1.3.12: 「良い」 副詞「良く」は別語彙素。 「うまく」「十分に」「たびたび」の意の連用修飾の用例は、副詞とする。
		良い	
		善い	
		好い	
		佳い	
		快い	
		悦い	
		宜い	

付表3 同語異語判別結果の一覧（名詞）

語彙素	語形	書字形	備考
明日	アシタ	あした	UniDic-1.3.12: 「明日」「朝」
		明日	
		朝	
		旦	
		晨	
当たり	アタリ	当たり	UniDic-1.3.12: 「当たり」「辺り」
		中り	
辺り	アタリ	あたり	
		辺	
		辺り	
網	アミ	あみ	UniDic-1.3.12: 「網」「編み」
		網	
編み	アミ	編み	
上	ウエ	うえ	UniDic-1.3.12: 「上」「上（接尾辞）」
		上	
		主上	
		表	
上（接尾）	ウエ	上	
うち（代名）	ウチ	うち	UniDic-1.3.12: 「うち（代名）」「内」「家」 「内」と「家」との使い分けは雑誌九十種に準拠する。 内：かさの～／朝の～に仕事をする／…する～に 家：～が建つ／～の女房／～の人／～の社長 代名詞「うち」は「うちは」「うちら」等の場合のみとし、「うちの父」のような例は代名詞としない。
		内	
内	ウチ	うち	
		内	
		中	
		裡	
		裏	
家	ウチ	うち	
		家	
御上	オカミ	お上	
		御上	
		主上	
女将	オカミ	おかみ	
		女将	
		女主	
		お内儀	

語彙素	語形	書字形	備考	
伯母	オバ	おば	UniDic-1.3.12: 「伯母」「祖母」 「祖母」には古典語のフラグを立てる。	
		伯母		
		叔母		
		小母		
		姑母		
		姨		
祖母	オバ	祖母		
表	オモテ	おもて	UniDic-1.3.12: 「表」 仮名書き例は、「顔」の意が明確な場合に限り「面」とする。	
		表		
面	オモテ	おもて		
		面		
係	カカリ	かかり	UniDic-1.3.12: 「係り」 「係」は「庶務係」等の担当者の意のものとする。それ以外は、「掛」とする。	
		係		
		掛		
掛かり	カカリ	かかり		
		掛かり		
		係り		
籠	カゴ	かご	UniDic-1.3.12: 「籠」「駕籠」	
		籠		
		籠		
		籠		
駕籠	カゴ	かご		
		駕籠		
		駕籠		
影	カゲ	かげ	UniDic-1.3.12: 「影」「陰」 「オカゲサマ」の「カゲ(陰・蔭)」と「影」とを同一語彙素にまとめるのは問題があると思われる。	
		影		
陰	カゲ	かげ		
		陰		
		蔭		
		翳		
傘	カサ	かさ	UniDic-1.3.12: 「傘」「笠」「量」「嵩」 「傘」「笠」「量」はアクセントが同じ。語源も同じと思われる。	
		傘		
		笠		
		量		
嵩	カサ	かさ		
		嵩		
風	カゼ	かぜ	UniDic-1.3.12: 「風」「風邪」	
		風		
風邪	カゼ	かぜ		
		風邪		

語彙素	語形	書字形	備考
語り	カタリ	かたり	UniDic-1.3.12 : 「語り」 「騙り」
		語り	
騙り	カタリ	かたり	
		騙り	
角	カド	かど	UniDic-1.3.12 : 「角」 「廉」 「才」 「門」
		角	
廉	カド	かど	
		廉	
才	カド	かど	
		才	
門	カド	かど	
		門	
釜	カマ	かま	UniDic-1.3.12 : 「釜」 「窯」
		釜	
		罐	
窯	カマ	窯	
		竈	

資 料

要 注 意 語

1 接頭的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
1.1	アイ 相	接頭辞 「相」と1最小単位との結合体が名詞である場合は除く。（相=乗り，相=討ち）			
	【例】 二氏其出身の方向に於て甚だ【相】異なる者あり、 経済雑誌は【相ひ】變らず冷々然たる風情にて、				
1.2	オ 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。 〔御足，御家（「御家芸」の場合），御出で，おいた，御薄，御かか，御鏡，御欠き，御陰，御敷（オカズ），御河童，おかま，女将（オカミ），御上（オカミ），御殻，御厠（オカワ），御冠（オカンムリ），御木曳き，御清（オキヨ），御形（オギョウ），御髮（オグシ），御事（オコト）（代名詞の場合），お好み（焼き），御御（オゴ），御御（オゴウ），おこわ，御下げ，御差し，御薩，御座形（オザナリ），おぎぶ，御三（オサン），御汐井（「御汐井取り」の場合），おしっこ，御絞り，御湿（オシメ），おじや，おしゃぶり，お釈迦，お洒落，御床（オジョウ），御節（オセチ），御宅（代名詞の場合），御多福，御陀仏，御玉，御頭（オツム），御手（「御手上げ」「御手の物」「御手塩（オテシヨ）」の場合），御出来（オデキ），御出座（オデマシ），御転婆，御伽（オトギ），御腹（オナカ），御成り，御握り，お主（代名詞の場合），御寝しょ，御眠（オネム），御萩，御箱（オハコ），御早う，お払い（「お払い箱」の場合），おひたし，お冷や，御袋，御古（オフル），御前（代名詞の場合），御負け，御座（オマシ），おませ，御祭り騒ぎ，おまる，御巡り（オマワリ），御身（オミ），御娘（オムス），御結び，御襠褌（オムツ），御目見え，御許（オモト），御物（オモノ），御漏らし，御八つ（オヤツ），御寝る（オヨル）〕			
	【例】 本義などという者は到底面白きものならねば読む【お】方にも退屈なれば 坊主の読む【お】経の文句を聞くが如く、 しばらく【御】待ち候へ。				
1.3	オン 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。 〔御衣（オンヅ），御曹司（オンゾウシ），御大（オンタイ），御中（オンチュウ），御殿油（オントナブラ），御身〕			
	【例】 客は外国の人多く、【おん】国の学生なども見えしやうなりき。 【御】繪を見たまひつつ感じたまへる氣色にて、				
1.4	カク 各	接頭辞 漢語の1最小単位と結合したものは除く。（各=国，各=地）			
	【例】 彼れの作は【各】頁（ページ）皆な光彩に満ちて居る。 而して部の下には係があり、【各】係には主任が置いてある、				
1.5	ゴ 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。 〔御器（ゴキ），御形（ゴギョウ），御供（ゴク），御後（ゴゴ），御座，御所，御新，御仁，御神火，御饌（ゴセン），御前，御託，御亭，御殿（ゴテン），御伝，御悩，御飯，御辺（代名詞の場合），御免，御覽，御料，御寮，御霊（ゴリョウ）〕			
	【例】 切歯をしてもどかしがられたるは【御】尤（もつとも）千万とおぼゆ。 鳳鳥河圖獲麟の筆は【御】幣かつぎたるを免れず				
1.6	コン 今	接頭辞 漢語の1最小単位と結合したものは除く。（今=回，今=度）			
	【例】 【今】プロジェクトの計画研究メンバー10人のうち 【今】シーズンは計約4トンの出荷を見込んでいる。				

- 1.7 **シヨ** 接頭辞
諸 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(諸=国, 諸=所)
【例】
【諸】伺(うかがひ)、上申、請訓書等は、
- 1.8 **ゼン** 接頭辞
全 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(全=国, 全=社)
【例】
『改定註釋 樗牛全集』【全】七卷
甲状腺中の【全】沃度(ようど)量の60%を含める酸に
- 1.9 **タイ** 名詞-普通名詞-一般
対 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(対=米, 対=人)
【例】
先づ【対】露西亞侵入の方面よりいへば、
- 1.10 **ホノ** 接頭辞
仄 「ほのか」「ほのめく」「ほのぼの」「ほのめかす」は除く。
【例】
【ほの】ぐらき壁畫の彌陀の慈眼光りぬ
鉢の梅が香【ほの】かをりて、
- 1.11 **ホン** 接頭辞
本 「この」の意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。(本=件)
【例】
【本】ランプ中にて最緊要素の一たる眞空は、
- 1.12 **ミ**
御 次に挙げるものは後の部分と併せて1最小単位とする。
[御明(ミアカシ)、御生(ミアレ)、帝(ミカド)、御溝(ミカワ)、御酒(ミキ)、御籤(ミクジ)、御髮(ミグシ)、御座(ミクラ)、御食(ミケ)、御衣(ミケシ)、御子(ミコ)、御輿、御言(ミコト)、御簾、御衣(ミゾ)、御台、御嶽(ミタケ)、御靈(ミタマ)、御手洗(ミタラシ)、御張(ミチョウ)、御堂、御水(ミモイ)、御息所(ミヤストコロ)、御幸(ミユキ)、御代(ミヨ)]
【例】
松竹の飾り、日の【御】旗、
三種の神器の一なる八咫の【御】鏡を御神體として、

2 接尾的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
2.1	アガリ 上がり	接尾辞-名詞的-一般 前にその職業・身分だった者の意。			
	【例】 江の島の岩本院の稚兒【あがり】				
2.2	アグネル あぐねる	動詞-非自立可能	文語下二段-ナ行(下 一段-ナ行)	動詞連用形	文語: アグヌ
	【例】 信直が納得すまい、と考へ【あぐね】ているうちに、 多くの国会議員が答えを出し【あぐね】、				
2.3	アソバス 遊ばす	動詞-非自立可能	五段-サ行(文語四段 -サ行)	動詞型活用語には連 用形	

【例】
断じて救ひ【得】べき望みなきなり
中止又は解散の處分を、爲し【得る】や否や

2. 13 **オエル
終える** 動詞-非自立可能 下二段-ア行-一般 (文語下二段-ハ行-一般) 動詞連用形 文語：オウ

【例】
一大冒険事を成し【終へ】たる心地して
机の上に、讀み【了へ】たる書を閉ぢ、

2. 14 **オオセル
果せる** 動詞-非自立可能 下二段-サ行-一般 (文語下二段-サ行) 動詞連用形 オオス
「すっかり終える」の意。

【例】
欺き【果せ】給はんとは御情無き御心なり、
意志、また強くて、目的し【おほす】。

2. 15 **オクレル
遅れる** 動詞-非自立可能 下二段-ラ行-一般 (文語下二段-ラ行) 動詞連用形 文語：オクル

【例】
抑も又た時勢に取【後れ】たる思想に非ずや、
あとの一艘は、遂に乗り【おくれ】てけり。

2. 16 **オル
居る** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般 (文語四段-ラ行/文語ラ行変格) 動詞連用形 文語ラ変：オリ
動作・状態の継続・進行を表す。

【例】
天下の財が安田氏に集り【居り】しが爲のみ
先刻購入せし切符には未だ鉄も入れ【居ら】ざる故、

2. 17 **オワシマス
おわします** 動詞-非自立可能 五段-サ行 (文語四段-サ行) 連用形
動作・状態の継続・進行を表す。

【例】
誰か又皇祖神靈の長なへに鎮まり【おはします】を疑ひ奉るものあらん。

2. 18 **オワス
おわす** 動詞-非自立可能 文語サ行変格-ス/文語四段-サ行 動詞連用形
動作・状態の継続・進行を表す。

【例】
羅漢の如く椽頭に並び【座せ】り、
僧正の經讀み【おはす】月夜哉

2. 19 **オワル
終わる** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般 (文語四段-ラ行) 動詞連用形

【例】
云ひ【終つ】て大に哭するを
天鳴り地響きて世は魔界と化し【終れ】るか。

2. 20 **カ
化** 接尾辞-名詞的-一般
漢語の1最小単位と結合したものは除く。(特=化, 液=化)

【例】
イオン【化】

2. 21 **ガカル
がかる** 接尾辞-動詞的 五段-ラ行-一般 (文語四段-ラ行) 動詞型活用語には連用形

【例】
其色白み【がかり】、
芝居【がかつ】た挿話

- 2.22 **カタ方** 接尾辞-名詞的-一般 動詞連用形
「仕方」の「方」は除く。
- 【例】
餘りなる言ひ【方】と心の中に思ひしなり、
寄附金の用ゐ【方】、使ひ【方】、
- 2.23 **ガタイ
難い** 接尾辞-形容詞的 形容詞-タイ（文語形容詞-ク） 動詞連用形 文語：ガタン
「有り難い」の「難い」は除く。
- 【例】
一々その名を擧げ【がたし】といへども
必ずしも平均に同様の長壽命を保つべしとは云ひ【難き】も、
- 2.24 **カタガタ
旁** 接尾辞-名詞的-一般
- 【例】
昨日の禮【旁旁】小柴須藤金澤等の宅を廻勤したるに
- 2.25 **ガチ
勝ち** 接尾辞-形状詞的 動詞型活用語には連用形
- 【例】
天氣陰鬱にして雨【勝】なるにも拘はらず、
社會にあり【がち】の事なるべし、
徳義の養成を怠り【勝】なりし以上、
萬事常に扣（ひかえ）目【勝ち】なるが故に
- 2.26 **ガテラ
がてら** 接尾辞-名詞的-副詞可能 動詞型活用型には連用形
- 【例】
みやこ人涼み【がてら】にきても見よ
嬢様のお傳（もり）【がてら】奥様のお侍（つき）として
- 2.27 **カネル
兼ねる** 接尾辞-動詞的 下一段-ナ行（文語下二段-ナ行） 動詞連用形 文語：カヌ
- 【例】
流石に當路の者も扱ひ【かね】て、
日常心得べき學科を修め【兼ね】て
- 2.28 **ガル
がる** 接尾辞-動詞的 五段-ラ行-一般（文語四段-ラ行） 形容詞型活用語には語幹
助動詞「たがる」の「がる」は除く。
- 【例】
漢學者の有がた【がる】經書と申すも
いや【がる】客を、強て止めて、
- 2.29 **カワス
交わす** 動詞-非自立可能 五段-サ行（文語四段-サ行） 動詞連用形
「互いに～する」の意。「差し交わす」「取り交わす」は除く。
- 【例】
深くも言ひ【交はし】し我を忘れて、
皆いざや快く酌み【交さ】ん
- 2.30 **カン
間** 接尾辞-名詞的-副詞可能 漢語の1最小単位と結合したものは除く。（空=間、車=間）

【例】
 クラスメート【間】に文學研究會を作つたり、
 前橋より線路を群馬縣澁川まで凡十一哩（マイル）【間】延長の議を出願す、

2. 31 **ギミ** 接尾辞-名詞的-一般
君

【例】
 姫【君】
 母【君】

2. 32 **キル** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般（文 動詞連用形
切る 語四段-ラ行）
 「すっかり～し終える」「ひどく～する」の意。

【例】
 分り【きつ】たる次第
 蟬啼くや乾き【切つ】たる石佛
 其甚だ馬鹿氣【切】たる事を認めれば

2. 33 **クサイ** 接尾辞-形容詞的 形容詞-サイ 形容詞型活用語には 文語：クサシ
臭い 語幹
 「～めいた感じがする」の意。望ましくない意を強める用法。「かび臭い」「焦げ臭い」の「くさい」は除く。

【例】
 青【くさい】ほど未熟な私に
 照れ【くさく】て言えなかつた「ありがとう」。
 米国よりずっと古【くさく】なつてしまった。

2. 34 **クダサル** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-アル-サル 動詞型活用語には連
下さる （文語四段-ラ行） 用形

【例】
 ギブミーレーターをご覧【下さい】ね。
 ご意見、ご感想をお寄せ【下さい】。

2. 35 **クダサレル** 動詞-非自立可能 下一段-ラ行-一般 文語：クダサル
下される （文語下二段-ラ行）

【例】
 何卒朋輩の人々に御傳へ【下れ】度伏して願上候。

2. 36 **グルミ** 接尾辞-名詞的-一般
ぐるみ 「そのものをひっくるめて全部」の意。

【例】
 大雅寺を寺【ぐるみ】賣るから
 盆【ぐるみ】推進めた番茶の土瓶を、

2. 37 **クレル** 動詞-非自立可能 下一段-ラ行（文語下 動詞連用形 文語：クル
呉れる 二段-ラ行）
 「～てくれる」の意。「さつ呉れる」は除く。

【例】
 余等の爲めに非常なる世話をなし【くるる】とともに
 余等一行を送ることを約諾し【呉れ】たれば、

2. 38 **クン** 接尾辞-名詞的-一般
君 「同君」の「君」は除く。

【例】
 芳川顯正【君】談
 A【君】
 警部【君】

2. 39 **ゲ**
気 接尾辞-形状詞的 動詞型活用語には連用形、形容詞型活用語には語幹
- 【例】
いと趣味あり【げ】に説明し、
嬉し【げ】に笑ひて、
彼が如く何【氣】なしに數言にて説去んとするは
2. 40 **ケイ**
系 接尾辞-名詞的-一般 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(文=系, 日=系)
- 【例】
わたしも犬【系】だし
癒やし【系】、癒やし顔。
2. 41 **ゴ**
後 接尾辞-名詞的-一般 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(戦=後, 老=後)
- 【例】
蛤門の戦い【後】、
2. 42 **ゴ**
御 接尾辞-名詞的-一般
- 【例】
手負の苦痛を忍びつつ、親【御】の前に物語りたる戦況を讀むが如き心地せらる、
さる富豪の妾とやらになり給ひたる母【御】なれば、
2. 43 **コト**
事 名詞-普通名詞-一般 名称を表す名詞や代名詞に付く用法。
- 【例】
へコキムシ【こと】ミイデラゴミムシは黄色と黒の模様。
私【こと】
2. 44 **ゴト**
ごと 接尾辞-名詞的-副詞 可能
「～も一緒に」の意。
- 【例】
焼網の上の干物を棒【ごと】咬へて悠々退却、
2. 45 **ゴト**
毎 接尾辞-名詞的-一般 そのもの一つ一つ、その時その時の意。
- 【例】
卷【毎】に文體も異なり
彼は日【毎】に書を寄せしかば
2. 46 **コナス**
熟す 動詞-非自立可能 五段-サ行(文語四段 動詞連用形-サ行)
「うまく～する」の意。
- 【例】
洋服を甘く着【こなす】可し、
百僚を使ひ【こなす】ことも不得手の方なれば
2. 47 **サ**
さ 接尾辞-名詞的-一般 形容詞型活用語語幹
「そうだ」「過ぎる」が接続するときの「なさ」「良さ」の「さ」、ケシ型形容詞に付く「さ」, 「憂さ」の「さ」は除く。
- 【例】
夏の暑【さ】に困りたり。
斯る事に至れる悔し【さ】よ

2. 48 **サス
さす** 動詞-非自立可能 五段-サ行（文語四段
-サ行）
 「させる」の意。
【例】
幾十年前の革命は、私の家を貧しく【さし】て、
可愛い眼をパチクリ【さし】て、
2. 49 **サス
止す** 動詞-非自立可能 五段-サ行（文語四段 動詞連用形
-サ行）
【例】
幾千人のほむるよりうれしと斗りいひ【さし】て
われは読み【させ】る集を閉ぢ、
2. 50 **サマ
様** 接尾辞-名詞的-一般
【例】
これぞ、出雲の神【さま】の御情かと思へば、
赤穴のばあ【さま】は御まめに候や。
殿【様】の馬鹿らしきをも厭はざるなり、
2. 51 **サン
さん** 接尾辞-名詞的-一般
【例】
恐く東京裏店の御かみ【さん】に類せん
とても十五六の娘【さん】では不足なる故。
2. 52 **シキ
式** 接尾辞-名詞的-一般
形式・方法などの意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。（洋=式，正=式）
【例】
ゴシツク【式】大寺院の細長き尖塔、
2. 53 **シナ
しな** 接尾辞-名詞的-副詞
可能
【例】
帰り【しな】に一撃されて
2. 54 **ジミル
染みる** 接尾辞-動詞的 上一段-マ行（文語上
二段-マ行） 文語：ジム
【例】
垢【染み】た単衣に古帽を戴いて、
ハイカラ【染み】た洋服姿の觀山氏
2. 55 **ジュウ
中** 接尾辞-名詞的-副詞
可能
その範囲すべてに渡っている意。
【例】
體【中】が凍るかと思はれる風の吹く田圃道から
これにても島【中】第一の洒落たる家に御座候
一年【中】絶へず競馬を行ふ事となり、
2. 56 **ジョウ
上** 接尾辞-名詞的-副詞
可能
漢語の1最小単位と結合したものは除く。（機=上，車=上）
【例】
爲替【上】輸入を利し輸出を不利とすることとなり、
2. 57 **ジョウ
状** 接尾辞-名詞的-一般
「～の形・有り様」の意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。（液=状）

【例】
両手にて貝【状】の水盤を捧げ、
美麗なる帯【状】若くは縞【状】の構造を呈するに至れるものあり。

2. 58 **スギル
過ぎる** 動詞-非自立可能 上一段-ガ行（文語上
二段-ガ行） 動詞型活用語には連
用形，形容詞型活用
語には語幹 文語：スグ

「適当な度合いを超える」の意。

【例】
流石に戯言を云ひ【過ぎ】たり
餘りおとなし【過ぎ】て、勇悍の美德を缺ぐに至れり

2. 59 **ズク
づく** 接尾辞-名詞的-一般

【例】
面白【づく】に力み出す。

2. 60 **ズクメ
尽くめ** 接尾辞-名詞的-一般

【例】
右も左も金【づくめ】

2. 61 **スル
為る** 動詞-非自立可能 サ行変格-為ル（文語
サ行変格-ス） 文語：ス
漢語の1最小単位と結合したものは除く（対=する，信=ずる）。「～んずる」という形
式は除く（甘ん=ずる，重ん=ずる）。

【例】
戀【する】眼よりも熱く
獨立國の体面を全ふ【し】たるものなれば

2. 62 **セイ
性** 接尾辞-名詞的-一般
物事の性質・傾向の意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。（特=性，急=性）

【例】
アルカリ【性】の亞硫酸曹達溶液を取り
ブラックベリーはつる【性】の植物なので、

2. 63 **ソウ
そう** 形状詞-助動詞語幹 動詞型活用語には連
用形，形容詞型活用
語には語幹
様態の助動詞「そうだ」の語幹に当たるもの。

【例】
漢人にて書き【そふ】なる論文をものせられし時代もありき、
強【さう】に腰の抜けてる多数黨
不思議【さう】に四邊を見廻し、

2. 64 **ソウ
そう** 名詞-助動詞語幹 終止形
伝聞の助動詞「そうだ」の語幹に当たるもの。

【例】
コラーゲンの量やキメの細かさまで分かる【そう】
「マジシャン」というニックネームで呼ばれている【そう】だが、
四十四年もかかる【そう】です。

2. 65 **ソコナウ
損なう** 動詞-非自立可能 五段-ワア行-ナウ
（文語四段-ハ行-ナ
ウ） 動詞連用形

【例】
漢學者の家に生れて、漢學者になり【損なひ】、

2. 66 **ソコネル
損ねる** 動詞-非自立可能 下一段-ナ行（文語下
二段-ナ行） 動詞連用形 文語：ソコヌ

- 2.76 チュウ 接尾辞-名詞的-副詞
中 可能
「～の内部にある」「～の範囲内にある」「～の状態にある」の意。
漢語の1最小単位と結合したものは除く。(空=中)
【例】
純金を坩堝(るつぼ)【中】に容れ、
我國の果物【中】米國に販路を開くべき見込あるは、
心易かる航行は一年【中】半日も有難きなり。
- 2.77 ツイデ 名詞-普通名詞-一般
序で
【例】
お祝い【ついで】に、新しいのをお買いなさい。
くたびれ【ついで】
- 2.78 ツキ 接尾辞-名詞的-一般
付き
「札付き」(知れわたっていること、悪い評判が世間に広まっている人の意)は除く。
【例】
まず仮名【附】の訳書を先にし、追々漢文の訳本を読むべし。
果實は皮【付】の儘手にて四つに切り
- 2.79 ツクス 動詞-非自立可能 五段-サ行(文語四段 動詞連用形
尽くす -サ行)
「すっかり～する」の意。
【例】
名利共に失ひ【盡し】て然かも失ふて得る所なきものなれば
希臘拉典の古文を悉皆讀み【盡す】ことに傾心せり
- 2.80 ツケル 動詞-非自立可能 下一段-カ行(文語下 動詞連用形 文語：ツク
付ける 二段-カ行)
「～し慣れている」の意。
【例】
宗教家は辯舌に於ても不斷からしやべり【つけ】て居るので、
どうも飲み【付け】ないもんですから。
- 2.81 ツコ 接尾辞-名詞的-一般 動詞型活用語には連
っこ 用形
「～すること」の意。
【例】
事業は逆も起り【っこ】はない。
慣【っこ】になつてゐるから
- 2.82 ツコ 接尾辞-名詞的-一般 動詞型活用語には連
っこ 用形
「～比べ」「互いに～する」の意。
【例】
山上で辨當を食べて馳け【っこ】をして下る
茄子や胡瓜は紺や納戸の法被が引張り【っこ】、
- 2.83 ツヅク 動詞-非自立可能 五段-カ行-一般(文 動詞連用形
続く 語四段-カ行)
「引き続く」「打ち続く」等、動作継続の動詞に接続しないものは除く。
【例】
兎角雨のみ降り【續き】候ひぬ。
- 2.84 ツヅケル 動詞-非自立可能 下一段-カ行(文語下 動詞連用形 文語：ツヅク
続ける 二段-カ行)
「打ち続ける」「打(ぶ)つ続ける」等、動作継続の動詞に接続しないものは除く。

【例】
 昨年の米作及麥作【とも】、先づ平作以上にして、

2. 94 トモ 接尾辞-名詞的-副詞
 共 可能
 それを含めての意。

【例】
 送料【とも】
 住所・氏名【とも】

2. 95 ドモ 接尾辞-名詞的-一般
 共

【例】
 昔神武天皇躬づから大伴物部の兵【ども】を率ゐ
 無学の拙者【共】には御両君の博学あり / \ と見えて何とも申上様なし。
 道中にて人々の失錯ありしこと【ども】を告げて打笑ひ玉ひき。

2. 96 ナイ 接尾辞-名詞的-一般
 内 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(室=内, 社=内)

【例】
 三週間【内】に其登記を為すことを要す

2. 97 ナガラ 接尾辞-名詞的-一般 動詞型活用語には連
 乍ら 用形
 「~のまま」「~すべて」の意。

【例】
 昔【ながら】の美髯を捻りながら、
 涙【ながら】におもひいづる彼の日のわかれよ。
 人は生れ【ながら】に戦死すべき運命を擔へるものと爲せり。
 宗教と道徳兩(ふたつ)【ながら】全たきを得、

2. 98 ナサル 動詞-非自立可能 五段-ラ行-アル-サル 動詞型活用語には連
 為さる 用形(文語四段-ラ行)

【例】
 御安心【なさる】べく候。
 チヨイと御覽【なさい】よ
 病氣の事を考へないで居【なさい】、

2. 99 ナシ 名詞-普通名詞-一般
 無し 「有る無し」「形無し」「底無し」「台無し」「人で無し」「人無し」「幕無し」
 「間無し」「道無し」「文無し」「休み無し」の「無し」は除く。

【例】
 地底の岩を音【なし】に流るる水こそ地面を膏腴にする者なり、
 花も香もなき根【無】草

2. 100 ナミ 接尾辞-名詞的-一般
 並み その類と同じ、又は同じ程度であることを表す。

【例】
 人【なみ】ならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。

2. 101 ナリ 接尾辞-名詞的-一般
 形 そのもの相応である様の意。

【例】
 低い価格設定には低い【なり】の理由があります。
 それ【なり】の役目を与えて投げさせたいと思うよ。
 不調【なり】に試合をつくり、

2. 102 ナリ 接尾辞-名詞的-一般
 形 「~のまま」「~するまま」の意。

	【例】 涙にむせび、遂に、それ【なり】に寝入り候へども、				
2.103	ナレル 慣れる	動詞-非自立可能	下二段-ラ行一般 (文語下二段-ラ行)	動詞連用形	文語：ナル
	【例】 あゆみ【なれ】たる小徑を過ぎ 住み【なれ】し、宿こそなけれ、めでましし、母こそまさね、				
2.104	ニクイ 難い	接尾辞-形容詞的	形容詞-クイ(文語形容詞-ク一般)	動詞連用形	文語：ニクシ
	醜悪の意の「醜い」は除く。				
	【例】 此家の立はなれ【にくく】、 随分あたりの者御機げんの取り【にくく】、大心配を致すよし、				
2.105	ヌク 抜く	動詞-非自立可能	五段-カ行一般(文語四段-カ行)	動詞連用形	
	「終わりまで～する」の意。				
	【例】 「笑顔で耐え【抜く】しかないな」 熟練した技と、磨き【抜か】れたセンスをもって作り出される料理 日本全体の利益はどこにあるかを考え【抜か】なければ、				
2.106	ハジメル 始める	動詞-非自立可能	下二段-マ行(文語下二段-マ行)	動詞連用形	文語：ハジム
	【例】 是れ彼れが勢力を政界に失ひ【始め】たる第一歩なりき。 我ははしためのもて來し蠟燭にて、新聞をよみ【はじめ】ぬ。				
2.107	ハタス 果たす	動詞-非自立可能	五段-サ行(文語四段-サ行)	動詞連用形	
	「すっかり～し終える」の意。				
	【例】 使ひ【果し】てしまはなければならぬ。				
2.108	ハテル 果てる	動詞-非自立可能	下二段-タ行(文語下二段-タ行)	動詞連用形	文語：ハツ
	「すっかり～する」「～し終わる」の意。				
	【例】 興味とみにさめ【はて】たるも口惜し。 石炭をば早や積み【果て】つ。				
2.109	ハナシ 放し	接尾辞-形状詞的		動詞連用形	ツパナシ
	【例】 僕等が書き【放し】、言ひ【放し】にしたるものも、 諸事やり【放し】の風ありしかば、				
2.110	ハベリ 侍り	動詞-非自立可能	文語ラ変変格	連用形	
	【例】 朝な朝なは頭の痛みて晏くも強て起き【はべり】ぬ。				
2.111	バム ばむ	接尾辞-動詞的	五段-マ行一般(文語四段-マ行)		
	【例】 落日黄【ばみ】て晩秋の乾風光り、 雲浮かぶ空の色生あつく蒸しも汗【ばむ】街よ、				

2.112	ハン 版	名詞-普通名詞-助数 詞可能 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(新=版)			
	【例】 吉利支丹【版】の書物のタイトルページの銅版畫				
2.113	フウ 風	接尾辞-名詞的-一般 様子の意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。(和=風, 古=風)			
	【例】 田舎の物を食して田舎【風】に運動遊戯すれば ゴシツク【風】の浮彫をした破風				
2.114	ブリ 振り	接尾辞-名詞的-一般 「それだけの時間が過ぎた」の意。			
	【例】 吾人は久し【振り】に演説らしき演説を聴けり、 何年【ぶり】にての對顔故談話盡さず、				
2.115	ブリ 振り	接尾辞-名詞的-一般 様子・状態の意。	動詞型活用語には連 用形	ッブリ	
	【例】 非常の働き【振】といふべし、 枝【振】美事な松の梢に				
2.116	ブル 振る	接尾辞-動詞的 「~のように振る舞う」の意。	五段-ラ行-一般(文 語四段-ラ行)	形容詞型活用語には 語幹	
	【例】 あの高【振ら】ぬ處が何うも豪い。 ハイカラ【振つ】た清國留學生が				
2.117	ブン 分	名詞-普通名詞-副詞 可能 分量の意。			
	【例】 この集め得たる三日【分】の蓮をば手づから一本づつ折りては糸を取り、 エキス【分】の少いことと、消化吸収率の悪いことが缺點です。				
2.118	ポイ ぼい	接尾辞-形容詞的 形容詞語幹に接続する「ぼい」は除く(例：荒っぼい、安っぼい)。「いがらっぼい」の「ぼい」は除く。	形容詞-ポイ 動詞型活用語には連 用形	ッポイ 文語： ボシ, ッポシ	
	【例】 抑も世間の厭き【ッポイ】が故か、 幅二寸計の縹子の巻帶、ぐるぐると巻附た姿仇【ツぼく】、				
2.119	ポッチ ぼっち	接尾辞-名詞的-一般		ッポッチ	
	【例】 これ【っぼっち】も思っていなかった。				
2.120	マイラセル 參らせる	動詞-非自立可能 下一段-サ行-一般 (文語下二段-サ行)	連用形	文語：マイラス	
	【例】 御情のほど沁々と妾は嬉しく思ひ【まゐらせ】し、				
2.121	マエ 前	名詞-普通名詞-副詞 可能			

2. 140 **ラ等** 接尾辞-名詞的-一般 事物をおおよそに指す。
【例】その学校に何の書を読み何事を談ずるも、なん【ら】の害をもなさざるのみならず、
2. 141 **ラクらく** 接尾辞-名詞的-一般 四段活用の終止形 「…すること」の意。
【例】望む【らく】は今後も尚ほ巍然として此通弊以外に立たざるべからず。惜む【らく】は今日同盟の機會已に去りしことを。
2. 142 **ラシイらしい** 接尾辞-形容詞的 形容詞-一般（文語形容詞-シク） 文語：ラシ 「いかにも～の様子である」の意。
【例】陪審官諸公が被告の尤も【らしき】口吻に迷はされて文明世界の紳士【らしく】せんとせば
2. 143 **リュウ流** 接尾辞-名詞的-一般 流派の意。
【例】佛蘭西には佛蘭西【流】北米合衆國には合衆國【流】あり
2. 144 **ルイ類** 接尾辞-名詞的-一般 漢語の1最小単位と結合したものは除く。（人=類）
【例】しだ【類】、苔【類】なども、ところえがほに着生せり。
2. 145 **ワスレル忘れる** 動詞-非自立可能 下一段-ラ行-一般（文語下二段-ラ行） 動詞連用形 文語：ワスル 「打ち忘れる」は除く。
【例】見【忘れ】給ひたりな
2. 146 **ワタル渡る** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般（文語四段-ラ行） 動詞連用形 「辺り一面に～する」「ずっと～し続ける」「徹底的に～する」の意。
【例】銃は、一齊に放たれて、谷より谷にひびき【わたり】ぬ。福沢諭吉氏が「西洋事情」は、寒村僻地まで行き【渡り】たりと聞けり。文壇の全面にしみ【わたれ】る大弊害にあらずや。

3 助詞

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
3. 1	ガが 【例】獨乙國に一皇帝を立てて其一統を大にせんことは獨乙人民【が】夙に祈望する所なり母の教を重んぜざれば、母はあれどもなき【が】如し。以て我が獨立を確守せむ【が】爲なり	助詞	格助詞	活用語には連体形	
3. 2	ガが 【例】瞬きもせず視つめ居りし【が】其の顔色は轉た益と鬱し來りて見へにけり	助詞	接続助詞	連体形	

3.3	カシ かし	助詞	終助詞	活用語には終止形	
	【例】 爰に其光景を略述するは、此問題を説くに最も適切なる要領なるぞ【かし】。				
3.4	ガシ がし	助詞-終助詞		命令形	
	【例】 深山のころを 語れ【がし】				
3.5	カシラ かしら	助詞	副助詞		
	【例】 何【かしら】心せはしき日なりけり、				
3.6	カナ 哉	助詞	終助詞	活用語には連体形	
	【例】 宜なる【かな】、人は「君が代」よりも「梅の春」を聴んと急ぐや。 ああ死を以ても脅かすべからざる彼等の安心は貴き【哉】。 嗚呼不幸なるは今の国民【かな】。				
3.7	ガナ がな	助詞	終助詞	活用語には連体形, 命令形	
	【例】 獨り寐の夜毎の夢に逢ふと見し其一たびを現とも【がな】 かの河に釣もせし【がな】				
3.8	カラ から	助詞	格助詞	活用語には連体形	
	【例】 ばらばらと春の雨【から】明けにけり 折【から】一天俄に搔曇りて、颯と吹下す風は海原を揉立つれば、				
3.9	カラ から	助詞	接続助詞	終止形	
	【例】 國政の利害は。社會の表面に顯れておる【から】。人々の目につき安く。 既に國會を開く【から】には、不具の國會を開かず、完全の國會を開けよ、				
3.10	キリ きり	助詞	副助詞	活用語には連体形	ギリ
	【例】 張保は恐れて姓高と云ひし【ぎり】敢て悉く言はず、				
3.11	クライ くらい	助詞	副助詞	活用語には連体形	グライ
	【例】 ナカナカ此【位】の事にては未だ役目は濟まぬなり 全く不都合なき條文の凡そ何個條【位】たるべきかを知るに苦む。 箇條書が事實の用を爲す【位】ならば初より何も心配はある可らず				
3.12	ケレド けれど	助詞	接続助詞	終止形	ケド
	【例】 この人、巻烟草は、のむ【けれど】も、天狗とヒーローとは、のまずといふ。				
3.13	コソ こそ	助詞	係助詞	活用語には連体形	

3.23	たり たり	助詞	副助詞	連用形	
	【例】 歳を経て田園となり【たり】洪水に穿たれ【たり】して				
3.24	つつ	助詞	副助詞	連用形	ズ
	【例】 甲板の上を唯だ兩人行き【つつ】復へり【つつ】彷徨せり 組ん【ず】ほぐれ【つつ】				
3.25	つつ つつ	助詞	接続助詞	連用形	
	【例】 聲を呑み【つつ】泣くひとりの少女あるを見たり。 従ふて養鶏業の發達を害せられ【つつ】あるは事實なり。				
3.26	て て	助詞	接続助詞	連用形	デ
	【例】 頃者文部省は吾人に報告し【て】曰く 品行不良なるを以【て】去年二十八日帝國大學に於【て】退學を命ぜられたり 英雄は好ん【て】人の意表に出づ。				
3.27	で で	助詞	格助詞		
	【例】 一人の老寡婦は、此の大會の終りしあと【で】、同く二弗を寄附して曰く 亡滅の亂【で】開化が早く來るかは知らねどちと馬鹿馬鹿しき事なり				
3.28	で で	助詞	接続助詞	未然形	
	【例】 なほ死な【で】ありつるよ。 又我愛もて繋ぎ留め【で】は止まじ。				
3.29	と と	助詞	格助詞		ット
	前接の活用語の活用形を連体形とするのは、終止形と連体形とで語形が異なり、明らかに連体形とわかる場合のみ。 【例】 人にしてこの明識を有する【と】有せざる【と】の原因はいかん、 此に列挙せる特質は果して日本国民の普遍なる特質なり【と】言ふを得べきか。 曰く、彼は必らず榮え、我はいよいよ衰るふべし【と】。 太陽の光、きらきら【と】、かがやくにいたれば、				
3.30	と と	助詞	接続助詞	終止形	
	【例】 二十年経つ【と】赤兒も二十なり				
3.31	ど ど	助詞	接続助詞	已然形	
	【例】 亡滅の亂で開化が早く來るかは知らね【ど】ちと馬鹿馬鹿しき事なり され【ど】、にはかのこととて、兵器など備はらざりしかば、				
3.32	どころ どころ	助詞	副助詞	活用語には連体形	

【例】
 今日はまだ中金融緩漫【どころ】では無く、金融甚だ繁忙にして、東へ赴き玉ふ【どころ】か妻女子息が西の國へや旅立玉はん、

3. 33 トモ 助詞 接続助詞 動詞型活用語には終止形、形容詞型活用語には連用形

【例】
 文章の争に於て敵を作る【とも】、人と人との間に於て敵を作るを好まざるなり、れ一國の大問題にして一日たり【とも】等閑に附し去るを得ず。
 少なく【とも】右の三勢力に訴へ、而して後明らかに、其關係を察せざる可からず。

3. 34 ドモ 助詞 接続助詞 已然形

【例】
 倍根の理學は人心の理を説くといへ【ども】空虚に涉らず實事考驗を以て要とせり
 果肉は臭氣あれ【ども】、種子は、うまくして、食すべし。

3. 35 ナ 助詞 終助詞 活用語には終止形

【例】
 物忘したまふ【な】。
 その箱のふたをあくれば、あやしや【な】、白雲、中より、たちのぼり、飛んでいたらん術もが【な】、

3. 36 ナガラ 助詞 接続助詞 動詞型活用語には連用形、形容詞型活用語には語幹

「～しつつ」「～ではあるが」の意。

【例】
 余は驚き【ながら】之を視れば
 恥かし【ながら】、それがしにて候。
 是を以て其文明の生み出せる健児も、残念【ながら】亦唯物質的の人なる耳、然し【ながら】歴史上の沿革に考ふれば未だ遽かに之を望む可らざる者あり
 女【ながら】も、國のため、君のために、つくさん。

3. 37 ナド 助詞 副助詞 ナヅ、ナンド
 前接の活用語の活用形を連体形とするのは、終止形と連体形とで語形が異なり、明らかに連体形とわかる場合のみ。
 「～などす」は連用形接続。

【例】
 家財衣類【など】も売尽して、
 屋根をまくり、船をくつがへす【など】、われらに害をおよぼすことあれども、はては笑ひ罵り、また歌ひ【など】す。

3. 38 ナム 助詞 終助詞 未然形

【例】
 這娑婆はとても去られぬ世なれども生れぬさきの國へ行か【なむ】

3. 39 ナリ 助詞 副助詞

【例】
 いわゆる宗旨【なり】、徳教【なり】、政治【なり】、経済【なり】、その所論おのおの趣を一にせずして、
 他を罵りて、讀者を喜ばせ、我新聞【なり】、雑誌【なり】の賣行きをよくせんとするものあり。

3. 40 ニ 助詞 格助詞
 前接の活用語の活用形を終止形とするのは、終止形と連体形とで語形が異なり、明らかに終止形とわかる場合のみ。

【例】
 輕氣球の、空中【に】飛揚するも、この理にほかならず。
 この八房をして伏姫を背ひ去る【に】至らしめたる原因は何ぞと問ふに、
 後漢の末は、世乱れ【に】乱れて、

3. 41 二 助詞 接続助詞 連体形
 に

【例】
 租税の善悪を吟味する【に】二個の全く異なりたる立脚點あり、
 小太郎が、父につれられて、野原を散歩したる【に】、みちばたに、次の晝のごとき植物の花さきみたり。
 然る【に】退て熟々之を考ふれば

3. 42 ニテ 助詞 格助詞 活用語には連体形
 にて

【例】
 七十七歳のとき、江戸【にて】死せり。
 茅、竹など【にて】、屋根をふき、
 日本の書家の支那に及ばざるは必しも外に證を假らず日本の筆を製する工人の拙なき【にて】知るべし

3. 43 ノ 助詞 格助詞 活用語には連体形
 の

【例】
 吾人は有力なる一學會【の】創立を耳にすることを得たり、
 何ぞ其教育【の】振はざるや。
 みだりにその是非を論ずる【の】弊あり。
 さても礼儀知らず【の】の継子どもかな、

3. 44 ノ 助詞 準体助詞 活用語には連体形
 の

【例】
 我邦【の】は否らず戦争後に作る者甚だ多し
 差支のなひ様に仕掛おく【の】を。親たるものの本分と思ひ違へて。

3. 45 ノミ 助詞 副助詞 活用語には連体形
 のみ

【例】
 語學【のみ】にて世の用には足りなむ、
 印刷の際、その中にて、入用なる活字【のみ】を拾ひ、
 ただ、齒がみして、くちをししく思ふ【のみ】なりき。

3. 46 ハ 助詞 係助詞 ンバ、バ
 は 前接の活用語の活用形を終止形とするのは、終止形と連体形とで語形が異なり、明らかに終止形とわかる場合のみ。

【例】
 義【は】山嶽よりも重く死【は】鴻毛よりも輕し
 すなわち圧制政府の倒るる【は】自然の數というべし
 あまり薄情に【は】あらずや。
 眞に偶然ならざるを嘆ぜず【んば】あらず。
 されば其人若し妻無く【ば】此娘をいたはりて妻とし玉へ、

3. 47 バ 助詞 接続助詞 未然形、已然形
 ば

【例】
 今回もし幸にして官私の変革あら【ば】、国庫より見て学校の資本は必ず豊なるをさとることならん。
 みづから、營養分をとることあたはざれ【ば】、かならず、他物に寄生す。

3. 48 バカリ 助詞 副助詞 活用語には連体形
 ばかり

【例】
 わが敦賀を去ること、北方、五百海里【ばかり】の所にあり。
 昨夜の雨に甲板は流るる【ばかり】濡れたれば、

3. 49	バヤ ばや	助詞	終助詞	未然形
	【例】 一たび、あとに立ち歸り、主君の最期にあは【ばや】。			
3. 50	へ へ	助詞	格助詞	
	【例】 東京を御發輦西京【へ】行幸在らせられ給へり 新眞事誌に左院【へ】宛たる副島氏始八名の建言書を載せたり			
3. 51	ホド ほど	助詞	副助詞	活用語には連体形
	【例】 思へば實に酸素【ほど】功用の偉なる者はあらざるなり 時俗の論【ほど】恃むに足らざるものはなし			
3. 52	マデ まで	助詞	副助詞	活用語には連体形
	【例】 官省寮司より六十餘縣に至る【まで】既に昔日の日本に非ず 即ち曉六時十五分一秒より同三十分【迄】の時刻なり 今より之を視れば左【まで】憂ふる程の事無かりけり			
3. 53	モ も	助詞	係助詞	
	前接の活用語の活用形を終止形とするのは、終止形と連体形とで語形が異なり、明らかに終止形とわかる場合のみ。			
	【例】 千斤の圓石【も】推さばなどか轉ぜざらん 百個の竈爐は航海中少し【も】間斷なく燃やし續くべかりしなり			
3. 54	ユ ゆ	助詞	格助詞	
	【例】 その少女いづく【ゆ】來しや			
3. 55	ヤラ やら	助詞	副助詞	ヤラン
	【例】 マクレオッド【やら】バスチヤ【やら】そんな事は存ぜぬなり。 手荷物 of 鞆の中より何【やらむ】取出して、			
3. 56	ヨ よ	助詞	終助詞	活用語には連体形、 命令形
	【例】 なほ死なでありつる【よ】。 勤勉なれ【よ】、物ごとに。 難きこととて厭ふな【よ】 佛蘭西の詩人【よ】、死すべきに死せ、			
3. 57	ヨリ より	助詞	格助詞	活用語には連体形
	【例】 斯等の船舶は如何なる方面の航路【より】引上げたるか、 大學【より】も高等學校を先にせよ。 高等學校の増設は、何【より】の急務ならずや。			
3. 58	ヲ を	助詞	格助詞	活用語には連体形

【例】
 此の地に行幸し先帝の靈【を】祭り給ふ
 鑛業の被害益々増加する【を】黙視するの理由如何。

4 助動詞

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
4.1	キ き	助動詞 過去・完了	文語助動詞-キ	連用形（カ変・サ変 には未然形・連用 形）	
	【例】 關原の戦は、天下わけめの戦なり【き】。 わが國には、陥落地震の起り【し】こと、はなはだ少し。 入費も、非常にかさみたり【しか】ば、 是なかり【せ】ば吾人は既に其立場を失ひし者也。				
4.2	ケム けむ	助動詞 過去推量	文語助動詞-ケム	連用形	
	【例】 その女のおもて見し時の、父が心はいかなり【けむ】。 最早十一時をや過ぎ【けん】、				
4.3	ケラシ けらし	助動詞	文語助動詞-ラシ	連用形	
	【例】 一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰み【けらし】。				
4.4	ケリ けり	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ケリ	連用形	
	【例】 馬の毛色など、くはしく語り出で【ける】に、さらに、違ふことなかり【けり】。				
4.5	ゴトシ ごとし	助動詞 比況	文語助動詞-ゴトシ	活用語には連体形	
	【例】 今日の選挙競争は恰も國際的競争の【如し】。 急に留學生を出すなど、盜賊を捕へて繩をなふが【如き】觀あり。 或る一部に評さる【如く】狷介硬直ならず、				
4.6	サセル させる	助動詞 使役・尊敬	下一段-サ行-セル (文語下二段-サ行)	五段・サ変以外の未 然形(四段・ナ変・ ラ変以外の未然形)	文語：サス
	【例】 我生涯にて尤も悲痛を覺え【させ】たる二通の書状に接しぬ。 さる中につたなき筆のあととめて見【させ】たまひしとのみにても、				
4.7	ジ じ	助動詞 打ち消し推量	無変化型	未然形	
	【例】 今清の滅びんとするは、智者にあらぬ人にも隠れはあら【じ】。				
4.8	シメル しめる	助動詞 使役	下一段-マ行(文語下 二段-マ行)	未然形	文語：シム

4.17	タリ たり	助動詞 断定	文語助動詞-タリ-断定	
	【例】 由來鳥羽、伏見は洛南の防備上要害の地盤【たり】。 世界新聞事業家中錚々【たる】一人なり。 飄然【と】して煙の如く淋しく退去せり。			
4.18	タリ たり	助動詞 完了	文語助動詞-タリ-完了	連用形
	【例】 此辭をば弄ばむと企て【たり】。 一たび法の精神をだに得【たら】んには、 ただをり／＼思ひ出し【たる】やうに「薬を、薬を」といふのみ。			
4.19	ツ つ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ツ	連用形
	【例】 石炭をば早や積み果て【つ】。 蓮如の「御文章」は彼れが理想の文学なりと聞き【つれ】ども 一輪の名花を咲かせ【て】けり。			
4.20	テル てる	助動詞 補助動詞縮約形、「ている」の縮約形	下一段-タ行	連用形
	【例】 巖そかに酔潰れ【てる】梅花節			
4.21	ナイ ない	助動詞 打ち消し	助動詞-ナイ	未然形
	【例】 アイデアルとリアルとは詩文の上では誰も免かれ【ない】事にて、			
4.22	ナリ なり	助動詞 断定	文語助動詞-ナリ-断定	活用語には連体形
	【例】 吾人は未だ其の言の當否を判ずる能はざる【なり】、 英國にては却て不利【なら】ざるは何ぞや 記者の見しは其第卅九號【に】して三角法高等代數等を説明せり			
4.23	ナリ なり	助動詞 伝聞	文語助動詞-ナリ-伝聞	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形
	【例】 聞く【ならく】、星氏は少時人相見に、劍難の相ありと言はれたりきとかや。			
4.24	ヌ ぬ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ヌ	連用形
	【例】 彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至り【ぬ】。 かくて、年をへ【ぬる】まゝに、 胃弱を恐れて滋養を廢し【な】ば患者は遂に斃る可きなり。 あなたへゆき【ね】、			
4.25	ベシ べし	助動詞 推量	文語助動詞-ベシ	終止形、ラ変には連体形

4.34	ユ ゆ	助動詞 受身・自発・可能	文語下二段-ヤ行	未然形	
	【例】 戀すれば人に憎ま【ゆ】わが家はあかき月夜も石つぶて降る				
4.35	ラシ らし	助動詞 推量	文語助動詞-ラシ	終止形, ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 君は又いづこの人となりぬ【らし】 達摩の説法よりも陸奥の議論の方が效能ある【らし】。				
4.36	ラシイ らしい	助動詞 推量	助動詞-ラシイ	動詞型活用語には連体形, 形容詞活用型には終止形	文語：ラシ
	【例】 他に深き仔細のある【らしく】覚え、 高地に砲臺【らしき】ものあり				
4.37	ラム らむ	助動詞 現在推量	文語助動詞-ラム	終止形, ラ変には連体形	
	【例】 何事をのたまふ【らん】とゆかしくて、 月日はいつまでかかる【らん】、				
4.38	ラレル られる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	下一段-ラ行-レル (文語下二段-ラ行)	五段・サ変以外の未然形(四段・ナ変・ラ変以外の未然形)	文語：ラル
	【例】 印度は今は既に熟知せ【らる】、 到底普通の人には了解し得【られ】ぬものなれば、				
4.39	リ り	助動詞 完了・存続	文語助動詞-リ	サ変の未然形, 四段の命令形, 下二段活用の連用形	
	【例】 止むを得ず船を返すに至れ【り】 御身が印度に赴任せ【る】以來久瀾なることなりしが 僕謂へ【らく】民の愚見破れざれば文字を改むる「能はずと 拭ふべからざる汚點を加へ【り】」。				
4.40	レル れる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	下一段-ラ行-レル (文語下二段-ラ行)	五段・サ変の未然形(四段・ナ変・ラ変の未然形)	文語：ル
	【例】 終に日耳曼諸族の民に其國を滅ぼさ【る】 格別斬新なる發見を促したりとも思は【れ】ざれども 英國にて所得税法の完全に行は【るる】所以のものは				

5 「—の〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
5.1	アイノコ 合の子	名詞-普通名詞-一般			

【例】
内大臣と夕顔の【間の子】である

5.2 アイノテ 名詞-普通名詞-一般
合の手

【例】
【合の手】を入れた

5.3 アカノマンマ 名詞-普通名詞-一般
赤の飯

【例】
こんなめでたい【赤の飯】はない。

5.4 アサノハ 名詞-普通名詞-一般
麻の葉

【例】
【麻の葉】とか七宝とか

5.5 アサノミ 名詞-普通名詞-一般
麻の実

【例】
かりしやぼんは、種油、【麻實】油、魚油などに苛性かりを加へて製す。

5.6 アジノモト 名詞-固有名詞-一般
味の素

【例】
アジシオとか【味の素】、タバスコなどを

5.7 アシノヤ 名詞-普通名詞-一般
葦の矢

【例】
陰陽寮から桃の杖と弓、【葦矢】が配られた殿上人が、

5.8 アマノガワ 名詞-普通名詞-一般
天の川

【例】
別るるや夢一筋の【天の川】

5.9 アマノジャク 名詞-普通名詞-一般
天の邪鬼

【例】
僕は昔から【天の邪鬼】で、誕生日というのが好きじゃなかった。

5.10 アマノハラ 名詞-普通名詞-一般
天の原

【例】
【天の原】、遠く広く、

5.11 アリノトウ 名詞-普通名詞-一般
蟻の塔

【例】
【蟻の塔】を積むやうぢやア

5.12 アリノママ 名詞-普通名詞-副詞
有りの儘

【例】
【ありのまま】のわんこを撮り続けて行きたい

- 5.13 **アリノミ** 名詞-普通名詞-一般
有の実
【例】
先は見事な【ありのみ】ではないか、
- 5.14 **アンノジョウ** 副詞
案の定
【例】
【案の定】品切れで手に入りにくく、
- 5.15 **イキノネ** 名詞-普通名詞-一般
息の根
【例】
たちどころに襲われて【息の根】をとめられる
- 5.16 **イタノマ** 名詞-普通名詞-一般
板の間
【例】
二人は靴を脱いで【板の間】にあがった。
- 5.17 **イチノカミ** 名詞-普通名詞-一般
市正
【例】
その監督は京職があたったが、実際の刑は【市正】と物部が担当した。
- 5.18 **イチノカミ** 名詞-普通名詞-一般
一上
【例】
めづらしげなし。一上にてやみなん
- 5.19 **イチノゼン** 名詞-普通名詞-一般
一の膳
【例】
この【一の膳】の後に、家長からお酒が一人一人に注がれ、
- 5.20 **イチノツカサ** 名詞-普通名詞-一般
市司
【例】
左京・右京には官営の市が設けられ、【市司】がこれを監督した。
- 5.21 **イチノトリ** 名詞-普通名詞-一般
一の酉
【例】
十一月五日は 【一の酉】
- 5.22 **イツキノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
齋宮
【例】
姫宮さま方が【齋宮】や齋院にお立ちになって
- 5.23 **イノコ** 名詞-普通名詞-一般
猪子 いのししの意。
- 5.24 **イノシシ** 名詞-普通名詞-一般
猪
【例】
そのとき、大きな【猪】が、にはかに、草の中から、あれて出ましたから、

- 5.25 **イノフ
胃の腑** 名詞-普通名詞-一般
【例】
二切れあったのをまたたく間に【胃の腑】におさめた。
- 5.26 **イボタノキ
いぼたのき** 名詞-普通名詞-一般
動植物
- 5.27 **イボタノムシ
いぼたのむし** 名詞-普通名詞-一般
動植物
- 5.28 **ウエノハカマ
表袴** 名詞-普通名詞-一般
【例】
おぼえことに容貌あるかぎり、下襲の色、【表袴】の紋、馬、鞍までみなととのへたり、
- 5.29 **ウオノメ
魚の目** 名詞-普通名詞-一般
【例】
幼稚園の時【魚の目】が出来ました。
- 5.30 **ウジノカミ
氏上** 名詞-普通名詞-一般
【例】
また六百六十四年には【氏上】を定め、豪族領有民を確認するなど豪族層の編成が進められた。
- 5.31 **ウノケ
兎の毛** 名詞-普通名詞-一般
【例】
どンドン【兎の毛】の根元のほうへともぐりこむ。
- 5.32 **ウノハナ
卯の花** 名詞-普通名詞-一般
【例】
楽浪の志賀の【卯の花】腐しかな
- 5.33 **ウマノオ
馬の尾** 名詞-普通名詞-一般
動植物
【例】
クリの害虫【ウマノオ】バチ
- 5.34 **ウマノホネ
馬の骨** 名詞-普通名詞-一般
【例】
どこの【馬の骨】ともわからないような
- 5.35 **ウミノオヤ
生みの親** 名詞-普通名詞-一般
【例】
おまえの【生みの親】は小学校の教師だったらしい
- 5.36 **ウミノコ
生みの子** 名詞-普通名詞-一般
【例】
【生みの子】と義理ある子
- 5.37 **ウワノソラ
上の空** 名詞-普通名詞-形状
詞可能

【例】
皆がわいわい言っている言葉を【上の空】で聞いていた。

- 5.38 **エゴノキ** 名詞-普通名詞-一般
えごのき 動植物

【例】
そこらに生えている檜の木や椎の木、【エゴノキ】やムラサキシキブ、

- 5.39 **エノキ** 名詞-普通名詞-一般
榎 動植物

【例】
肥後五日町の古い【榎】の空洞に、長三尺餘周り二三尺の白蛇住む。

- 5.40 **エノグ** 名詞-普通名詞-一般
絵の具

【例】
白いエナメル【絵の具】で議員名を記す。

- 5.41 **エノコ** 名詞-普通名詞-一般
えのこ

- 5.42 **エノハ** 名詞-普通名詞-一般
榎葉 動植物

【例】
竹田の名水が育んだ、【えのは】（ヤマメ）尽くしの名物料理。

- 5.43 **エンノシタ** 名詞-普通名詞-一般
縁の下

【例】
【縁の下】の力持ち登場！

- 5.44 **オクノイン** 名詞-普通名詞-一般
奥の院

【例】
本堂の下の道を北に行くと【奥の院】がある。

- 5.45 **オクノテ** 名詞-普通名詞-一般
奥の手

【例】
実は【奥の手】がある。

- 5.46 **オテノモノ** 名詞-普通名詞-一般
お手の物

【例】
甘い言葉は【お手の物】

- 5.47 **オトコノコ** 名詞-普通名詞-一般
男の子

【例】
天主の人らは【男の子】が出来た時だけ、

- 5.48 **オトメノカサ** 名詞-普通名詞-一般
乙女の傘 動植物

【例】
【オトメノカサ】の可憐な白、ササクレヒトヨタケの白鳥の羽根のような白、

- 5.49 **オノエ** 名詞-普通名詞-一般
尾の上

【例】
ほほ、背、腰、腿の外側、【尾の上】のほうがわずかに黒味がかっている。

5.50 **オモイノタケ** 名詞-普通名詞-一般
思いの丈

【例】
自由に【思いの丈】を書ける

5.51 **オモイノホカ** 副詞
思いの外

【例】
【思いのほか】落ち込む曲が多いと思ったし

5.52 **オンナノコ** 名詞-普通名詞-一般
女の子

【例】
可愛い【女の子】と文通してみたいなあ。

5.53 **オンノジ** 名詞-普通名詞-一般
御の字 「ありがたい」「しめたものだ」の意。

【例】
損しなかつただけ【御の字】です

5.54 **カギノテ** 名詞-普通名詞-一般
鉤の手

【例】
【鉤の手】に曲って見るか

5.55 **カゴノトリ** 名詞-普通名詞-一般
籠の鳥

【例】
日本から一歩も出ることのできない【籠の鳥】である。

5.56 **カジノキ** 名詞-普通名詞-一般
梶の木 動植物

5.57 **カズノコ** 名詞-普通名詞-一般
数の子

【例】
ニシンの卵は“【数の子】”

5.58 **カゼノカミ** 名詞-普通名詞-一般
風之神

【例】
古くから信仰された【風之神】であった。

5.59 **カゼノコ** 名詞-普通名詞-一般
風の子

【例】
子供は【風の子】ですから

5.60 **カノコ** 名詞-普通名詞-一般
鹿の子

【例】
適当な大きさの【鹿の子】絞りにして

5.61 **カバノキ** 名詞-普通名詞-一般
樺の木 動植物

【例】
【カバノキ】やハシバミそれに落葉ナラの

5.62 カミノク 名詞-普通名詞-一般
上の句

【例】
一首のなかで【上の句】と下の句とが合せてあります

5.63 カミノケ 名詞-普通名詞-一般
髪の毛

【例】
あんなに【髪の毛】がワッサワッサしてたら

5.64 カメノコ 名詞-普通名詞-一般
亀の子

【例】
皮をよく【亀の子】だわしでこすって洗い

5.65 カメノコウ 名詞-普通名詞-一般
亀の甲

【例】
【亀の甲】状に「町」が連鎖していくパターンができる。

5.66 カモノハシ 名詞-普通名詞-一般
鴨の嘴
動植物

【例】
【カモノハシ】は何を食べますか？

5.67 カリノヨ 名詞-普通名詞-一般
仮の世

【例】
この世が修行のための【仮の世】であり

5.68 カルノイチ 名詞-普通名詞-一般
軽市

【例】
飛鳥時代の市である海石榴市や【軽市】、

5.69 カンノキ 名詞-普通名詞-一般
貫の木

【例】
錠前を打ちこわして【貫の木】を抜いた。

5.70 カンノムシ 名詞-普通名詞-一般
瘡の虫

【例】
夜泣きや【かんのむし】を鎮めてくれるのが

5.71 キサイノミヤ 名詞-普通名詞-一般
后宮

【例】
朱雀院の【後の宮】の御方などめぐりけるほどに

5.72 キタノカタ 名詞-普通名詞-一般
北の方

【例】
一条長成の【北の方】として、鷹司の邸の奥に暮している常磐には

- 5.73 **キタノマル** 名詞-普通名詞-一般
北の丸
【例】
皇居、【北の丸】に設けられた
- 5.74 **キノカシラ** 名詞-普通名詞-一般
木の頭
【例】
之を【木の頭】として舞臺は廻り、
- 5.75 **キノコ** 名詞-普通名詞-一般
茸 動植物
【例】
「ウミクサ」、「【キノコ】」、「コケ」、「シダ」等、肉眼を以て見得べきもの、これに屬す、
- 5.76 **キノジ** 名詞-普通名詞-一般
喜の字
【例】
ええと、いくつか、【喜の字】の祝いをしたのが、
- 5.77 **キノドク** 形状詞-一般
気の毒
【例】
他の人たちは、【気の毒】だが
- 5.78 **キノミ** 名詞-普通名詞-一般
木の実
【例】
十月の草原で、【木の実】のかおりをかぎながら
- 5.79 **キノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
柵造
- 5.80 **キノメ** 名詞-普通名詞-一般
木の芽 サンショウの芽の意。
【例】
【木の芽】を何か乗せると
- 5.81 **キノヤマイ** 名詞-普通名詞-一般
気の病
【例】
【気の病】のようなものですから。
- 5.82 **グウノネ** 名詞-普通名詞-一般
ぐうの音
【例】
【ぐうの音】もでなかった。
- 5.83 **クサノネ** 名詞-普通名詞-一般
草の根 「一般人、民衆」の意。
【例】
【草の根】主義の成果だ
- 5.84 **クスノキ** 名詞-普通名詞-一般
樟 動植物
【例】
樹齡二千年を超えるという御神木の【楠】を仰ぎ見る。

- 5.85 **クニノカミ** 名詞-普通名詞-一般
国守
【例】この【国守】の北の方も詣でたりけり。
- 5.86 **クニノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
国造
【例】郡司は、もとの【国造】など伝統的な地方の豪族が任じられ、
- 5.87 **クノイチ** 名詞-普通名詞-一般
くのいち
【例】江戸へ行っている【くノ一】たちの中では、最年少の娘だ。
- 5.88 **クノキミ** 名詞-普通名詞-一般
九君
【例】【九君】は、冷泉院の御皇子の弾正宮と申す御上にておはせしを、
- 5.89 **クマノイ** 名詞-普通名詞-一般
熊の胆
【例】熊の胆嚢を乾燥させて作られる「【熊の胆】」
- 5.90 **クマノミ** 名詞-普通名詞-一般
熊之実 動植物
【例】ツノダシチョウウオ【クマノミ】その他色々
- 5.91 **クレノオモ** 名詞-普通名詞-一般
呉母
【例】【くれのおも】つらゆき来し時と恋ひつつをれば
- 5.92 **コウノトリ** 名詞-普通名詞-一般
鶴 動植物
【例】【こうのとりのり】は、長い赤い足をして歩きまわっていた。
- 5.93 **コウノモノ** 名詞-普通名詞-一般
香の物
【例】たくあんやぬか漬けなど【香の物】が並べられました。
- 5.94 **コウノモノ** 名詞-普通名詞-一般 ゴウノモノ
剛の者
【例】すばらしい【剛の者】だ。
- 5.95 **コウリノカミ** 名詞-普通名詞-一般
評督
【例】一般のコホリの評造または【評督】に対応するものが柵造、
- 5.96 **コオリノミヤツ** 名詞-普通名詞-一般
コ
郡造

【例】
一般のコホリの【評造】または評督に対応するものが柵造、

5.97 **コシノモノ** 名詞-普通名詞-一般
腰の物

【例】
彦次郎の【腰の物】まで卯平のところに質に入れてしまっていた。

5.98 **コトノハ** 名詞-普通名詞-一般
言の葉

【例】
【言の葉】のびらびら降れば

5.99 **コトノホカ** 副詞
殊の外

【例】
桜を【ことのほか】好きだったように思います。

5.100 **コノカミ** 名詞-普通名詞-一般
兄

【例】
「似るべき【兄】やははべるべき」

5.101 **ゴノキミ** 名詞-普通名詞-一般
五君

【例】
【五の君】は近衛殿下基通の室にして、衣通姫と綽名せられし程の美人也。

5.102 **コノシタ** 名詞-普通名詞-一般
木の下

【例】
桜散る【このした】風はさむからで

5.103 **コノハ** 名詞-普通名詞-一般
木の葉

【例】
主な食べ物は、【木の葉】や果実である。

5.104 **コノマ** 名詞-普通名詞-一般
木の間

【例】
【木の間】をビューッと吹き抜け。

5.105 **コノミ** 名詞-普通名詞-一般
木の実

【例】
植物は熟した【木の実】を必ず水の中に落とし

5.106 **コノメ** 名詞-普通名詞-一般
木の芽

5.107 **コノモト** 名詞-普通名詞-一般
木の下

【例】
椎ひろふ里のをとめの聲たえて【木のもと】寒くあられちる也

5.108 **コノワタ** 名詞-普通名詞-一般
海鼠腸 動植物

【例】
なまこ（海鼠）・【このわた】（【海鼠腸】）・かかな（めばる、鮓）

5.109 **ゴンノソチ** 名詞-普通名詞-一般
権帥

【例】
道真は右大臣から大宰【権帥】に左遷され、

5.110 **サイノカワラ** 名詞-普通名詞-一般
賽の河原

【例】
【賽の河原】で石を積む

5.111 **サイノメ** 名詞-普通名詞-一般
采の目

【例】
クリームチーズを【さいの目】に切って

5.112 **サルノコシカケ** 名詞-普通名詞-一般
猿の腰掛 動植物

【例】
【サルノコシカケ】がひさしのようにってはえていて

5.113 **サンノキミ** 名詞-普通名詞-一般
三君

【例】
【三の君】、二郎君は、東の殿にぞとりわきてかしづきたてまつりたまふ。

5.114 **サンノゼン** 名詞-普通名詞-一般
三の膳

【例】
お酒が配られ、【三の膳】に移る。

5.115 **サンノツギ** 名詞-普通名詞-一般
三の次

【例】
学校の資格問題などは二の次【三の次】であらう。

5.116 **サンノトリ** 名詞-普通名詞-一般
三の酉

【例】
今年は【三の酉】まである年のよう。

5.117 **サンノマル** 名詞-普通名詞-一般
三の丸

【例】
城の水の手は【三の丸】の崖下にあった。

5.118 **サンノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
三宮

【例】
【三の宮】こそいとさがなくおはすれ。

5.119 **シチノキミ** 名詞-普通名詞-一般
七君

【例】
【七の君】は嚴島の内侍の娘なりしが

- 5.120 **シナノキ** 名詞-普通名詞-一般
科の木 動植物
【例】菩提樹 【シナノキ】科の落葉高木。
- 5.121 **シノキミ** 名詞-普通名詞-一般
四君
【例】かしづきたまふ【四の君】にあはせたまへり、
- 5.122 **シモノク** 名詞-普通名詞-一般
下の句
【例】一首の【下の句】を詠みかけてきた。
- 5.123 **ジャノヒゲ** 名詞-普通名詞-一般
蛇の髭 動植物
【例】すいかずらや【じゃのひげ】や大黄などを枯れ草の中に見いだして
- 5.124 **ジャノメ** 名詞-普通名詞-一般
蛇の目
【例】番傘、【蛇の目】の傘などの油張りのもの
- 5.125 **ジョノクチ** 名詞-普通名詞-一般
序の口
【例】だがそれはほんの【序の口】だった。
- 5.126 **シラベノオ** 名詞-普通名詞-一般
調べの緒
- 5.127 **ジンノザ** 名詞-普通名詞-一般
陣座
【例】おこなひに【陣座】ざまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、
- 5.128 **スエノヨ** 名詞-普通名詞-一般
末の世
【例】【末の世】のかなしき麦を打ちにけり
- 5.129 **スケノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
少領
【例】一般のコホリの評造または評督に対応するものが柵造、【助督】にあたるものが判官なのであろう。
- 5.130 **スズカケノキ** 名詞-普通名詞-一般
篠懸の木 動植物
- 5.131 **スノコ** 名詞-普通名詞-一般
簀の子
【例】底面に【簀の子】状の板が敷いてあり
- 5.132 **スノモノ** 名詞-普通名詞-一般
酢の物

【例】
【酔の物】として食べるのが定番

5.133 セキノヤマ 名詞-普通名詞-一般
関の山

【例】
この程度が【関の山】なのだ。

5.134 セノキミ 名詞-普通名詞-一般
兄の君

【例】
おせいさんの【背の君】のことが思い出される。

5.135 ソエノハウリ 名詞-普通名詞-一般
副祝

5.136 ソデノシタ 名詞-普通名詞-一般
袖の下
賄賂の意。

【例】
【袖の下】（賄賂）を使って見逃してもらう

5.137 ソチノミヤ 名詞-普通名詞-一般
帥宮

【例】
その日、【帥宮】も参りたまへり。

5.138 ダイノジ 名詞-普通名詞-一般
大の字

【例】
【大の字】になって寝る

5.139 タカノハ 名詞-普通名詞-一般
鷹の羽
動植物

【例】
ススキの中でも葉模様が美しい【タカノハ】ススキ

5.140 タケノコ 名詞-普通名詞-一般
竹の子

【例】
雨後の【竹の子】のようだ。

5.141 タコノキ 名詞-普通名詞-一般
蝟の木
動植物

5.142 タツノオトシゴ 名詞-普通名詞-一般
竜の落とし子

【例】
【竜の落とし子】に似た形をしている

5.143 タノモ 名詞-普通名詞-一般
田の面

【例】
【田の面】や畦道に落ちちらばった稲の穂

5.144 タブノキ 名詞-普通名詞-一般
楠
動植物

【例】
【タブノキ】・スダジイ・アカガシなどを優占種とする照葉樹林が発達している。

- 5.145 **タラノキ** 名詞-普通名詞-一般
たらの木 動植物
【例】
【タラノキ】の芽の天ぶら
- 5.146 **タラノメ** 名詞-普通名詞-一般
たらの芽
【例】
【たらの芽】のほどろに春のたけ行けばいまさらさらに都しおもほゆ
- 5.147 **タラノコ** 名詞-普通名詞-一般
鱈の子
【例】
かじればシンから出てくる梅干、おカカ、卵焼、塩鮭、【鱈の子】
- 5.148 **チノイケ** 名詞-普通名詞-一般
血の池
【例】
地獄の【血の池】のような見るからに辛いぞ
- 5.149 **チノケ** 名詞-普通名詞-一般
血の気
【例】
ハリファの顔から【血の気】が失せた。
- 5.150 **チノミチ** 名詞-普通名詞-一般
血の道
【例】
腹の足しにも【血の道】の薬にもならない
- 5.151 **チノワ** 名詞-普通名詞-一般
茅の輪
【例】
たましひのかたちを想ふ【茅の輪】かな
- 5.152 **チャノコ** 名詞-普通名詞-一般
茶の子
【例】
一桁の足し算、引き算はお【茶の子】さいさいになりました
- 5.153 **チャノマ** 名詞-普通名詞-一般
茶の間
【例】
高度成長期の【茶の間】を再現。
- 5.154 **チャノユ** 名詞-普通名詞-一般
茶の湯
【例】
【茶の湯】のたしなみのない人もその風流な雰囲気
- 5.155 **ツカノマ** 名詞-普通名詞-一般
束の間
【例】
【束の間】の船長気分を堪能。
- 5.156 **ツキノカツラ** 名詞-普通名詞-一般
月の桂

【例】
その木の葉に宿る露を「【月の桂】」と呼び、

5.157 ツギノマ 名詞-普通名詞-一般
次の間

【例】
藩主明成の居室の【次の間】に侍っていた

5.158 ツキノモノ 名詞-普通名詞-一般
月の物

5.159 ツキノワ 名詞-普通名詞-一般
月の輪
動植物

【例】
北アルプスには【ツキノワ】グマ、それにカモシカがいる

5.160 デクノボウ 名詞-普通名詞-一般
木偶の坊

【例】
【木偶の坊】みたいに突っ立ってる

5.161 テノウチ 名詞-普通名詞-一般
手の内

【例】
互いに【手の内】を見せ合っていた。

5.162 テノウラ 名詞-普通名詞-一般
手の裏

【例】
社長の、【手の裏】を返すようなこの態度

5.163 テノコウ 名詞-普通名詞-一般
手の甲

【例】
ほお紅下地を【手の甲】に取り

5.164 テノスジ 名詞-普通名詞-一般
手の筋

【例】
【手の筋】を眺めたり、なんとなく目をパチパチさせたり、

5.165 テノヒラ 名詞-普通名詞-一般
掌

【例】
【掌】で包んだ湯飲みを見つめ、

5.166 デノマ 名詞-普通名詞-一般
出の間

【例】
外来者は、よほど改まった客でないかぎり土間側の部屋【デノマ】にとどまる。

5.167 テノモノ 名詞-普通名詞-一般
手の者

【例】
織田の【手の者】だ。

5.168 テノモノ 名詞-普通名詞-一般
手の物

【例】
歴史物は官立の【手の物】とも限るまじきに、
言葉で相手を惑わすのはお【手の物】

5.169 トウノベン 名詞-普通名詞-一般
頭弁

【例】
蔵人所より、【頭弁】、宣旨うけたまはりて、

5.170 ドウノマ 名詞-普通名詞-一般
胴の間

【例】
【胴の間】に釣り座を確保

5.171 トオノキミ 名詞-普通名詞-一般
十君

【例】
十の君、「(中略)」とのたまふに、

5.172 トキノコエ 名詞-普通名詞-一般
関の声

【例】
十万の戦士が【関の声】をあげた。

5.173 トキノマ 名詞-普通名詞-一般
時の間

【例】
広い練兵場は【時の間】、しいんとふかい白日の沈黙におちいる。

5.174 トコノマ 名詞-普通名詞-一般
床の間

【例】
正面の【床の間】を背にして座った白鳥医師を中心に、

5.175 トシノイチ 名詞-普通名詞-一般
年の市

【例】
浅草観音の【年の市】

5.176 トシノウチ 名詞-普通名詞-一般
年の内

【例】
【年の内】に春立ちにけり

5.177 トシノクレ 名詞-普通名詞-一般
年の暮れ

【例】
この【年の暮れ】にGCSB職員が

5.178 トシノセ 名詞-普通名詞-一般
年の瀬

【例】
【年の瀬】も押し詰まったこの時期の

5.179 トチノキ 名詞-普通名詞-一般
栃の木 動植物

【例】
本来の材質は【栃の木】で、

- 5.180 トノエ 名詞-普通名詞-一般
 外の重
 【例】
 御垣より 【外の重】 守る身の 御垣守
- 5.181 トノクスリ 名詞-普通名詞-一般
 外薬
 【例】
 『本草集注』 「典薬」 「【外薬】」 という文字の書かれた木簡も発見されています。
- 5.182 トノコ 名詞-普通名詞-一般
 砥の粉
 【例】
 継ぎ目のところに、【砥の粉】で継ぎ目がないように見せます
- 5.183 トノモ 名詞-普通名詞-一般
 外の面
 【例】
 その夜、【外の面】は春の塵風が荒れ、
- 5.184 トビノウオ 名詞-普通名詞-一般
 飛びの魚 動植物
 【例】
 二つら三つら【飛びの魚】すべりて安し。
- 5.185 トビノモノ 名詞-普通名詞-一般
 鳶の者
 【例】
 梯子なんかを担いで走っていた【鳶の者】です。
- 5.186 トモノオ 名詞-普通名詞-一般
 伴の緒
 【例】
 もののふの八十【伴の緒】の思ふどち心遣らむと馬並めて
- 5.187 トヨノアカリ 名詞-普通名詞-一般
 豊明
 【例】
 【豊明】は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ。
- 5.188 トラノオ 名詞-普通名詞-一般
 虎の尾 動植物
 【例】
 まっ白なおか【とらのお】と黄いろいこがねおぐるまとを交ぜて生けた。
- 5.189 トラノコ 名詞-普通名詞-一般
 虎の子 大切にしておかないものの意。
 【例】
 41兆円の【虎の子】の税金からいただくのだ。
- 5.190 トラノマキ 名詞-普通名詞-一般
 虎の巻
 【例】
 『法名用字範』といった【虎の巻】を片手に
- 5.191 トリノイチ 名詞-普通名詞-一般
 酉の市

- 【例】
【西の市】で広式屋の親子と出会った。
- 5.192 トリノコ 名詞-普通名詞-一般
鳥の子
- 【例】
伝統的材料の【鳥の子】紙を用い、
- 5.193 トリノマチ 名詞-普通名詞-一般
酉の待
- 5.194 ドロノキ 名詞-普通名詞-一般
白楊 動植物
- 【例】
最近頭角を現した若い詩人が【白楊】の憂愁さを扱った詩の
- 5.195 ナイシノカミ 名詞-普通名詞-一般 ナイシノカン
尚侍
- 【例】
【尚侍】の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおはしけるを、
- 5.196 ナカノキミ 名詞-普通名詞-一般
中君
- 【例】
この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、【中の君】、四の君、五の君とおはす。
- 5.197 ナカノクチ 名詞-普通名詞-一般
中の口
- 【例】
【中の口】の格子の音がして
- 5.198 ナカノマ 名詞-普通名詞-一般
中の間
- 【例】
宴会に備えての準備を指図して【中の間】に入り
- 5.199 ナナツノウミ 名詞-普通名詞-一般
七つの海
- 【例】
蒸気船の発明などにより【七つの海】を股にかけて航海し、
- 5.200 ナノハナ 名詞-普通名詞-一般
菜の花
- 【例】
ゴールデンウイークは【菜の花】、桜が見頃。
- 5.201 ニシノウチ 名詞-普通名詞-一般
西の内
- 【例】
【西の内】紙は、那須楮の繊維だけで漉かれている。
- 5.202 ニノアシ 名詞-普通名詞-一般
二の足
- 【例】
開発には【二の足】を踏んだかもしれない
- 5.203 ニノウデ 名詞-普通名詞-一般
二の腕

【例】
たかの友梨に行って美しい【二の腕】に仕上げなきゃ

5.204 **ニノカワリ** 名詞-普通名詞-一般
二の替わり

【例】
三月の【二の替り】に、西鶴の『凱陣八嶋』を出した

5.205 **ニノク** 名詞-普通名詞-一般
二の句

【例】
しばらく【二の句】が継げなかった。

5.206 **ニノゼン** 名詞-普通名詞-一般
二の膳

【例】
食事はいつも【二の膳】、三の膳つき

5.207 **ニノツギ** 名詞-普通名詞-一般
二の次

【例】
誰に師事するかは【二の次】であった。

5.208 **ニノトリ** 名詞-普通名詞-一般
二の酉

【例】
この夜【二の酉】なりといへど

5.209 **ニノマイ** 名詞-普通名詞-一般
二の舞

【例】
父の【二の舞い】にならないとは限らない。

5.210 **ニノマル** 名詞-普通名詞-一般
二の丸

【例】
この大手三之門内から【二の丸】となる。

5.211 **ニノヤ** 名詞-普通名詞-一般
二の矢

【例】
景行が【二の矢】を放つ。

5.212 **ヌイノカミ** 名詞-普通名詞-一般
尚縫

【例】
父種継の従姉である【尚縫】が最近体調を崩して宿下がりをしていると聞いたからである。

5.213 **ネムノキ** 名詞-普通名詞-一般
合歡木 動植物

【例】
初夏はアジサイ、夏は【ネムノキ】、アメリカフヨウなどが咲き続ける。

5.214 **ノノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
野の宮

【例】
六条の御息所は、【野の宮】移徙の折にも趣向を凝らし、

- 5.215 **ノミノイチ** 名詞-普通名詞-一般
蚤の市
【例】
フランスの【蚤の市】での仕入れ品
- 5.216 **ハギノヤ** 名詞-固有名詞-一般
萩の舎 中島歌子の塾名
【例】
明星は鐵幹一派の機關雜誌なるが、鐵幹の師、【萩の舎】主人も、之に一臂の力を添へたり。
- 5.217 **バケノカワ** 名詞-普通名詞-一般
化けの皮
【例】
【化けの皮】を剥がす
- 5.218 **ハゼノキ** 名詞-普通名詞-一般
黄櫨 動植物
【例】
【ハゼノキ】の紅葉
- 5.219 **ハチノオ** 名詞-普通名詞-一般
発緒
【例】
壱越調の声に【発の緒】を立てて、
- 5.220 **ハチノコ** 名詞-普通名詞-一般
鉢の子
【例】
【鉢の子】の中は空っぽ
- 5.221 **ハチノス** 名詞-普通名詞-一般
蜂の巣
【例】
【蜂の巣】をつついたような大騒ぎ
- 5.222 **ハツヒノデ** 名詞-普通名詞-一般
初日の出
【例】
山頂から【初日の出】を見る
- 5.223 **ハラノムシ** 名詞-普通名詞-一般
腹の虫
【例】
【腹の虫】がおさまらない
- 5.224 **ハリノキ** 名詞-普通名詞-一般
榛の木 動植物
- 5.225 **ヒダリノツカサ** 名詞-普通名詞-一般
左の司
【例】
【左馬寮】の御馬、蔵人所の鷹すゑて賜りたまふ。
- 5.226 **ヒノイリ** 名詞-普通名詞-一般
日の入り
【例】
【日の入り】時間のチェックをお忘れなく。

- 5.227 **ヒノキ** 名詞-普通名詞-一般
檜 動植物
【例】
材木には松・杉・【ひのき】・栗・けやきなどあり。
- 5.228 **ヒノクルマ** 名詞-普通名詞-一般
火の車
【例】
お隣りは外車で我が家【火の車】
- 5.229 **ヒノケ** 名詞-普通名詞-一般
火の気
【例】
【火の気】のないテントの中は寒く、
- 5.230 **ヒノコ** 名詞-普通名詞-一般
火の粉
【例】
【火の粉】が舞いあがった。
- 5.231 **ヒノタマ** 名詞-普通名詞-一般
火の玉
【例】
【火の玉】が飛び交う
- 5.232 **ヒノテ** 名詞-普通名詞-一般
火の手
【例】
町に【火の手】があがり、
- 5.233 **ヒノデ** 名詞-普通名詞-一般
日の出
【例】
【日の出】を迎えることができた。
- 5.234 **ヒノバン** 名詞-普通名詞-一般
火の番
【例】
提灯の【火の番】をしていた
- 5.235 **ヒノマル** 名詞-普通名詞-一般
日の丸
【例】
ロビーに【日の丸】を掲げるように要求した
- 5.236 **ヒノミ** 名詞-普通名詞-一般
火の見
【例】
訪れる人は隣りの【火の見】檜を目印に
- 5.237 **ヒノメ** 名詞-普通名詞-一般
日の目
【例】
【日の目】を見なかったかつての極秘文書をベースに
- 5.238 **ヒノモト** 名詞-普通名詞-一般
日の本

- 【例】
「【日の本】（もと）の国」
5. 239 **ヒノモト** 名詞-普通名詞-一般
火の元
- 【例】
「【火の元】に、注意してください」
5. 240 **フキノトウ** 名詞-普通名詞-一般
蒨の臺
- 【例】
【蒨の臺】の天麩羅
5. 241 **フクノカミ** 名詞-普通名詞-一般
福の神
- 【例】
家族は「素行の悪い、【福の神】」と呼んでいる
5. 242 **フシノキ** 名詞-普通名詞-一般
五倍子の木 動植物
5. 243 **フンノツカサ** 名詞-普通名詞-一般
書司
- 【例】
上の御遊びはじまりて、【書司】の御琴ども召す。
5. 244 **ヘソノオ** 名詞-普通名詞-一般
臍の緒
- 【例】
第一の誕生の際に【臍の緒】の代わりとなった母乳は、
5. 245 **ホオノキ** 名詞-普通名詞-一般
朴の木 動植物
- 【例】
巨大な【朴の木】を手彫りした捏鉢
5. 246 **ホゾノオ** 名詞-普通名詞-一般
臍の緒
- 【例】
御【臍の緒】は殿の上。
5. 247 **ホトケノザ** 名詞-普通名詞-一般
仏の座 動植物
- 【例】
春の七草の【仏の座】
5. 248 **ホノジ** 名詞-普通名詞-一般
ほの字
- 【例】
此處の坊んちに【ほの字】や
5. 249 **ホルトノキ** 名詞-普通名詞-一般
ホルトの木 動植物
- 【例】
タブノキ・マテバシイ・【ホルトノキ】・ヤブニッケイなどの照葉樹
5. 250 **ボンノクボ** 名詞-普通名詞-一般
盆の窪

【例】
後頭部と首の境目にある、【盆の窪】

- 5.251 マクノウチ 名詞-普通名詞-一般
幕の内

【例】
ルームサービスで【幕の内】弁当をたのんだが

- 5.252 マゴノテ 名詞-普通名詞-一般
孫の手

【例】
日用品としての「【孫の手】」は、米英では見かけません。

- 5.253 マスノスケ 名詞-普通名詞-一般
鱒の介 動植物

【例】
サケの仲間であるキングサーモンは日本では【マスノスケ】と呼ばれ、

- 5.254 マタノナ 名詞-普通名詞-一般
又の名

【例】
大窪逸人【又の名】を「エスピー」と云ふ

- 5.255 マタノヒ 名詞-普通名詞-一般
又の日

【例】
【又の日】を期して

- 5.256 マツノウチ 名詞-普通名詞-一般
松の内

【例】
正月【松の内】を過ぎた頃

- 5.257 マツノザイ 名詞-普通名詞-一般
松の材 動植物

【例】
松を枯らす病原体は、体長1ミリメートル足らずの「【マツノザイ】センチユウ」です。

- 5.258 マノアタリ 名詞-普通名詞-副詞
目の当たり 可能

【例】
現実を【目の当たり】にしていたのである

- 5.259 ミズノアワ 名詞-普通名詞-一般
水の泡

【例】
すべて【水の泡】である。

- 5.260 ミズノテ 名詞-普通名詞-一般
水の手

【例】
城の【水の手】は三の丸の崖下にあった。

- 5.261 ミチノシ 名詞-普通名詞-一般
道師

【例】
真人・朝臣・宿禰・忌寸・【道師】・臣・連・稻置

- 5.262 **ミチノベ** 名詞-普通名詞-一般
道の辺
【例】
【道の辺】の草の花
- 5.263 **ミドリノスズ** 名詞-普通名詞-一般
緑の鈴
【例】
幸福の木やカネノナルキ、ハートカズラ、【ミドリノスズ】、ブライダルベールなど
- 5.264 **ミナノシュウ** 名詞-普通名詞-一般
皆の衆
【例】
良いか【皆の衆】。
- 5.265 **ミノウエ** 名詞-普通名詞-一般
身の上
【例】
いまひとつ役割に恵まれない【身の上】を、
- 5.266 **ミノケ** 名詞-普通名詞-一般
身の毛
【例】
【身の毛】がよだつ思い
- 5.267 **ミノシロ** 名詞-普通名詞-一般
身の代
【例】
【身の代】金目的略取等、
- 5.268 **ミノタケ** 名詞-普通名詞-一般
身の丈
【例】
自分の【身の丈】に合った生活
- 5.269 **ミノホド** 名詞-普通名詞-一般
身の程
【例】
人間は【身の程】を知るべきです
- 5.270 **ミノマワリ** 名詞-普通名詞-一般
身の回り
【例】
われわれの【身のまわり】は、
- 5.271 **ミノモ** 名詞-普通名詞-一般
水面
【例】
【水の面】見る女の瞳。
- 5.272 **ミヤノメ** 名詞-普通名詞-一般 ミヤノベ
宮咩
【例】
ことばなめげなるもの 【宮のべ】の祭文よむ人。
- 5.273 **ムクノキ** 名詞-普通名詞-一般
棕の木 動植物

【例】
庭でいちばん高い【棕の木】

5.274 **ムシノイキ** 名詞-普通名詞-一般
虫の息

【例】
既に【虫の息】のようだった。

5.275 **ムスビノカミ** 名詞-普通名詞-一般
結びの神

【例】
【結びの神】の引合せねえ

5.276 **ムロノキ** 名詞-普通名詞-一般
榲木 動植物

【例】
玉箒刈り来鎌麻呂【むろの木】と棗が本とかき掃かむため

5.277 **メノカタキ** 名詞-普通名詞-一般
目の敵

【例】
伝統芸能まで【目の敵】にするような

5.278 **メノコ** 名詞-普通名詞-一般
目の子

【例】
大ざっぱな【目の子】勘定

5.279 **メノタマ** 名詞-普通名詞-一般
目の玉

【例】
二つの【目の玉】が飛び出してしもうての、

5.280 **モチノキ** 名詞-普通名詞-一般
麴の木 動植物

【例】
ツバキや【モチノキ】などの常緑樹

5.281 **モッテノホカ** 形状詞-一般
以ての外

【例】
「魚を裏返すなど【もってのほか】！」とエキサイト。

5.282 **モノノカズ** 名詞-普通名詞-一般
物の数

【例】
仮説などは【物の数】ではない

5.283 **モノノグ** 名詞-普通名詞-一般
物の具

【例】
体の上に【物の具】がからから鳴った。

5.284 **モノノケ** 名詞-普通名詞-一般
物の怪

【例】
【物の怪】がついたように病んでおります

- 5.285 **モノノフ** 名詞-普通名詞-一般
武士
【例】
猛き【武士】、仇敵なりとも、
- 5.286 **モノノホン** 名詞-普通名詞-一般
物の本
【例】
いろいろな【物の本】によると
- 5.287 **ヤノアサツテ** 名詞-普通名詞-一般
やのあさって
- 5.288 **ヤノネ** 名詞-普通名詞-一般
矢の根
【例】
【矢の根】には奥地の土族が好んで用いる鳥兜の毒が
- 5.289 **ヤブノナカ** 名詞-普通名詞-一般
藪の中 「真相のわからないこと」の意。
【例】
真相は【藪の中】
- 5.290 **ヤマノイモ** 名詞-普通名詞-一般
山の芋 動植物
【例】
【山の芋】をおろしてすってあるもの
- 5.291 **ヤマノカミ** 名詞-普通名詞-一般
山の神
【例】
水の神、【山の神】としてこの土地を守ってきた
- 5.292 **ヤマノテ** 名詞-普通名詞-一般
山の手
【例】
【山の手】の閑静な雰囲気漂わせている
- 5.293 **ヤマノハ** 名詞-普通名詞-一般
山の端
【例】
ビルのかなたの【山の端】
- 5.294 **ユキノシタ** 名詞-普通名詞-一般
雪の下 動植物
【例】
【ユキノシタ】科の落葉小低木です
- 5.295 **ユノハナ** 名詞-普通名詞-一般
湯の華
【例】
有名温泉の【湯の華】
- 5.296 **ユリノキ** 名詞-普通名詞-一般
百合樹 動植物
【例】
散歩の途中で【百合樹】の太い幹からひよいと伸びた小枝を

- 5.297 **ヨイノクチ** 名詞-普通名詞-一般
宵の口
【例】
時間はまだ【宵の口】
- 5.298 **ヨノナカ** 名詞-普通名詞-一般
世の中
【例】
【世の中】で色々なことが起きている
- 5.299 **ヨノメ** 名詞-普通名詞-一般
夜の目
【例】
【夜の目】を寝ずに
- 5.300 **リュウノヒゲ** 名詞-普通名詞-一般
竜の鬚
動植物
- 5.301 **ロウノキ** 名詞-普通名詞-一般
蠟の木
動植物
- 5.302 **ロクノキミ** 名詞-普通名詞-一般
六君
【例】
大殿の【六の君】を思し入れぬこと、なま恨めしげに大臣も思したりけり。
- 5.303 **ワキノシタ** 名詞-普通名詞-一般
脇の下
【例】
体温計は、耳式と通常の【脇の下】や舌先で測定できる
- 5.304 **ワタノハラ** 名詞-普通名詞-一般
海の原
【例】
【わたの原】八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟

6 「ーが〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
6.1	アメガシタ 天が下 【例】 【天が下】のすべての事には季節があり	名詞-普通名詞-一般			
6.2	イワガネ 岩が根 【例】 かどかどしき【岩が根】に一輪の花を點したる風情、	名詞-普通名詞-一般			
6.3	ウバガモチ 姥が餅 【例】 広重の「東海道五十三次」草津にも描かれた【姥が餅】屋が相変わらず賑わいを見せていたが、	名詞-普通名詞-一般			
6.4	カリガネ 雁が音	名詞-普通名詞-一般			

【例】
【雁が音】の聞こゆる空よ月立ち渡る

6.5 **ケンガミネ** 名詞-普通名詞-一般
剣が峰

【例】
まさに【剣が峰】の一番である。

6.6 **マンガイチ** 名詞-普通名詞-副詞
万が一 可能

【例】
【万が一】リプレイハズシに失敗した場合

近代文語 UniDic 短単位規程集 Ver. 1.1

2016年3月31日

編者・発行者 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 コーパス開発センター

執筆担当者 近藤 明日子 (コーパス開発センター プロジェクト非常勤研究員)

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042(540)4300 (代表)

URL http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/